
現実世界の仮想現実

芥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界の仮想現実

【Zコード】

Z5022X

【作者名】

芥

【あらすじ】

VR技術の応用で作られたVR RPG『デュアルワールド』その魅力に引き寄せられる者は多かった。そんな人々の中の一人である青年が、なんとなくゲームへ挑む物語。ゲーム内で二ヶと名乗る青年はNPCである少女シアを助け、一夜を過ごした。その後訪れた街で事件に巻き込まれ、その後二ヶは現実世界と仮想世界の違いを考えるようになる……。

誤字脱字等々ありましたら、一言でも構いませんので、お気軽に感想までお願いします。

新たな一步

VR RPG。

その意味する所は、普段ゲームに触れている者には実に分かりやすく、そして惹かれる文字だった。

普通の RPG とは違う。

前にくつついでいる VR とは、ヴァーチャル・リアリティーの略で、仮想現実を作り出しその内で様々な体験をすると、まるで実体を持つた自分の体が体験したかのように感じる事が出来る技術の名稱だ。

簡単に言つてしまえば、仮想の自分を仮想世界で動かすイメージだ。

その構想や技術は昔から注目され力を注がれてきたが、その技術が娛樂であるゲームの世界へと入つてくるのには、随分と時間がかかった。

未発達だった VR 技術は進歩と共に、実験の意味も兼ねてか様々な所で目に付く様になり、やがて充分に発達した後に、ようやく娛樂への転用が認められた、と言つ訳だ。

ゲームをプレイする人と言つるのは特別な限定条件がある訳じゃない。

やりたい人がやって、やりたくないなればやらない。だからこそ娛樂なのだが。

つまり様々な人間がゲームに触れていて、その中には VR 技術に触れた人ももちろん居る。居て当たり前だった。

だから情報が流れやすいこの時代に、VR 技術に触れた人の体験談を聞いてそれをゲームに使うとどうなるのか、という色々の妄想は、VR 技術が発達する前よりも、より現実味を帯びて強まるばかりだった。

しかし VR 技術を応用したゲームと言つものは、作る側も頭を悩

ませるものだつたのだ。

今まで積み上げてきたものが僅かに応用が利くとは言え、ほとんどは未知の物だつた。

ノウハウの積み重ねが無い状態での開発は困難を極めた。しかし、もしその困難を最初に突破したのなら、その先に待つ様々恩恵は素晴らしい魅力的に違いなかつた。

複数あるゲーム製作会社はこぞつて製作に踏み切り、何社かはその困難の前に破れ、VRゲームの開発競争から外れていつた。

残つた会社はどれも大手の、体力がある会社ばかりだつた。

どの会社も開発が進み、各社の広告宣伝にゲームーは心躍らせるばかりだつた。

その頃に、VRゲームをプレイするためのハードが発表された。

ゲームの広告宣伝が飛び交う中で、ハードはどうなるのか、と囁かれていたが、いくら待つても謎が明かされず、VRゲームの開発側もハードについては一切の情報を明かさなかつた。

だがハードが無ければソフトなんて作れるわけが無い、その認識は誰もが持つていた上に、ハードよりも確実に情報が流れるソフトの方が皆気になつて仕方なかつた頃の、発表だつた。

『VRG』バーチャル・リアリティ・ゲーム。

実際にシンプルで分かりやすい名前だつた、だがもつと良い名前をという声もそれなりに有つたらしい。

しかし、最初の一歩としてはいい名前だと、賞賛する人もかなり居て、更にハードなんてどうでも良いからゲームを早くやりたい、という人達も重なり、次第に皆納得してしまつたのだつた。

そのハードの形は、見た目はHMDとなんら変わりなかつた。

使用例の画像は機械が目を完全に覆い、耳まで伸びた所に横長のボタンが並んでいた。

それがVRGの電源である事は明白だつた。

他にも画像や情報が記載されていたが、どれも既に情報を追つていた人達にとつては既出の情報ばかりで、いち早くプレイしたいゲ

一マー達はもう実物を触るしかない所まで来ていた。

そして発売当日。

長蛇の列がどこまでも伸びていた。

皆の目標、もとい標的はもちろんVRGとそのソフトだ。

VRGの発売と共に店頭に並ぶ、栄光ある最初の一歩を踏み出すソフトは四本。

シュー・ティング、アクション、RPG、シユミレーション、といったラインナップだった。もちろんその前には、見慣れないが想像すると気持ちを高揚させてしまう文字、VRとそれぞれに付いている。

人気なのはアクション、次にRPGとシュー・ティング、更にその次にシユミレーションとなっていた。

発売当初はまだアクションがトップを独走していたが、VRゲームソフトがそうそう簡単に出来る訳も無く、一ヶ月経つてもソフトの数は微々たる物しか増えずに、さらにそのクオリティも先に出たソフト五本に及ばないもので、実質VRGで遊べるソフトは四本と言つても過言ではなかつた。

そして一ヶ月も経つと、最初は圧倒的だつたアクションの売り上げは落ち着き、トップの座をRPGへと譲つていた。

その原因はアクションゲームにありがちなストーリーの短さと、いくらVRゲームがかつてない新鮮さを貰えてもやがてそれに慣れてしまう事だつた。

それに比べ、当初からかなりの出来でRPGの王道をひた走つていた物が、安定した売り上げを誇るのは仕方ない事だつた。

しかしそれだけじゃなかつたのだ。

VRGの発売から一ヶ月。つまりソフトの発売から一ヶ月と言つても等しい丁度その日に、RPGゲームの大規模アップデートが行われた。

VRゲームでないゲームの歴史でもおそらくは無かつた蛮行だつた。

しかしそのアップデートに伴い、更に売り上げが加速したのだから、猛攻とも言い直すべきだろう。そのアップデートとは……。

俺は特別ゲームに情熱を傾けている訳じゃなかつた。

もちろんゲーム自体は好きだが、年間でやるゲームの本数はせいぜい一、二本くらいのもので、もちろん欲しいと思えるゲームがあればそれよりも多い時もあるのだが。

ゲームを買う本数が少ない理由としては、まず直感的に注目し、その後はゲーム雑誌やネット、店頭で実際に手にとって見たりして情報を集めて、設定やあらすじなんかを読んだ時に、この続きが知りたい、やってみたいと強く思わされるような作品だけを買っていられるからだ。

それに俺自身が一度、一つのゲームを始めてしまつと、そのゲームの裏の裏までやり尽くさないと納得がいかない、という無駄に几帳面というか凝り性な性格も関係しているだろう。

そんな俺が手を出したのがVR RPGと言つ、全く新しいジャンルのゲームだつた。VRGと言われる新ハードとそれ専用のソフトからなる、ゲーム業界に一石を投じた物だ。

VR RPGと言つても、既存のRPGをまるで現実のように体験出来るだけで、基本的なゲームとして構成する素材なんかは既存のものと同じ。そう言つてしまえば些細な事に感じるが、そのVR部分の魅力と言うのはやはり強大な物である事は間違いなかつた。

だから発売日当日はバイトを休みにして、長蛇の列に並ぶ羽目となつたのだが。

幸いにもバイト先はゲームには興味の無い世代もそれなりにいたので、全員がVRゲームを求めて休みの取り合い、なんて事にはならなくて心の底からほつとしたものだ。

製作側も店側も相当の数が買い求めると予想したのか、何時間と並んで辿り着いても、まだ山のように在庫が並んでいた。それでもニュースなんかでは売り切れ続出、なんて報道しているのだから足

りなかつたのだろう。そんな報道を流すテレビを消し、ベッドに横たわる。

ベッドの上には空の箱と説明書や保証書などが広がつていて、少し邪魔くさかつたので箱に再び戻しておく。

説明書には一度目を通していただが、念のために再び見ようか、なんて考えが頭をよぎるが、そんな事より早くVRゲームがやってみたい、と俺自身が急かすので、そのまま箱にしまい込む。

次にやることはソフトの開封だつた。

買ったソフトはVR RPGというジャンルに、初めて足跡をついた記念すべき第一号。

名前を『デュアル・ワールド』

仮想現実であるVR空間での世界。現実とは違うが極めて近い二つ目の世界。故にデュアルワールド。

初めてのVR RPGにとつては實にピッタリな名前だつた。

ソフトは光学ディスクなんかが主流の時代に、今時かよ、と思われるカートリッジ式。素人には分からぬいけどきっと高性能なんだろうと無理やり納得して、デュアルワールドのカートリッジをVRGの左側に付いている、ソフト取り込み口から差し込む。その近くにある四角形で細長いランプが緑色に光る。それがソフトの認識が終わつた合図だ。

ランプの下にあるボタンは、カートリッジを排出する時に使うボタンだが、今は使う必要ない。今使うべきなのはその隣のVRG自体の電源ボタンだ。

それを押すと、電源ボタンの上に、ソフト認識と同じくランプが灯つた。色はオレンジ。きっとソフト認識との差別化のためだろう。そして電源が入つた事を確認すると、次に行つるのはもちろんそれを身に付ける事だ。

まじまじと見つめ、深呼吸をし、これがVRGへの第一歩! そつ

心で呴き、意を決してそのVRGを被る。

恐る恐る目を開けると、そこに広がるのは無限に広がるファンタ

ジーな世界、……ではなく、ありふれたデジタルな画面だった。

体の感覚も現実のものだし、試しに手で顔を探ると感触でVRGが有ることもわかる。

はあ、とため息をついて改めて画面を見る。

そこに映し出されていたのは時刻設定の画面で、そういうえば説明書に初期設定がどうだと書いてあつた事を思い出し、自分でVRGを付けねば分かるだろう、なんて思っていた事を思い出した。仕方ないのでさっさと時刻設定を済ませようと思ったが……。

「……これ、どうで操作するんだ?」

てつくり感覚で全てを操作する物だと思つていただけに、そういう所は流し読み程度にしか見てなかつた。

もう一度ため息をついてVRGを頭から外し、丁寧に仕舞い込んでしまつた説明書を箱から再び取り出して、中身にもう一度目を通す。

どうやら電源とは別に、VR世界に移行するためのボタンがあるらしい。見てみると電源ボタンとは反対の、右側に確かにそれらしいボタンがあつた。

改めてVRGを被りなおし、手探りでそのボタンを探し出して、ゆっくりと押した。

その瞬間、妙な浮遊感が体を包み、足の先、手の先から冷たくなつて、やがて体の感覚が無くなる。それが体から首へ、首から頭へと伝わっていき、突如、意識が途切れた。

……目覚めの時のような気分で目を開けると、そこに広がっていたのは宇宙だった。

実際の宇宙とは違うと分かったのは、自分の周りに浮いた球体のアイコン達。

それらを視線の中心に捉えるとヘルプとして文字が浮かび上がる。宇宙をイメージして作られたVRGのメインメニュー画面だった。

その中から時刻設定を選ぶと、00:00と空中に表示される。その数字を指でスライドさせると数字が動いたので、今の時刻を手早く入力する。

次に気になったのは自分の体だ。VR空間での体であるアバターの容姿だ。

VRGにおけるアバターはどのゲームの世界でも共通の自分自身の分身であり、VRGでアバターを弄ればそれが即時反映される。なので自分のアバターをまずどういうものなのか把握しておかないと、色々と困るものがあるのだ。そう、説明書に書いてあった。

周りに浮かんだ球体達を眺めていき、やがてアバターと名の付いた球体に恐る恐る手を伸ばし触れて見ると、その瞬間に放射状に世界が塗りつぶされ、不思議な浮遊感は無くなり宇宙空間もあつとう間に変わってしまった。

そこに新たに現れたのはどこまでも続く真っ白いタイルの床と、大きな鏡が据えてあるだけのとてもさびしい空間だった。

鏡には細くて筋肉も付いていない頼りない男の姿が映り込んでいて、それが自分である事は明白なのだが、信じたくない気持ちも持たなくなる程にひ弱だった。

服装は質素なデザインの簡単な物しかなかつたが、どうせゲーム中はそのゲームの中での服装になるし大して気にする事も無かつた。それと鏡に映っていたのはもう一つあって、まるで地球の周りを漂う衛星のように、周りを飛んでいる手の平サイズの球体があつた。これはシステムスフィアと言つて、触ると空間に応じて空中に半透明の板が現れて、その画面をタッチすることで操作することが出来る。

システムスフィアに触れるといくつかの操作画面が空中に現れ、今出来る操作を視覚的に確かめることが出来た。

……どうやら顔の造形や身長など、普通のゲームと同じぐらい自由で豊富なカスタマイズが施せるようだったが、性別だけは変えられないようになっているようだ。

こういうキャラをカスタマイズする時に、自分とはかけ離れた美形にしたり、と言うのは特別不思議な事ではないが、どうにもVRゲームに関しては自分が操作するキャラを美形にするのはなんだか嫌な気分がした。

その理由としては、まず第一に思いつくのが操作するキャラがイコールで自分と結びつく事だろう。

気にしない人は気にしないだろうし、嬉々として進んでそれを行う人も居るだろうが、VRゲームでは必然的に一人称視点でゲームをプレイする事になるので、操作するキャラが美形と言う事は、その分身であるプレイする人間も美形、という扱いになるに等しい。簡単に言つてしまえば、一人の人間がアバターの皮を被っている、と言う扱いになるので、もしその姿を自分自身で見た時に感じるのは違和感か、優越感か、という話だ。

色々とステータスを弄つていると、あまりに現実とかけ離れたステータスは感覚的なズレ、違和感が凄かつた。

慣れればなんて事は無くなるだろうが、最初から違和感だらけの体で行動はしたくなかったので、顔の造形も含め現実に近い値にしながらも、多少は見栄を張つて盛つておく。もちろん違和感が無い程度に。

キャラメイクが満足いく形で終えると、次はVR空間での体の動かし方に慣れる必要があった。おそらく最初からそういう事も考えての、果ての無いこの空間なのだろう。

走つたり、跳んだり、回つて見たり、逆立ちしたり。

結論から言うならば、疲れる。しかも凄く。

てっきりVR空間だから疲れる事は無いだろうと思っていたのだが、動けばその分疲れるのは現実に限らずこっちの世界でも適用されるらしかった。しかし痛み、という物は一切感じない。その代わりに感覚が無くなるのだ。

仮想現実とはいえ、意識は現実にある人間の物だから、当然といえば当然の処理だろう。

ゲーム中に炎に包まれて死ぬ時なんかに痛覚があつたら、それこそ死ぬ思いをする羽目になる。

痛みの代わりの無感覚は、言つならば麻酔を掛けられている時の感覚が近い物に挙げられるかも知れない。

見ればそこにちゃんとあるのに、動かそうと思つても動かない。触つても触つた方からしか感触が無く、触られた方は無感覚だ。ちなみに本来ある痛みの大きさに応じて無感覚の度合には変わるもので、今のは一番酷い場合だ。

アバターも決まって、準備運動も終えたので、システムスフィアからメインメニューへと戻る。操作画面のボタンを押すと、世界が放射状に広がったのとは逆に、世界の果てから宇宙空間が高速で侵食した。

自分の立っていた所が宇宙に呑まれると、足を付けるための地面が無くなつたのだから当然、体が浮遊感に包まれ、すぐに落下する感覚に切り替わる。

覚悟をしてなかつただけに慌てふためいてしまつたが、何秒かするとその感覚が当たり前のものとなり、最初に見たVRGのメインメニューへと戻つてくる。

つまり自分の周りに宇宙が広がり、いくつもの球体が取り囲んでる状態に。

そういうえば最初にメインメニューに来た時は、自分の姿を確認して無かつたので覚えてないが、今はさつきキャラメイクしたそのまんまの姿が確かにあつた。

今度こそ、球体の中からゲームの文字が浮かび上がるものを探す。割とすぐにそれは見つかった。視界の中心に捉えるとゲームと言う文字の下に、大きめの文字で「デュアルワールド」と表記されている。それに手を伸ばす。仮想の心臓は破裂しそうなほどに脈打つ。

……アバターには血は無いのだから心臓も必要ないのだが、おそらくはキャラメイクの時に感じた違和感の問題か、より現実に近づけるために用意されたもの、もしくはそのどちらもだらう。

球体に触れる。その球体から眩いほどの光が溢れ、視界は真っ白に染まる。

そんな中でも次に目に入れる風景を妄想し、心臓が高鳴りを止めなかつた。

白一色の風景が真ん中から空色に染まっていき、眼下には広大な土地が広がっていた。

気付けば自分が飛竜の背中に座っていて、広大な土地を風を切つて飛んでいた。

頭の防具や鞍も付いている事から、視界にある大きな城で飼われている騎竜なのかも知れない。

凄いスピードと飛竜の動きに振り落とされそうになるが、どうやら落ちる事は無いように設定されているらしく、引っ張られる感覚は常にあるが、透明な壁に体がぶつかり止まる。

大きな城がそびえていて、その周りを少しスピードを落として飛竜は回る。

まるでこの世界を見る時間を取りえる様だつたが、おそらくこれがデュアルワールドのOPなのだから、推測は間違つていらないだろう。
……確かにただ飛んでいるだけでも相当楽しい。普通は味わうことの無い感覚を楽しめる上に、今まで画面の向こうの世界だつたものが、その世界に入り込んで現実のように感じることが出来る。

遙か彼方にはどこまでも続く森や山、海まで見える。

現実にある高層ビルの群も無いし、汚れた空気もない。肺にいっぱいの空気を吸い込めばそれがどれだけ新鮮なものなのかが分かるぐらいた。

時々山の向こうに見える建物らしきものは、また別の街だらう。RPGなのだから最初の街以外にも、いくつもの街がこれから待ち受けているだらうし、今見える風景は全て自分で踏破する事が出来るのだ。

あの森も、あの山も、あの海も。きっとこれから色々なイベントがあつたり、レベル上げでお世話になつたり、それぞれにそれぞれの思い出が刻まれる事だらう。

今はまだ白紙。これから自分の足跡をこの世界に付けていく。

そう考えると、やっぱり気持ちが高ぶって仕方ない。VR技術のおかげで今までのゲームよりもそれを身近に、確かに感じることが出来た。

飛竜の背中で世界を眺めていたのは一分ぐらいだろうか、OPにしては丁度いい時間だ。

飛竜は進路を変えて緩やかに降下していく。目指した場所は城下町の中心にある大きな噴水で、NPC ゲーム側の住人 である街の人々が避けて飛竜が着地できるだけのスペースを作る。

飛竜がゆっくりと、何度も翼を羽ばたかせ着地し、静止した所で飛竜から飛び降りる。衝撃はあつたが痛みは無い。

降りてみて初めて飛竜の大きさに驚いた。高さは三メートル、横は頭の先から尻尾の先まで五メートルもある。

……さっきまでは世界の大きさばかりに目を取られて、それを比較対象としていたからこの竜の大きさにも気が付かなかつたのだろう。

改めて全体像を見回してから、飛竜の方へと歩いて行き手を伸ばす。

飛竜もそれに気が付いてくれたようで、長い首を曲げて鼻先を手に近づけてくれる。

近づけてくれた頭を、猫や犬でも撫でる様にしてやると、クウンと可愛らしく鳴いて嬉しそうな顔を浮かべてくれるのだった。

飛竜に世界を見せてくれたお礼に少し戯れないと、突如周りから拍手の嵐が巻き起こる。

何事かと思つて周りを見渡すと、そこにはひたすらに人が居た。もちろんNPCなのだが、その顔は実に現実らしく動きも滑らかで、とても仮想のものとは思えないぐらいだった。

拍手に戸惑つていると、飛竜が吼えた。狼の遠吠えの様に上を向き、全てに響き渡らせるかのように力強く。あまりの迫力に腰が抜けそうになつた程だ。

それが合図となつて、システムスフィアと同じ様な球体が空から降ってきた。

大きさはシステムスフィアとは比べ物にならないくらいに大きいが、流石に飛竜ほどではなく、およそ三十センチ程度の球体が空中に浮いていて、ニコーゲームと文字が浮かび上がる事からこゝが今、従来のゲームにおけるタイトル画面なのだとわかる。

タイトルロゴは表示されなかつたが、このNPC達の拍手と同時に見える風景が、このデュアルワールドの象徴であつて、それと同時に歓迎の意味も込められている。

包む雰囲気が、この世界が、デュアルワールドへようこそ、と言つてゐる。

その演出に少し感動を覚えるが、まだ始まつたばかり、いやまだゲームは始まつてもいい。

このニコーゲームと表記された球体に触れる事で、ようやく始まる。

意を決し、手を伸ばし、触れる。

メインメニューからデュアルワールドを始める時には白い閃光に包まれた。今度はそれと逆でメインメニューの宇宙空間を思い出す暗闇が身を包む。

しかし宇宙空間のように無数の星が輝いているなんて事は無く、方向感覚すら麻痺する黒一色の世界だつた。

それも一瞬の事で、眩い光が暗闇を裂いたと思えば、目の前には剣や斧、弓なんかを携行した屈強な男や女が結構な数で雜多に立ち並んでゐる。

誰も彼も服装が見た事のあるような革製や布製のいかにも冒險者と言つ格好。中には魔法使いだと一目で分かるローブを羽織つた者や、騎士なのだろうか重そうな金属の鎧を纏つた人も居て、誰もがある一点に居る人物を見つめていた。

そこには王様と一目見て分かるよう、と言つ配慮なのか、重そうな王冠を被つている初老の男が、豪華な金枠と布地が赤く弾力の

ありそうな玉座に腰掛けていた。

その後ろには相談役なのか、王様よりもかなり年を取っているだろう顔にたくさんの皺が刻まれた老人が、玉座より一歩ほど後ろに下がり杖を突いて待機している。

ガヤガヤと騒ぎ立てている数ある冒険者達に向か、王様が立ち上がり、叫ぶ。

「ここに立ち上がってくれた冒険者達よ、王の名の元に感謝する！この世界の命運はそなた等の腕に懸かっている。もちろん他の国からも、多数の勇気ある者がこの世界の危機に立ち上がりてくれている。急ぎ、世界の安寧の為に、魔物達に碎かれた星の命を集めてくれ！」

王様がそう叫ぶとその場に居た全員が目を滾らせて、一致団結し遠吠えの様に気合の入った声で叫ぶ。

なんとなくそれに習わないといけない様な気がして、少し遅れながらもその声と重なり混ざる。

その後は特に何もなく、さつきの威勢はどこへやら、ぞろぞろと後ろの階段から全員が降りていく。

その流れに乗って階段を降りていくと、城の兵士に誘導されて城の入り口まで連れて行かれる。

どうやらこれから話を進めないと、城に再び入る事は出来そうになかった。

その証拠に門番が一人、堅く閉じた門の前で立ち塞がつて動こうとしない。

無理矢理入ろうとするが、その手に持つた長槍を一人全く同時に動かし、まるで×印を作るよう逆を塞いだ。

「王は執務にお戻りになつた、面会は許可されてない。」

「また魔物達が活性化した事もあり、今後城での職務に従事する者

以外は立ち入り禁止だ

門番の一人はそれだけ言い、俺が数歩離れるとまた元の長槍を天に向け、待機状態へ戻る。

王様の時も思つたが声はそれぞれピッタリと合つていて違和感も無く、かといって演技に問題も無くはまり役なのだが、目の前の二人は違う声だつたし、王様もまた違う声だ。

もしかしたら、このデュアルワールドのNPCは全員それぞれに声があるんだろうか、なんて考えが頭を過ぎるが、いくらなんでもそんなことが出来る訳はないだろうし、まだ三人の声しか聞いてないからあまりにも情報が少ない。

それにエンディングを迎えるとキャストも表示されるから、その時に疑問も解決するだろう。

そう自問自答し、城を背に歩き出す。

振り返つた先の開けた町並みの中心に、さつきまで見ていた噴水があつた。

OPで見て、タイトル画面でもあつた町の中心の大きな噴水の周りには、子供たちが遊んで居たり、その子供たちの付き添いらしい大人達も居て世間話でもしてるのであつた。やけに賑やかだつた。

残念ながらOPで乗つていた飛竜は姿形も無く、あれがOPだけの特別な存在だつた事を思い知らされる。

しかしこれからストーリーを進める事でまたあの飛竜に乗れるかもしれない、そう思うとあの風景を思い出して胸が躍つてしまつ。

しかもOPとは違い自由に操作できる可能性もあるんだから、期待は膨らむばかりだ。

とは言つてもおそらくは乗れても中盤からで、序盤では無理だろうといつのはどんなRPGでも似たような物だ。

いつまでも飛竜の事ばかり考えていても仕方ないので、まだ日の差すうちにRPGでの醍醐味の初步の初步。街中の人達に聞き込みを開始しなければなるまい。

と思つたが、その前にはステータス確認だ。

と思つたが、メニューの開き方がわからない。

メインメニューの時みたく周りに浮いてる訳でもないし、キャラ

マイクの時のようなシステムスフィアも無い。

となれば、残されたのはジェスチャーかボイスか。

一瞬考えたが、メニューを出すジェスチャーと言つのがすぐに思いつかず、とりあえずボイスの方から試して見ることにする。

「……メニュー」

なんか大声で言つと恥ずかしい気がして、小声で呟く。

NPCのだからこちらからアクションを仕掛けない限り、反応が返つて来る事は無いのだが、造形がリアルなので頭で分かっていても、いざとなると体が本能的に避けるのだった。

幸いにも試行一発目から当たりだつた様で、目の前にキャラメイク時と同じ半透明な板が空中に浮かぶ。

アイテム、ステータスから始まり、その下にお馴染みのメニューがつらつらと並べられてるがとりあえずアイテムを覗く。

半透明の操作盤のアイテムの表記されている所をタッチすると、新たな操作版が空中に現れる。

そこにはアイテムが表示されていて、現在は銅の剣、薬草が二つのみだつた。最初から武器と回復アイテムがあるだけまだ親切な方と言えるかも知れない。

更にアイテムを表記する操作盤の端に表記されている数字から、持ち歩けるアイテムの上限数は三十だと言う事がわかる。

もちろん今持つている武器と薬草で二つの枠が取られているから、現在の残り枠は二十八となる。

それ以外は特に得るものも無く、アイテムの操作盤を閉じる。

…前にやり残した事があった。

お約束と言うかなんというか、当たり前の事なのにそれが抜けて

いた自分の頭に少し残念な感情抱かずにはいられない。

思い出しだだけマシか、と自分に言い聞かせ、アイテム欄にある銅の剣を指先で叩く。

操作盤に更に重なるように、装備しますか、はい、いいえの表示が現れる。

武器は装備しないと意味が無いよ、って訳だ。

はい、を更に叩き、その瞬間にアイテム欄から銅の剣と言つ表示は消え去る。

……成る程、装備は手持ちの道具とは別か。

次に腰の所にずつしりとした重みが増えるのを感じ、視線を移すとそこには安っぽい皮製のベルトにぶら下がった、錆びてるんじやないかと思うぐらいの赤さを帶びたごつい剣があった。

試しに抜こうとして見るが抜けない。どんなに力を入れても、抜く角度を変えて見ても。

少し銅の剣と格闘して、街の中では抜くことは出来ないのだと結論付けた。

確かに、RPGで街中を抜刀しながら歩く、そんな主人公を俺は見た事が無い。

アクションゲームなんかだと自由度の高い作品では出来る事もあるが、RPGは基本的には敵と遭遇した時にしか戦わないのだから、そういうた場面以外で剣を抜くタイミングはイベントぐらいな物だ。装備できたのは確定なのでこれ以上は無駄だと悟り、再びアイテム欄に目を向けたが、他にやる事は特に無かつたので再びメニュー画面の操作に戻り、今度はステータスの文字を叩く。

新しく現れた操作盤からはいろんな情報が読み取れる。

まずは各種ステータス。LVから始まりHP、SP、MP、筋力、体力、魔力、敏捷と続いている。

まだレベルが一なのでどの数値も一桁が大半で、HP、MP、SP、SPはなんとか一桁だが、基本的に増減するものだと思われるの一桁でも心許ない。

それとは別の所に表記されているのはAP。アビリティポイントだ。

今はまだ何の世話にもならないが、後から特殊な技能を得るのに使うだらう事は予測が付く。

操作盤の端っこに地味に表記された、所持金を表す欄は空しくゼロを表示していて、ただお金の単位であるC^{クロス}だけが意味のある表記となっていた。

最後に気になつたのが、半透明な紫色の水晶の欠片の様なアイコンがあつて、その隣にはこれもまた所持金と一緒にゼロと書かれている。単位は無かった。

最初はなんだらうと思つたが、すぐに思い当たる節が浮かぶ。

王様が言つていた『魔物達に碎かれた星の命』それがこれの事なのだろうと言うのは、何作かRPGをやつていると直感的にわかる。いわゆるキーアイテム。冒険の目的であり、いくつもあるそれをどのくらい集めたのかを表記するカウンター。

とは言え物語の本筋には関係の無い、主人公を特別に強化したりするのに使うアイテムなんか似たような感じで、メニューに表示されている事もあるが、今回は王様の発言から分かるように碎かれた星の命、つまり欠片と言うのは簡単に推測できる事で、アイコンから見て疑う余地も無いだらう。

それがどのくらいの大きさかまでは流石に予測が付かないが、少し進めばボーナス的なイベントで一つぐらいは手に入るはずだ。それで実物を手に入れれば大きさなんてすぐに分かるだらう。だから今は特に気にしない事にする。

そして次にする事、メニューの下から数えたほうが早い所、コンフィグの文字。

つまりゲームの色々なところを自分なりに調整する設定の項目。それを叩く。

現れた操作盤を上の項目から確認していく。

BGM、効果音、音声等のお馴染みとも言える音量調節は無く、

文字送りの調整も無い。

これらはVRゲームであるが故に必要な無い項目だったのだろう。確かにBGMは流れてないし、兵士に止められた時も、会話した時も、効果音らしいものは無かった。

画面に文字が表示される訳ではないので文字送りも必要ないし、音声を消してしまえば読唇術でも使うしかないだろう。幸いに口の動きもリアルそのものだ。

誰もしないし、出来ないだろうが。

慣れ親しんでいる項目はほとんどが無く、せいぜい操作盤の色を変える、透明、半透明を切り替えたりする項目ぐらいが従来のゲームからも引き継がれている項目だろうか。

その代わりにVRゲーム特有の項目ももちろんある。

まずはその一つを弄ると、自分の周りを飛ぶ球体が現れる。

それはシステムスフィアだった。弄った項目は、メニュー開閉時の認証方法という項目だった。

デフォルトの音声認識、今切り替えたシステムスフィア認識、後はメニューを出す時に浮かんだもう一つの方法、ジェスチャーだ。どうやらきつかけになるジェスチャーを自分で登録するらしく、人によつては便利になるだろうが、俺はそれを選ぶ気にならなかつた。

他にも項目はあったが、特に調整する必要もないと思つたのでそのままにしてメニュー画面を閉じる。

なんだか設定が終わると一仕事でもした様な気になつてしまつが、従来のゲームで言えばようやくこれから自由に操作出来る様になり、気持ちが外に向いているはずなのだが……。

「あ

不意にある事を思い出して、もう一度メニューを開く。今度はボイス認識ではなく、変更した通りシステムスフィアに触れて。

動作は違えど全く同じメニューが開き、更に端の所に表記されている時間に田をやる。

デジタルな時刻表示はもうすぐ昼になる事を示していた。

区切りもいいので、ここで一旦ゲームを中断して昼飯を食べてから、気持ちを改めてやり。

昼飯のメニューをどうするか、冷蔵庫の中身を記憶から漁りながら考える。

それと同時に平行して次にゲームの中でやる事も考える。

当初の予定通り街中の人達に話を聞いて、……その話によつて多少は行動が変わるかもしねりが、その後は RPG の肝でもある戦闘だ。

VR RPG の戦闘がどういう仕様なのかは、情報も無く分からない事しかないが、ここまで素晴らしい出来を誇る世界を作つているのだから、戦闘が味氣の無い物にならない、といつ予感はひしひしと感じていた。

そう考えると俄然やる気が出てきて、このまま昼飯を食べずに……なんて考えも浮かぶが、腹が減つてはなんとやら、ちやんと腹ごしらえはする事にしよう。

開いたままのメニューから中断を選ぶ。

その瞬間、現実で VR 世界に飛び込んだ時のような感覚が再び襲い、意識が途切れた。

正しきは眞実

腹ごしらえを済ませ、使い慣れたドアノブを捻って、見慣れた自分の部屋に入る。

ベッドの上に転がしたままのVRGを手に取り、まだ慣れてないせいか少し手間取りながら頭に装着する。

目の前に広がる光景は真っ黒な画面を下地に、操作盤と同じ半透明な板が張り付いているもので、そこにはゲームを中断している面と、何のゲームを中断しているか 今はデュアルワールド が表記され、その下に再開する場合はVRボタンを押してくださいとご丁寧にも表示されている。

何も気に留めることも無く、頭の右側、耳より少し前の所ぐらいにあるVRボタンを慣れない手つきで探し、押す。

三回目にもなる体の先から冷えていき意識が途切れる感覚に、少しは慣れてきたものの、今だに少しの不安があつたりする。

これは特にこのVRGに限った事ではなく、VR技術で仮想現実に飛び際は付いて回るらしく、次第に気にしなくなつてくるらしい。それが何時になるかは自分次第なので、今は気長に待つしかないだろう。

いくら俺が不安を抱こうとも、もう数ある実績を上げたVR技術の応用な上、商品化されたといつ事は~~安全~~全面も特に気にする事もないはずなのだから。

意識が途切れ、再び目を開けるとそこはもうデュアルワールドで、中断した城の前からそのまま始まる。たつきとどきも変わつていない。

じつちとしては立つたまま寝てて、そこから目を開けた、という奇妙な感覚があつたりするのだが、そこらへんに文句を言つのはお門違いか。

それが嫌なら何処かに座つたり、寝転がりながら中断コマンドを

叩けばいいだけの話なのだから。

今度からはそうしようと、心に決めてから足を踏み出す。

やる事は昼前に決めた通り、町の人達への聞き込み。情報もそつだがイベントがあるかもしないし、武器屋と防具屋、後は道具屋なども見て回りたい気持ちがあつた。

所持金は相変わらず空だが、性能と値段から手ごろな物に目を付けておくのは俺なりの序盤の定石だ。

序盤は基礎ステータス自体が低いために、装備も含めた総合的なステータスの大部分を武器の性能に頼らざる負えない。

なので少し値が張つても攻撃力が上がる武器を買っておけば、そつそう戦闘で負ける事も無くなるし、楽に敵を倒せるおかげで経験値稼ぎもお金稼ぎもスムーズに進む。

この街は閑散として品揃えも無い、狭くて住人も少ない、よくあるRPG初めの村みたいな状況とは正反対だったので、品揃えは期待できるし、人が多い分、情報も期待できる。

一国の城下町なのでそれなりに広さがあつて、全部周るのは骨が折れそうだが、それもまたRPGらしい楽しみとも言えるだろう。自然と顔が笑い、足取りが軽くなる。

心の中で無駄にテンションを上げながら、まずは噴水を目指して歩き出した。

城の前、一人の門番を背に歩き出し、足を踏み入れたのは大通りと思われる広々とした道。

そこには荷物を運んでいる馬車や、道の端にいくつも立ち並ぶ露店、並ぶ商品を品定めしている人も居れば、店主と楽しげに笑い合っている人も居たりして、活気に溢れるいい所だと思えた。

歩けないほど人が居たわけではなかつたので、歩いている人達の隙間を縫つて歩いていく。

その途中で気付いた事だつたが、システムスフィアが浮かぶ様に設定を変えてから、俺の周りを飛ぶシステムスフィアに通行人達は気付いてないどころか、ぶつかる軌道でもぶつかつたりせずに入を

すり抜けて行く。

システムの名の通り、どうやら干渉できるのは俺だけみたいだった。

噴水までたどり着き、手当たり次第に話を聞こうと思つていたのだが、なにやら騒がしく変な雰囲気を醸し出している人だかりが目に付いた。

噴水を取り囲むように家々が並んでいるその一角。およそ十人ちよつとの人が何かを取り囲むように集まつて、なにやら怒声やら罵声を叫んでいるようだつた。

気になつて近づいて見るが、全員が全員別々に叫んでいるので全く聞き取れないし、何を中心てそんな怒つているのかもわからない。これがイベントである事は人だかりを見た時からなんとなく分かっていたので、人垣の一番外側に居た、少し高級そうな服を着てぽつちやりとした商人風な男に事情を聞くために、その肩を叩く。

前の何かに向けて放つていた嫌な顔のまま振り向き、今度はその敵意が俺に向けられる。

だが愛想の良い顔をすると、少なくとも刺々しい物は無くなつたようで、やんわりとした嫌な顔に変わつてくれる。

これがイベント通りの仕様なのか俺の愛想が良かつたのかは分からぬが、話が聞ける程度には和らいでくれたのでよしとする。

あまり待たせてもまた刺々しくなりそうだったので、手早く口を開く。まず確かめるのはどうしてこうなつたのか、誰がこうしたのか、だ。

「この人だかりは何なんですか？」

俺がそう言つと、俺の全身をくまなくしたから上まで見て、それから嫌々と言う顔が少しの驚きと共に商人にふさわしい笑顔に変わる。

「あんた、冒険者か。成る程、なら知らないはずだな、あの性悪女の事を」

商人風の男の顔が再び嫌そうな顔をするが、自分に向けられた物ではないとわかる。

この騒動の中心、この人だかりを作った原因である人物に向けられていた物が、再び向けられただけだ。

性悪女と言つていたけど、こういう時は大体物語りに絡んでくる重要キャラクターな可能性が高いので、性悪という部分で避けたい気持ちがあつたが、仕方なく首を突っ込む事にした。

性悪女？と返すと、なんらかのその性悪女にやられた事を思い出して腹が立つたのか、眉間に皺を寄せ、怒りのままに説明してくれた。

「あの女、名前は偽名ばかりで分からぬんだが、金を持つてる男ばかりを狙つて、色仕掛けで出来た隙を突いて人様の金をくすねてたんだ」

成る程。どつちが正しいのかはまだ決めかねるが、なんとなく事情は分かつてきた。

そう言わるとこの商人風の男もそうだが、集まっている人たちは全員男で、身なりがどれも質のよさそうなものばかりだった。事情は分かつたので、今度は本当にこの人垣に首を突っ込み、その性悪女と言うのをこの目で確認する事にする。

ゲームの主人公らしく無理矢理人垣を掻き分けて前へ出る。

なんなく最前に出れた俺の目が、その罵声怒声を浴びせられる性悪女を捉えた。

ピンクか紫か、またはその間の色合いを持った髪の毛を左右で縛る、いわゆるツインテールにしていて、その毛先は面白いくらいに跳ねている。

目尻が少し上がつていて気の強そうなイメージを受けるが、長い事怒鳴り声に晒されていたせいなのか、その紫の瞳には涙が少し溜まっている様にも見えた。

服装に乱れは無く、暴力なんかを振るはないのはせめてもの良心なのか、年齢制限の壁なのか。

女の子は地面に座り込んでしまつて逃げる気も起きないのだろう、ただ虚ろに人垣に目を向けているばかりだった。

そんな時女の子と目があつた。誤解ではなくしつかりと、ぴつたりと。

俺が顔に怒りを浮かべていなくて、怒鳴つたりもしていなかから、この人達の中では浮いて見えたのかも知れない。

彼女の視線が一縷の希望を持つて、俺に助けてと訴えかけてくる。選択肢でも出てきそうな空気が流れたが、このデュアルワールドでは自分の行動によつて選択を選ぶはずだ。

この人だからだつて、気にせず関わり合いにならなければ、こういった事態にはなつてないはず。

助けを求める少女の瞳に、俺は……彼女に背を向けた。

一步踏み出した後、人だからの方を見る。何事かと、集まつていた男達全員が俺に注目している。

普段の俺ならこんな事はしないだろう。でもここはゲームの世界、俺が主人公の世界。

だつたら多少の無茶も通つていいはずだ。

だから俺は、彼女を守るよつに、男達と対立するよつに、その狭間に壁の様に立ち塞がる。

金は無い。だから彼女が盗んだというお金を俺が返すのは無理だ。力で捻じ伏せる。これも初期ステータスなので無理だろう。

口で捻じ伏せる。話を聞くに相手の方が筋が通つていて駄目だろう。ハツタリなんかで誤魔化せる程の頭の回転と口のうまさも自信は無い。

じゃあどうするか。思い浮かぶ答えは一つ、それもうまくいくか

は分からぬ。

でも彼女の助けに応えたからには、どんな手でも使って助けてやるしかない。

まずは俺の話を聞かせる所まで、場を落ち着かせるしかない。

「皆さん、落ち着いてくださいー。怒鳴るだけでは何も解決しません。まずは話を……」

「関係ない余所者は黙つてくれるかー！」

俺が乱入して声を上げた所までは静寂を保っていたが、それは乱入者である俺の正体が何なのかを頭の中から探し出していた時間らしく、その答えが出た瞬間に怒鳴り声で張り上げた声が止められてしまう。

「あんた、身なりからじて冒険者だろ？。だとしたらこの問題に關係ないし、関わる必要も無いだろ？」

確かに正論ではある。俺にメリットは無いだろ？、デメリットしかない。

もちろんそれはこの「デュアルワールド」の住人から見たら、の場合である。俺も同じ立場だったならそう言つだろ？。

俺の推測が正しければ、このイベントはデメリットもあるがそれを越えるメリットをもたらしてくれる筈だ。

だから相手がいくら引き下がつた方がいいと勧めてきても、それを跳ね除けて俺は彼女を助ける。

「そうですね。確かにあなたの見立て通り、私は駆け出しの冒険者です。彼女とも面識はありませんし、助ける義務も無いです」

「だったら……！」

「しかし、私にもやはり思う所はあるのです。私は今日始めてこの

街を拝見しましたが、とても素晴らしい感嘆いたしました。所がその素晴らしい町並みの一角でこんな騒ぎが起きてるじゃないですか。しかもこんな大人数がよつてたかつて、一人の女の子に「

口を挟む隙も無い程に流れるように言葉を紡ぐ。しかも内容がこの街を褒める物であれば、この街に住む者にとつては悪い気はしないだろう。そして更にそれを貶めているのが自分達だと余所者に言われば、頭に血の上つた人達も少しは頭を冷やしてくれる。そうなれば狙い通り、俺がペースを握つて話を進められる。

「傍目から少し眺めさせて頂きましたが解決する様子も無かつたので、私が仲介人としてこの問題を解決したいと思いまして」
「う……ん、そう言わればそつかも知れないが、だがこの女が一方的に悪いのは確かだ。あんたはどうやって解決するんだ?」

心の中でガツッポーズをする。

向こうがこっちに対して歩み寄つてくる姿勢を見せたなら、後はもう俺が仕切つて行つても大丈夫だろう。多少は強引になるが、致し方ない。

「ええ、解決するためにもお互いの話を聞かせてもらつていいですか?嘘をついているとは思いませんが、お互いの齟齬はなるべく無くしておいた方がスマーズですから」
「わかった」

男達の代表として俺と話していた三十手前、下手をすれば三十を越えてるかも知れない細長い顔をした男がそう言い、自分が少女に騙されるまでを詳細に語つてくれた。

周りの男達もその人が喋る中で、所々頷いたりしてて、おおよその手口は全員が共通の認識を持つてているようだつた。

実際語つてくれた内容も商人風の男から聞いたものと同じ様なものだった。

他の男達に改めて「皆さん、」のような感じですか?」と聞くと力強く頷き返す。

これで片方の言い分は揃つた。

次は騒動の原因、力無くへたり込んでいながら男を騙し続けてきた可愛らしい少女。

その言い分を揃えなければならない。

地面に力なく座り込んでいる少女の前にしゃがみ込んで、目線を合わせる。

泣いてたり、怯えている子供なんかは目線を近くして優しく語り掛ける事で、素直な子なら言うことを聞いて懷いてくれたりもする。ちなみにこれはバイトで培つたスキルで、そのおかげで割りと親子連れに顔と名前を覚えられてたりする。

今回はそんな小さな子供ではないものの、怯えて精神的にも弱つてゐる事が見て分かるので、少しでも信頼してもらつたためにやつてみたが、どうやら効果は少なからずあるようだつた。

「……あなたは、どうして……」

今にも泣き出しそうな声で喋るので、喋るのを一寸止めさせたために手を翳して制する。

それは少女に伝わつてくれてみたいで、言葉は無くなる。背中に刺す男達の視線が痛いが、慌てず焦らず、落ち着かせる。

「安心してください、私はあなたの味方です。だからどうかありますまの真実を話してください。それで私が何とかします」

立場的には仲介人としてなので、彼女の味方とは大きな声で言えず、彼女だけに聞こえる声量で耳元に少し千近づいて囁く。

耳元から顔を離し彼女の顔を見るが、まだ疑いが完全には晴れてはいないような表情だったのに、最後の一押しとして出来る限り優しく、笑顔で、今度は囁く必要は無いのでしっかりと言葉を吐く。

「大丈夫」

彼女の顔が今度こそ明るく、希望を見つけた顔になる。
後は事の顛末を聞き出す。

それは俺が言わなくても、少女は状況が分かっていて自分から話し出すのだった。

「……私はシア・アメシスト、孤児院の子です」

少女の名前とこの騒動の真相に迫るキーワードと思われる、孤児院。

それを聞いた男達が急にざわめき出す。言葉の中の単語すら聞き取れないが、少女の言葉になにかを連想させるものがあつたのだろう。

少女はそんな男達のざわめきも意を解さない素振りで、しつかりと俺の目を見続け、話を続ける。

「私は幼少の頃に捨てられて、ずっと孤児院で過ごしてきました。親の顔も知らないし、記憶も孤児院の物しかありません。……けど私は幸せだった。母代わりに大事に育ててくれた人も居て、私は血の繋がっていないとは知つていましたが、それでもその人を母と呼びました。それが……母さんが一番喜んでくれたから……！」

何かを思い出したのか、一度引っ込んだはずの涙が再び溢れそうになつていて。

俺はゆっくりでいい、とだけ言って静かに言葉を待つた。

後ろの男達はもう黙つていて、ただ静かに俺と同様少女の、シアの言葉を待つていた。

「でも……幸せな日々は永遠には続きませんでした。孤児院の前に置かれて行く子供が年々増えるばかりで、私も手伝いはしていたもの、それでも次第に追いつかなくなり、やがて……母さんは過労で倒れ、そのまま……息を引き取りました。そうなれば母さんの名前の元に集まつていたお金も、人一倍動いていた母が居なくなる事によつて人手も足りなくなり、その結果は……」

そこでシアは黙つてしまつた。
再び涙を溢れさせ、今度はそつ簡単に止まりそうも無いほどに泣いていた。

しかし、俺には今のシアの話が男達から金をふんだくる事に繋がらない。まだ何か明かされていない真実がある。
それを知るのはシアと、後ろに居る、せつせつわついてた男達。
俺は振り返り、男達に問う。

「何か……知つていますね」

なるべく感情を消す。怒りを感じていた訳じゃないし、シアに同情した訳でもない。
出来るはずがない。まだ真相を知らないのだから。

「あ……あ、確かその孤児院は潰れてしまった。それと残された子供達の引き取り手を探していたのも知つていて。その子供達がどうなつたかは知らないが……」

「売られましたよ。……いや……買われていつた、と言つた方が正しい、ですかね……」

いつの間にか泣き止んでいたシアが少し強めに話しながら会話を入ってきた。
その声にはいろんな感情が混ざっている、やう思わせる声色だった。

「私は働ける年で働く所も見つかったので、この街から離れる事はありませんでした。でも買われた子供達が心配で、……これは明かせませんが、ある人に頼んで子供達が今どうなっているか、……それと過去の事を調べてもらいました」

急に男達がざわめく。それもさつきの比にはならないほどに。中には逃げ出そうとする者までいたが、俺は大声を張り上げ、元からこの騒ぎに興味を向けていた人達に協力を仰ぎ捕まえてもらつ。元よりこの街に住んでいるのだから逃げ道などないだろうに。ここまでシアが話してるのだから、延々と怒鳴り続けた奴等は、最後まで聞かなければいけない義務がある。

男のむさい怒鳴り声より、透き通るようなシアの声で語られる方が一千倍はマシなのだから、それくらいは我慢すべきだ、と逃げた奴等に言い聞かせ黙らせる。

逃げ出そうとした男達は涙目になっていたが、生憎と逃げた事が自分たちが悪いと示しているようなものなので、一切の情けはかけない。

場が収まるごと、シアは再び語りだす。

「そして子供達の生まれの理由を知りました。金持ちの道楽、と言うにはあまりに行き過ぎたその行為を」

一息を置く。

きつとこれから喋ることに関しては、一際抱く感情が違うのだろう。

目には先程までは見えなかつた怒りが垣間見え、それが男達に向かっている。

「彼らは自分達が遊び呆けていた証拠を！ その証拠の子供を孤児院に預ければいいと、繰り返し続けた。その結果は、……悲惨な物にしかならなかつた！！！ 子供達の引き取り手を探す時もあなた達は事実を知りながらも、無視をした！！」

シアが初めて見せた激情だつた。

だからその声に、雰囲気に、……事実に、近くの全員が驚き、当の本人達は力なく崩れ去る。

正直、この展開は予想していなかつた。

俺が借金を肩代わりする方向で話を進めようとしていただけに、俺もこの話に呑まれていた。

でも俺は立場上仲介人だ。もう流れ的には決した様なものだが。だから最後には俺が仕切つて終わらせなければなるまい。

「ここに互いの合意の元、選ばれた仲介人である私が、この騒動の裁量をさせて頂きます！！」

噴水を取り囲む全員に聞こえるように、まるで一つのエンターテイメントのようだ。

「騒動の発端は少女、シア・アメシストがここにあります男達に色仕掛けを仕掛け、そこ出來た隙を突き金を盗んだ事に始まります。男達の言い分は一つ。あの女が俺達を騙した、だから俺達は悪い。一方少女は男達が金に物を言わせ、子供を作るも育てずに他人に擦り付けたその責任を、大切な母君と必死に背負つてきました。しかし当然限界はあり、それに耐え切れなくなり家族同然の子供達は各地へ売りに出され、たつた一人の母親を間接的に殺され、居場

所である孤児院すら潰された。後に調べると引取り手を探す時に名乗り出なかつた人達が子供達の生みの親だと発覚。それを知つた彼女は！？」

ここまで大仰に離し立てるに嘘つぽく感じてしまうのだが、今この時に限つてはこれぐらいやつても足りないくらいだ。

言葉を切つたのはこの先の閉め所を知らないから。

彼女が何故事件を起したのかは分かつていただが、その先のどうしたいのかを俺はまだ聞いてない。

だけど、わざわざ彼女に聞いてから俺が言い直す必要も無い。

座つたままの彼女に手を差し伸べる。

ここから語るのは君だ、と。

少女は手を取つてくれた。立ち上がり足に着いた汚れすら払わずに、大きな声で叫んだ。

空に、全てに、響くよ。

「彼らが見捨ててきた子供達とその子供達の未来の代金を払つていただき、新たに孤児院を建てます！！」

彼女の言葉を染み渡らせるよつに間に置いて、後は俺が場を引き継ぐ。

「仲介人である私には少女、シア・アメシストに理があると思いますが、……折角ですので皆様にも裁量をしていただきましょう！！私と同じ意見をお持ちの方は拍手を！！」

俺が叫ぶと、次の瞬間拍手の嵐が巻き起こる。

OPの歓迎の拍手とは違う、皆が正しいと思つた、彼女が正しいと。

行つた行動だけじゃなく、その理由に至るまでを吟味し、下して

くれた判断に、もはやケチのつけようは無かった。

そんな拍手の嵐の中、服が引っ張られた。

振り返ると少女の顔があり、瞳が合つ。

「……ありがとうございます！」

そう言つて少女、シア・アメシストは大粒の涙を流した。
今度は悲しみからではなく、喜びから。

騒動は收まりを見せた。

街中での大騒ぎに城の兵士達が何事かと様子を見に来て、当事者であるシアと男達は事の顛末を詳しく聞くために城へと連れて行かれた。

俺はただの仲介人だつたので、特に拘束されるような事も無く、町の人々から賞賛されるばかりだつた。

仲介人、と言つても話を聞き出し、町の人々を扇動したりと、道化の様な役割しかしてなかつたが、結果的に思つた通りの結末に至れて良かつた。

無理矢理にでも首を突っ込んで、このイベントをこなそうと思つた一因に、あの少女の存在がある。

流石にこの展開は予測できなかつたが、あの少女が仲間になる可能性が高いと睨んだからだ。

地面に座つていた時に魅力的な細足が顔を覗かせるスカートの隙間から見えた、太股の所に黒いベルトで括り付けられた、こげ茶色の皮の鞘に納まつた短刀。

あれは彼女が戦闘も可能である事を示している気がしてならなかつたのだ。

それに他の街の人々なんかとは違う、物語の本筋に絡まないモブキャラ特有の地味さという物が、彼女から感じられなかつた。

むしろその逆での目立つ髪色と、可愛らしい顔立ちに声、服装はどこか周りとは一線を引くデザインだつた

これであの少女には貸しを作れたので、今後それを理由に仲間として連れ立つて歩けるとすればいい事尽くめだ。

最初からそんなに高いレベルでは無いだろうけど、一人が一人になつて戦闘における行動回数が増えたり、パーティ内での役割分担なんかも出来るようになる。

もつとも彼女の目的が目的なので、ここはまた一つ彼女を言いくるめる舌戦を繰り広げなければならないかもしないが、こちらに好意を寄せてくれている分、あの騒動を収める時よりも簡単かも知れない。

あの少女の事を考えたついでに改めてあの騒動を思い出す。

推測にしか過ぎないが、彼女はあの真実を皆に分かつてもらいたかったんだと思う。

だからあそこから実力行使で逃げようとも思わなかつたんだろうし、どうにか話を聞いてもらおうと最初は努力したに違いない。いや下手をすると子供達の事実を知つた時から憎しみ全開だつたかも知れないが。

外見からは気の強そうなイメージしか持てないキャラなのに、あの騒動の中で見せた彼女の顔はどれも礼節を知る淑女、と言うイメージしか持てなかつた。

とは言え、色仕掛けで騙して金を盗んだ事は否定しなかつた事からも、それが事実であるのは十分推し量れる。

どんな理由があろうと盗みを働いた女の子に淑女と言つのは、他の淑女に失礼な気がしないでもないが、あくまでも俺自身が抱いたイメージなので、さほど気にすることもないだろう。

思い返した騒動と少女の心境を推理してると一つの疑問が浮かぶ。ゲームのNPCなのにリアル過ぎないか、という事だ。

あの最中では普段大人しい俺もつい気が大きくなり、演劇部での癖のかつい大立ち回りをしてしまつた。

これがNPCしか居ないオンラインゲームだから良かつたものの、将来的に出てくるであろうオンラインゲームでやつたならさぞ恥ずかしい事だらう。

自分の行動を思い返して、顔が真つ赤に染まり、恥ずかしい気持ちが胸いっぱいに広がりただ悶える。

少しの間頭を抱えて悶えるとよつやく落ち着きを取り戻すことが出来て、改めて落ち着いて考える。

門番の時はてっきり何回城に入ろうと挑戦しても、寸分変わらない動作と、一言一句変わらない台詞で返されると思っていたので気にせずに先へ進んだが、今回は俺の話す言葉を理解した上で会話をしていた。

選択肢があるわけじゃないので、あらかじめ決められた通りにNPCや主人公が動くのではなく、プレイヤーの行動、言葉で状況が逐一変わっていく。

そしてそれにしつかりと対応するNPCの頭脳。思考の元であるAIが人間と同等の物を持つてるとしか思えなかつた。

VRGが出るまでの間にこんな高等なAIを持ったキャラが居るゲームは無い筈だ。そんなゲームがあつたならネットなんかで騒がれないはずが無い。

それにこの人間並みの思考を持つキャラは、固有キャラの可能性が高いシアに限つての事じゃないという所も、中々興味深いものがある。

商人風の男は典型的な返答だったものの聞かれたら、それに対しての答えを返してくれた。

仲介人として間に入つた時に男達を代表して俺と会話していた、細長い顔の男も俺とちゃんと会話をしていたし、感情が荒れ狂つていた男達をなだめようと俺が言つた言葉も、しつかりと男達は理解し収まつてくれた。

シアは俺が差し出した手の意味を言葉にせずとも理解してくれたし、街の人々も突然の俺の呼び掛けに応えてくれた。

俺の行動が一般的な行動だとは思つてない。

それを予想し対応できるAIを作るとなると相当難しいのではないかと思う。専門的な知識は無いので詳しくは分からぬが、簡単に出来るなら、これもまたさつきと同じ理由で、従来のゲームでそういったキャラが居ないのはおかしいはずだ。

それにこれはオンラインゲームで、いくつものプレイヤーが購入し、プレイしているはずで、それら全ての行動に対応できるのは、

やはりそれぞれのデュアルワールドにおいてNPC達が自分で考え、行動する必要がある。

人と同等の思考を持つ仮想の人間。

映画かなんかでよく題材にされたりする言葉の並びだが、今回は同じフィクションでありながら自分で、自分なりのコンタクトを相手に取れる。

その間には絶対的に埋まらない差があるが、逆にここまで人間に近いと良くない事を考えてしまうの仕方が無い事かも知れない。

年齢制限的な行動はおそらくは禁止されている。

デュアルワールドは全年齢対象のゲームなので過度な暴力や性的行為は無いはずだ。

……そもそもVR技術の応用での性行為等はVRGに限らずVR技術に関わる全てで禁止されている為に関係なかった。なんでも身体や精神にどのような影響を及ぼすか分かっていないからだとか。

いくら実用化が進んでいてもまだまだ発展途中の技術なのかも知れない。

後はプレイヤーがデュアルワールドの住人に対してどのような感情を抱くか、だ。

俺はゲームをプレイしているだけで、いかに住人がリアルだろうとその絶対的な壁を持つために気持ち悪いとは思わない。

そもそも自分自身がこの世界の冒険者と言う役割を演じているのだから、その仮の自分と相対しているのが限りなく人間に近いフィクションのキャラだとしても、こっちもフィクションのキャラを演じているだけ、と割り切ってしまう。

だが俺とは違う考え方を持つていて、はっきりと住人達を気持ち悪いと言う人も居るだろう。

現実と同じ様にそこに人がいて、喋りかければ応えてくれて、自分の行動が周囲に影響を及ぼす。だからこそ、そこに現実と同じ考えを持ってきてしまうのだろう。

……他のプレイヤーの心配をしてもしょうがないか。

空を見上げた。

熟しそぎて腐りかけた思考を、空を見上げる事で綺麗にする為に。長く答えの出ない事ばかりを考えても、ただ脳を空回すだけの無駄な行為にしかならない。

他人がどう思つてゐるのか、どんな技術でこの世界が出来ているのか、そんな事は何も気にする事じやなかつた。

俺はただこのデュアルワールドの冒険者となつて、碎かれた星の命を探す。ゲームをクリアする、それだけがやる事だ。

別にオンラインゲームではないのだから他のプレイヤーに気を使うこともないし、ノイズのような思考をこのゲームに持ち込んでも仕方ない。

この世界を余す事無く楽しむ。それが一番必要で大事な事だから。腐りかけの思考は無くなり、強い日差しが満遍なく街に降り注ぐ。噴水に腰掛けていた俺は、視線を空から城の方へと移す。そこには一人の少女が立つていた。

右手を上げて存在をアピールすると、俺の姿を見つけた少女が途端に表情を明るく切り替える。長い間事情を聞かれていたおかげで暗かつた表情は見る影も無い。

噴水の近く、俺の目の前まで駆けて来て立ち止まる。肩より少し長いツインテールが揺らしながら、腰ぐらいまで頭が下がるくらいの深いお辞儀をされた。

下げられた頭を無理矢理上げる訳にもいかず、とりあえずは黙つて頭を上げるのを待つた。

少女、シアが頭を上げると同時に俺は言葉を掛けようとするが、それより早くシアが言葉を滑り込ませてくる。

「本当にありがとうございました！ あなたがいなければ私は……」

そこまで言つと急に言葉が途切れ途切れになり、それに伴つて眩しそうの笑顔が歪んでいき、泣き顔へとゆっくり変わつていく

のが見て取れた。

あ、と思う間も無く、シアはその顔を手で覆つてしまい、嗚咽を漏らす。

思つた通り、見た目のままの強気キャラではなかつたようだが、それにプラスして涙脆い部分もあるらしい。

周りの人々が視線を向けてくるが、大体の人気がさつきまでの騒ぎを知つてるので、男が少女を泣かせている、といった場面に見られないだけまだマシだった。

それでも街の人達が見ている中、ただ黙つて待つのも男らしくない上に、刺さる視線のおかげで居心地も良くないので、噴水から腰を上げてシアに近づく。

我ながら凄くクサイ事をしようとしているのは分かつていて、後でまた悶える事になるだらうという事も分かつていて、それでもその小柄な体と小さな肩を揺らしながら泣いている姿を見て、体が反応してしまいそつとその体を包み込む。

心の奥底では拒否されたらどうしよう、なんて怯えた気持ちもあつたが、それは杞憂だつたようでシアは受け入れてくれたみたいだつた。その証拠に最初は俺が一方的に抱いてるだけだつたが、こちらに体を預けてくれる。

そして泣き止む所どころか、更に声を上げて涙を流す。

全てが終わつて、今まで溜め込んでいた辛い気持ちなんかが堰を切つて溢れ出したのだろう。

俺にとつてはこの世界は今日来たばかりなのだが、シアにしてみればここで暮らしてきた記憶が、思い出がある。

どのくらいの期間かはわからないが、その生きてきた年月の一部を灰色に染めてきたのだから、それはとても悲しい事で、その今日まで積み重ねた灰色の時間も今日限りで終わつた。

だから救われた証に、全てを終わらせる為に、今はただ胸を貸して泣かせてやるのが俺が出来る事だつた。

「……大丈夫？」

「……はい……すいま、せん……」

シアは散々泣いた後、ようやく落ち着いてきて一緒に噴水の端に腰掛け居たがまだその顔を手で隠したまま。

泣いた後らしく目が真っ赤になつてゐるのをシアが体から離れた時に見たが、すぐにそれを隠してしまつた事から、そんな顔を見られたく無いという事だろう。

……現実にこんな子が居たら即告白なのに、と考えるがゲームと現実を一緒にするな、なんてお決まりの台詞がどこからか飛んで来そうなので自重する。

そこでふと思いつ出し、システムスフィアに触れてメニューを開いた流れのまま止まる事アイテム欄を開く。中から騒動の後に露店のおばさんからもらったソフトクリームを一つ選択し取り出す。白いクリームの甘さがどうたら、要約するとオーソドックスなバーラ味と説明文に書かれていた。

それを泣き腫らした顔のシアに差し出す。

おずおずと差し出す手にしつかりと握らせ、手を離す。

シアがそれを一口食べるまで見守り、恐る恐るだつたが口をつけたので、俺も自分の持つソフトクリームに口をつける。

それなりの甘さだったが、しつこくなく口の中で溶けると、また違つた甘みが膨らむ。

後味はすつきりしていて、いくら食べても太らないんじゃないかなと思うぐらいだ。

……ゲームの中だから太るわけが無いといつ突つ込みは考へないでだが。

ローグ系、不思議系と言つた方が一般的には分かりやすいかもしないが、そういうたゲームには必ずあると言つていい満腹度というステータスは、このデュアルワールドには無い。

RPGなのだから無くとも不思議な事は無いのだが、色々とリア

ルな世界なのでそういうたステータスがあつてもおかしくない、と思つて改めてステータスの画面なんかを見たが、それらしい表記は見当たらなかつた。

「このソフトクリームも満腹度を上げるものではなく、食べると体力を回復させる道具。しかも薬草の五倍は回復する」と説明にも書いてあつて、未だに一度も戦闘を経験していないのに使うのはもつたいたい氣もするが、一人で食べなよ、とくれたおばさんに悪い氣がしたので大人しく一人で食べる事にした。

暑い日差しの中、後ろには噴水と子供の声が、前には冷たいソフトクリームと暑さに負けないくらいのむち苦しい露店の親父が、何かの商品を声を張り上げて宣伝している。

街の活気をBGMに黙々とソフトクリームを食べていた。

シアの方が一口分早く食べ始めたのに、俺のほうが明らかに早く食べ終わりそつだつたのは性別の差か、食べ方の問題か。……ちなみにソフトクリームに限らずアイスは舐めずに、普通に食べる派だ。そんなくだらない事を考えながら街を歩く人々を眺めていると、横から声を掛けられる。もちろん声の主は俺の隣に腰掛けるシアだつた。

「今日は本当にありがとうございました。私じゃどうにもならなくて……復讐、つて訳じやなかつたんですけど、私にはあんな事しか彼らに出来なくて、彼らに見つかって囮まれた時も真実を全て伝えなかつたんです。どんな顔をされようともそれが真実だと知つて欲しかつたんです」

「……ああ、わかつてゐる。だが俺はあんな事を言つてしまつたが、君の取つた方法は好きじやない。結局それはただの犯罪でしかない、下手をすれば真実すら誰にも届かせられなくなる。本当に伝えたい事があるのならば誠意を持つて、正当な手段で迫るべきだ。……ごめんね、説教くさくなつちやつたけど」

「いえ、それは正しいと思ひます。私が……間違つていたんです。

母さんも自分が辛い時こそ人に優しく接しようとしましたし、それを守れずに不当な手段で奪われたものを取り返そうとした。……」

少し声色が震えていたので、また泣きそうになつてゐるのが手に取るよう分かる。

また泣かれても困るのでその頭に手を優しく乗つけて、撫でてやる。

破壊力抜群の潤んだ瞳での上田遣いに危うくやられそうになつたが……何とか堪えてゆつくりと撫でながら言葉を掛けてやる。

「大丈夫。確かにやり方は駄目だつたけど、行動する元となつた気持ちは正しいはずだよ。シアが報われなかつた子供達のために何かしようとした。それは間違つてはいないから」

「あ……はい、ありがとうございます……」

赤面して俯いたのでシアの表情は見えないが、怒つてゐるという事も悲しんでいるという事も無いだらう。

ふと、こんな妹が居たなら俺も良い兄でいれるのになー、と現実の残念な妹を思い浮かべてしまつ。

思考は現実に向いていたが、撫でてる手は止まらずシアの頭をひたすらに撫でていた。

だが思考もこっち側に引っ張られる。

そのきっかけはシアがぼそりと呟いた言葉。

何か言つたのは分かるが、街の喧騒に呑まれ何を言つたのかは分からぬ。

わからないからと言つて無視する訳にもいかず、俺は聞き直す。今度ははつきりと聞こえた。

「……名前。あなたの……」

そういえば俺はある騒動の時にシアの名前を知つてなんとも思わず使つていたけど、俺の名前をまだシアに教えていなかつたのに今気が付いた。

「ああ、俺の名前まだ教えてなかつたな。……」「めんな、俺は……」

そこで固まつてしまつた。何故かといふと俺が今言おうとした名前は現実の名前で、ここ仮想現実での名前ではなかつたからだ。
……そういえば、アバターを決める時に名前を決めてない。いや、俺の記憶が正しければ操作盤にも名前を入力する欄は無かつたはずだ。

「…………あの…………」

「ああ、ごめんね。ちょっと待つて……うん、何も聞かないで、少しだけ、ね？」

やばい。ここに来てから初めてうろたえてるかも知れない。
とりあえずはこの場を切り抜けるためにも、普段使つてるHNEとかでいいだろ。……後で名前を設定する所を確認しておこう。

手早く思考を纏めて、目が泳いでるシアに名前を告げる。

「俺は、二ケ。そう呼んでくれ

「…………二ケ、さん

まるで噛み締めるよひに俺の名を反復するシアの頭から手を離し、
その口の端に付いた少しのソフトクリームを指で取つてやる。

それを数秒たつてから認識して、シアの目がゆっくりと見開かれて、真っ赤に染まる様は見てるこっちとしては中々に見ごたえのある变化だった。俺がうろたえた事を隠すためにやつた事とは言え少

々やり過ぎたかも知れない、とも思つたが、可愛かつたので良しとしよう。

再び俯いてしまったシアに助け舟を出してやる。

もつとも攻めたのも助けたのも俺なので、自作自演みたいなものだが。

「それで城に連れて行かれて、その罰とかはなかつたのか？」

男達とシアは街中で大騒ぎ　　より騒ぎを大きくしたのは俺だが
した当事者として連れて行かれたが、理由を含めればシアの方が
が理に適つてているとは言え、行つた行為としては実際に十数件から
金を騙し取つたシアの方がよろしくない。男達はそれがあつたから
こそシアを見つけて取り囮むような行動に及んだのだから。

だから事の顛末を城の兵士が聞いたとして、どう判断を下すかは
俺には全く分からぬ。

今こうしてシアとゆつたりと話せていいし、シア自身もあまり切
羽詰まつたような態度も取つてなかつたので大丈夫だとは思つが、
関わつた以上その顛末は聞いておかなければ目覚めが悪い。

「私は、私が行動を起す理由と彼らが街中で長時間私を拘束した事
を考慮されて、お金を騙し取つた事とその盗んだお金は帳消しだと
言されました。その代わりに彼らもお咎め無しと言つて決着しま
した」

「そう、か……」

案外あつたりとしていて驚いた。流石にこの世界観で禁固刑とか
は無いと思つてはいたが、あるいは……なんて思つてた自分がどこ
か馬鹿らしく見えてくる。

だがお互にそこまで損失をこつむつた訳じや無さそうだし、こ
れにて一件落着か。

ああ、最後にシアに聞く事がまだ残っていた。

「とにかくシーアはこれからどうするんだ？」

過去も清算出来たようだし、確かに働く所もあるといってたからそこで働いて、働いて、働いて、すこしづつ貯金をためていき、新たな孤児院を建てて、そこで憧れた母親のように捨てられた哀れな子供を育てていく。そんな未来をシアは考えているかもしれない。正直、シアが仲間になるという可能性はある騒動のクライマックスで言った、シアが目指す目標を聞いた時に格段に下がったように思えた。

孤児院を建て直す。つまり詳しい事は聞いていないが、おそらくはこの思い出のある街で、出来れば同じ所に建てるだろ。お金がどのくらいかかるかはわからないが、相当な金額が必要だろ。し、継続的に収入も無ければ続かない。

一応俺は冒険者と言う立場で、根無し草な俺が彼女のためにできる事といえばお金を立ち寄った時に寄付するとか、食べ物なんかを贈与するとか、そのぐらいしか浮かばない。

ゲーム中ではサブイベント的なポジションで割とあるイベントなので、もちろんやり込む派の俺は、これから何度も無く足を運ぶ事になるだろうがそれもいいだろう。

現実世界ではそう言った行動は無にも等しいのだから、仮想の現実くらいは心優しく生きたいものだ。

突如、俺の思考を遮るシアの発言が飛び出す。

「二ケさんは、冒険者ですよね？」

「うん？あ、ああ、まだ駆け出しだけどね」

戦闘を一度も体験しない上に、いまだ初期装備の初期ステータス。それどころか街から一歩も出でていない。もつと言つなら移動し

た範囲が城からこの噴水のある広場までの、百メートルもないんじやないかと思う短距離。

一つの意味で駆け出しな冒険者。

そんな俺にさらにシアは困惑させるように言葉を紡いでいく。

「私も、連れて行ってくれませんか……！」

それは意外な申し出だった。

とは言え最初からそれを狙つていただけに、心の中では歓喜していたのだが、俺が独りでに考えていた事が引っかかり素直に喜べないのと、どうしてその申し出をするのかという理由が純粹に知りたかった。

だから俺はすぐにその答えを返さず、両手の先同士を合わせながらそわそわと俺の返事を待つシアに、まずは質問を投げかけてやるのだった。

「シアの目標、孤児院の件はどうするんだ？ てっきり働いて建て直すものだと思ってたけど……」

「孤児院の事を諦めた訳じやないんです。でも普通に働いていたら何十年掛かるかわかりませんし、稼ぎも普通に働くより冒険者としての方がいいんです。旅のついでに色々と周つて見るのもいいんじゃないかと思つて……。もちろん一ヶさん次第なのですが……」

「俺次第、か……」

何も迷う事はない。むしろ願つたりな申し出なのだ。

俺は本当に駆け出しで、この街の事も、外の事も何も分かつてゐ事はない。

そこに仲間が一人増える。しかもそれなりの時間をこの町で過ごし、地理に明るい上に、この世界の事も一般常識ぐらいなら知つているだろう。

おまけに、こんな可愛い子を連れていくなら羨望の眼差しを向けられる事もあるだろうし、何よりこれから予想される長い旅路で飽きることなく過ごせる。

これは可愛いとか関係無しに、話し相手が居ない孤独な旅は得て

して寂しいものだ。

だから俺は何も迷わないで、シアの申し出を受ける。

「俺は構わない。むしろ助かるぐらいだ。……それじゃあよろしく」

右手を差し出す。

左手にはソフトクリームのクリームはもう食べてしまつていてコーンの部分だけが残つていた。

俺の申し出を受ける言葉と、その差し出された右手に何を思ったのかは俺の知るところではないが、しっかりと握り返して、笑顔でそれを喜ぶシアはとても幸せそうだった。

「こちらこそ無理を言つてしまません……。不束者ですがよろしくお願いします」

笑顔が日差しでさらに眩しく照らされる。

その返事の言葉は色々と誤解を招く気がしないでもないが、シア自身が本当にそう思つているという極僅かな可能性もあるので、特に言及する事もなくシアの差し出した手を握る。

シアも握り返してくれて、硬く握手を交わした。

システムからシア・アメシストが仲間になつた的なメッセージが出てきても不思議じゃなかつたが、残念ながらそんなメッセージは出ない。

でもお互いが仲間だと認める事によつて、システム側でそれを勝手に認識でもしているのだらう。

シアと固く結んだ手を解き、システムスフィアに触れて、メニューを出すとそこにはしっかりとシアの名前が仲間として、パーティの一員として登録されていた。

パーティが何人まで連れて行けるのかは分からぬが、流石に一人一人でその枠が埋まるとは思えないのでとりあえず置いておき、

新たにパーティに入ったシアのステータスを見ようとメニューを指先で叩く。

そこに表示されたステータスは、ほとんど何も表示していなかつた。

せいぜい表示されていた所は名前や武器、生い立ちと書かれた文字。生い立ちの文字を叩いても出てくるのは俺があの騒動の中で聞いた事と何も変わらない事ばかり。

なんだこれ、と思つて色々と試すものの何も変わる事はなかつた。思いつくのはパーティ加入時のレベルが俺、つまり主人公基準で、俺がレベル一だからシアもレベル一……そのせいで魔法なんかは一切覚えていない、と言うのは十分に考えられる話だった。

しかしその考え方からいと、魔法、スキル、アビリティは分かるが、レベル、基礎ステータス、HP等も一切の表示がないのはどういう事なのだろう。

従来のRPGではもちろんこんな仕様を見た事はないし、何らかの意味があるのかは分からないが、現実問題そうなつてるのだから意味のある仕様なのだろうと無理矢理納得する。

念のためシアにも確認しようと顔の向きを変えると、ぱちり目が合う。

「…………どうした？」

「いえ、二ケさん」こそ何もない所を眺めていて……、何か考え方ですか？

「え……」

俺は今まで空中に浮かんだ、近未来デザイン的な半透明の操作盤を操作し、シアのステータスを見ておこうと考えて、そのあまりにも情報が少ない画面を見ていた。

それが今のシアの言葉からすると、このメニュー画面はシアに見えていないという事になる。

システムスフィアがNPC達に接触も認識もされないのと同じで、このメニュー画面も同様に接触、認識ができない。システムに関する事、普通のゲームならば気にする事でもなかつたが、このVRゲームという舞台になつて初めて意識する。

確かにNPCがメニューを開く必要もないし、それで困る事もない。NPC達からすればここが現実で、俺達が普段暮らしている現実をそれと認識する事となんら変わらない。

それならば、レベル、ステータスやスキル、魔法等はどうなるのか。

戦闘を経験し上昇するレベルは、戦闘経験を積んだつて事で特に問題ない。ステータスも同様に、体が何だか軽い気がする程度の認識で済むだろう。

スキル、魔法に関してはレベルアップと共に閃いたという形なら問題はないだろう。

アビリティはどうなる？

未だに俺のAPはゼロなので何も習得する事は出来ないが、文字を叩くと一覧が表示され、どんなアビリティがどの程度のポイント消費で獲得できるのか、どのような効果を持つのかが表記されている。

その中には多種多様な特殊技能の名前が並ぶ。

裁縫、料理、鍛冶、採掘、掃除、鍊金……家庭的なものから専門職的な事までがごちゃ混ぜに並んでいて良く分からぬ感じだったが、ある法則性に気付く。

戦闘に関するものは並んだ名前の中には無く、それ以外の部分ばかりがアビリティの一覧に名を連ねる。

つまり、アビリティもまたスキルや魔法と同じで自然に習得が可能と言うわけだ。

だからNPCにはメニュー画面が要らない。

俺はレベルアップなどでシステムからポイントを供給されて、それをメニュー画面から使う事によって、昨日まで出来なかつた事が

……やつきまで出来なかつた事さえも、ポイントを消費しアビリティを習得したならば、その瞬間から出来るようになつてしまつ。

ゲームをプレイしている側から見れば当たり前だが、何年、何十年とこの世界で生きてきた人達に、俺がこんなチート紛いな事をしていいのか、と俺の僅かな良心が痛むが、おそらく強化しなければただの人間程度の戦闘力しか得られないの、ここはゲームとして割り切つて痛む心を治めておく。

シアが心配そうに見つめてくるので、耐え切れなくなつて適当に誤魔化す。

「……ああ、うん。考え方をしててね、これから的事とか……」「これから的事、ですか……？」

シアも俺について来ると言つたのだから、俺の動向はすなわちパーティ、ひいてはシア自身の動向にもなり得る。

だからそれに興味を向ける事は自然な事で、俺もこういう展開になつてしまつたので、シアに街を案内してもらおうとか考えていた。俺自身の出自がどうか良く分からないので、一応、騒動時に余所者と言つてるのでそれに沿つて、シアに捏造した設定のまま、道案内を頼む事にする。

「まだこの街に来たばかりで見て回る暇も無かつたから、街を回りたいんだけど大丈夫かな？シアは退屈になると思うんだけど……」

「私は大丈夫です。……むしろ喜んで道案内を勤めさせていただきますよ」

ありがとう、ヒートで手に持つたコーンを口に放り込んで、噴水から腰を上げる。

シアもそれに習つて、まだ手に持つていたコーンを口に入れ立ち上がる。だがコーンまでしっかりとアイスが入つていた様で、きつ

とあのキーンとした感じを我慢しているのだから、こめかみ辺りを押さえて、まぶたを強く瞑り、眉間に皺を寄せている。

押されて、まぶたを強く瞑り、眉間に皺を寄せて いる。

そんなに急がなくともいいのに、と思うかあえて言葉にする程度ないか、と思い少しだけ笑つてやる。当の本人はそんな事とは露知らず、ひたすらに耐えているのだった。

シアの頭の痛みが取れるのを待つてやる。

ようやく収まってきたのか頭から手を離し、今までの自分を思い出してか、恥ずかしそうな笑みを俺に向けて浮かべた。

それに同じく笑顔で返してやり、予期せぬイベントもあってか遅くなってしまったが、当初の計画通りに街の人々から話を聞きながら街の探索へ向かうために、改めて声に出して言う。

「それじゃあ行くつか
「はー！」

本来ならそんな事も言つ必要はなかつた。でも予期せぬイベントこと、シアの加入イベントにより、こんな事を言つても返事をしてくれる仲間が増えた。

それを?み締めて足を踏み出す。街の喧騒に紛れて初期装備の皮靴が、石の地面を踏み鳴らす。

それに続いて軽い足音が続く。

最初の目的はこの噴水周りでの聞き込み。あの騒動で街の人々に顔が知られてやりやすくはなってるはずだ。……俺の気分的な問題でも。

街での聞き込み及び探索は思いのほかスムーズにいった。

その要因はやっぱリシアのおかげ、と言いたいのだが半分ぐらいは意外な事に俺のおかげでもあった。

正しく言えば俺の冒険者と言つ肩書きが、思つていたよりも力を持つていて、シアの地の利と俺の人に対する利が、相まつた結果、と言つべきか。

まず計画通りに噴水の周りに居た人達に話を聞いた。

特に重要な情報は無く、RPGにはよくある基礎的な情報ばかりが集まつた。

この街はあの噴水を中心として円を描き、そこからはみ出るようになに城が建つていて。

シアから聞いて分かつた事だが、城から街を貫き外へ繋がる大通り、その中心に位置するこの大きな噴水を取り囲んでいる建物の群れを『内街』『インタウン』

それ以外の外側の城壁に近い所を『外街』『アウトタウン』

そしてその全てをまとめたこの国の名前はファイルストと言つらしい。

俺がシアの騒動に巻き込まれたのはもちろん内街。

ここでは城に続く大通りがあることから城に用のある者や、観光で訪れる人なんかが多く来る場所らしく、物や宿の質は高いものと同じく値段もお高いものになつてているという話だ。

逆に外街は正反対、というか汗臭い感じの所だとシアに教えられて、最初は何の事かと思ったが実際に案内されて納得した。これはたしかに汗臭い。

なにせ城壁に隣接した外周部の通りは、誰も彼もがあのゲーム開始時の、王様が叫んでいたあの時の冒険者達によく似た格好をしていたからだ。

外街は、内街が気品と礼節を弁える上級階級の街とすれば、外街は正反対の有様に見える。

質より量、静かさより騒がしさを選ぶような、しかも全体がそういう風潮になつてゐるのに驚いた。

なんでも休憩がてらにこの街に立ち寄る冒険者達が多いために、自然と外街には冒険者に適した環境が出来上がつていき、気付けば一日寝れればいい宿屋や、内街とは味のランクが落ちるが量はその数倍を誇る定食屋、冒険者達の交流の場であると共に情報交換の場でもある酒場等どんどん増えていつたらしい。

それで最終的には冒険者が多く集う、土臭い感じになつてしまつた、というところか。

何故冒険者が外街に集まるようになったのかは実に単純で、外に出来るのにも、入るのにも近いから。

街から外へ通じる門は一つで、下手をすると城の物より豪華なのでは、と思わせる大きさを誇り警備している兵士も何人か居るうえに、休憩所的な物まで備えられていた。

とは言え硬く閉じているものではなく、常に人が一人か三人は通れる隙間が空けられていて、どうやら人が通るのを防ぐものではないらしかつた。

シアが言うには魔物の侵攻が及んだ時に閉められるらしいのだが、シア 자체は閉じた状態を見た事がないと言つていた。

次に色んな店屋を回……ろうとは思つていた。

いくらゲームとはいえ文無しでお店に入る度胸が恥ずかしながら無かつたのだ。咎められる事もないだろうが、VRゲームとなると頭で考えていたRPGの定石よりも、実際感じる恥ずかしさの方が上回つてしまふのだった。

何時間も歩き回つて、まるでデータのような有様だつたが、収穫は乏しく努力に対しても報われた気はしないが別に気にする事もなかつた。

疲れきつて足を休ませるために、城のはずれに街とその周りの

草原を見下ろす事のできる高い丘に一人はいた。そこがこの街の、シアの道案内の終点だった。

一人とももう立っている事すら辛いぐらいに足が疲弊していて、そこにたどり着いた時に、なりふり構わずに少し長めの芝生達のクツシヨンに身を投げた。

しばらく一人とも言葉も交わさず、寝転がっているせいで街は首を上げないと見えないが、代わりに空を見ていた。

まだ強く日の光が差す空。メニュー画面を開き、現実時間を確認するがまだ四時過ぎだ。

昼過ぎからあの騒動に巻き込まれ、街をシアと一緒に探索して、まだ二時間と少ししか経っていないのは自分でも驚きだった。色々な物を見て、色んな人達と話し、全てが新鮮だった。

もちろん知識としては知っているものだし、画面越しにはそれらを見てきたから全く知らないと言う訳ではなかつたが、この限りなく現実を再現したVR空間でそれを改めて見るのは、やはり現実に近いだけに新鮮さを感じるのは当然の事かも知れない。

だから、それを思い出して自然に顔が笑い、咳いてしまう。

「楽しかったなあ……」

「そう……言われると、私も案内した甲斐が、あります……」

隣で仲良く寝転がっているシアが俺の咳きに反応して、言葉を返してくれる。

その声はやはり疲労感が現れていて、今にも寝てしまいそうながらにも感じてしまつが、シアの顔は笑顔だった。つられて俺も笑顔で返す。

そういえばセーブとかどこにするんだら?……、あと夜とか、俺は中断して現実で寝ればいいけど、そうなると中断してる時はこの世界の時は止まつてしまつだからシアが寝る時間もなく俺に付き合つ羽目になるし、やっぱり睡眠とかは取らないと駄目だよなあ、

NPC達もこの世界で生きてるんだし。

……なんて、これから事を考えるが、街を探索してて発見した、法則とも言える事実、自分の目で見たほうが早いを思い出し、今は考えない事にする。

なんとかなるだろう。そんなお気楽な考えを添えて。

再び二人共が沈黙する。気まずい様なもののじやなく、二人共が疲れを癒し、この風景を楽しむために。

だからそんな静かな所に、一人以外のものが足を踏み入れたなら、俺とシアが気付くのも当然だつた。

そして、ここは街から離れていて、人の目も無く、街の外と同じ様な草原で……だから、敵にエンカウントしたとしても、当然だつた。

「 ッ！」

体は疲れきつていたがそんなのかまわずに全身に力を込めて跳ね起きた。見ればシアも同様に臨戦態勢に入つていた。

スカートを少し上げて、吸い込まれそうなその太股に隠されたいた短刀を一息に抜いて構える。

それを見てから俺も慌てて、シアとは恥ずかしくて比べられないほど不器用に、鋸びた様な黒ずんだ赤色をした銅の剣を構える。

この銅の剣は片手剣なので利き腕の右手に持ち、反対の左手には、盾でも持てればいいのだが生憎とそんなものは無いので手持ち無沙汰だ。

相対したこのデュアルワールドでの最初の記念すべき敵は、黒味がかつた紫色の体表を持ち、鋭い牙が並んだ口からはまだれが垂れ流しになつており、鋭い眼光で身を竦ませたくなるほどに敵意、いや殺意に満ちていた狼だつた。数は四体と一体。

四体が横一列に並び、その後ろにリーダー格と思われる一回り大きく、基本的な見た目は一緒だが、それとは区別するためか頭の上

でこげ茶の長い毛が靡く狼が一体。

多分、勝てない。そう直感した。

勝てないモンスター、王様の言葉に習つなら魔物だと思つ要因は二つ。

二つが地理的に普通は長時間居る必要が無い所だからだ。俺はシアに案内されたからであつて、普通のプレイヤーならばイベントで来るか、来ても立ち寄つて何も無いと判断すればすぐに去つてしまふだろう。

だからここに敵がいたとしても気が付かない。

二つ目は明らかにリーダー格の狼の存在と、数の多さ。
こいつらはそれぞれがバラバラに動いてるわけではなく、見てすぐ分かるようリーダー格の狼を中心に集団として、襲つてきてる。
なんとか前に陣取る狼達四体を倒しても、その奥に控えるアイツは体の大きさと比例して強さもまた一回りは強いだろう。

こつちは一人。レベルも装備も初期状態。

数も個々の強さも足りないのは分かりきつてる事だつた。
それに俺は足が竦みそうになつて、逃げ腰になつてゐるのが自分でも分かつていて。

現実ではありえないシチュエーション。こちらに殺意を向ける獰猛な敵達。

それに、知らず知らずのうちに怯えていた。逃げていた。
どうせ勝てないなら、逃げるのに全力を尽くせばもしかしたら…
…なんて考えが過ぎる。

足は疲れ切つてゐるがこの際そんなのは関係ない。原始的な恐怖に押され背を向けて走る事はできるだらう。でも、逃げ切れるのか、と言われるど、それもまた無理だらうと予感できる。

現実世界で狼より足の速い人間なんて、ましてやスポーツなんて一切して来なかつた俺が仮想世界とは言え、狼の足の速さに適うはずも無い、というのはすぐにわかる。

そういう所は現実と似せなくていいかなあ……などと考へなが

ら、八方塞がりのこの状況に弱腰になる俺の思考を、炎が焼き払つた。

え、と思う間も無く手に持つた銅の剣が突如現れた炎に包まれ、ただの銅の剣がその赤色も伴つて煌々と燃えている。柄までは炎が包んでないが、刀身に宿る炎の勢いからして、普通は猛烈な熱が柄を握る俺の手を襲うのに、全くと言つていいほど熱は感じられない。感覚的にはただ銅の剣を握つていてのとなんら変わらない。

これは、起こつた現象から察するに付加魔法^{エンチャント}。

誰が？ と疑問が浮かぼうとしていたが、この場にいる者は限られている。

自分ではもちろん無いし、敵がそんなことするはずも無い。だから……。

「ファイアチャージ
火炎装填！」

そう女性特有の声色で叫ぶ。手に持つていた短刀が炎を帯びる。これは、この付加魔法はシアが放つたものだつた。しかも自分だけではなく俺の剣にまで。

でもあの時、シアのステータスを見た時には魔法の類は何も表示されてなかつたはずだ。だからこそシアのレベルが俺基準で最底の一なのだと思つたし、だから魔法の類を覚えていなくともなんら不思議では無いと納得したのだ。

だが、今確かにシアは魔法を使つた。考へても答えが出るわけでもなく、シアの叫び声でようやく今の状況を思い出し、くだらない思考を閉じて目の前の敵に目を向ける事が出来た。

「二ヶさん、剣を！」

構える。様にもなつてない素人丸出しの構えだが、今はそんな事構つてられない。

必要なのは敵から逃げ出さず、切り伏せて、生き延びる事だ。

少し長めの草をしつかりと踏み、駆け出す。無謀な突進と言われば確かにその通りだが、行動の幅が無い今はこの選択肢しか思い浮かばない。

四体の狼は半分の一体づつに別れ、それぞれが俺とシアにその凶暴な牙を剥き出しにして、噛み付こうと助走をつけて走つてくる。それに対しても俺は不恰好ながら剣を横一線に振る。炎が軌跡を描き、まるで炎の壁でも作り出したかのように一瞬だけ空中を炎が覆つた。

すると狼達は速めていた足を止め、殺しきれなかつた勢いを保つたまま草の上を滑つてくる。

苛立つたように短く吼えた狼達に足を止める間も無く、再び返す刃で炎を振るう。

攻撃を当てるのを重視し胴の辺りを狙つた。まず一匹目に攻撃がヒットしその身を焼いた。もう一匹もそのまま炎で焼き払おうとしたが、一匹目に当たつて鈍つた刃は、一匹目の狼に当たる事も無く難なく避けられてしまう。

剣を振るつたままの体勢で、剣に体重を乗せていた俺は攻撃をよけられた事によつて体が硬直する。そんな隙を見逃すつもりは無いのだろう、攻撃を避けた狼は体勢を整え、獰猛で鋭い目で俺を標的と定め、襲い掛かろうとしていた。

だがそれは狼の短い悲鳴のよつた鳴き声とその頭に刺された炎の短剣に防がれた。

「大丈夫ですか……！」

「ああ、おかげさまで」

狼が、頭に刺さつた短剣の炎に体を包まれて、まるで灰のよつた細かい粒子となり、風に乗つてどこかへ飛ばされていった。

俺の助けに入つたという事は、始めにシアに向かつていつた狼一

匹はもうシアの手によつて倒されたのだろう。……意外と武闘派のかもしない、とか思いつつ、あんなに泣いたりして大人しそうなイメージを持っていたシアを、改めて見つめ直す。

極端に変わつたような気配は無いし、言動も普通だつた。ただ今は街中でのシアとは少し違つていて、その少し強気な顔立ちに近い、勇ましさを感じられた。

従えていた狼四匹を瞬殺され、怒りを覚えたのかリーダー格である狼がたてがみを揺らして、空間を揺らすように吼えた。

体の奥底まで響き渡るぐらゐの声だつた。悲しみや怒り、リーダー格の狼が抱いた感情が込められた咆哮。その中でも一番強い感情は怒り。それに殺意も同じぐらい纏つていて、抵抗すら無駄なんじやないかと思わせるぐらゐに迫力満点だつた。

……実を言うとシアの付加魔法の炎を振るつて狼を倒した時に、これはいけるんぢやないのか、と思つた。手下扱いの狼を一撃で粉碎する事が出来たから、それより少し強いだけの奴も二人掛かりなら倒せると、そう思つた。

でもその咆哮は、そんな稚拙な考えを吹き飛ばし、余りあつて恐怖を刻み込む。

だから一步、足を、引いてしまつた。

それを俺が怯えたのだと奴は悟つた。だからまずは俺を標的に定め、その足を踏み出すのは至極当然の事だつた。……複数を相手にするにはまず弱い奴から。基本に忠実な奴だ、なんて思つてる間も無く間を詰められて、目の間にさつきの狼よりも凶暴凶悪で、鋭く大きな口と牙が俺を噛み碎こうと迫つていた。

怯えに囚われた俺はなりふり構わず、ただその俺に向けられた殺意から逃げるために剣を振るう。だが。

適当に振るつた炎を纏つた剣は、狼の体に確かに当たつたが、まるで岩かなんかに打ち付けたよつた嫌な音と痺れるほどの衝撃を手に伝わらせ弾き返される。

驚愕する暇も無く反射的に手持ち無沙汰な左手で自分の身を庇う。

そこに盾があつたなら、いま俺の剣が弾かれたのと同様に音を立てつも狼の牙を防いでくれただろうが、生憎と現実には盾が無いので当然の如く腕を噛まれる。

痛みは無い。だが左手がぐちゃぐちゃと噛まれ、形と感覚が無くなつていくのが分かる。

右手の剣で再び攻撃を加えようとするが、そこで剣が纏つっていた炎が消えているのに気付く。

時間切れ。悪態をつく暇も無く、それでもと剣を振るつたが案の定弾かれる。

だが次の瞬間、狼は苦しそうな悲鳴を上げて、俺の左手を離し、後ろに跳躍して距離をとつた。

何事かと見ると狼の右目が無くなつていた。

そして俺の隣にはシアの姿が。それだけでシアがあの狼の右目に短刀突き刺したのだと言うのは簡単に予測がつく。

俺の左手は狼に食われたせいで感覚が無くなり、だらんとぶら下がつている。

HPは現在の状況では確認できないが、まだ全身から力が抜けたわけではないし、剣を掴む右手もまだまだ健在なので大丈夫だろう。

「ニケさん！大丈夫ですか！？」
「大丈夫だ！すまん、助かつた」

二人が隣り合わせに立ち並んで狼に向けそれぞれ武器を構える。

一瞬の気も抜け無い。あの狼の突進スピードからして、もう一度付加魔法を使う暇は無い。だからこそシアも改めて付加魔法を掛け直すといった事はしないのだろう。

だが付加魔法が無ければ、いや付加魔法があつても奴の体表は手下の狼に比べて随分と硬くて通らなかつた。じゃあどこを攻撃すれば。

それは今シアがやつたように、これは従来のRPGではなくアク

ションの方の知識になるが、ボスが固い時は目や間接の隙間などの柔らかい所が弱点なのでそこを狙うのは、割とよくある攻略法だ。だから狙うべきは目か口の中、という事になる。

シアもそれが分かつていてさつきもそうしたのだろう。

シアに目線を送る。シアも同じ様に俺に目線を送っていたようで、しっかりとアイコンタクトが取れた。

俺が右側から狼に向けて走ると、反対の軌跡を描いてシアは左から攻める。

狼は迷いもしなかつた。右目が死角になつていてもかかわらず、そちら側に回り込もうとしていたシアを標的に捉え、襲い掛かる。狼からすれば手下三人と自身の右目を潰したのはシアなのだから、俺よりも憎悪値^{ハイト}が高いのは当たり前だったのかもしれない。だから俺は進路をやや直線的に狼へとどる。

俺を気にしていらないというのならこつちとしては好都合だつた。

シアの持つ武器は短刀。明らかに武器としての攻撃力は低く、どちらかというと手数重視な武器だろう。対して俺の片手剣は確かに初期装備で攻撃力も低いかもしれないが、一発の威力は短刀よりも重いはずだ。

敵の柔らかい部位を狙つて攻撃するならば、手数勝負の短刀より一発が重い片手剣の方が有利だ。

だから俺よりも戦い慣れたシアよりも、今の本命は俺だった。

狼がこつちに背を向け始め、それと同時に俺も片手剣を逆手に持つ。

別に格好をつけてる訳ではなく、斬るのではなく貫く、刺すのならば逆手の方がやりやすいと思ったからだ。

この作戦を成功させるためには、完全に敵の狙いから外れた俺が奇襲として一発で成功させないいけない。

もし攻撃を外してこつちの狙いがばれてしまえば、途端に警戒され隙も無くなり、あつという間に全滅の道を辿るに違いない。

緊張が体を強張らせるが、酸素を取り込んで無理矢理解し、息を

止めた。

戦いは一瞬で決まる。

シアが、さつき俺に襲い掛かったのと同様の狼の食いつこうとする突進を、ひらりと身を捩ってかわす。避けられた事をすぐに察知した狼が、今度は黒光りする鋭い爪が生え揃った前足でシアの体を裂こうとするが、それもまたシアは軽く飛んで避ける。どころかその襲い掛かる前足を足場に再び飛んで狼の上を飛び越える。

俺はもう狼との距離は僅かで、ここで狼が振り返れば田の前に顔が来るであろう距離まで詰めている。

そして狼を飛び越えて狼の背中側、つまり俺の隣に着地し、狼が振り返る動作を見せてから振り返るまでの間に唱える。

「ファイアチャージ
火炎装填」

炎が灯る。もちろんシアの短剣ではなく、俺の逆手に持った片手剣が。

狼が振り返る。その速さからどの辺りにどのタイミングで来るか予測し、剣を構える。

そして炎が貫いた。狼が振り向き際に俺のことを認識し、そのまま食い付こうと開けたその大口に。

硬い体に覆われた生き物は、得てして体の体内は脆く、その一撃で凶悪な狼は葬り去った。

体の内から焼かれ、炎に包まれた後、手下の狼とは違い灰のような粒子とならずにその体を残していたが、どうやら動かないようだ。力が抜けてその場に座り込む。元から街での探索でへとへとだった事を思い出し、鞭打つて動かしていた体は強制的に休む事を決めたようだ。

シアも同様に、座り込んで空に向け息を吐いていた。そして俺の視線に気がつくと笑顔でやつたね、と返して来る。

俺の初戦闘にして、シアとの初の共闘。それは少し危なかつたが、

なんとか一人で力を合わせて勝つ事ができたのだった。

戦闘の後、RPGでは経験値がいくらだとかの表示があるのはお馴染みだが、このデュアルワールドでは表示は一切無かつた。

俺はなんと無しにメニューを開くと俺のレベルから一から一になつていた。

それに伴いAPも一ポイント入り、片手剣スキルの一一番簡単な技だと思われる『スラッシュ』も習得したようだ。その証拠に今まで灰色だつたのが白い文字で書かれていた。

とりあえず俺のステータスはそれぐらいで後回しにし、気になつたシアのステータスを開く。

今まで魔法の欄は灰色の文字で書かれていて叩いても何も起らなかつた。

だが今シアのステータス画面を開いて見ると、魔法の欄が白くなつていて叩くとシアが覚えている魔法、火炎装填がしつかりと表示されていた。

疑問なのがなぜそれが最初見た時に無かつたのか。街中の探索をしていただけなので戦闘はもちろんそんな魔法を覚えるイベントも無かつたはずだ。

だとすれば最初から覚えていたという事になるが、それだと表示されなかつた意味が分からない。

考えつくのは戦闘中に思いついた、ぐらいだが、まるで勝手知つたるかの如く使つていたシアを思い出し、その可能性を捨てる。次に思いついたのは、あまり期待できないが、俺が知らなかつたからという線だ。

つまりあのステータス画面は全てを表示するシステム的な物ではなく、俺の記憶から作られるプロフィール帳なんじゃないかという可能性だ。

もちろん俺自身のステータスは数字まで事細かに書かれていてシステム的なのは間違いないが、仲間に關しては違う仕様と考えるとどうにか説明が付けれる。

それを証明するためにも俺はシアに話しかける。

「あれ、凄かつたな。知らなかつたよ、シアが魔法を使えるなんて」「ごめんなさい、言つてませんでしたね……」

「いや、いいよ。そのおかげで勝てたんだし。他にも使える魔法とかあるの？」

「ええ、初步的な回復魔法ですが……。あ、一ヶさん左手、大丈夫ですか？」

「う、ん。動かないけどとりあえずは……」

「ちょっと待つてください」

そう言つてシアは重そうな体を起し、俺の近くまで来てまた座る。左手を持ち上げられてシアの右手がその上に翳される。横目に開いたままのシアの魔法の欄を見るが、まだ火炎装填のみだ。

シアが呪文を唱える。

「ヒールドロップ
癒水」

シアの翳された右手から水滴が一滴垂れて俺の左手にぶつかったかと思うと、水滴が触れた所から淡い青色の光が左手を包んで輝く。再び横目で見た魔法の欄にはしっかりと癒水と刻まれていた。

可能性の低かつた推測は見事的を射ていたという訳だ。

謎も解け、シアの回復魔法のおかげで左手の感覚も戻つたおれは改めてシアにお礼を言つ。

「ありがとうな。こんな回復までしてもらつちやつて

「気にしないでください。私達はもう仲間なんですか？」

「そう、だな。ごめんな

「いえいえ」

なんか仲睦まじいやり取りを繰り広げる。『仮が付けば開かれたままのメニューの端っこにあるデジタル時計が、そろそろ五時ぐらいを示そうとしていた。

今日はバイトも休みにしたので一田中やるつもりだつたが、晩飯の準備なんかもあるのでここらで一旦落ちないといけない。幸いまだ時間はあるので今度は中断ではなくセーブしてやめよう、とか考えていたが、その前に田の前に転がつたままのあのリーダー格の狼が気になつて仕方なかつたのでシアに尋ねて見る。

「あれつて何で手下の狼みたく消えないの？」

死体に指差し、シアに聞くと、少し見開いて、それから落ち着くように息を吐き、それから普段と変わらぬ顔に戻つて、説明をしてくれた。

「あれは魔物の死体クリーチャーコーブスつて言って、あれから素材を剥ぎ取つて売るとお金になるんです。冒険者の代表的なお金を稼ぐ手段ですね。えつと、外街にあつたお店覚えてますか？」

「ああ、なんか無駄にでつかいとこりだつたかな。名前は……クリーチャーズコレクト」

「そうです。あそこに死体」と持つていいくと、解体などをやつてくれるんです。武器とかに素材を使いたい場合は解体だけしてもうつて素材を受け取る事もできます」

「へえー、じゃあれも持つてつた方がいいんだよね」

「そうですね。損にはならないですから、出来る事なら持ち帰つた方がいいです」

そう言われておれは重い腰を上げた。急に起き上がりて襲い掛かってくるんじゃないかと内心ビクビクしながらその死体に近づく。

そして四次元ポーチこと、最初から腰についていたポーチへ入れようと試みると、案外素直に入ってくれた。

アイテム欄を確認するとそこには『ウルフリーダーの死体』と書かれていて、確かにアイテムとして収まっている事を確認した。

そして振り返るどどこかで聞き覚えのある声が耳に届いた。

もう一度、振り向くとそこには見覚えのある紫色の体表の狼たちを従えて、今倒したばかりのウルフリーダーがこちらを睨んでいた。俺とシアは戦う事を選ばずに、一目散に逃げ出した。

逃亡戦

街を見下ろす事の出来る丘から、新たに出現したウルフリーダーから逃げるために全力疾走をしていた。

街を数時間歩き、疲れ果てて休憩している所に四体の狼を連れた一体のウルフリーダーが現れた。シアと協力し何とかこれを倒して一息つき、戦闘の余韻に浸っていた。ここまで良かつたのだが……。

「……ハア……で、どう、する……！」

丘から街に入るまでは相当な距離がある。その道中は折り畳まれたような通路が延々と続き、百八十度曲がるカーブで追つてくる狼達を牽制して何とか距離を稼いでいるが、やはり総合的に見ると直線の方が距離は長いので、直線的なスピードではまず敵わない狼達に距離を詰められてしまつ。

「……まずは、手下の方を、叩きましょ。……奴等なら、ファイアチャ火炎装填ファイアチャを掛けた二ヶさんの、一撃で……倒せます」

「……それは、つまりあと、一回しか掛けられない……って事、かな？」

一人で、では無く俺にと言つことはつまりそういう事になつてしまつ。それが悪いとも言つ氣は無いし、仕方ない事は分かつていて、MPには限界があるのでから。

息も切れ、足も縛れそうになるが、それでも必死に走りながら作戦を練る。

死ぬ、という事に関してゲームだから怖くないと言つのは無かつた。

それはVRゲームという現実に近い環境だから本能的に怖いというのもあるし、ゲーム的に考えれば、死んだ時の「デメリット」が未だにほつきりしていない分、何が起こるかわから無いから怖いのもある。

……後は心情的な問題もあった。俺がシアがやられる様を見たくはない。

「…………そうです。多分、あと一回が…………限界です」「そうか…………」

「このままジリ貧の逃亡劇をいつまでもやっていたって追い詰められるだけだ。

ならいつそ抵抗した方がまだ生き残る可能性は高い。

「シア、次でツ…………」

剣を振る。曲がり角から頭を出した狼を叩き、吹き飛ばされた狼がさらに別の狼とぶつかり、全体の動きを阻害する。でも今回は狼を叩き、前へ振り返った所で吹き飛ばされた狼とは別の狼が曲がり角を曲がって走ってくるのが見えた。

完全に体が前へ走ろうと向いてしまっているので、狼の足の速さからして、今から再度振り向いても剣が間に合つかは分からぬ。でも何もせずに後ろから後頭部でも齧られるのは流石に嫌だったのでも、迎撃しようと体を再び傾けた時、不意に何かの影が通った。

「りょう、かい…………です！」

滑り込んできた影はシアだった。ご丁寧に俺への返事まで添えて。シアはどうやらスピード型のようで、足の速さもシアの方が早い。だから俺が後方を勤めていたのだが、俺が止め切れなかつた狼をシ

アが斬り飛ばし時間稼いでる間に、俺と並走するシアが付加魔法を唱え、その瞬間俺の剣は炎に包まれる。さつきの戦闘から推測するに効果時間は一分ぐらいか。

それまでに決めなければ博打のような逃亡劇をするしかない。腹を決め曲がり角に滑り込む。

右手に持つ剣を左肩まで絞り、体も捻つて待機する。数秒もしないうちに懲りずに追ってきた狼の鼻先が見えた。そこで最大限の力で剣を半円を描いて切り込む。

並走していた二匹をまずは焼き払い、勢いのまま壁に衝突した衝撃を押さえ込み、次に備える。

馬鹿見たく学習能力の無い狼は再び並走してくる。それをさつきと同じく迎撃し、今度は残った親玉ことウルフリーダーを討つために、曲がり角から一気に飛び出す。

十メートルほどの通路の丁度真ん中辺りに標的の姿があった。黒味がかつた紫色の体表、頭の上のこげ茶のたてがみは間違いなくウルフリーダーの姿だ。

だけどさつきとはつきりと違う箇所があつた。

先程倒したウルフリーダーの目を、シアが目を潰した事で注目したのもあつてちゃんと覚えていた。しかし、今この対峙しているウルフリーダーには俺が知っているウルフリーダーには無い、目に古傷のような物があつた。

それは、丁度シアが潰した場所と同じ右目に、×印で確かに刻まれていた。

それに一瞬気を取られるが、今は一刻も争う事態なので些細な事だと思考を捨て、同時に足に力を込めてウルフリーダーへ一直線に向かう。

ウルフリーダーも俺を認識すると猛然と突っ込んできながら、その大口を開ける。

それに合わせてこちらも炎の剣を合わせ、その口へ吸い込まれるよう突いた。

それでさつきと同じ様に倒せる、はずだった。

俺の体が思い切り引つ張られ、そちらにつられてしまう。もちろんピッタリと合わせていた剣の照準もズレて、ウルフリーダーの口を狙っていた剣は、右前足の辺りに吸い込まれる。

ウルフリーダーを倒すのを妨害したのは一人の少女。

言うまでもなくシアだったのだが、それを何故か、と聞く前に俺の剣がウルフリーダーの黒ずんだ紫色の、附加魔法を掛けた剣でさえ弾き返してしまったその体表に、深々と傷を付けて、そこから炎が伝い、ウルフリーダーの体が燃え盛る。

起きた事実と自分の頭の中で想像が相反し、体が固まり、声が出てしまう。

「なん、で……」

ウルフリーダーは炎に包まれながら断末魔を上げて、死体へと変わった。

本来ならそれを手放しで喜んで、辛くも勝利する事で得る事の出来た二つ目のウルフリーダーの死体を四次元ポーチに放り込むところなのだが、今は力なく立ち尽くし、炎の消えた剣を収める事すら忘れて、呆然と死体を見ているしかなかつた。

「危なかつ、たー……」

隣では流石に疲れきつた顔を隠せないシアが俯きながら立つて、膝に手をつけてその体力を少しでも回復させようとしていた。

「シア、なんだ今…………」

普通なら弾かれる所が、まるで弱点のようここここに攻撃が当たつただけで倒すことが出来た。

それを意図的に行つたのは間違いなくシアだ。だから何故あのウルフリーダーを倒すことが出来たのか、知っているのもまたシアなのだ。

とうとう力尽きてシアはその場座り込んでしまった。MPももう無いと言つていたし、相当疲れているのだろう。でも俺との会話はする気らしく、疲れきった顔に笑顔を貼り付けてさつき俺が呟いた事、俺が今思つていてる疑問に答えてくれる。

「あれは……ウルフリーダーなんですけど、特殊なんです」

「……特殊?」

「はい……。田の所に傷がありましたよね?」

「ああ」

俺が一瞬氣を止め、些細な事だと氣にしなかつたあの傷が何かの証なのだろうか。

「あれが通常とは違う種である事を表していて、その固体は姿形は似ているんですけど性質が大きく異なるんです。普通のウルフリーダーが体表が硬く、内部が弱点なのに対して、あの変異種、冒険者の人達の間ではデュアル種、もしくはD型と呼ばれている固体は、内部ではなく外部が弱点なんです。だから二ヶさんの剣が体表を斬つて勝つ事ができたんです。……二ヶさんが飛び出してから気付いたので少し遅くなつてしまつたんですが……」

「そう、だつたのか……まあ、結果オーライつて事で、シアが氣にする事じゃないよ」

通常種に加えて亞種のようなものまで居て、しかも対処方法があれだけ違うとなると今後も戦闘に際して苦労しそうだ。……でも、それでこそ楽しみがいがある。

シアには助けてばかりで知識も教えてもらつてばかりで、なんか

悪い気がして謝罪と御礼をしたが、あの時の恩に比べれば、なんて言われてしまつて丸め込まれてしまう。

忘れずにD型ウルフリーダーの死体を四次元ポーチに投げ込み、少し休憩して歩けるだけの体力を回復させ、今度はゆっくりと蛇腹の通路を一人で降りていく。

休むために

ようやく街に着いた。

街の唯一の出入り口である門を南、城を北だとすると、北西の位置にある街を見下ろすことが出来るぐらいの丘とその通路で、一度の死闘を繰り広げ、ようやく帰ってきた。

街の喧騒がどこか懐かしく感じ、身に染み渡るものを感じた。だが街はもう日が落ちる事もあって昼間よりは人が少なく、あちこちにあつた露天はもう店仕舞いの用意をしている。

メニューを開くと現実時間がもう五時過ぎを示していて、俺もそろそろデュアルワールドをやめて晩飯の準備に取り掛からないと本格的にまずい事になる。

本当は街の探索が終わってから、すぐにでもセーブしてやめる予定だったが、予期せぬ戦闘を一度挟み、かなり体も疲弊してしまつたために、元から予想していた時刻よりもだいぶズれた時刻にこの街に帰つてくる羽目になった。

もちろんそれなりの収穫はあった。レベルは一度目の戦闘でD型ウルフリーダーとその手下を倒した事で一から三に、APも使う間も無く四も溜まっている。

残念ながら今回はスキルを覚えなかつたが、流石にレベルが上がる度に覚えるつてのは無くて当たり前と言うか、珍しいといふか。だから特に気にしなかつた。……そういえば俺一度目の戦闘で折角覚えたのに『スラッシュ』使わなかつたな。まあ、あの時は口の中を狙つて突いていたから、覚えていても使おつとは思わなかつただろうが。

街に着いた俺はまずセーブできる所を探す。晩飯の後も再びやる気ではいたが、もしこのまま不慮の事故で電源が切れてしまつては今までの時間がそのまま無駄になつてしまつ。

そしてセーブで思いつくのは、教会か宿屋。でも街を探索した時

に教会にそいつた機能が無いのは確認済みなので、宿屋にまずは足を運ぶ。内街か外街かはまだ決めてないが正直セーブ出来るならばどっちでもいいというのが本音だつたりする。

「シア、この辺で一番近い宿屋つてのはどじだる?」

「この辺なら、……黒香亭コクカティですけど……内街の中でも結構高級な部類に入りますよ?」

正直、高級だとか低俗だとかそんな事は気にしてなかつた。質ではなく早く休みたい、早くゲームを終わらせたい。そんな気持ちが今一番心の領域を占める思いだつた。
だから別に高かろうがなんだろうが近くあるのならばそれでいい、と言おうとした所で自分が重大な見落としをしている事に気がついた。

「あ、無理だ……」
「あ、気がつきましたか?」
「わかつてたの?」
「えつと、……はい」

疲れなど忘れて悶えた。確かに街の探索中にシアに「今は文無しだから次に来よう」とは言つていたが、肝心な言つた本人が忘れていて、言われたほうがしつかり覚えていて。しかもそれを指摘された日には穴があつたら入りたい気分にもなるが、生憎穴らしいものは無いので悶々とした感情の行き場を失い、結果、路上で悶えるしかなかつた。

一通り悶え終えた後、俺は実に簡潔な解決策をシアに提示する。

「換金しに行こう」
「……はい」

笑顔で返してくれるシアだつたが、やはり疲れが見えるので早く休ませてやりたいという気持ちが芽生える。……もちろん俺も休みたいのだが。

そんな訳で近くにある黒香亭には悪いが、今は外街にあるクリーチャーズコレクト、ここへ重たい足を引きずりながらも出来る限りの速さで向かうのだった。

重たい足で十分も歩くと外街の名物、というかフィルストを象徴するような対魔物用の門が見える。そこからさらに五分くらいの道程を行き、やがて門に劣らない大きさの建物へとたどり着く。

看板にはCCCと書かれていて、きつちりしているとはいえない外装で、所々塗装が禿げたりしていたりもある。

そんな少し小汚いCCCの建物に俺とシアは足を踏み入れる。黒の両開き扉は見た目に反して押すと簡単に開いて、もしかしたらこのドアも壊れかけなんじゃ……と思わせる。

ドアをくぐるとまずは結構な人数が一度には入れそうなロビー、左手には壁に沿つて階段があり一階にも行けるようだ。今は用が無いので行こうとは思わないが。

ドアをくぐりそのまま真っ直ぐに進むとカウンターがある。部屋の三分の一は占めているカウンターでは何人かが窓口に立ち、その後ろではなにやら慌しく働いてる人達の姿も見える。

後ろを歩いていたシアにどこで換金するのか聞くと、小さくカウンターで言えば大丈夫、と答えるのでそのまま進み、一番近い所に居る受付の人と話しかける。

お姉さん系のすらつとした人がこういう受付を担当しているのが大体のゲームでの有様だが、見事に正反対の三十台後半と見られる顔と筋骨隆々でごつく、その黒く焼けた肌は間違いなく外で働く人間の証拠で、こんな所で事務的な受付を普段からしてるとはとてもじゃないが思えなかつた。

しかし対応は実にスマーズで、多少馴れ馴れしい所もあつたが、

『気さくなおつさんだと思えばなんて事はなかつた。

「すいません、クリーチャーハープスを換金したいんですけど」

「ん？ お前さん、新人か？」

「……はい、そうですけど」

「そうかそうか。いや別にお前さんに文句があるとかじゃないんだ。ただここは義務として、最初に訪れた冒険者つてのには説明しなきやならん事が山ほどあつてなあ……つて、後ろの人は……シアか？」

前半部分の説明を真面目に聞いてただけに、突然飛び出したシアの名前に呆気に取られる。

なんでここに急にシアの名前が出るのかは分からないが、この受付のおっさんがシアの名前を口に出した事から少なくとも知り合いである事は分かる。

当の本人のシアは俺の後ろに隠れていたが、少し経つても会話が進まずに、自分に視線が注がれているのに気付いたようで観念してその体を俺の後ろから出す。

「どーも……ガランさん。お久しぶり、です……」

「おお、やつぱりシアか。どこまつつき歩いてるかと思えば、男でも捕まえてたのか、成る程成る程」

「違います！」

俺の後ろに隠れてた割には元気よく挨拶をしていたが、ガランといつこの受付のおっさんの年齢特有の『冗談』に、まともに返事をしている辺りシアの性格も出でている。

「お一人は知り合いなんですか？」

「ん……？ ああ、つい……一ヶ月前だったか。それまでうちで働いてたんだが、書き置きと共に姿を消しちまつてなあ。てっきり他所

にでも行つたかと思えば……

シアの言つていた働く場所とは「このじだったのか」と思い返しそこから出て行つた経緯は、おそらくあの騒動の発端となつた、子供達の事を知つたからだろつ。

シアの性格を鑑みるに迷惑を掛けると思つたから何も言わずにここを出て行き、その後はまさに体当たりの行動をしていた訳だ。

俺の後ろに立つていたシアは一步踏み出し、改めて俺の隣に立つた。

そしてその頭を俺にしたように、深々と下げるのだつた。

「じめんなさい！私の身勝手で……」

「……なあに、気にする事はねえや。確かにあれだけ働いてた優秀なシアが突然居なくなつて慌てたが、それぐらいで致命傷になるほど俺らはシアに負担掛けた訳じやないと思つてる。それにシアが自分の意思で出て行つたんだ、それを引き止める訳にも行かないだろつ」

「……ガランさん」

一人の意味深な会話についシアの過去の事とかを聞いて見たい衝動に駆られたが、あまり無理に聞くのも悪いし、何より今は急がなきやならない。

一人の間でなにやら氣まずいやらほんわかしてるとかよくわからぬい空氣が流れるが、俺はそれを遠慮なくぶつた切つて話を進める。

「それで……」

「おつとすまんな。懐かしい奴にあつたとは言え、仕事は仕事だ。きつちり説明させてもうらう。……んだが、シアから何も聞いてないのか？」

「いえ、ここにクリーチャーポーラスを持つてくると解体やらなん

やらをやつてくれる、というのは聞きましたが詳しい事は……

「そうか……それじゃ、シア、お前から説明してやれ」

「え！わたし、ですか……？」

「これも黙つて消えた罰つて事だ。『マーニュアルの天使』様なら大丈夫だら、これで許してやるよ」

「その呼び方はやめてください……もつ……」

おっさんこと、ガランさんがその顔に笑顔を浮かべ、シアに此処、この説明を、これもまた冗談だらうが罰として強制する。……いやほんとに罰なかもしれない。あのぐらいの年のおっさんがシアぐらいの年齢の子を、娘のように可愛がついていても何らおかしくないし、そうだとしたら今まで親のような気持ちでずっと接してきて、いつかは別れも……、とは考えていても、それが急に居なくなつたとすれば少なからずショックはあつただらう。だから、今こうして顔を見れて、無事で居る事がわかつて、ほつとした。だから、心配を掛けた事に対する罰。

とは言えこれ以上俺が無為に一人の過去を説索するのは良くないだろう。シアもこれからこの説明をしてくれるよつだし、二人の間柄の説索はやめ、シアに向き直る。

「えつと、……」ここクリーチャーズコレクトでは冒険者様による魔物の死体、クリーチャーコープスをお預かりし精査、後にその質、量、レート等に応じまして金額を算出し、冒険者様に提示。納得いかれましたら受付でサインをしてもらい、冒険証の提示での本人確認を終えた後、その金額が支払われます。それ以外にも武器や防具などに魔物の素材が使いたい場合、その旨を伝えていただければその素材自体をお渡しする事もできます。もちろんその場合はお渡しする金額は減少しますし、素材全てをお求めする場合は手数料を払つていただきます”……です”

「流石、一ヶ月も仕事しなくとも、一字一句間違えないでよく覚え

てるもんだ」

何だか事務的な説明だと思ったら、ガランさんの発言から本当に推測するに本当にマニユアルっぽいらしい。

だからマニユアルの天使、か……。確かに説明としては凄くしっかりしていて分かりやすかつたし、つっこえる事も無くなるで当たり前のように長文をスラスラと読む様は、シアの可愛さも伴つてマニユアルの天使の名に相応しい仕事っぷりだ。シアのその様に驚きと賞賛を送りたい気持ちがあつたが、今はそれよりもさつきのシアの説明の中で必須らしい話をしておきながら、俺が初めて聞いた単語があつた。

だから説明してくれたシアにお礼を言い、気になつた単語についてどちらとも無くぶつける。

「……冒険証つて何ですか？」

俺の質問に二人共が一瞬目を丸め、その後取り繕つたように顔を戻し、俺の左手を一人揃つて注視する。なんだろう、と俺もそこに視線を移すと左手首にあるのは金色か茶色かよく分からない色合いのリングで、色の無い宝石みたいに輝く物体がはめ込まれている。もしや、と思い手首にあるそれを顔の横まで持ち上げると一人の視線も一緒に移動し、半ばそれで確信は出来ていたが、最後の念のための確認に二人に聞く。

「……これ、ですか？」

一人ともが頷いた。何だか恥ずかしくて顔が真っ赤になりそうになるが、自分に仕方ない事、仕方ない事と言い聞かせてクールダウンさせる。ともあれ換金に必要なものは揃つてたし、さつきのシアの説明で分からぬところも無い。これで換金に関する知識は全て

揃つた。

さつきの恥ずかしさをまだ引きずっていたのを乾いた笑いで誤魔化し、俺は取り繕つたように改めてガランさんに換金をお願いする。

「よし、それじゃあここにロープスを出してくれ。最初から換金つて事は素材類は持ち帰り無しつて事でいいんだな?」

一瞬迷う。確か武器や防具にも使えると言つてたから、序盤で装備が心許ない今、魔物の素材で武器の一つでも作れば……、と考えるが結局首を縦に振つて全てを換金する事にする。

四次元ポーチへ手を突つ込み、ウルフリーダーの死体を思い浮かべながらポーチの中身を掴み、引きずるよう取り出す。現実ならどうやって入つてたのかと驚く所だが、リアルに中々こだわってるデュアルワールドでもこじらへんの仕様は従来のゲーム的なものと何ら変わりない。

完全にリアルを再現しようと言つわけではなく、元をただせばゲームに過ぎないのだから。

まず一体のウルフリーダーの死体を取り出し、カウンターの上へ乗つけて、俺が再びポーチに手を入れた事でまだあるのだろうと思つてくれたのか、ガランさんが自然な動作で最初に取り出したウルフリーダーの死体を少し横に退ける。

俺は再びウルフリーダーの死体を取り出し、カウンターの上にある最初に出したウルフリーダーの死体に半分ほど重なるように置いた。同じウルフリーダーの死体とは言え、二つ目に取り出したのはD型のウルフリーダーの死体で、普通のよりは多少値段が上がると思われる。

その証拠に俺がそれをカウンターに置き、死体の顔、右目の所に刻まれたD型の証である傷痕を見たガランさんの目が見開き、感心したようなため息を吐いたからだ。

「初心者のくせに、一体以上持つてきた上にそれが〇型とは……」
りやこの先が楽しみだ」

「まあ、ほとんどはシアのおかげなんですねけどね」

自嘲気味に笑うと隣に立つシアが何だか凄く慌てた様子で叫ぶ。

「そ、そんな事は無いですっ……ケさんが居なかつたら倒せなかつたですし、わたし一人の力程度じゃ……」

「二ヶ、つて言つのか……シアは強かつたうつ?」

「ええ、そりやもう。俺よりよっぽど冒険者つて肩書きが今うんじやないかつてぐらいに」

「ははは、ここにいる時に護身術代わりに最低限の戦い方つてのを叩き込んだからな。駆け出しそうは強くて当たり前だな」

必死に講義するシアを余所に、俺とガランたるとそんな会話を交わす。

通りであんなに強いわけだ。俺と会話をしながらも慣れた手つきで後ろに居たここの中年らしき人に、俺が取り出した二体のウルフリーダーを持って行かせる。多分、これから精査が行われるのだ。

とか思つてると放つておかれたシアが泣き出しそうな顔をしていたので、その頭に手を乗つけてそつと撫でてやる。シアは恥かしそうに俯いたが、心地いいのか振り解くような事はせずに黙つていた。

「……まるで兄妹だな」

「あ、やつぱりそう思います? 僕もそんな気がしてたんですよ」

そんな事を言い、シアの頭を小気味よくポンポンと叩く。

シアは相変わらず俯いていたが、今のでさらに顔を真っ赤にしている気がしないでもない。だからと黙つてやめる気は毛頭無かった

が。

するとガランさんが大きく笑い、俺に言つ。

「シアを頼むな。この先も……」

「むしろ俺が世話になるかも知れないですけど、ね」

俺も同じくらい大きく笑い返してやる。言葉に隠した意味をガランさんはしっかりと受け取つてくれたみたいで右手の拳を突き出してくる。

俺もそれに答え右手の拳を差し出し、ガランさんの拳にしつかりとぶつける。大きさは明らかに釣り合つていなかつたが、そんなのは関係なかつた。

そして少しの間そうしてると突然ガランさんが後ろを振り向く。そこに居たのはさつきウルフリーダーの死体を持つていた同じ人で、その手には死体ではなく何枚かの紙の束を持っていて、それをガランさんに手渡すとそそくさと奥へ消えていった。

どうやら精査、と言つものが終わつたらし。あの紙には換金に関わる情報が書かれているに違ひなかつた。

無言で真剣な目つきを紙に向け、静かに捲つていく。。

「ふん……まあ妥当な所か。ほら、これが換金する際の精査要素が書かれた紙だ。後学のために見ておくといい」

そう言つて紙の束を俺に渡してくる。それを受け取り一番上の紙の一一番上から目を通していく。

そこには死体の損傷具合などの項目がずらつと並び、それぞれにプラスやらマイナスが書き込まれている。わかりやすいのは、一体目のウルフリーダーの死体をシアが右目を潰したのでその分マイナスになつていいところか。

しかしこうなるとなるべく無傷で敵を倒さないと、コーパスを持

つてきてもたいした金は入らない事になる。それはただ力だけで圧倒するのも駄目つて事で、これから金を手に入れたいと思つたら多少でも作戦を考える必要がありそつた。だが、いざとなればそんな事に構つてゐる暇も無くなるのだが。今日のウルフリーダー戦でも、正直ギリギリ過ぎる戦いだつた。

紙に一通り目を通し、ガランさんに返す。

そのついでに紙の最後の方に書かれた単語の意味を尋ねる。

「ありがとうございます。あと、レートつて何ですか？」

「レートつてのはクリーチャー単体の相場価格つて言えればわかるか？」ウルフリーダーのレートは今日は約千、D型は二三千だ

「なるほど……」

相場つて事は市場があるつて事だが、OPで見た他の街々と連携して形成でもしてゐるのだろうか。詳しい事は分からなが、ようは日によつてクリーチャー単体の価格が変動するつて事でレートはその価格の事を指してゐるのだと、噛み碎いて理解しておく。

「合わせて四千一百^{クロム}だな。詳細は見せた通り。これで大丈夫か」「大丈夫です。お願ひします」

ガランさんは一瞬仕事の顔になり、再びさつきまで氣を失なおつさんの顔に戻る。

ガランさんに促されて左手首の冒険証を差し出す。確かに、と言つてガランさんはカウンターの下からお金を取り出し、差し出したままの俺の左手にお金を握らせる。

現実の日本の通貨と似たような感じで四枚のお札と一枚の硬貨。もちろんデザインは違うし、百円玉の変わりは金色の硬貨だ。

それをどこに入れようか迷つたが、財布らしい装備は無いのでとりあえず四次元ポーチへ放り込む。

「これで換金までの一通りだ。大丈夫か？」

「はい、ありがとうございます。今後も世話になると思いますがよろしくお願ひします」

「いひちひや、大物頼むぜ」

ガランさんの大きいくつし手と硬く握手をして、じじを出る。

後ろでシアが再びガランさんに改めての謝罪と別れの言葉を告げていたが、俺が関わるところではないのでそのままドアを開けて外で待つ。

シアが外へ出てくる僅かな間にメニューを開く。所持金の欄には先程受け取った四千一百じがしつかりと刻まれていて、あれで良かつたのかと思わせる。それとは違う画面の端に現在時刻が表示されていて、もう六時近い。まずいなあ、とは思うがもうすぐでセーブが出来るので、中断は選ばずにそのままいる事に決めた。こういう時にあとちょっと、あとちょっとって思つてしまつのはやはりゲームに毒されているからなのか。

開いていたメニューを閉じると、丁度シアが扉を開き出でくる。元から目的は分かつていたので、シアは俺が何も言わなくても的確な言葉を掛けてくれる。

「いひから一番近い宿は、『哭椿』つてところですね」

「良し、じゃあ行くか」

シアが俺の一歩前を歩いて道案内をしてくれる。俺は情け無いながらもそれについて行き、五分もするとその哭椿という宿にたどり着いた。

石造りでしつかりと手入れも行き届いてるようで、少なくともじ

じよりは外見が綺麗だった。

哭椿と書かれた看板がドアの近くに垂れ下がつていて、なんだか

いい雰囲気を醸しだしていた。

扉を開け、シアと共にぐぐると待ち受けっていたのはガリガリな、下手するとシアよりも細いんじゃないかと思わされる青年だった。年の頃は俺と同じくらいだらうか。

「よつじん、哭椿へ。本日はどのような用件で?」

「えつと、休みたいんですけど……」

「一部屋、一部屋、どっちですか?」

一瞬戸惑つた。ZPことはいえ現実そのもの見たいなものなのに、女の子と一つの部屋で寝るのは。俺は……まあいいんだが、問題なのはシアの方だ。今日初めて会った男と同じ部屋で寝るのは流石に抵抗があるだらう。だから俺は多少の出費は覚悟して一部屋を示す、一本指を立てた右手を上げた。元はといえばシアの存在がなければこのお金も無かつたような物なのだから、シアのために使った所でなにもおかしい所はないのだし。

だが俺の上げよつとした右手をシアの手が押さえ、代わりに少し大きめな声で一部屋、と宿屋の店主らしき青年に宣言するのだった。俺がそれに驚き、何か言おうと言葉を頭の中で考えてる間に、青年が薄く笑い話を進めてしまつ。

「かしこまりました、一部屋ですね。それでは宿帳を付けさせて頂きますのでお名前をよろしいですか?」

「あ……ああ、えつと、二ケ、で」

「二ケ様、以下一名様、本日はZJ利用頂き有難うござります。こちらがお部屋の鍵となります。お部屋の位置はあちらの案内板に書かれておりますので、鍵の部屋番号と照らし合わせてお向かいくださ

い

青年は流暢にそう言つて鍵を手渡してくると、一回へ続くと思わ

れる階段の近くにある案内板を指差す。そして「」ゆつくりびつや、と言つと顔に笑顔を貼り付けてその場で佇むばかりだった。

なんだか抗議を唱える間も無く押し切られてしまつたが、やつぱり不安なのでシアにいいのか？ と小さく聞くが、先に部屋に行きましょうとなんだか怪しい笑顔で言つばかりで、取り合つてくれなかつたので仕方なく階段を近くの案内板に目を通し、鍵番号の一番の部屋を探す。案内板によると一階に上がって通路の一番奥の通り側、つまりはこの宿の入り口側の部屋に一番と割り振られていた。

階段を上り、奥の部屋、一番の部屋へたどり着く。鍵穴に鍵を通し回す。ガチャリと鍵の開いた音がしてから鍵を抜いて、ドアノブを回す。割り振られた部屋はしつかりと清掃も行き届いていて、シアに言われたような汗臭い冒険者達がとりあえず泊まるには少しもつたいいくらいだつた。そして、案の定ベッドは一つ、何とか二人は寝れそだがおそらくはぴつたりくつつかないとどちらともなく落ちるだろう。柵も無い白いシーツの様な物が何枚か掛けられただけの布団は明らかに一人では狭すぎる。

これ、どうするんだろう、とか思いながらも、さつき店主が宿帳を付けてくれた事を思い出し、セーブがおそらく完了している事にほつ、として、次に繰り広げられる展開に目を背けながらもメニューの中斷を叩くのだった。

失った感覚が体に戻つてくる。疲れきつていた体は現実の体に戻つた瞬間に嘘のように無くなつていた。だから、重たかつた仮想の体に慣れていた感覚のせいで、現実の体が嘘見たく軽く感じられて、なんだか気分が良かつた。

VRGを頭から外し、ベッドの上に無造作に放つておく。頭の中でこれからあの状況をどう打開しようか考えるが、空腹感からかうまく思考がまとまらない。

部屋に置かれた時計を見ると、もうほとんど六時としか言えない六時前を指していた。

ベッドから妙に軽くなつた体を起し、部屋のドアへ向かい、デュアルワールドでの出来事は一回置いておき、とりあえず今日の夕飯の献立を考えるのだった。

晩飯も食べ終えて再び自分の部屋に戻つてくる。VRGを被つてVRボタンを押そうとした所で画面端の電池残量を確認、昼前から続けてやつてた事もあり充電が半分を切つていたので、箱から充電器を取り出しセットする。

充電されている事を画面上で確認し、今度こそVRボタンをしつかりと押す。

落ちる感覚と共に意識が途絶え、デュアルワールドで目を覚ます。状況は確か、死闘一回潜り抜け、その疲れを癒すためにも宿屋に泊まろうとしたが、文無しだつたために魔物の死体をCCで換金し、この世界の通貨であるクロムを入手。それを使って近場の宿屋『哭椿』で部屋を一人いるのに何故か一部屋だけを借り、そこに足を踏み入れた所で途切れている。

復帰した俺を襲つたのは、まず全身の疲れと主に足を中心に感じる重たい感じだった。

そういえばこっち、デュアルワールドではこんな状態だった。だ

からこそなんとか宿に泊まろうとしていた事を思い出す。

本当に一室といった感じの部屋の窓側にはシアが立っていた。両開きの窓を開け放つていて少しの風が部屋の中へ流れ込む。窓辺に立ち、外の通りを歩いてる人達を眺めていたようだった。

シアの隣まで歩いていき、シアが見ていたものを見ようと同じ様に窓辺に立ち外へ目を向ける。

それに気付いたシアが一瞬こっちを見るが、何も言わずにまた窓の外へ向き直る。

風が頬を撫でる中なんとなく呟く。

「……なに、見てたんだ？」

シアの表情は何も変わらない。ただ何かの感情に浸つたような遠い目で、通りを少し慌てた様子で歩いている冒険者達の流れを眺めている。

「……私も、あの入達と同じ舞台に、立てたのかなあ、なんて思いまして」

「冒険者に憧れてたのか？」

「……はい。ここで働いてる時に色々な冒険者の人達と関わって、色々な話を聞いて、外に憧れていきました」

でも、とシアは続ける。憧れながらも冒険者としての道を選ばなかつたのは、冒険者となればここにいつまでも居るわけにはいかないから、それはここの中を裏切る事になるんじゃないかと。折角拾つてくれて、仕事までくれたのに、それはあんまりじゃないかと。そんな想いを話してくれた。

「でも結局、感情的に行動してしまったんですけどね……」

自分を嘲笑うように、そんな言葉を吐いてシアは笑つた。僥ぐ消えそうな、今にも泣きそうな、そんな顔をするシアの頭に手を載せ、これでもかというくらいくしゃくしゃにしてやる。

抵抗する気配もなくシアはただそれを受け止めていた。

「終わった事は気にするな。ガランさんも気にしちゃいないさ。シアに比べたら付き合いなんて無いようなものだけど、そんな事をいつまでも気にするような人じゃなーってのは分かる。むしろいつまでもシアの方が気にしてたら、ガランさんも素直にシアが帰つてきた事を喜べないだろ？」

「……そう、ですかね」

「そうだ、と返事する代わりに再び頭をくしゃくしゃにしてやる。今度はしっかりと抵抗の意思を示し、元気が出てきた事を窺わせる素振りをする。

シアの元気が出て来たといひで、肝心で重要な一つの疑問をぶつける。

「シア、そういえば何で部屋を一部屋にしたんだ？ 明らかに一人で寝るには狭いぞ」

「えっと、それは……その、まだ駆け出しですし、あの、……資金も出来る限り節約しないといけないかなー、と思いまして……他に他意はないです、はい」

窓から差す夕日のせいか顔は赤く、俯いてるせいでの表情は見て取る事ができない。

そういうえば今現在この「テュアルワールド」で夕日が出るような時間だという事は、この時間軸は現在時刻と連動しているという事になる。……などと余計な事を考えてお茶を濁して見るが、これは、あれか。……そうか。しかし一つ気がかりな点がある。だがそれも実

際にやつてみればわかるだらう。

「そりか……ならいいんだが」

「今日は疲れましたし、私はお風呂に入つてきます、それでは！」

言つが早いかシアはすぐに部屋を飛び出してしまつた。……しかし風呂もあるとは中々現実感溢れるゲームだと改めて感心せざる終えない。戦闘などの面が現実味を帯びているのは、より現実に近づけるため、緊張感をもたせるためだという事は分かるが、生活面まで現実に似せる必要はあるのかといえば正直必要ない気もするが……。でも確かに本来のRPGではシナリオがあつてそれに沿つよう進んでいくが、このデュアルワールドでは『碎かれた星の命の欠片』集める事だけが目標と定められ、それ以外は何も決められていない。つまり、その目標に至るまでの道程を自分で決めていくしかない訳だ。

だから全ての自由度を上げるためにも、生活面の充実も欠かせない要素なのがもしけない。

一人部屋に残つた俺は特にする事もなく、重たい足を休ませるためにベッドに腰掛けた。

パタパタと動かす力もなく、座るだけのつもりが腰掛けた途端に全身の力がベッドまるで吸われたように抜け、そのまま横たわる。体に力が入らない。それだけ体自体が疲弊していただろう、動かそうと言つ氣すら起きない。

ああ、そういうれば俺も風呂に入れば少しは疲れも取れるだらうか。現実ではあの疲れた時に入る風呂には何とも言えない染み入る感覚があつて、結構気分的にも肉体的にも疲れが取れる。

もし、生活面も現実に近いものを再現しているのなら、もしかしたら、とも思わないでもない。

とはいえシアはこの宿に風呂がある事を知つていたようだが、俺は何も知らないのではまずは店主のあの青年に聞かねばならないだろ

う。……なるべく荷物は部屋に置いておこうと思つたが、よく考えたら手荷物ぐらいしかないので何も気にする事はなかつた事に気付く。便利だな、四次元ポーチ。

まだ体は重かつたが目的が出来たので力を入れてベッドから起き上がる。

そのまま部屋を出て鍵を掛ける。シアも荷物らしいものは置いてなかつたので仮に俺より先に来て入れなくとも大して困る事もないだろう。それでも一応シアには伝えておかないと云々ないが、……それはもし会えたらにしよう。わざわざ自分の身を滅ぼしかねないところに、自らの意思で赴く必要はない。

少しの通路を渡り、階段を下りると、相変わらず青年が店番をしていたので、近づいて風呂場を尋ねてみる。

「風呂場……ですか？ そうですね、うちは本当に寝泊りするだけなので備え付けの物はありませんが、近くにお湯屋があるんです。そちらでしたらお客様の要望にもお応え出来るかと思いますが……」

「お湯屋か……それってどうやら辺りにあるんでしょうか？」
サノウノコ

「」を出ますと左手側に『覚能乃湯』というお湯屋があります。ここを出てから田で見て頂ければ暖簾が見えると思いますので、そちらに向かって頂ければ

銃に絶命文筒にさしかかる所がお湯だ。かってお湯でさ鹹を
覚えていりますので」さりげなくお顔を出していただければまたお渡しし
ます。

そういうシステムなのか、と半ば感心し、鍵を取り出して店主に渡す。

恭しく礼をする様と、完璧な対応は相当手馴れている感じがして、まだ見た目は若いのに相当しっかりしてるんだなあ、と思わせる。おそらく同年代であり、バイトで鍛えた多種多様な客の捌き方をマスターした俺でもあそこまでの対応は出来ないだろう。ましてや一切の彼自身の感情、嫌そうにしたりと言つのが全く感じられなくて、店主としては完璧だ。

俺もあそこまでとは言わないが、もつと精進しないとならない、と何故かゲームのNPCに対して負けず嫌いな俺は闘志を燃やしつつ、哭椿ナクツバキから出て左手の、黒色にお馴染みの温泉マークが白く刻まれた暖簾を目標に歩き出した。

外はもう暗くなりかけていて、人も疎らになつていて。それでもまだ俺のように出歩く人も居るが、大体は帰る途中の人達らしかつた。

覚能乃湯 二ヶ

お湯屋『覚能乃湯』^{サノウノユ}は、実に和風な、馴染みある近所の銭湯と似たような感じだった。

暖簾と言われた時点で何だかそんな気はしていたが、街の雰囲気が日本とはかけ離れていたので、なんだか凄いギャップを感じてしまう。とはいえ覚能乃湯は、そんなものと一緒に疲れも吹き飛ばしてくれるくらい快適だった。現実にあるお湯の種類は揃えられる上にサウナまで完備してるので、ゲーム会社のこだわりが見え隠れする。

ゲームの中だからいいか、そのまま入るつかとも思ったが、やはりN.P.C.とはいえる周りの目が気になるのでしつかりと備え付けの洗面器具で体を洗い、室内に取り揃えられた選り取り戻りの風呂を片つ端から試していく。そして途中、一通り回って少し温めのところに入つてのんびりしていると先客が話しかけてくる。こういったところでのミニユニークーションはそう珍しいものではないが、まさか話しかけられるとは思わなかつたので驚いてしまう。

これもまたN.P.C.だが、俺と同じぐらいの年の男だった。それでいて引き締まつた筋肉にところどころに見え隠れする傷痕がそれなりの経験を持つ冒険者である事を示している。髪は短く、濡れていようがほとんど変わらない長さだ。

「よ、あんたも冒険者かい？」

「そつちは中々経験豊富そうで」

「ははは、そう返されたのは初めてだ。それに見る目もある

ガランさんほどではなかつたが、豪快に笑う青年は俺の向かいで風呂に使つていた。

何だか年の近い感じがして、変な親近感が沸いていた。シアとも

違い、男で、文字通り裸の付き合いで、多少近しく感じてしまつても不思議じやないだろ？

「俺はレオン。あんたは？」

「二ヶ、まだまだ駆け出しの冒険者。というか今日なつたばかり」「お、駆け出しか。それじゃここはいつちよ先輩として色々と教えてやら無いとな」

「お手柔らかに」

そんなやり取りをしたが、話し始める前にレオンが風呂から上がる。なんだろうと思つていると突いて来いと手で示すので疑問に思ひながらも黙つて付いていく。

レオンが向かつたのは覚能乃湯、男湯の中から外へ出る扉。そう、露天風呂だった。

「こっちの方が気分がいいだろ？」「

顔だけをこちらに向けてそんな事を言つレオンに、俺は全面的に同意せざる終えなかつた。元より露天風呂は行く予定だつたのだが、お楽しみは最後に取つて置く派なので、今まで入らずにいたのだが、新たな話仲間が出来たのならこれ以上無いタイミングだろ？

レオンが誘つてくれなかつたら俺から誘つていたかも知れない。外へ足を踏み入れると、火照つた体には寒いくらいの風が吹いており、早く湯に漬かりたい気持ちが大きくなる。

そこに広がる露天風呂はどうやら大きな橢円の形をしていて、全体が石造りのそれを竹かなんかの大きな仕切りが真ん中あつた。……いやいや、と突つ込まさる終えなかつたがそこはそれ、年齢制限の壁があるから決して何らかのトラブルがあつてもあれが倒れたりはしない。……はず。だが音声は聞こえるよつて、なにやら姦しい声が時々聞こえる。

「な！」

力強く俺に同意を求めてきたが、俺自身は、さつきまでの俺の気持ちを返してくれ、と叫びたかった。だが、何とか言葉を飲み込んで、湯に漬かる。俺は扉から近めの所に腰を下ろし、レオンもその隣に腰を下ろす。

「それで、何で冒険者やろうなんて思つたんだ、こんなろくでもない仕事……下手すりや死ぬかも知れない」

「……まあ俺にも分からないな」

事実だった。俺は現実からこのゲームの世界に遊びに来ているようなもので、この体も、この名前もすべては偽りの物で、死ぬかも知れないなんて言われたって、死んだらやり直せばいいとしか言えない、この世界に生きている人間じゃないから。

それをこっちの住人であるNPCに伝えたって何も変わらないし、何も理解はしてくれないだろ？。だからそんな無意味な事はしないし、しようとも思えない。

前も確かにこんな事を思つた気もするが、彼らはこの世界に生きている。それを俺がわざわざ壊す必要は無い。俺一人がこの世界の駆け出しの冒険者を演じればそれで丸く收まり、俺はただゲームを楽しむ事が出来る。……こんな事を考えさせるのもこのVRゲームだから、リアル過ぎるから、だろうなあ。

「……そうか。まあ、二ケみたいな奴も結構いるからなあ。二ケに限らず、生きる意味とか、やる事がないから、だとかそんな不確定な事を目標に冒険者になる奴も少なくない」

「そりやまあ、物好きだな」

「二ケ、お前もそうだろうが」

レオンにそう言われたが適当に笑つて誤魔化すと、それを察して話題を変えてくれる。

見た目と喋り方から熱血系な感じだとは思つていたが、どうやらこの人の良さから見ても筋金入りだらうな、とは予想がつく。

「それで、なんか魔物は倒したのか？」

「ウルフリーダーを一体」

「ほう、そいつは駆け出しにしちゃ上出来だな。何人だ？」

「一人。それと片方はD型だった」

そう言つた途端レオンが勢いよく噴出した。

何事かと思つて隣を見ると、むせ返つてゐるレオンが苦しそうにしていた。ガロンさんにもなんだか将来を期待してゐる的な事を言つていたが、やっぱり値段にも結構な違いがあつたように、強さもまた違うのだろうか。

ようやく落ち着きを取り戻したレオンが、俺になんだか聞いてはいけない事をこれから聞く、と言わんばかりの顔で迫り、顔に書かれたその通りに俺に質問を投げかけてくる。

「お前つ……！」一人でD型なんて、もう一人が強いのか？」

「いや、もう一人は冒険者ですらない。しかも女の子」

レオンは今度こそ言葉を無くし、失礼だが変な顔でこいつを見たまま固まつた。

レオンの頭の中はきっと真つ白になつてゐるか、過去の記憶でも探つてゐるだらう、どちらにしろ今の俺にこのレオンに掛けてやる言葉は何も無かつた。

「大したもんだな。理由は無いとか言つてたが、なるべくしてなつ

たんじやねえのか、それ？」

「そうだとこれからも安心できるな。先輩のお墨付きとあらば」

「へっ、安心してると足元すべられるぞ。俺だつてそこまで名があるって訳じやねえから、俺と同じくらこまでは保証してやるがな」「そりや心強い」

一人で大いに笑いあつた。学校を卒業し就職するわけでもなく、バイトで自分の小遣いをちまちまと稼いでる俺にとって、人と触れ合つのは家族かバイト先の人達。後はたまに遊ぶ友達か。だからこうして仮想世界のNPCだとしても、同じ年ぐらいの男とこんなに和気藹々に話すのはとても心地が良かつた。

「連れが女だと色々と苦労するだらう? 買い物が無駄に長かつたり、こまけえ事をいつまでもグチグチ言つたり、挙句人の事を道具みてえに扱いやがつて……」

何だか凄く私怨が混じつてゐるような氣もするが、俺とシアは今日初めて会つたばかりで何もトラブルめいた事も無いし、困つた事も無かつた。とはいえ街の探索時は文無しで話を聞いて回るだけだつたし、その後は戦闘をして宿に……。ああ、そういうば何故か部屋を一部屋にされたんだつけ。とはいへ間違いも起せないこの世界では杞憂だらうし、シアとも長い付き合いではないのでこれから色々と問題が出てくる可能性はあるが、今はまだシアとの問題は全く無い。

「いや、俺の場合は今日初めて知り合つたばかりだからあんまりそういうのは……。レオンはその口調からして女性の連れがいるのか?」

レオンは心底嫌な顔を作り、それだけで全てを肯定した上に、あ

あ好きじゃないんだなあ、といつ感想まで抱かせる。なので俺はそれ以上追及せずに別の話題でも、と頭を探っていると、レオンがそんな俺の様子を見てだらうか、気にするなと声を掛けた。

「別に一緒に居たくねえ、て訳じゃないんだ。たまたまなんかこいつ、似たような境遇のお前さんにグチを言いたくなつた、ていうか、うん、なんだ……その、すまんな」

「いや、気にしなくていいよ。俺にはレオンのその苦しみは分からないけど、そのグチくらいは聞いてやれる」

「……二ヶ、お前良い奴だな」

「何をいまだ」

「前言撤回」

そんなやり取りをして一人で笑つた。そろそろのぼせそうだつたのでレオンに風呂から上がると伝えると、じゃあ俺も、なんて言って付いてくる。

「入つていなければまだ入つていればいいのに」

「風呂に入るのはいつでも出来る。だけど一期一会かもしれない出会いはその場限りだ。大事にしないといけないだらう?」

どうやら風呂から上がつてもまだまだ逃がしてはくれなさそうだ。

部屋を出て 一切振り返らず走った。

ここ 哭椿 ナクツバキ という宿はここ クリーチャーブロクト の近くにあったから名前だけは知つていたが、実際に泊まる機会は一切なかつた。でも近くのお湯屋、覚能乃湯 ウノユ は近くにあつたのでよく利用していた。

そこへ飛び込む。ここしばらくは利用してなかつたが、外も中も変わつたところはなくて記憶にあるままだつた。

まだ顔が熱い気がして、それを塗りつぶすようにお湯を被る。肌を撫でたお湯ではこの体の熱が塗りつぶせなくて。体を洗つたらすぐ少し熱めのお風呂に浸かる。

疲れきつた体を癒してくれる温もりが心地よかつた。その暖かな熱は体を支配していた熱も溶かしてくれて、ようやく少し落ち着いた。

思い出す。今日一日の出来事。

子供たちが失つた未来を、私は”生みの親”から徴収し、払つてもらおうとしていた。

やり方がよくない。それは二ヶさんに言われた。本当の事だと、自分でも今になつて見ればなんて馬鹿なことを、としか思えない。だけどあの時の私はそれが正しいと思っていた。だから続けた。そしてその報いとして今日、あの場所で捕まり、囮された。逃げる隙もなくて、私はそこでようやく気付いたんだ……。このやり方は間違つていた、と。

だから私が犯した罪を罰で贖つ事は何も怖くなかった。ただ真実だけは伝えないと、そう……あの時思つた。でも状況はそれを許さない。私が伝えるべき真実が表に出る事を、光を目指す事を許さなかつた。

私には何も出来なかつた。だけど 。

彼が、二ヶさんが人垣を割つて顔を出したあの瞬間は一生忘れな

いと思つ。

皆が私を恨み、罵倒し、見下していた。なのにそこに突然現れた人は周りの人とは何もかもが違っていて、その目は温かさに満ちた目で、私を見て驚いたような顔をしていたのには私も驚いたなあ……。

そして、私がこの人なら……助けてくれるんじゃないだろうか、……そう思つて、思つてしまつて、目を合わせた。思いを込めて。だから一歩踏み出して振り返つた時には、自然と涙が流れてしまつた。私を庇うように立つたあの背中はすゞぐ……たくましかつた。この人は、こんな私でも手を差し伸べてくれる。

そして、最後に手を本当に差し伸べてくれて、私はその手をとつて、叫んだ。

それでの騒動は終わつた。私が間違つた方法で解決しようとして、そしてその罰を受けるはずだつたのに、それをしつかりと導いてくれた。

私が受けるべき罰は無いとみんなは言つけれど、それは間違つてゐるんだと、私はそう思つ。

盗んだお金の使い道は一つしかなかつた。新たな居場所を作るか、子供たちが失つた未来を少しでも買い戻すか。二ヶさんには孤児院を建て直すとしか言つてないけど、その先に……それ以外にもまだ私が受ける罰は残つてる。そう思つてしまつたから……。

「そこのお嬢ちゃんは何をしみつたれた顔してるのでかなあ？」
「えつ……」

目の前にはいつの間にか大人っぽい女の人がいて、何故だかわからぬけど私に話しかけてきた。

その顔には覚えはなかつたので、初対面なのは間違いかつたのだけれど、どうして私に話しかけてきたんだろうという疑問は残る。

「安心しな。別にどうして食おうって訳じゃない。なんだか暗いオーラを放ちながら、お湯に浸かってる物憂げな少女がいたから、私の性分で頬つておけなくてね」

「はあ……」

何だかよくわからないけどこのお姉さんみたいな女の人は私を心配……してくれたみたいで、悪い人ではない気がした。でも余りに突然の事でなんて反応をしたらいのかわからない。

「なんか悩み事でもあるなら相談して」

「……え、もう何も悩んではいないんです」

「わ？ つて事は……」

「はい、私の悩み事はもう解決してるんです」

「……の割にはやけに暗い顔してたけど……」

その質問には答えられなかつた。いや答えてしまえば、この思いを自分以外の人に教えてしまえば、それはわが……私だけの罪でなくなる。

「少し……思い出していただけなんです。私つてなんでか思い出すだけでも、悲しくなっちゃうみたいで……」

「……そつか」

お姉さんみたい見知らぬ女的人は、私の隣まで移動する。そして頭がぐいっと引っ張られる感覚がして、気付けばお姉さんに頭を抱えられ、肩に頭を預けていた。

「あの……」

「私はアシリ。悲しい時は誰かを頼るんだぞ。」

かの縁、少し話でもしようじゃないか。えーと

「シア、です」

暖かかった。それになんだか懐かしい。お湯の熱さとかじやなくて、恥ずかしい時とも違つて、……あ、そうだ、母さんが私を励ましてくれた時も同じ様に、俯く私をこうして抱きしめてくれた。それで、言葉を掛けてくれた。

「シア、ね。あ、そうだここじや何だし、外へ行こう」

「えつ、そ、外ですか？」

「そう、露天風呂。この街初めてだからね、存分に楽しまないと

そう言つてあつという間に外へ繋がる扉の方へ向かつていつてしまい、なにも言つ間もなく、黙つて帰るのも何だか悪い気がして、仕方なくアイリさんの後を追つしかなかつた。

扉を開くとひやりとした風が体を撫でて、思わず引き返したなるが、もうお湯に浸かつてこちらに手招きしてくるアイリさんを見ると、いまさら引き返す訳にもいかなかつた。

アイリさんに招かれるまま湯に浸かり、夜空を見上げた。

吸い込まれそうな夜空に星が輝いていて、その広大さを考えたら私の悩みなんてちつぽけ物にすら思えた。

「今日はいい空だね。野宿しながら見る空より断然綺麗だ」

「アイリさん……冒険者なんですか？」

「ああ、一応ね。シアは、冒険者なのかい？」

「いえ……冒険者の人の手伝い、なのかなあ……」

「おいおい、なんだその自信なさげな答えは

そういうえば、二ケさんに連れて行つてくださこと言つて、それを受けてもらえたけど、私の立場つて具体的にどうなるんだろう。

付き人……ペア……あ。

一瞬、頭が沸騰しそうな事を考えてしまった、よつな、気がした
けど氣のせい、氣のせい。

違う。一ケさんとはそういうのじゃなくて……ええーと、うーん。

「そんなに悩む事なのかい、それは？」

「はつ……えーと……はい」

「ふふふ……悩ましいねえ」

「……？ どういうことですか」

「……いすれ気付くや」

そう言つてアイリさんは何かを含んだように笑うのだけれど、私には何の事かさっぱりわからず。でも私の事なのでなんだかはつきりしなくて、すくべもやもやが胸に残る。

「こんな気持ちのいい湯なら酒の一杯でも欲しくなるが、仕方ない。
帰つてからレオンの奴と晩酌と行くか」

「……お連れさんがいるんですか？」

「ああ、中々男気溢れる奴だよ。ただし少し短気だがね」

そう言つて笑うアンリさんはなんだかとても幸せそうだが、月明かりが霞むぐらいに眩しかった。

それがその連れの方をどれだけ大事に思つて居るのか、それを映す鏡のようで、すくべうらやましかった。

「あれ？」

体が何だかふらつく……。なんだろう、力が……。

「ん？ おい、大丈夫か？ 付き合わせ過ぎたか……仕方ない、こ

れも私の責任だな」

ぼんやりとした意識の中で、ふわっと体軽くなる。目に移る世界は何だか奇妙な事になつていて、床だつたはずの固そうな石が壁になつて、いつも倒れそうだな、と思っていた仕切りが床になつていて、そこでやつと、自分が動いて無いのに視界が動いてくのを見つて……。

湯からレオンと共に出る。

そこに待ち受けるのは中々大きなロビー。湯から上がった客が湯上りを心地よく過ごす為か、大人数が談話の出来る、長いちやぶ台みたいな足の短いテーブルのが六脚、しかもそれが置いてあるのは畳の上という完璧な日本仕様。とはいえるは正座が苦手なのであまり畳というものが好きではない。というよりは嫌な思い出が思い浮かぶから嫌だ、という至極私怨極まりないのだが。だがそれほどあの足の痺れる感覚は恐ろしい。人を殺せるんじゃないかとも思う。

食べ物と飲み物もそれなりには揃えてあり、風呂に入つてそのまま飯を、という流れも可能なようで、実際長テーブルでは何人かが集まり、顔を突き合わせながら談笑している。何だかああいうのはいいなあ、とか思いながら、俺は畳に腰を下ろさずに、一直線に向かう。そこは飲み物が売つているカウンター。その奥に立つ恰幅が良ぐ二コ二コと笑顔が眩しいおばちゃんに何があるかを尋ねる。

「おい、どうしたんだ急に。逃げるもんでもあるまいし」

トレオンは言うものの、やはりこれは湯上りの気分が覚めない内にやつておかないといけない気がする。おばちゃんから商品を受け取り、四次元ポーチからお金を取り出して渡す。毎度、とおばちゃんが笑顔を崩さずいい、俺も笑顔でありがとうと言つ。

手に持つのはビンのコーヒー牛乳。製作会社は流石だ、わかつてる。

その場で蓋を開け、腰に手を当てる。あとはそのまま一気にビンの中身を飲み干す。流れ込む冷めたい感覚が何とも言えなかつた。そして一気に飲んだ後思い切り息を吐く。疲れた体はびくべやら、もう体のどこにも疲れを残してはいなかつた。

「……何やつてんだ、お前」

「和の心、だよ」

「いや、さっぱりわからんが」

やはり日本風な場所であつても、外は正反対のヨーロッパ辺りをイメージして作ったせいか、住む人々にはあまり日本の知識は無いようだ。という事はしつかりとこういう物が用意されているのは、プレイヤーへの配慮という事になる。そんなスタッフの遊び心はどんなゲームでも、俺がゲームをプレイしてる時に見つけるといほくそ笑んでしまうポイントだ。

そんなスタッフの気配りに感謝しつつも、俺は呆けた顔をしたままのレオンに向き直る。

「そういえばこれからどうするんだ？」

「俺の連れも今ここにいて、後で合流するように話はしてあるから、それまでのんびりしてようと思つが」

「よし、じゃあそつするか。食い物でもなんか食べるか」

「いや、俺はつまみ程度でいいな」

「そつか、じゃあ俺は無難にカレーでも食うかな」

現代的なメニューが並ぶ中から基本的にハズレが少ないものを選ぶ。シアもおそらくここに来てるだろから、待つてれば分かるだろ。あの髪型だし。ツインテールは街中でも見なかつたし、そうそう居ないんじゃないだろうか。

もし仮にシアとはぐれてしまつても、その時は哭椿^{ナクツバキ}のしつかりした青年店主が何とかしてくれるだろ、と軽く考え、頼んで数十秒で出来た、ほかほかの出来立てカレーを、コーヒー牛乳の時と同じおばちゃんから受け取る。

手前のところが空いてたのでそこに一人向かい合つようじて胡坐で

座る。ちなみにレオンは枝豆を選んだ。あれだけ俺よりは稼いでそうな素振りをしてた割には随分と所帯染みてる。見た目とは違つて実は僕約家だつたりするんだろうか……。などと考えていたが今は目の前にあるカレーライスがとても気になつて仕方ない。

VRGを使いVR空間に入った時、最初はてつきり現実の体の感覚とリンクしているものだと思っていたが、それが覆されたのは先程、晩飯を食べて中断していた途中から再開したときの事だ。相当疲弊していた体のままVR世界から離脱し、現実の体では今までが重かつた分軽く感じた。逆に復帰するとVR世界での疲れが残つたままで、現実では晩飯も食つて動ける状態だというのに動けないほど体が重かつた。それに晩飯を食つた直後にも関わらず、いま俺はこづしてカレーライスを頬張ろつとしている。

結果、導き出されるのはVRGで作り出された**仮想体**は、現実の体とは一切のリンクがないと言つ事だ。
アバター

トイレとかどうなるんだろつ、と思つてしまつが、別にオンラインゲームではないのでポーズが効く分、そこは現実の体が尿意を感じたら自動的に中断して、接続を切つてくれるとか、その辺だろう。実際の所はなつてみないと分からなうが、これで現実に戻つて糞尿垂れ流しだつたら軽く死ねるぐらいだ。

そんな事を考えて、カレーライスを見るとなんだか……、いや考えるのをやめよう。折角今日一日死ぬ思いをして稼いだお金で買ったものを、食わないで捨てるなんて選択肢があつていいはずが無い。俺は無心でカレーライスに食らいついた。

あまり辛口ではなく、実に平凡なカレーライスだつた。ここまで味の再現とかが出来るならこつちで暮らしてもいいんじやないか、と思えてくるが、先程自分で出した現実の体とリンクしないというのを思い出して、あえなくその考えを捨てざる終えなかつた。

VR世界では腹いっぱい食べてようと、現実の体が栄養もなく餓死してしまつたら元も子もない。

「お

俺が色々と考えながらカレーライスを食べている様子を、奇異の眼差しを向けながら枝豆を貪るレオンが、何かに気付き手を上げる。

「アイリーー！　」

振り返るとそこには俺やレオンと同じぐらいの年の女性が居て、その豊満な胸を強調したような服で手を振りながらこちらに近づいてくるのには危うくカレーを噴出しそうになつたがなんとか堪える。そしてその後ろの少し小柄な女の子が何だかこっちに視線を向けている。

可愛い子だけど俺会つた事あつたかな……。胸の辺りまで伸びた髪は何も縛る事もなく降ろされていて、湯上り特有の瑞々しさを帶びていて、照明が反射するツヤのある髪は艶やかで紫っぽい色だった。

湯上りだからかほんのり赤くなつている顔を良く見てみると、う、なんかどつかで……。

思つが早いが、相手が話すが早いか。

「二ヶさんも、来てたんですね」

後者だつた。「ごめん！」と心中で全力で謝り倒し、それを表に出さないように細心の注意を払いながら、自然な会話に努める。……髪下ろすだけでここまで変わるものなんだな。

「……ああ、シアが言つてたから、場所は店主さんと聞いて「そなんですか……あ、すいません、私場所も教えずに飛び出してしまつて……」

「いや、全然気にしてないよ」

俺も髪を下ろしたシアに気付かなかつたからおあいこで、なんて口には出せないが、心の中で咳いておく。

シアとそんなやり取りをしたのも束の間、シアの隣に立つお姉さんが急に近づき顔を寄せてきて、なんだか値踏みしているような目で全身を見られる。レオンが確かアイリ……って呼んでたな。

「……なんでしょう？ 顔になんか付いてますか？」

「いや、……ちょっとね」

ちよつと、って何だろ？ とか思つが教えてくれそもそも無いので、まずは仲が良さげだつたシアに助けを求める視線を送るが、わたわたとするだけで具体的な救済策は無いようだ。……元よりあまり期待はしていなかつたが。俺が助けを求められるのは、残るはレオンだけ。視線を向けると、はあ、と一つため息を付いて、俺の目の前に迫るアイリと黙つ女性に声を掛ける。

「アイリ、いつまでやつてんだ。迷惑してんだひつ」

「おひと、『めんなさい』。つい、ね」

何が、つい、なのは分からないが、とりあえず見知らぬ女性の顔が急接近したまま、と言つ窮地は、その仲間である、レオンによつて救われた

ので、俺もやつと長い息を吐き、落ち着く。

「『めんね、あたしはアイリ。そこの馬鹿レオンと一緒に冒険者やつてるわ』

「俺は二ヶです。まだ駆け出しの冒険者で……」

「そのわりには口型をもう狩つてたりするけどな」

俺がアイリさんに自己紹介をすると、言い終わらないうちにレオンが割り込む。

さらにそれに対しても俺が文句を言おうとしたのに、彼さるよつててにアイリさんがその会話に乗っかる。

「うつそ！ D型を初心者が、つてますます氣になるわねえ」

最後に俺はシアを頼つて視線を送るが、相変わらず慌てて何をすればいいのか迷い、最終的に俺がいつもシアにしていて、頭に手を載せて撫でるだけだった。

あれから四人はそれぞれ向かい合つて座つた。俺とシア、その向かいにレオンとアイリという席順だ。冒険者として先輩でもある一人に色々と聞くことが出来て、これから旅路に役立ちそうだつた。

話してわかったのは、冒険者と听つても一枚岩で星の欠片を集めているわけではなく、どうやら冒険者の中から星の欠片を探してくれる有志を募つた、というのが正しいらしい。

もちろん他の冒険者達も星の欠片を見つけたらCCに報告し、欠片を手渡す。そしてその欠片を国に引渡し、ここから冒険者に報酬が払われるといった形になつていてるらしい。

一応この世界の人々は全員が魔物とこの星の命に危機を感じていて、国の募集に募つた証として無色の宝石があしらわれた冒険証を持つ冒険者はなにかと優遇される、と言つ話だつた。つまり俺の持つ冒険証がその無色の冒険証なのだが、いまいちその実感が、恩恵

クリーチャーズコレクター

をあまり感じない事もあつて薄い。まだ俺が駆け出したといつ事もあるのだろうけど。

冒険証にはめ込まれる宝石は冒険者となつた国によつて色分けしてあるらしく、レオンとアイリは赤色。シアは冒険証が無いが、この国の冒険証の色は青色なのだと。

無色はどこの国でも共通で、世界の救済者、だとなんとか。ご大層な名前が付いていてもやる事は歩き回つてその欠片を探すだけなので、やることは地味極まりないが。

それと武器なんかの話も聞いた。俺自身今は初期装備の片手剣だが、他にも種類があるので参考までに一人に聞いてみた。

レオンは大剣。確かにイメージ通りと言うか、力任せにブンブン振り回している絵が簡単に浮かぶ。

アイリは魔弓^{ダガ}使いらしく、後方からの弓攻撃、魔法支援が主な役割で、たまにストレスが溜まつてる時にはレオンごと攻撃魔法で吹き飛ばす事もあるらしい。アイリらしいといえばらしいが。

そしてシアの武器について聞いた時に、聞きなれない言葉を聞いたので例の如くシアに聞いてみる。

「魔剣士?」

「はい。魔法と剣術を合わせて使う人をそう言つんですね」

「魔剣士すら知らないって……二ヶは今までどこに住んでたのよ」

日本です。とは言えず、笑つて誤魔化しておく。間髪入れずにシアに魔剣士について説明させてその場をしのぐ事に……いや、この世界の勉強と言つ事にしておこう。

「私の場合は短刀^{ダガ}と、知つての通りの火炎装填^{ファイアチャージ}や癒水^{ヒールドロップ}両方使うので一応魔剣士という扱いになります」

「へえー」

「シアちゃんつて、冒険者じゃないつて聞いたけど……良く知つて

るね

「ここで働いてましたから、ある程度だけなんですか？」

褒め称えるようなレオンの表情と声は、シアには少しくすぐつたいらしく、もじもじとして俯いてしまう。それとは別にアイリが最初にあつた時のような、全身を嘗め回すような視線を向けてくる事に気付く。

「……二ヶ、アンタつて本当に冒険者？」

痛い所を突かれた気がする。いや突かれた。

俺自身がシアの方が冒険者っぽいと思つてしまつていて、ステータスを比べても明らかにシアの方がらしい。

「多分、きっと……その通り」

アイリに鼻で笑われた。すぐ屈辱的だったが返す言葉もなく、絶対アイリなんか追い越して鼻で笑い返してやるのと心に決めた。今決めた。

それと今後シアの方が冒険者っぽいと言われないためにも、明日からは積極的に外に出てレベル上げをしないと……あとはこの国の人よりも少し見ておきたい。あの丘から見ただけじゃ、……というよりあの時は疲れてすぐにへばっていたのでまともに見てもいなかつたつ。

「俺、そろそろ宿に戻るよ」

そう言つて俺は楽しい席を立つ、少し名残惜しかつたが、流石にそろそろ休まないと明日に響く事になりそうだったからだ。だから多少は引きずるものもあつたが、振り切つてそこから離れる。明日

はレベル上げが主な目的になるだろうから、俺一人でも大丈夫だと
思ったので、一緒に席を立とうとするシアを押し留めて、俺だけが
その場を去る。

「じゃーな、まだどつかで。シアは後でな、鍵は開けとくか」「
「ああ、まだどつかで、な」「
「ばいばい、楽しかったよー」

三人に別れを告げて外へ出た。……そういえばここお湯屋だった
んだなあ、と黒と白の暖簾を見て思い出した。なんだか食べたり呑
んだりしながら談笑していると、どこでも居酒屋のような気分にな
つてしまつのも、だんだん年寄り臭くなつてのかもなー、などと
思いつつ、満天の星空の下、もはや湯上り気分でもないが気持ちは
上を向いたまま歩いていく。

宿に帰り、店主の青年から鍵を受け取る。

足早に階段を駆け上がり部屋の鍵を開けて飛び込んだ。ベッドの横に力なく座り込む。

楽しい楽しい時間が遠く、まるで祭りの会場から離れる時のよつな気持ちを抱きながら、あのひと時を思い返したりする。あの一人も、仲間になるのかなあ。だけどあの一人中々レベル高そうだったし、なるとしてももう少し後か……。

眠気が襲つてくる……。シアがベッドで寝ると思つから俺はこのまま寝よう。

睡魔に襲われながらも現在時刻をメニューを開いて確認する。
現実時間で八時前

楽しかつた……。あんなに人とお喋りしたのは久々だつたなあ。レオンさんと、アイリさん、しばらくこの町を楽しむつて言つてたし、またいつか会えるかな。

そういえば二ヶさん、先に帰つちやつたからあんまり喋れなかつたけど、やつぱり今日一日色んな事があつたから疲れたんだよね……。部屋開ける時は寝てるかもしれないからそつと開けないと……二ヶさん起こしたら悪いし……。

部屋のドアを開ける。ドアノブはゆっくり捻り、扉を開ける時も軋む音が立たないよつとそつと開けて、中を見るために顔を覗かせる。

田は合わなかつた。けど姿は見えた。
扉を開けてそのまま進んだ所にある、ベッドの横の床に二ヶさんが座つて寝ていた。

「な、なんですか？」

扉を開けた時と同じ様にゆっくりと閉めて、そろそろと近づく。ベッドのシーツには皺がついていて使ったような感じはあるけど、寝たような後には見えなかつた。まるで上に乗つただけのようなそんな感じがした。

どちらにしろ二ヶさん^{アバター}がベッドで寝ていなことは見て分かるだけれど……。

どうして？ なんで二ヶさんはこんな所で……。

……ああ、そうか。原因は私、か。

こんな事になるなら一部屋取つてもいいんだつたなあ、……もつ遅いのだけれど。

でもこのままベッドで寝るのも何だか悪い気がするしね、どうしよう。

……そうだ、だつたら……

う……ん……。

瞼が重い。体も足も重い。ちゃんと休んだはずなのに……。

……ああ、そうか。宿のグレードはこの仮想体の、ステータスに表示されないパラメーターである疲労の回復の度合^{アバター}が違うのかも知れない。

高級な所で休めばどんな疲労も一発回復。逆に安宿だと一日だけしか休まないと満足に回復しない、とか。今度手持ちに余裕がある時にでも試してみないと。

……ね？ 隣で寝てるシアさん。

とりあえず訳が分からなくて、心臓も起きの癖にバクバクで、なんかかわいいというのだけは分かる。俺は冷静だ。

状況を整理する。

俺が目を覚ますとシアが隣で寝ていた。なんだか凄く、電車で隣の人がこちらに頭を預けて熟睡してる的な、気まずさともどかしさを思い出す。

俺が寝る前の行動から思い出すと、俺は確かに一人で、シアがベッドを使うものだらうと思い、ベッドの脇に腰掛け寝た。起きるとシアがご丁寧にベッドのシーツを掛けてくれた上で隣で寄り添うように寝ている。寝顔が可愛い。あとシアは髪を下ろしているほうが個人的に可愛いと思う。明日言つて見ようかな。

この状況は、どうしてこうなった、の一言に尽きるのだが、俺は冷静なのでとりあえずメニューを開く。

現実時刻は寝る前に見た時間からほとんど変わっていなかつた。

……現実時間とリンクしてるものだと思つたけど、これもアバターの時と同じで実は別だつたらしい。

一通り動かすに出来る事はしたが、……さてどうしようか。

下手に動くとシアを起してしまいそうで怖いが、こちちは寝起きドッキリをやられた気分なので眠くない。あとこの状況で一度寝出来るほどに俺の女性免疫は高くない。

このまま寝顔を眺めているのも悪くなかったが、流石にそんな訳にも行かないでの、意を決してそつと体を起こし、シアをゆっくりと抱きかかえてベッドに寝かす。やっぱり小柄な女の子なので、見た目通り軽かつた。

なんとか起こす事なくベッドに運び込めたので、そのままシーツを肩まで掛けてやり、俺はそつと部屋を出た。

空を見るといつも青い空に星が輝いていて、月も星に負けないくらいに光を放つていて、その光を遮る障害が少ないおかげかこんな時間でも道は明るく照らされていて、明かりがなくとも全然平気なぐらいだつた。町のほとんどが寝静まり、音は風が吹く音と自分が放つ音だけだつた。

そんな静寂が心地よかつた。

俺はこの街から外へ出る唯一の道、門へと歩きながらメニュー画面を操作する。

今日の一回の戦闘で一度のレベルアップ。その際に得たAPをまだどれに振るか決めていなかつたからだ。

アビリティの欄を開く。戦闘、というか武器関連や特技はスキルとして別枠なので、ここで選ぶのはそれ以外のものになる。

裁縫やなんかの生活系のアビリティはとりあえず関係ないので除外し、必要そなうなをピックアップする。

このデュアルワールドのアビリティは少し変わつていて、一つのアビリティには三ランクあり、一ランク目は基本的な効果を持つていて、ほぼ全てが一APで取得できる。そしてその上のランクに上げるのは、物にもよるが十から二十付近までAPが必要だ。さらにもその上もあるが、……生憎と今はまだ俺のレベルが低いせいか詳細すら出ていない。育ててからのお楽しみだろう。

俺がピックアップしたアビリティは四つ。

『手入れ』 武器と防具の耐久値の消耗を抑える

いたつて地味な効果だが、こいつのはあるのと無いのとでは後に響く時があるので習得しておく。

『魔法』 基本的な魔法を使用する事が可能になる。

このアビリティが無いと魔法が使用出来ないらしい。俺はこのVR世界で魔法を自分が使えるなら絶対使いたかったので、これを習得する。

『休息』 疲労が回復するのが早くなる。

これはさつき疲労と言つもの恐ろしさを味わつたので習得しておぐ。

『識別』 敵を注視すると情報が表示される。

これはもはや必須とこつが、なきや困るぐらこのものだと四つの一つを残すという選択もあつたが、まだまだゲーム序盤なので

とりあえずこの四つを習得する。どれかをランク一にするためにポイントを残すという選択もあつたが、まだまだゲーム序盤なので

アビリティポイント

質より量を今回は取つておく。他にめぼしいものもあつたので、またレベル上がつてAPが増えたらそちらを選んでいき、ある程度の数を揃えたら質を上げていく方向で考えていく。

メニュー画面を順に叩いていき、ピックアップした四つのアビリティを習得し、画面を閉じる。目の前にはもう門が見えていた。少し開いたままの門を潜り、近くで警備をしている城の兵士に挨拶をして外へ出る。

外は危ないから気をつけて、と声を掛けられたのでお礼を言つて、月明かりに照らされた草原へと足を踏み入れる。静けさと中で風に揺られた草達がざわめく。目に見える範囲に敵は映つてないが、これがファイールドだとすると、あの丘で突然現れた狼達のように戦が突然現れてエンカウント、という事もあるかもしれない。気を引き締めて気配を探る。もちろん胴の剣はまだ抜けない。

静けさが一層深まり、風が強く、一瞬だけ吹いた。

自分が出した音、風によつて起きる自然な音。それらに一切当てはまらない、違和感のような物音がした。振り返るとそこにいたのは俺が持ち望んだ魔物だった。

月明かりが反射し煌いでいる体表は鱗のようになつていて、その右手には俺よりも高価そうな銀色の剣。左手には皮で作られている質素な盾。一本足で立つその魔物の足の隙間から長くうねうねと動く尻尾が見える。

早速識別アビリティを使うためにその魔物を注視する。

名前は『リザードマン』装備は思つた通りの『鉄の剣』『皮の盾』で、それ以外の表示は無い。

その表示を読み終えた瞬間に敵が動いた。

数メートルも離れていたリザードマンは、一回の跳躍で空中から鉄の剣を振り下ろしてくる。

剣を抜く暇もなく、ただ反射的に横へ転がる。地面に振り下ろされた剣が刺さる音が聞こえたが、それを目視する暇もなく、ただ手探りで腰の頼りない俺の武器を手に取る。

体勢を立て直し、半ば自動的に剣を構える。

リザードマンは標的を外したその剣で空中を切り払い、当たらなかつた事にイライラしているようだった。……そんな簡単に当たつてたまるかよ。

俺の狙いは一つ。ただひたすらに避けて俺の唯一のスキルである『スラッシュ』をお見舞いする事だ。

このリザードマンは出会いがしらの跳躍といい、機動性に富んでるみたいなので、隙を突く事は難しいだろうけど、かといって切り合いをして勝てるとも思えない。武器の質も向こうが上で、おまけに盾もあるのだから、それで受けられて反撃されればかなり厳しくなる。

方針は決まった。あとはそれを実行するだけだつた。

リザードマンが先程の跳躍とは違い、小刻みに跳ねるようこちらへ向かってくる。俺はただひたすらに待つしかないのと、リザードマンから田を離さないようしながらその周りを回るよう走る。リザードマンは走る俺を追いついて跳ね続ける。このままだと堂々巡りか……。

敵の隙を見つけるために敵の周りをひたすらに回るのは、アクションゲームでは割と有効的な手段だが、時折ひたすら回るとそれを追つて敵もひたすらに回り続ける、いわゆるループ状態に陥る時がある。

これを抜けるには俺自身の動きを止めるか、敵の動きが変わるか、他に乱入者が現れるか。

今この状況で一対一になるとまず逃げるしか無いだらつ。そういう事を祈るのならば、俺か、リザードマンが行動を変えなければならぬ。

しかしリザードマンはAIで行動が限られているだらうから、実質的にはプレイヤーである俺が動かなければならぬ。それが分かっても具体的にどう行動すればいいのかはまだ答えが出でていない。だがこのループ状態ならば考える時間はいくらでも作り出せる、…

…俺の体力が続く限りだが。だから今は冷静に考える。

むやみやたらに突っ込んで切りかかっても、盾で防がれて反撃の一太刀を受けるのは目に見えている。

ならば最初の出会い頭の一撃をかわしたように、敵の攻撃を誘いそれをかわし、反撃を叩き込む、といつのはどうなるか。……まず前提が難しいかもしない。

まだこのデュアルワールドでの戦闘は三回目で、人型で剣を使う魔物の相手にするのは初めてだ。もちろん現実で剣を相手取ったことは無いし、経験が全く無い俺が、リザードマンの剣を正確に見極めて避ける事が出来るとは思えない。

最初の一撃は、大きく跳ぶ、剣を思い切り振り上げていた、そういつた動作があつたからこそ、見極めて横に避ける事はできたが、それでも無様に転がりながらで、なので、完璧に避けられたとは言えないだろう。それを狙つて確実に出来なければ、相当な深手を負うことになる。

選択肢が無い。でも何かしらの作戦がなければ、俺の実力では勝てないのは明白だ。

このデュアルワールドは、RPGにしては戦闘の部分はアクションゲームに近いものがある。それもVRゲームと言つ媒体のせいなのだろうが……。そのおかげでアクションゲームの知識も役立つ事はあるのだけれど、コントローラーを握つて操作するのとは違い、自分が動く事で操作となるので、指先だけの操作よりは反応が鈍くなるのもあるし、自分の行動がリアルタイムで反映されてしまうので、頭が考えるよりも早く体が反射的に動いてしまうのを止める事は出来ない。その例としては、レースゲームで曲がるときに体を傾けたりや、ホラーゲームで驚いた時に体が反応してしまったのがいい例だろう。

だから原始的な恐怖に本能的に体の動きが止められるのを防ぐ事も出来ない。ましてやそれが真に迫るものならば尚更だ。

だから突然動きを変えて襲つてきたりザードマンの剣に、一瞬だ

け体が固まり、相手が剣だと言つのに腕を盾代わりに交差させて防いでしまつ。

剣が深々と腕を裂く感覺だけを感じる。

それを振り払つように無造作に剣を振り、リザードマンを牽制する。後ろに飛びそれを避けたりザードマンが、余裕のある顔でさつきの借りを返したと言わんばかりの顔をするので、若干イラッとする。

切られたのは左手だつたようだが、まだ動く。痛みを感じないから体を盾に使うという手もあるが、今回はレベル上げが目的なので、出来る事ならば攻撃を食らう回数は減らしたい。

一旦距離を取り、相対するが、状況は劣勢だ。

ループ状態だと思つて考え込んだのが間違つた。この世界ではNPC達が意思を持ち、自分で考えて行動するのだから、それと同等とはいかなくても、魔物なりの思考回路があつてしかるべきだつた。従来のゲームと同じに考えていると、今の俺のようになんか怪我をする、か。

覚悟を決める。敵が高等な思考を持つのなら、小細工のよつな作戦じや駄目。かといつて作戦の幅は少なく、俺の力じやその数少ない選択肢すら実行出来ずに、リザードマンを敗れない。

ならば、俺が変わつてその作戦を成功させるしかない。

敵の剣を避けられる自信が無い、なんて言つて逃げてる場合じやない。もうそれしか勝つ見込みが無いのだから。

両方が動かない。俺は相手の攻撃を待ち、敵は俺の出方を探る。緊張感が走る。仮想の心臓が悲鳴を上げるが、それすら押さえ込んでリザードマンの動向に目を配る。無理だと諦めた、敵の攻撃を誘い、かわし、一撃をお見舞いする作戦。出来なきや多分、死ぬ。でもやるしかない。

そして、リザードマンが動いた。地面を蹴り、一息に放物線を描いて跳躍する。

油断はしない。思い切り振り絞られた、その腕の先の鉄の剣に意

識を集中する。

最低限の動作で避け、最大限の攻撃を叩き込む。攻撃ポイントは人型の魔物なので、人の急所と同じ首を狙う。

リザードマンが目の前まで迫り、腕を振り下ろす。俺はそのタイミングに合わせて、剣を振るために一度引く動作をして、紙一重のところでその剣をかわす。

リザードマンの剣は俺に当たらずに、勢いのまま地面に吸い込まれていく。だが地面に刺さる前に、俺の一閃が、地面に平行に振るわれた『スラッシュ』が青い軌跡を残して首を切った。

手じたえは確かに感じた。しかし血も出ないし、首が真つ二つに切れる事も無い。だがリザードマンの動きは不自然に固まっており、こちらが構えを解くと同時に糸が切れたように倒れこむ。もはやそれは『リザードマンの死体』と表記されるアイテム扱いになっていた。

それを四次元ポーチへ放り込む。そして何も無かつたような静寂に包まれて、よみやく実感できる。

「……勝つ……たー！」

今の戦闘で精神がかなり削られて、もう正直帰りたい気持ちだった。

リザードマンの一撃を食らった事を思い出し、HPの確認にメニュー開く。HPは半分程度になっていた。連戦するには心許なかつたので、アイテムの欄から薬草を取り出す。

「……これどうすんだ？ 塗るのか、食うのか……」

薬草は使えばHPが回復するのはもはやRPGに限らず、ゲームをよくプレイする人達にとって別に不思議な事ではない。ただ、問題はどうやって使うか、だ。

「マンドボならば薬草を選んで”使う”でも選べば済む事だが、このテコアルワードではそもそもいかない。とはいえて、壊したりする道具も無いし、はっぱをそのまま負傷したところに当ておくれ事も試したが、効果は無い。……やはり食べるしかなかつた。

唾を一回飲んで、意を決し口に入れ、噛む。

感想、凄まじく苦い。良薬は口に苦し、とは言つけれど、薬草如きで良薬と言つていいものなのかも定かじやなし、苦すぎて舌の感覚が無くなつてくる。これ実は舌にダメージも入つてゐる感じないのかと思うぐらうに、苦い。

でもメニュー画面を見るとちゃんとHPが回復されているので、効果はしつかりとあるようだ。……だがもう食べたくない。

レベルはまだ三のままだつたが、薬草を取り出した時に見たアイテム欄に、リザードマンの死体と共に、その装備品である鉄の剣が何故か入つていた。残念ながら皮の盾は無いようだつたが、これはリザードマンからのドロップして事でいいのだらう。早速装備品を入れ替える。

みすぼらしかつた剣がグレードアップして、なんだかよつやく様になつた気がする。

さつきまでは俄然弱気だつたが、ここに来てこのドロップで自然とやる気も出でくる。

その後も出てきたのはリザードマンばかりで、一対一で戦えるので俺には丁度良かつた。薬草の苦味を味わいながらも、限界まで戦い、レベルも六へと到達した。

APの振り分けは宿に帰つてからする事にしよう。振り分けてる途中で襲われたら確実に一撃は食らうだらうから。

レベルが上がつたおかげで、スキルも『ストライク』といつ突き技を新しく覚えた。あまり使う機会は無さそうだなあ、とか思ったが、ウルフリーダー戦で突きを使った事を思い出し、考えを改める。相変わらず盾はドロップしてくれはしなかつたが、鉄の剣を装備しているのを除いて二つ入手。

レベルアップの副産物にしては中々良い拾い物だろつ。売ればそれなりになりそうだ。ついでにリザードマンの死体も溜まつてしまつたので明日の朝一番で売り払つてしまおうか。……少し素材にして見るのもいいかもしない。

門の前で相変わらず警備を勤める門番の兵士に軽く挨拶をして中に入る。俺が出る時と同じ人だったので、どうやらこんな時間でも怪しまれずに通れたようだ。

そして、宿へ戻るために歩を進める。

現実時刻は夜九時。デュアルワールドの時間は、もう日が昇り始める頃だった。

現実時間で九時を過ぎた頃、デュアルワールドでは朝になっていた。

夜のレベル上げの後、宿にこいつそりと戻つてシアに気付かれないように再び眠る。どうやらプレイヤーである俺がこのデュアルワールドで睡眠を取ると、デュアルワールドの中の時間が急速に進むようだ。最初こそ時間は合つていたが、睡眠を取つたおかげでズレが生じたのがその証拠だった。

田を覚ますと田の前にシアが居た。なんだか奇妙な表情をしていた。

怒つてゐるようで、恥ずかしがつていて。悲しそうで、嬉しそうな、そんな複雑な表情。女心が手に取るよう分かるスキルもアビリティもないで、今の俺にシアの本心がどういったものなのか分からぬが、とりあえず謝つておく。多分俺が原因だと思うので。

「……なんかよく分からぬけど……」「めんな?」

シアは反応こそすれど、言葉で返す事はしてくれなくて、俺に取れる選択肢は限りなくゼロになり、俺も困る。

気まずい沈黙が空間に満ちるが、俺に何かしらの原因があるつぽいので、俺は動けない。ただただシアがこの沈黙を破つてくれるのを祈つて待つしかない。今の俺にはそれしか出来なかつた。やがて、シアもこのままだと何も進まない事に気が付いたのか、よつやく口を開いてくれた。

「……っ……んです、か?」

シアが俯きながらも搾り出した言葉は、良く聞き取れなかつた。

細く消え入りそうな声で呟くよつて言つたので、最初の方が聞き取れない。

「触つ、たん……ですか」

……これは、どうしたものか。触つたと言えば触つた事になるが、決してそんなやらしい事をした覚えも無い。とはいへシアは触つたかどうかしか聞いて無いので、変に自分から墓穴を掘るような事は避けたいところではあるのだが。

様子見でまずは真実を告げよつ。何か勘違いしている様ならその誤解を解けばいい話だ。変に考えると余計に面倒な事になる。

「……触りました……」

途端に、シアが俯いていても顔が真つ赤に染まつていいくのが分かる。

その様子を見て俺は慌てて理由を付け足す。

「ちょっと待つてくれ！ そんなやましい気持ちじゃなくて、起きたらシアが隣で寝てて、俺に気遣つてくれたんだと分かつたんだけど、やつぱりシアみたいな女の子がベッドで寝ないのも体に悪いからさ、ちょっと動かしただけなんだよ、本当に。本当に」

「え？ えつと……本当に、それだけ、ですか……？」

「もちろん」

「そう、ですか……」

なんとかシアも分かつてくれたみたいでほつとした。

そういえば朝食とかはどうなるんだろう。一応夜動いて寝た分は、腹も減つていて、余裕で食えるのだけど。あと今日の予定も立てないといけないなあ。俺一人じゃなくてシアもいるし、ちゃんと話し

合って決めないと。

あ、リザードマンの死体を忘れてた。朝にでも換金しようかと思つてたけど、シアを驚かすために、まだ秘密にしておく。

とりあえず、朝食でも取りながらシアと今日の予定を立てる所から始めよう。

「シア」

「はっ、はい！」

ただ呼んだだけなのにこの過剰反応のは、やっぱり弁解したけど納得できていらないんだろうか……。とはいえた俺にはもうこれ以上どうする事も出来ないので、そのまま提案をシアに示す。

「いや、そんな怯えなくとも……。今日の予定なんだけど朝食でも取りながらでどうだ？」

「はい……大丈夫です」

案外、素直に応じてくれて良かつた。もしかしたら断られるんじや無いかとか思つたりもしたが、元気が無さそうではあるが了承してくれたので、そのままシアと会話を続ける。

「それじゃあ行くか、つでここで出してくれるのかな」

「……こりへんの宿だと大体この飯は付きませんね。朝夜問わずに」

「そうなのか……」

これは予想外だつた。昨日の夜は『覚能乃湯』で風呂に入り、そのまま夜食を取つたので、宿での食事の事は何も考えていなかつた。思い返せば、宿を出る時に食事の事を何も聞かれなかつた。あれは元から食事の準備が宿には無く、普通の客と一緒に、他所で食べるのだと思つたのだろう。ましてや俺が聞いたのは近場にあるお湯

屋。その詳細もあの店主の青年は知っていたようだつたし、そこでもそのまま食事を取るものだと思つたはずだ。

そして俺自身も食事の事を忘れていたために、自然と普通の客と同じ利用方法を図らずも取つてしまつた、と言つ事だ。

しかし、そつなると再び覚能乃湯に向かひしか……他に俺が思いつく食事処は無い。

いや……街の探索している時に見たよつた仮もするが、生憎と場所も名前ももはや記憶から抜け落ちている。

「あの……」

これから予定を立てるための朝食の時間を取るために、食事処を考えていた俺の思考はシアの遠慮がちな声に遮られる。

「どうした？」

「その……食事を取れる所を考えているんですね？」

まだ一寸しか一緒にいないといつのに、思考を見透かすのはスキルかアビリティか。ともあれ間違つてはいないし、別に予定する事でも無いので素直に頷く。

「私がお勧めの場所があるのでそここしませんか？」

「よし、じゃあそこにしてよ。道案内よろしく

「はいー。」

シアは元氣をすつかり取り戻したようで、せつあまでの様子はどこへや。女心と秋の空、とは昔の人もよく言つたものだ。そんな事を思つがもむろと口には出さずに、部屋を出て宿の階段を下りる。

「一ヶねん……」

「ああ、なんか騒がしいな」

階段を下りる前からなにやら下が騒がしい。叫び声、……いや、怒鳴り声か。太い声は男のようだが、一体誰に？ それにあの店主の青年は仲裁に入つたりしないのだろうか。

色々と疑問が浮かぶものの、状況がはつきりしない上に、どのみち階段を下りなければ外に出られないでの少し気後れしながらも、階段を下りていく。

階段を丁度降りきつたところで、一層強い怒声が気圧されるほどに響く。

「だから… こんなものに金を払えるかつて言つてんだけよ！」

恐る恐る歩を進めると、一回のロビー部分で中年の男性が、小柄な人にこれでもかと言つぐらに怒鳴つてゐる。それが騒がしかつた原因なのは一目で分かつたが、店主の青年の姿が見えない。こういう時は真つ先に対処するはずの人物が居ない。だからこそこんな朝つぱらから騒々しい事になつてゐるのだろうけど。

店主が居ない事にはこの宿を出て行く事も叶わないでの、とりあえず怯えていいるシアをなだめつつ、中年の男と小柄な人の動向を観察する。

「やうは言つても、これを注文したのはアンタだし、事前に金額と出来上がる日にちは伝えてたはずだけど」

中年の男に相対していた人は、小柄な女性だつたようだ。その声を聞いてようやくはつきりとする。髪は方に届くかどうかの短さで茶色。服装は汚れてはいないものの、工事現場でよく見る感じの服装だつた。腰に手を当てて、怒鳴る中年に一歩も引かずに対応しているのを見ると、隣に怯えきつたシアが居るせいが、際立つて強い

女性に見えてしまつ。心なしか背中も大きく見える。

「出来が悪いって言つてんだよ！ こんなものに金を払うくらいなら、魔物にでもくれてやつた方がまだましだ」

「……アンタ、自分が言つてる事分かつてんの？」

あ、なんかやばそうな雰囲気が漂つてらりとしゃる。無関係と言わればそのうで無視する事も出来るが……。一二で無視できるようならばシアにも会つてない訳だ。

「ストップストップ。一人共落ち着いてください」

「何だお前」

「おおい……。まさか一人が綺麗に同じ言葉を返すとは思わなかつた。

だがとりあえず俺の話は聞いてくれるようなので、説得のしようもあるとこ'うもの。

「いえ、少々騒ぎすぎなのでは、と思いまして。他に寝泊りしている人も居るでしょ？ こんな朝からそんなに騒ぐ事も無いでしょ？」

俺がそう言つと、意外にも反発してくるのは、女性、シアと同じくらいの女の子だった。

「アンタには関係ないでしょ？ 私はこの人と仕事の話をしているの」

「その仕事の話のせいで周りが迷惑してると言つてるんだけど」

「それはこの人が全面的に悪いわ。怒鳴つてるのもこの人だけだし」

そう言つて指差す少女の態度に俺は呆れ、中年の男は頭の血管が浮き出るほどに怒りを溜め込んでいて、今にも爆発しそうだ。

自然と小さなため息が一つ出でしまつ。またこれか、とは思わないでもないが、首を突っ込んでしまつた以上仕方ない。やるしかない。

「……分かりました。私は無関係な人間なので本当はとやかく言う権利はありませんが、円滑に事態を解決するために、私がお一人の間に立つのは如何でしょうか」

「余計なお世話だ！」

中年の男が怒りを俺に向けて放出したのか、再び怒鳴り声で俺の提案を跳ね除ける。

そのせいで俺もどう会話を続ければいいものか迷つていたが、もう一人の当事者である女の子が、それよりも早くその口を開く。

「いや頼めるならぜひ頼みたいね。この人は話を聞く気も無いし」

女の子の言葉に反論出来ないのか、男は黙る。

話の流れはなんとなく掴んではいるものの、具体的に何が問題になつてているのかがわからないので、そこから話を聞く事にする。

「それで、何が原因でこんな騒ぎに？」
「これさ」

女の子は腰の所から何かを取り出す。
取り出されたのは赤色の皮に収まつた、シアが持つてゐるような短刀だった。

「……これは？」

「魔紋付きの短刀。私の自信作さ。これをこの人が頼んで、それを

届けに来たんだけど、そんなものに払う金は無いとか言い出すもんで、揉めていたんだ」

魔紋という言葉に聞き覚えが無かつたが、とりあえず付加価値的なものだと理解して飲み込んでおく。

どうやら話を聞くに女の子に武器を依頼した男が、出来上がるといらないと黙々をこねてる訳か。いい年して何をやつてるのや…。その手首にある青い冒険証がこの街の冒険者であることを示している。

女の子の話を聞く分には明らかに男の一方的な我慢だ。要らないから料金を払わない、なんて子供みたいな言い訳が通じるはずも無い。しかしそれだけで結果を決めるのはあまりにも不平等なので、一応男の方にも話を聞いておきたい。

「それじゃああなたの方は何かありますか？」

男に問うが、さっきまでの威勢と罵声はどこへ言ったのか、静かに黙り込んでいる。

待つても、もう一回聞いても、反応が無い。

痺れを切らしたのか、女の子が男に向かって冷静に、静かに問う。

「もういいわ。唯一つ聞かせて。これを買うのかどうか」

「……わざわざから払う金は無いって言つてるだらつ」

「あつそ」

女の子はそれだけ言つと短刀を仕舞い、身を翻して宿から出て行く。一度入れ替わりで店主の青年がやつてくるが、もう事態は収束してしまった後なので、一歩遅かつた。

男も何も言わず、ただ俺をその目で一瞥し、同じ様に去つていく。

「なんだつたんだ……」

「さあ……？」

呆気に取られている俺とシアはただ呆然とその場に立ち尽くし、二人が出て行つた宿の入り口を見つめていた。店主の青年がなんだろうと見ているのが分かつたが、少しの間動げずに居た。

その謎の拘束を腹の虫が破り、ようやく動けるようになつた俺達は、奇異の目を向けていた店主の青年に宿の代金を払い、外へ出る。四千と少しばかりの所持金が今は、昨日のお湯屋で使つた分も含めて半分ほどになつっていた。だがまだ昨日の夜中に一人で稼いだ分を換金していないので、それを所持金に含むのならまだ金欠とも言えない位には持つてゐる事になるはずだ。

「「」」

シアのお勧めの食事処を楽しみにしながら、先を歩くシアについていく。

シアは髪型を再びツインテールにしていた。黒いリボンで結ばれたその綺麗で艶やかな髪をつい触りそうになるが、何とか堪える。

シアは通りを何分か歩き、そこからいかにもな路地裏へと足を踏み入れる。

多分、地元の人でも限りある人しか知らないような、秘境の店なのだろうか、とか思いつつ、置いてかれないように付いていく。

やがて目前に現れたのは定食屋だった。通りには目が届くものの、少し離れているせいか通りからは注目もされないような寂れた所に建つていた。

店の名前は『「」』暖簾にそう書いてあつた。

昔ながらの定食屋をそのまま持つてきただよつた、どこか浮いたその存在にシアは何のためらいも無く暖簾をくぐり、引き戸を音を立てて開き、入つていく。

確かに、いかにも高級そうなレストランとか、そんな上流階級のお店よりは心が落ち着くが、それにしたつて少しひまほらじい氣もする。

シアの後について暖簾をくぐると、その内装もいかにもな感じだつた。

お店の半分ほどを占領するカウンター席。そして人がやつとひとり通れるほどの通路があつて、テーブル席が三つほど並んでいた。カウンターの中には歳を取つたおじいさんが居て、いらっしゃい、とゆつくりと言つてくれる。

どうやらシアがお勧めと言うだけあって、シアはこのおじいさんとも顔馴染みらしく、シアの姿を見るとその顔を綻ばせて、ひさしぶりだね、と言つのだった。シアは同じくらいに笑つて言葉を返す。そのついでに注文を頼んでいたが、いつもの、で通じる辺り相当な常連客なのだとと思わされる。俺は何にすると言わたが、シアと同じでいいと答えておく。シアがいつも、で通るほどに食べている物ならば、ハズレは無いだらうと思えるし、どうせならこの店を勧めてくれたのだから、料理もシアのお勧めに従つて見るのもいいんじゃないかと思つたからだ。

注文した後、三つあるひつけの一一番奥のテーブル席に俺とシアは腰を下ろした。

注文が来るまでの間に、わざと聞きたかった事でもシアに聞いてみる事にじよつ。

「シア、さつきの人人が言つてた『魔紋』って何なんだ？」

「えっと、魔紋っていうのは魔法が使えるようになる特殊な文様の事です。武器や防具、アクセサリーに刻んで持ち歩くのが普通ですね」

シアはそう言つと首の後ろに手を回して、何かを取り外し、手に乗せた後、俺に差し出してくれる。

シアの手に平に収まっていたのはペンダント。赤く細長い宝石に鎖が繋がっていた。

「これは？」

「私の魔紋付きのアクセサリーです。この宝石の表面を良く見てください。……紋様が見えると思つんですけど……」

シアにそう言われて改めて宝石の表面を見る。確かにそこには、宝石の赤よりも深く濃い紅色で複雑な紋様が描かれていた。

「これは何度か使つた見せた火炎装填ファイアチャージを使えるようになる魔紋です。これが壊れたりすると、もうその魔法は使えなくなるんです。もちろん同じ紋様を用意すればまた使えるようになるんですけど……」

シアにそこまで言われて、俺はふと疑問に思う事があった。シアが使つた魔法は一つ。昨日確認した事なので今も変わつてないはずだが、その一つが魔紋によるものだとして、もう一つは同じ様に魔紋なのか。そうだとすれば、魔法を魔紋無しで使う事は出来ないという可能性も出てくるのだが、答えを知るにはさらにシアに話を聞かなければならぬのに、丁度そこへ、店主の奥さんだらうと思われるおばあちゃんが、器用に一つの盆を片手でそれぞれ持つて現れた。

料理を運んできてくれたおばあちゃんも笑顔がとても穏やかで綺麗だった。『じゅっくりどうぞ、と言つ声も優しさが感じられて、こ

の店がシアのお勧めになるのも分かる気がする。

恭しくお辞儀をして去つていいく。

運ばれてきた料理は、和の定番ともいえる内容の定食だった。

鮭の塩焼きに大根の千切りの味噌汁。おひたしと一切れの漬物に、輝くような白米。どれも出来たてで、暖かそうな蒸氣が空中に舞っている。こんな和を体现したような定食なんていつぐらいに食つたものか……。日本に居ながらも、食べるものは和食からはかなり離れた生活をしているので、なんだか凄く新鮮に感じる。

意外とシアは日本食が好きなんだなあ、とか思つてしまつ。外見はファンタジー世界の住人そのもので、一切、日本らしいポイントは無いのにも関わらず、好むのが日本食というのは何が基準で決められているかは俺には分からぬ。

一口ずつ全てに口を付けて見たが、やはり味の方も見た目通り、いや見た目以上に美味しい。

空腹も手伝つて箸が進む中、先程の話の続きを戻る。

「魔紋で魔法が使えるようになるのは分かつたけど、シアは確かもう一つ魔法使えたような気がするんだけど、それも魔紋の魔法なの？」

「いえ、ヒールドロップ癒水は魔紋魔法ではなくて、私自身の魔法です。魔紋はあくまで補助的な物なので、習得して使うよりも消費は激しくなりますし、効果も少し落ちます。」

あの威力で落ちた状態つて事は、実際は相当威力があるんじゃないだろうか、とか思つたりもするが、確かに威力はそれなりにあつたが効果時間については結構短い方だと思う。シアが四回ほどしか使えなかつた事を考えれば、それが劣化した結果として妥当なのかも知れない。

説明を受けながらも、定食は渋る事も無くほとんど平らげつづつあつた。

魔紋という物は、言つてしまえばお手軽な魔法だと思えばいいのだろうというのはわかつたが、問題はその魔紋入りの道具等をどうやって手に入れるのか。

現段階で俺はレベルが五にもなつて、魔法の一つも覚えていない。魔法のアビリティは習得しているので覚えれば使えるし、習得して無いから覚えれないと言つことも無いだろう。アビリティを取つてから一レベルは上げているのだから。

なのでいつ覚える事が出来るのかわからぬ習得を待つよりは、魔法が使えるようになるという道具があるのならば、それに一度飛びついてみてもいいんじゃないかと思える。

「その魔紋入りの道具とかはどこで手に入れるんだ？」

「えーっと、そうですね。基本的には魔紋師と呼ばれる人達に頼むのが普通らしいです。それがあらかじめ魔紋が刻まれた道具類を購入するとかも基本的な入手手段ですね。値段は結構なものらしいですけど……。後は稀に魔物が落としたりもするそうです」

「なるほど……」

現実的に考えて俺が魔紋入りの道具を手に入れるためには、魔紋師に依頼するか、金を貯めて既存の魔紋入りの道具を買うか、その二つになるだろう。魔物のレアドロップに賭けるというのは正直、まだ早い気がする。

値段が相当なものだという魔紋入りを、魔物が低確率で落とすと言つことは、おそらく性能も普通に手に入るものよりも強力な物である可能性が高いし、それと比例してそのドロップする魔物自身も強力な可能性もある。今の強さでドロップするまでひたすらに戦うのは厳しいだろうし、どの魔物が落とすのかも分からぬ。むしろその過程で溜まつたお金で既存の物を買った方が手つ取り早い可能性もある。

とはいって、全体的な魔紋関係の相場が分からぬので、あまりに

も手が届かぬことになり、今回は諦めて地道に頑張るしか無いの
だか。

「魔紋を刻むのに何よりも何よりも掛かるかわかる?」

「それは……私の持つこれは貴い物で、私自身が刻んだわけでは無いので値段までは……。あとその刻む魔紋の質よりも結構な差があるみたいで、一概には言えないと想います……」

「そつか」

もう定食は完全に食べ終わっていた。米粒一つ残すのがもつたいなくらいにうまかったので、帰りにでもおじいちゃんとおばあちゃんにおいしかったと言いたいぐらい、気分が浮いていたが、肝心な事を忘れている事に気付く。

そもそも朝食を取りながら今日の予定を話すはずだったのに、俺の好奇心から魔紋の説明だけでもう食べ終わってしまった。我ながら計画を立てて、それを無計画に潰すことの性格は何とかしないといけないとか思いつつも、今更どうにもならないので、少しここに居座らせてもらつて今日の計画を立てることにじよつ。とはいえ俺の興味は魔紋にしか向いてなかつたのだけ。

「すっかり忘れてたんだけど、今日これからどうしようか」

「えつ、魔紋の事を聞かれたかのと、てっきり魔紋師のところに赴くものだと思つてたんですが……」

「やっぱりそう思つてたのか……。とか思つてしまつが、どうせ他にどうしてもやりたい、なんて事も浮かばないので、そのまま魔紋師のところを直指する事にするか。

「じゃあそうしようか。魔紋師つてどこに居るんだろう」

「街から少し離れた所に小さな町があるんです。そこに魔紋師達は

住んでるやつですよ」

「良し、じゃあ今日はせこに来てみよう」

今日の行動方針も決まつたので、席を立つ。二人してお盆を持ちカウンターへと差し出す。最初は普通にそのまま置いておこうとしたのだが、シアが立つた後に盆を持つたので、に俺も持つ事にした。帰りにちゃんとカウンターの中に立つおじいちゃんと会計をするおばあちゃんに、美味しかつたですと告げて、外へ出る。その足で外へ出る門へと足を向けた。

門は前に見た時よりも開いており、多くの人々が行き交っていた。その中に紛れて外に出る。今思えば昼間に外出るのは初めてだつたが、夜の時とはまた違つた、開放感のある空間に妙に気分が高揚する。

門から少し歩き、行き交う人々の邪魔にならない辺りまで移動してから、隣を歩くシアに目的地を聞く。

「あの森の辺りに見える建物がそうです

シアが指差す先には広大な森があり、その木々よりも少し高いせいか、人工物らしきものが頭だけを出している。何である所にあるんだろうとは思わないでもないが、今そんな事を考えていてもしようがないので考えない事にしよう。

行き先が分かれば後はただ歩くだけだが、夜の草原とは違い、目に見えてあちこちに魔物が徘徊していた。距離がありすぎて注視しても識別は出来なかつたが、見た感じリザードマンほど強そうには思えない。

ゴブリンっぽいのが集団でいたり、スライムらしき半透明のぶよぶよした奴が跳ねながら草原を闊歩していたり、まさに最初の草原と言える魔物達ばかりだった。

最初は避けて通ろうかとも考えたのだが、目指すべき魔紋師達の住む場所までは結構な距離があり、敵を避けて迂回しながら進んでいたら日が暮れるんじやないか、と言つ結論に至つたので、真っ直ぐに敵をなぎ払つていく事にした。……こつそりとあの強烈に苦い薬草でも何個か買っておけばよかつたとも思つたが、今更引き返すのも億劫なので、本当にやばくなつたら引き返す事にして、今は猪の如く突き進むだけだった。

道中に戦つた魔物を識別アビリティで見た限り、俺が思っていた通りスライムであつたり、ゴブリンだった。

戦いになつた時に俺は鉄の剣を抜いた。シアの記憶にあるのは赤錆びたような銅の剣だったので、すぐに疑問に思われた。昨日一人で夜この草原を歩いた事はあまり知られくなかったので、レオンを使つて誤魔化した。……後にばれそつだがその時はその時だ。

俺やシアのレベルではこの辺りの魔物は相手にもならず、火炎装填^{ファイアチャージ}を掛けていなくとも、一刀の元に切り伏せる事ができた。もちろん楽に倒せるので、経験値は無いも等しい値しかもらえなかつたが。數十分も草原を駆けると、ようやく建物を囲む森の入り口まで辿り着いた。

体力はそこそこに消費しているものの、傷や武器、防具の消耗もほとんど無かつた。

うつそうと茂る森の中を注視するが、外から見えた建物の姿は木々に遮られて見る事が出来ない。しかし、この中にある事は確かなので、そのまま真つ直ぐ進めば着くだろうと考へて、そのままシアと共に森に足を踏み入れた。

真つ直ぐに、ただ真つ直ぐに歩けば着く、はずだった。

十分ほども歩いただろうか。そこまで経つて違和感に気付く。

「なあ、シア……」

「……はい」

「なんか変じやないか？ こんなに歩いて辿り着かないほど、外から見た時は離れて無かつたぞ」

「そうですね……でもそんな、何かあるような話は聞いたこと無いですけど……」

シアがそう言つた話を聞いた事が無いのならば、ここは本当に普通の森なのだろう。普段は、だが。

明らかに今は異常だ。方向感覚が狂つてゐるとかそういうのではなく、延々と同じ所を歩かされてゐるような、そんな感じがする。分かりやすく言つならば、この森が”迷いの森”になつてゐる事になる。

原因が定かではないが、何かしらの原因があるのは確かだ。そしてこのまま歩き��けてもおそらくは同じ事だろう。今まで取つてきた行動とは別の行動をすれば何か突破口が見えるかも知れない。とはいへ、シアと別々に行動する訳にもいかないので、考えられるのは一つ。

木々に目印を付けていくか、焼き払つか。

後者は最終手段として取つておくとして、とりあえずは順当に、目印になる傷を木の幹に付けていき、ゆっくりと辺りを警戒しながら歩く。

再び同じくらいの時間を歩いた。メニュー画面の現実時間はこの世界の時間軸とはずれてゐるが、何分経つたかの確認には使える。計りたい時の現実時間を見て記憶しておけば、その後見た時間から逆算して導き出せる。

おそらく合計で三十分も歩き通したが建物は見つからないし、辿り着きもしない。

そろそろ体の方も厳しくなってきた。肩で息するぐらいに疲れ、まるで体力がこの森に吸われてゐるような錯覚すら覚えるほどだ。そして肝心な木に付けた傷。それをシアと一緒に探す。

「……ありました！」

シアがそういうのでシアの木の前、調べていた木を見ると、確かに俺達が付けた矢印が刻まれていた。

矢印は進行方向に向けて刻んだので、今この木に刻まれてゐる逆

向きの矢印は、俺達が逆に歩いている事を示している。

森が延々と続いていた訳でなく、俺達がどこかの地点で、気付かぬうちに反対を向かされて居たと言う事だ。

原因が分かれば、対処するのは実に簡単。

俺とシアは再び矢印の方向へ歩き出す。今度は木に刻んだ目印とは別の、地面に剣でを軽く刺してそのまま引きずるように歩いていく。その結果、地面には歩いてきた方向、つまり俺達の後方に線が出来る。もし俺達が知らぬ間に反転しても、線ですぐに気付く事ができる。

多少は剣の耐久度も心配だつたが、鉄の剣は後一本新品があるので、仮に壊れたりしても取り出すだけで万事解決だ。

そして少し歩くと、地面に描かれた線が気付くと田の前に、彼方まで延びている。

「ここだ」

さつきまでなら何も気付かずに、馬鹿みたいに来た道を戻る所だが、今回は反転する所をしつかりと見極める事が出来ている。そして正しい道へと歩を進めるために振り向く。

すると、突如空中が何も無いのに燃え上がり、やがて敵が現れる。即座に目線を合わせ、注視して識別する。

迷わせのレイス。

その魔物の名前が即座に浮かび上がる。俺の識別アビリティはまだランク一なので、敵の名前、装備品しか見えない。名前しか浮かび上がらなかつたと言う事は、装備品は何も無い状態という事になる。それは、敵の姿を見ただけでもすぐに分かる事なのだけれど。

突如現れたのは人を丸呑み出来そうなサイズの口を持つ、幽靈。

そうとしか表現できない。透けてはいながら、空中に風船のように浮かび、おぞましいほど大きな口を咀嚼でもするように動かし、口に比例した巨大な舌で、ご馳走を目の前にした動物のよう

に舌なめずりをしている。

ただのレイスではなく、一つ呑的な物がついてる事から、普通の敵とは一線を越す存在だと言つのは分かる。その巨大さも相まってか、威圧感と背筋が寒くなるような嫌悪感が凄まじい。

しかし、こいつがボスクラスなのは間違いなかつた。

引きずつていた剣を軽く振つて先端についてた土を払い、構える。

……そういえば道中に敵が出なかつたのは、こいつが居たからなのがもな。

そんな今更な思考も遮断し、田の前の敵の一拳一動に田を張る。空気が鋭く刺すような緊張感に包まれる。下手をすると話の進行上まだ倒せない奴かもしけないが、とりあえずはやってみるしかない。

シアとの連携を取るために、田線を送ると、そこでシアの異変に気付いた。

剣すら構えず、怯えたように自分の体を抱いて後ずせる。視線はもちろんレイスへとしつかり固定されてるのだが、倒すべき敵に向けるような目では無く、恐怖の大王でも見るかの如き恐れの目をしていた。まさか……。

俺の予感は、その数秒後に発したシアの言葉で、当たつていた事を証明される。

「ひつ…… む、 おばけ……」

じつやう少ししまずい事になつてこるようだつた。

怯えているからといって、敵が情けを掛けてくれるはずも無く、レイスは真っ先にシアへと突進する。それを確認し、俺もまたシアの元へと駆ける。

距離と速さを考えるならば、俺の方が少し早かった。しかし、シアの元へと向かう途中で、はつきりと見えた。

あいつの舌が誰よりも先にシアを絡めとろうと伸びているのを。右手の剣を握る。もし先に相手の舌がシアに触れようとも、そこから一瞬の間も無く切りかかれば大丈夫なはず。駆ける足に込めた力は緩む事は無い。

シアは突進するレイスに気がついているが、恐怖からか少しづつ後ずさるばかりで、ウルフリーダーと戦った時の纖細かつ大胆な、舞うような回避行動はその一片だつて伺えない。

レイスの舌が一瞬はやくシアを絡め取る。短いシアの悲鳴が聞こえたが、俺は構わず、目標をその伸び切った舌に定め、剣を構える。斬つても良かつたのだが、少しでも早く剣を届かせようと、選択したのは突き技『ストライク』覚えたばかりの技だが、頭でイメージして動作を取ればそれがスキル発動の鍵になる。

そのままレイスの舌へと鉄の剣の鋭い切つ先が吸い込まれるように軌道を描き、突き刺さる。しつかりと手ごたえがあつた。血はもちろん出ないが、レイスは拘束していたシアを離し、痛がるようにな中で舌が暴れ回る。

俺はそのまま歩みを止めずにシアの元へ駆け寄る。

「大丈夫か！」

「あ……は、はい……すいません、ありがとうございます……」「戦えるか？」

俺の言葉にシアは力なく頷くが、その様子を見る限り戦えるような状態ではなく、俺が何とかしなければならない状況だつた。

右手の剣を改めて握りなおし、レイスへと視線を向ける。俺が傷を受けた舌を完全に口に仕舞い込んで、空中に浮かぶ白い物体と化しているレイスに、俺は攻撃を仕掛ける。

五歩も歩けば届く距離にいる無防備なレイスに、今度は『スラッシュ』を叩き込む。

その攻撃は確実にレイスの体を捉える軌跡を描く。だが、レイスは避けるような素振りすら見せずに、ただ浮いたまま。何かあるのか、と思う間も無く、レイスがその大きな口を歪んだ笑みに変えた。

確信する。だが今更攻撃を止められるほどに余裕は無く、逆にこの勢いのまま斬る事で、強制的に相手の行動を阻害するしか俺の取れる道はなかつた。

そして俺のスラッシュがレイスの体を、……通り抜けた。手応えも無く、ただ空を切つただけ。

剣を振るつて気付かされたその違和感に、振るつた直後の硬直の中、首だけを回しレイスを目で見て確認する。

傷は無い。本当に剣がすり抜けたのだとそれで確信できる。

幽霊っぽいからなのか、物理系は無効なのかも知れない。もちろんそれは外側に限つて、だが。

さつきシアを捕らえた舌には確かに剣が通つた。そしてそれを体内に仕舞い込んだ。そして外側は攻撃が通らない。弱点はすぐに導き出せた。

性質こそ違えど、基本的な攻略方法はウルフリーダーと何も変わらない。

レイスが、横目に捉えていた俺の硬直の隙を突いて、その舌を伸ばす。

俺はなす術も無く捕らえられ、締め付けられる。唾液と下の表面のざらざらした感覚が、体に寒気を走らせる。力を込めてもその拘

束を解く事は出来なくて、俺一人ではもうどうにもならず、ただ死を待つのみになる。

しかし。今この場に居るのはボスクラスの魔物である迷いのレイスと、駆け出し冒険者の二ヶだけじゃない。そしてその残る一人は俺の仲間だ。

幽霊型の魔物、レイスは甲高い悲鳴を上げる。俺を締め付けていた舌の力が無くなり、自力でもその舌の拘束から逃れる事が出来た。するりと抜け、右手の剣でさらに追撃をかけ、身を引く。隣に立つシアの持つ短刀には炎が宿っていた。

「大丈夫ですか！　すいません……私のせいです……」

どうやらシアはしつかりとお化けではなく、魔物だと認識すれば大丈夫なようだ。最初はインパクトが強すぎて、本物の幽霊だと思いつ込んで恐怖したのだろう。

「いや……」ヒーヒは大丈夫。それより……」

鳴き叫びながらも、その弱点である舌を振り回し暴れているレイス。無差別に暴れるせいで無闇に近付こうものならば、たちまちその舌に弾き飛ばされるだろう。かなりの距離を取り、万が一に備えていつでも咄嗟の行動できるように構えておく。

すると突然あれだけ暴れ狂っていたレイスが、急に顔を下へ向けてその動きを止めた。

なんだ？　と思う間も無く、レイスがその顔を上げる。

おぞましいほど醜悪な顔で、その舌をまるで蛇のようすばやく出し入れする。そしてその舌先がむきとは違う事に気が付く。

「なんだあれ……」

その舌先は一股に分かれていた。本当に蛇のように。

舌全体がピンク色だったのに、一股に分かれたと同時にその舌先の色が無くなっていた。

色彩の無い灰色。だが木々の隙間から入り込む日の光を反射して、その色は輝く。

レイスの行動パターンと形態が変化したのは、すぐに分かった。おそらく何度かヒットさせた攻撃でHPが規定値を下回り、その結果、レイスは第二形態へと変化した。

確かに形態変化はボスの専売特許だが……初期のボスとしては少し早すぎないか、とか悪態をつぐが、レイスはそんなこっちの様子も気にも留めず、さつきよりも凶暴性が増した状態で、その舌先の鈍い輝きを俺達にぶつけるために振り回す。

レイスを中心に扇状に降られた舌をギリギリの所で、地面に伏せて避ける。シアは俺とは逆に、ウルフリーダー戦で見せた軽やかな跳躍で避けている。高速で自分の顔をレイスへと向け固定させる。

……見えてしまったのは不可抗力だと自分に言い聞かせる。

シアがそのままレイスに突っ込む。短刀を包む炎もそう長くは持たないために、今の内に出来る限り敵のHPを削つておきたいのだろう。炎を纏つたシアの短刀は、おそらく俺のただの鉄の剣よりも威力が稼げる。威力的には同等近いかもしれないが、そうなるとやはり攻撃スピードで勝る短刀の方がダメージを稼げるのは明白で、短刀が炎を纏つてゐるうちは、出来る限りシアの攻撃チャンスを作るために、俺が援護に回る。

「シア！ 任せた！！」

俺がそう言つて地面から起き上がりながら、不安定な姿勢を無理矢理起こす為に地面を強く蹴り、振り子のように帰つてくるレイスの舌先に目掛けて、剣を振る。渾身の力を込めたスラッシュだ。ここまで三回のスキルを使って、後どれくらい使えるかは分からぬ

が、感覚的に後一回は確実に使える。

遠心力によつて威力が増大したレイスの硬質の舌先と、重心を前に倒して勢いを付加し、さらにスキルを使って力の底上げをした俺の剣とが、互いが吸い込まれるように引き合い、金属質の音を高らかに奏で接触する。

ぶつかり合つただけで、互いの力比べとはいかず、無様に剣を弾かれて吹き飛ばされる。体全体に響く衝撃とそれに伴う浮遊感。そして数秒後に訪れた接地の瞬間、視界が回る。

揺れる意識を引き戻し、すぐに状況の把握に努める。

俺がレイスの舌を止められなかつた事で、シアがやられると言う事は無く、レイスの悲鳴が響く。シアがしつかりとその炎の短刀で何度も攻撃を与えたようだ。再び暴れまわるレイスからシアはすぐに離れる。俺の方へと視線を向けて心配そうな顔をするが、俺も黙つて地面に転がつてる訳にはいかないので、大丈夫だ、と手振りで示し立ち上がる。

俺の手に剣は無い。さつきの激突でどこかに飛ばされたようだ。今はそれを探す暇は無い。

すばやくメニューを開き、アイテム欄から鉄の剣を選択して装備する。

その瞬間腰には新たな重みが現れ、それとほぼ同時に剣を抜き、走り出す。

暴れ終わりに合わせて突っ込んだ俺に、レイスが気が付いた時は、もうその長い舌を振り回す余裕すら無いほどに接近している。そのまま舌の根元に斬りかかろうとしたが、剣は勢いのまま地面へと刺さる。

簡単な話だつた。ただレイスが後方へとその体を動かしただけ。

RPGでだつて敵は攻撃を避ける。そんな事すら頭から抜け落ちていた俺に、レイスは大きな口を開き、そのまま飲み込もうとする。

俺は未だに攻撃の硬直で動けない。このまま行けば間違いなく食われる。

口の中は何も無い真っ黒な空間になつていて、その闇の中から舌が現れている。ここに飲み込まれたらどうなるかはわからないが、正直嫌な感じがする。こんな序盤からまさか、とは思うが、ある一つの特性を持つ攻撃をその空間は予感させる。

即死攻撃。

食らつたら最後。ただ死ぬしかない絶対の攻撃。

普通は滅多に見ないような攻撃だが、たまにその即死攻撃を持つ敵がいるのは特別珍しい事じゃない。ましてやボスクラスになれば、これだけは気をつけないと全滅の可能性がある、なんて攻撃を持つていたつておかしくは無い。さらにHPも相当削れている状態の事なら尚更だ。

その時、目の前に影が通る。シアじゃない。それよりももっと小さく細長い……。

レイスの大口に、そのまま俺の代わりに吸い込まれたそれは、一瞬の事だつたが確かにその存在の正体が分かつた。俺の手元にあるものと同じ、……鉄の剣。

それがさつき弾き飛ばされたものだというのは分かつた。

視線を一瞬だけレイスから外すと、シアが投擲した直後の動作をしていた。その顔にはほつとした様な表情が浮かび、笑顔だつた。まるで当たつて良かつたとでも言つよう。……あれ、俺に当たつていたらどうなつてたんだろう。

剣を飲み込み、苦しむレイスが暴れようとその舌を振り回す直前、かなりの距離まで接近済みの俺は改めて剣を構えて、上から下へ、舌の根元に向け剣を振り下ろした。もちろんスキルのスラッシュで威力の増幅は忘れない。

「……じゃあな」

ぱつさりと根元から切れた舌が地面に落ち、レイスは悲痛な叫びを一際強く短く鳴いた後、力なく地面に落下する。

それは迷いのレイスのＨＰがなくなつた事。そして、俺達が勝利した事を示した。

人一人分の高さがある白い球体、もといレイスの死体をポーチへと仕舞い込む。最初はこんなに入るのか、と思つたが、そこはゲームらしく何の不都合も無くすんなりと収まる。

アイテム欄で見てもしつかりとその名前が表示されている。

ついでにレベルも一つ上がり、六になつた。スキルは何も覚えなかつたが、そういう時もあるだろうと少し残念だが納得しておく。そして、ある事に気が付く。

レイスが居た所、つまりレイスの死体が落ちた所に、光を反射し輝く物が落ちていた。

手の平からすこしはみ出す位の大きさの紫色をしていて、向こうが若干透けて見える程度の透明度と、どこか見え覚えのあるその形。

「これって……」

その欠片を試しにポーチへ放り込んで、すぐにメニューを開いてある一点に目をやる。メニューの端にある、意味ありげなアイコンの表記がある所へと。

そこには今までゼロだったのが、一という表記になつていた。これが示すのは一つ事実しかない。

王様が言った星の命の欠片。俺がこの世界で探し、集めるべき唯一つの目標。いくつあるかはまだ定かではないが、そのうちの一枚が、いま手に入った。

これが迷いノレイスのドロップである事は間違いない。

その変動した数字眺めながら、まだ続く道程と確かに一步進んだ事実を噛み締める。

「どうかしたんですか？」

シアが俺の行動に疑問を抱く。それもそうだ。他人から見れば何も無い空中を眺めて、うすら笑う変人にしか見えない。だがシアはすくなくとも俺にそういう感情は幸いにも抱いていないようで、ただ純粋に疑問に思つただけだろう。

「いや、なんでもないよ。ただ、なんでこんな所にあんなのがいたのか考えていたんだ」

口から出任せだが、実際気になる事の一つではある。

迷いのレイスは二つ名が付いていた。それがただ強いボスクラスを表すのか、欠片持ちの魔物を指すのかはつきりとはしないが、その名の通りに俺達をこの森に仕掛けたトラップで迷わせた。

魔物達が独自の思考を持つてるのは、リザードマン戦などで痛感しているので、レイスにも独自の思考があり、その結果ここを通り人間を迷わせていた、というのは納得出来る。それが何故なのかは、今の俺には知る術が無いが、その事から浮かぶ疑問が一つある。俺達が目指していた魔紋師達の住む所は、レイスに惑わされなければものの数分で辿り着くぐらいの距離のはずだ。もちろんそこに住む人達はこの道を行き来するはずなのに、街でそんな噂は聞かなかつたし、今朝宿で会つた女の子は届けに来た、と言つていたから、状況から考えてこの先の街から、今日、品物を届けるためにこの道を使つたはずだ。様子がおかしい事もなかつたし、俺が見抜けなかつただけだとしても、先にここへ戻るはずの女の子とは森の入り口でも道中でも会わなかつた。

もしかしたらまだ戻つていないという可能性もあるだろう。その場合は、行きはよいよ、帰りはこわい、みたいな事になつていたのかも知れない。

「本当、なんだつたんでしょうな……。最近魔物の活性化が進んで

るって聞きましたし、そのせいかも知れませんね。これからはもつと用心しないと……」

「そういうえばそんな事も聞いたな。まあ、どちらにしろ俺達に出来る一番いい方法は強くなる事だ。状況次第だが、もし魔紋が刻めれば俺も少しは強くなれると思つし、先を急いで。迷ったおかげで時間も食つたし……」

「そうですね、行きましょう。あ、二ケさん怪我とかは大丈夫ですか？　回復していかないと何があるか……」

「俺は大丈夫だ。そんなに気にするほどじゃないさ」

「そうですか……ならいいんですけど……」

シアの心配を他所に俺は歩き出す。実際の所、HPは半分以上を保っている。

それに、迷わされていたとはいえ、街まで実際に必要な距離の半分以上を使つていた迷いのトラップが、もう今は存在しないというのならば、少し歩けば敵に出会つ前に街に辿り着いたつてなんら不思議じやない。

だけど、目の前に現れた光景には少し拍子抜けさせられる。

魔紋という少し禍々しい響きを持つ、そんな不可思議なものを刻む事が出来る人達が住む街。そのせいでの少しはダークな雰囲気を想像していた。森に囲まれ、まるで外の人を拒絶している、なんて状態も少しは手伝つていただろう。

だが目の前に現れたのは最初の街、フィルストと同じぐらい、いやそれ以上に活気のあるまさに職人の街だった。

あちこちで職人気質な方々の怒号が飛び、その度に、その声に弾かれるように声が返る。師匠と弟子。その関係がありありと見て取れた。

あちらこちらで金属を叩く音が響き、やかましいぐらいだった。

その立地条件や話に聞く分で半ば分かつていた事だったが、どうやらこの街には受け入れるといった意思は無いようで、大きな門も

無ければ、街の入り口を示す装飾すら一切無い。

ただそこにたまたま人が集まっている、とでも言いたげな整合性の無い雑多な街。

「あれ？ アンタは朝の……」

その声に振り返ると、後ろには今朝、宿で一騒動起していた女の子が、こっちを不思議そうに見ていた。

「君は……」

「私はトツネ。ここにいるつて事は魔紋関係でなんか訳あり？」

「ん……ちょっと試して見ようかと。まあ、様子見程度に」

「……そつか。じゃあ私の店に来なよ。これも何かの縁だ、付いて来て」

それだけを言うとトツネは歩き出す。なんだか押されてしまつたが今更断るわけにもいかないし、そもそも目的は魔紋をより知つて、あわよくば刻んでもらつて戦力強化を図る事だ。

話を聞くだけでも損は無いだろう。そう思つて隣のシアが戸惑つた顔でこっちを見ていたので、軽く頷いて俺の意思を示し、先を歩くトツネに置いて行かれない様に歩き始めた。

大きな通りから外れて裏の路地を歩く。田も当たらず冷え切つた薄暗い路地裏は、陰鬱な気分にさせる。

しかし前を歩くトツネは一切を気にせずに軽快に進んでいく。後ろにはシアが俺についてきて、実質、女の子達に狭い路地裏で鍊まれる形になってしまっていた。

何をするでもないが、現実ではまずありえないシユチュエーショ

ンなうえに、外見は一人ともかなり可愛い部類に入るので、少なからず意識をしてしまう。

そんな俺の思考は無事一人に読み取られる事も無く、街の入り口から五分で目的地に辿り着く。

そこにはどこかの家の裏で、トツネは止まる事無く壁にある扉を開き、中から手招きする。

ここにはトツネの家の裏口のようだつた。

「じめんね。表だと色々と厄介だから」

そんな事を言われたが、俺はともかく、シアも大して気にした様子も無く、むしろ普通じゃありえない対応に楽しそうな表情を浮かべていい始末だ。

家に入るとそこは一つに分かれていた。壁によつて区切られているとかではなく、全く異質の空間同士が無理矢理くつつけられた様な、そんな光景。

片方は店の裏側と言つしか無いような空間。注文を受けたりするカウンターがあつて、その下の、外側から見えない位置には色々と雑多に置かれている。その他には魔紋を刻んだ既製品だろうか、金属の鎧や槍などの武具が並んでいた。

そんないかにも魔紋を扱う店のような風貌とは反対の、俺達がいるのがおそらく居住スペースなのだろう、木の温かみが感じられる白めの木造で、一本足の丸テーブルと、トツネが座り、あと一つの空きがある椅子も木製だ。

丁度店の外側からは見えない位置に居住スペースはあり、そこはしつかりと考えられているようだつた。

今はまだお客さんもいないようだつたが、今トツネが帰つてくるまではどうしてたんだろつ、とか考えてしまうが、俺に答えが出る訳も無く、空いている木の椅子に俺とシアはそれぞれ腰掛ける。

「それで？ なんか聞きたいことはある？」

テーブルに両肘を置き、手は組んで「の下にして、どこか嘘くさい笑顔を顔に貼り付けて、そんな事を言つトツネに何だか嫌な気配を感じて、俺は待つた区別の話題を振るといつ手段で様子を見る事にする。

「その前に聞きたい事があるんだけど、今朝ここに来る途中の森の中で変なのに会わなかつた？」

「変なの？ なんだそれ。見てないぞ。そんな事より……」

「いや白い丸い幽霊みたいな奴を……」

「知らないよ。そんなのがいたら皆の噂にもなるし、第一それって魔物だろ？ 逆に皆競つて倒しにいくと思つよ。それより……」

やつぱりあのレイスの存在は誰も知らなかつた。それならば何で俺達が通つた時だけ反応したんだ……？

この町の人々に無くて、俺達にはあるもの……。何だかなぞなぞのようない言い掛けだが、実際問題そなのだから仕方ない。

しかしいくら頭を捻ろうとも答えが出ない。どうしたものかと思つていると突然トツネが音を立てて椅子から立ち上がつた。

何事かと思う間も無く、トツネはその声を張り上げる。普段から声を出しているのか、耳を塞ぎでしまつほどの大音量だつた。

「話を聞けえええええええ！」

それは耳を塞いでいてもはつきりと聞こえた。叫び終えて肩で息をするトツネは俺を睨んでくる。シアは突然の事で、まるで雷に怯える子供のように瞼をきつく閉じ、耳に手を当てて震えてる。

「なんだよ、急に！」

俺の抗議の声にトツネは一層その剣幕を強くし、拳句その身を乗り出して顔が触れそうなほどにまで近づけて、それから俺の問いに怒氣を帶びた声で答える。

「あんた達、魔紋の事知りたかったんじゃないの！？ いきなり変な魔物の話なんかしちゃってさ、聞く気あるの？」

「あ、ああ……ごめん」

俺がそう言つても、トツネは少しの間近づけた顔を離す事無く、不満そうな顔でいたが、やがて諦めたように再び椅子に腰掛けた。

「えつと……魔紋を刻むのにどのくらい掛かるのか、ちよつと相場を聞いてみたくて……」

俺がそう言つとよつやくトツネはその不満そうな顔を引っ込めて、改めて顎の手をやり話し始める。

「相場、ねえ……。魔紋の種類とそれを刻む物次第でかなり差は出でるけど、本当にしょぼいもので三千、最高級なものなら一十万とかかなあ」

価格の差が凄まじいのに驚いたが、よく考えれば現実世界でも楽器なんかは物の質によつてその価格の差は激しい。そう考えると何だか納得出来る気がした。

トツネの言つた最低限のものならば今の手持ちでも出来るが、本当にしょぼいとまで言われると、なんだかそれで妥協すると損をするような気がする。

とはいえる付加される魔法の効果によるので、詳しいこ

とを聞かなければ一概に答へは出せない。

「その低めな所は具体的にはどんなのがあるんだ？」

「うーんと、単調な音を鳴らすだとか、剣先に指ぐらいいの火を灯すとか、そんなしょぼいのばつかりだよ。つける人はまずいね」

正直もう少し使えるようなものだと思つていたが、どうやら値段が低いほど子供騙しのようなものしかないようだ。となるともう少し高めのものないと、ただ記念に刻んだ程度のものになつてしまつ。懷に余裕があるならそれでもいいが、生憎と駆け出しの懷はそんなに暖かくない。

「……実用レベルの物となるとどのくらいからだらう？」

「ああ、あんたら冒険者だつたね。それなら……うん、大体一万ちょつとぐらいかな。まあそれでも『ライティング照明』とか『フローティング浮遊』のサポート系だけね。冒険者なら持つてた方が役立つでしょ？」

確かにそういうたサポート系の魔法は各地を回る際には必須のものだろう。様々な障害もそれに対応する魔法で突破する、なんて事もあるかもしれない。これから冒険者としてやっていくにはあつて困るものではない。しかしそれだけ便利なものが実践で使うものよりも安い値段なのは、やはりプレイヤーへの配慮なのだろうか。まあ、どちらにしろ今の俺達にとって一万を越えるものは高級なものである。とてもじやないが手を出せない。

「うーん、そうか……。欲しいものではあつたけど、今の俺達には手が届きやうに無いな。また今度、改めて来させてもらひつよ

そう言って俺は椅子から立ち上がる。大体の情報は手に入れられたし、元から手が届きそうも無ければ取りやめる予定だつたん

だ、今更ここで値切りの交渉もどこかみつともないよつな気がして、同じく席を立つたシアと共に入ってきた裏口から外へ向かう。

そんな俺たちの背中にトツネは声を掛けってきた。よく聞き取れず最初は別れの挨拶だとと思ったが、振り返ってその顔を見ると、どこか悲しそうな表情で、ただ立ち去っていた。

そのあまりにも予想外なトツネの姿に俺は固まり、つい声を掛けてしまつ。

「どうしたんだ……？」

「あ、……いや、その……」

どこか歯切れの悪いトツネを見ると、何か言いたげな事があるのだとすぐに分かるのだが、少し舞つても中々口を開かないので、仕方なくこちらから声を掛ける。どちらにしろ、そんな顔で見送られたら、ずっと気になつて気持ちが落ち着かなくなるのは分かつていい。

「言いたい事があるんだろ?」

「…………う、うん」

ようやく絞り出された声に、俺再び椅子に座る。シアは俺が座つた後にその意味を理解したようで、慌てて戻ってきて椅子に座つた。

その様子を見てからようやく立ち去っていたトツネも椅子に座り、話し始める。

「……本来掛かる魔紋刻費を半分にしてあげる

「…………そして、その裏とは?」

そんなうまい話がタダで転がつてゐる訳がない。それにそれを

最初から言わずにいた事も、口籠つていた事もあつてますそのままの真意が怪しい。

そもそも宿で少し会つただけの人間を、たまたま再会したからって家にまで連れてくる必要は無いはずだ。その上での話ながら裏が無い方がおかしいと思つのも普通のはずだ。

「…………手伝つて欲しい事があるんだ。それを無事終えることが出来たら、その報酬として半分の費用で刻んでもいい。安心して、腕は確かだから、アメノの名に賭けて」

そう言つたトツネの顔は真剣で、信じるに値するようなもののような気がした。それでも自分の実力が低いのは自覚しているので、無理そなならばおいしい話ではあるものの、断る事も考えていなこと駄目だ。

「とつあえず、話だけでも聞かせてくれるか？」

「…………あ、なるべくすぐ必要な鉱石があるんだ

「それを取つて来いと？」

普通に考えるならばそんな所だろつ。こわゆるおつかいイベントだ。それなりの物しか手に入らないのに労力が見合わないものが多い印象のイベントだが、今回はその報酬が先に提示されている。だから報酬はいいものだと分かるが、問題はその対価、鉱石を取りに行くとなるとやはりダンジョン的な所に行かねばならないだろう。しかしレベルがレベルだ。そこは雑魚ですら倒せないほどどの高難易度だと今は手も足も出ない。

俺の言葉にトツネは予想外な言葉を返す。もつともいい方向での裏切りだが。

「違う違う。元々私の父さんといつも行つてる所なんだけど、父さ

んが仕事で行けなくなっちゃって、私一人だとちょっと荷が重いから、その護衛つて所

「なるほど。それなら何とかなりそうだけど、護衛つて事はそこには魔物とかが出来るって事になると思うんだが……」

「ああ、出るけど大した奴はいないよ、雑魚ばっかり。でも数が多くてね、万が一って事もあるし」

「ならいいんだが……」

やつぱり話を聞けば聞くほどこいつますぎる話だとは思つ。だけどその報酬は今の俺にはとても魅力的で、掛けて見る価値はあるかも知れない。

少し悩んで、シアの方へ目線送る。どのみち俺一人では受けれる気はさらさら無い。シアが頷かなれば、俺はこのまま何も聞かなかつた事にして帰るのだが、シアは俺の視線に気付くと軽く頷いた。それを確認してから俺はトツネに向き直り、真っ直ぐとその視線を目と合わせ、右手を差し出し、言つた。

「わかった。受けよう」

俺のその言葉にトツネは表情を明るくし、俺の差し出した手に被せるように右手を差し出し、固く握つた。それは口約束のようなものだが、しっかりと報酬が用意された依頼でもある。

その成約によつて俺達はトツネを依頼者として、従つ必要もあるだろつ。まあ、当然の事だが。

「それじゃあ、なるべくすぐに……、今日の日が落ちるまでは終わらせたいんだけど、そつちの準備はどう?」

「こつちは問題ないけど……、そうだな、強いて言つなら万全な体制を整えるのために、道具屋かなんかがあると助かるんだけど……」

実際、回復アイテムの類は皆無に等しく、レイス戦での負傷によつてHPも減つてゐる。見知らぬダンジョンに突入するのならば、HPは満タンで、アイテムも潤沢でないと行く氣すら起きないのは、きっと俺が過剰な心配性だからだらう。特別今に限つた事でもなくゲームでは毎回こんな感じで進めるために、ゲームオーバー画面に遭遇することはほとんど無く、その代わりにプレイ時間が以上に増大する。つまり慎重すぎるプレイスタイル　友人にはチキンとか言われたが　一な訳だ。

「ああ、そういうのを揃えるならここから通りに出ればすぐに見つかるよ」

「わかった。すぐ済むと思つから、申し訳ないけど待つてもらひるかな」

「それくらい大丈夫だよ。私も万全にしてもらえると安心できる……つと、あんたら武器を少し貸してくれるかい？」

「え……、なんで？」

突然のトツネの言葉に俺は戸惑い、家の裏側、つまり入つてきた方から出ようとしていた足を止めた。

正直言つて、そこらの道具屋に行くのでも何があるか分からないため、武器を手放したくないという気持ちがある。

俺のそんな疑いを感じ取つたのか、トツネは慌てて付け足した。

「ああ、その武器結構使つてるだらう。直してあげるよ。これは今回受けてくれたサービスみたいなもの」

「魔紋師なのにそんな事出来るんですか……？」

トツネの言葉にシアが反応した。

普段はあまり喋らないシアでも反応するほどの何かが、トツネの言葉に含まれていたのだろう。俺には何の事が分からないので、黙

つてその顎末を見守る。

「私は魔紋と鍛治の両方を生業にしてるの。厳密に言つならその一つが混ざつたうちの家特有のものなんだだけね。そのおかげでこの店『一田連』が成り立つてゐるよつなもんや」

「はあ……」

そう皿邊づに言つトツネを見ると、悪い人ではないのかなとも思えてくるから不思議だ。それは純粹にその事を語るトツネの目が輝いていたからだらうか。なんにせよトツネは見知らぬ人よりは信用できる気がした。

「それじゃあ、これ。お願いするよ」

俺はその腰にある鉄の剣を皮鞘ごとトツネに手渡す。それにならつてシアもスカートの中から白い肌の足を覗かせながらも、短刀を取り出してトツネに手渡す。

一人の渡した剣をトツネは受け取り、軽々と持つ。

「任せて、買い物から帰る頃には終わらせるから

「ああ、頼む。それじゃあ行つて来る。ほらシア、行くぞ」「は、はい！」

そして俺達はトツネに見送られながら、裏口から外へと出た。

道具屋での出来事

トツネの店『一田連』を裏口から出て、案内された裏路地を通り、再び街の迎え入れる気のない質素な入り口へと戻ってきた。相も変わらず怒鳴り声が飛び交う通りを、今度はシアと二人、並んで歩いていく。

通りは見通しはよく向こう側の街の外まで、一直線で繋がっていた。

その通りの中で道具屋を探す。トツネが言ったのは見れば分かるという言葉だけだ。具体的な場所は教えてもらっていないが……確かに、通りに目を向けていればすぐ分かる。

数ある店構え おそらくほとんどは魔紋や鍛治の店 すら霞むような、一回りも一回りも大きい建物で、道具屋を示すマークがあしらわれた看板が、建物の大きさに比例して大きくその存在をアピールしていた。

「確かに見てすぐ分かるな、こりや……」
「ははは……そう、ですねー」

シアはどうことなく苦笑いを浮かべながら、俺の意見に同意する。

怒声と甲高い音の響く通りを歩き、その道具屋の前までやって来る。建物は赤暗い色で、汚れなどが窺える事から、相当年季の入ったレンガ造りなのだろうと予想がつく。扉は木製で黒鉄で補強され、取っ手も黒鉄の環だ。どうもこの世界はこういう扉の造りが多く、宿屋『哭椿』の扉もこのタイプだつた。まあ、世界観からすれば、さして違和感のない扉なのだが、やはり俺はドアノブを下げたり、回す方に慣れてしまっているせいか、違和感が拭えない。

微妙に不器用になりながらも道具屋の扉を開ける。

そこに広がるのは雑多で視界全てが埋まってしまう。そんな品物の数々。よく見ると薬草などのHP回復系だと思われるアイテムが、一まとめに整理され置いてあり、他にも見ただけである程度、使い方が連想できるようなアイテムから、何だこれ？と首を傾げてしまふような謎のアイテムもあった。

言つなればそこは宝箱だ。未知のアイテムが溢れる箱。

俺がRPGをプレイしていく楽しい事はたくさんあるが、そのうちの一つとして未知のものとの遭遇がある。アイテムや人、イベントに限らず、土地や敵に至るまで、自分の知らないものがそこにある。そしてそれを知る事が楽しいのだ。……確かに、こういうのを知識欲とでも言つのだったか、まあ俺の場合は本やゲームなんかが限定の事なのだけど。

元々このVRゲームに手を出したのもそんな興味からだった。木製の棚やテーブルに置かれたアイテム達に囲まれた空間は、はたから眺めている視点でプレイする普通のゲームと違い、その数によって圧迫されているような錯覚すら覚えるほどで、それを見て、触れるとと思うと、胸が躍った。

そんな俺を正気に戻すのは、若い女性の声。

「いらっしゃい。ゆっくり見て行つて頂戴」

その空間、扉を入った正面に、店の中央を陣取る机を挟んだ向こう側、カウンターで木製の振り椅子に座つて優雅にそこにいる女性は、この道具屋の店主だとすぐに分かる落ち着き払つた対応で迎えてくれた。

金色の長い髪に、妖艶な雰囲気を漂わせるその女性は、それ以上何も言わず、ただただ椅子に揺られていた。

今思えばこの世界の道具屋というものに入ったのはこれが初めてだ。だからこそここまで感慨深いものを感じてしまったのかも知れない。

しかしここまでも自分の世界に浸っている訳にもいかない。

トツネに武器の修理を頼んでいるから、多少は時間が掛かっても大丈夫だと思うが、それでも今日中には終わらせないといけない依頼だ。道のりに掛かる時間もまだ分からぬし、道具を買うぐらいであまり時間をかけてもいられない。じっくり見るのは時間がある時にすればいい。

そう思い、俺とシアはその道具屋へと踏み入り、様々なものにざつと手を通して、必要になりそうなものを揃えていく。

手にしたのは回復アイテム。薬草より回復する上位のHP回復アイテムである、薬瓶を五個、念のためにMPを回復するアイテムである星の実、というアイテムを二個手に取る。

薬瓶は、薬草から絞り汁を取り、そこに幾つかの薬実という物を混ぜて作られた物らしい。不純物を取り除き、より薬草の効果を高めたもので、手の平に収まるほどの小瓶に入っている。見た目は力キ氷にかけるメロンのシロップのような感じ、だと第一印象に思ってしまった。

星の実はMP回復のアイテムだ。薬草と同じように効果のある自然物をそのまま持つてきたのだろう。球体に棘が付いた様な形をしていて、言つなれば金平糖が大きくなつたような印象を受けた。しかしその大きさは金平糖を二つほど並べたぐらいの直径で、シアでも一口でいけるだろう、というぐらいの大きさにしか過ぎない。そして星の実の名に違わず、店内を照らす照明に一つ摘まんでかざすと、逆光によって黒い星の形を取る。だからこそ星の実なのだろう。

これらの説明が分かるのも、ひとえに説明画面が表示されるからだ。物に触れながら何なんだろう、これ？ とか思つている所に、説明画面が何の予兆もなく現れた時は、思わず声を出してしまつて、シアと店主に何事かと視線を向けられたものだ。少々きつかった……。

そのおかげで俺はシアにいちいち尋ねる事もなく、スムーズ

にアイテムの知識を得ながら買い物を済ませる事が出来た。VRゲームとして入り込んでいる人にとっては興奮めだ、なんて言われてしまふかも知れないが、大半の人はこの親切設計を喜ぶだろう。

それらの商品を抱え、女店主のいるカウンターへ置く。それに気付いて女店主は振り椅子から体を起こし、カウンターの机に体を預ける。その際にその豊満な胸がより強調された気がするが、見ないように努めながら、ポーチへと手を入れる。

女店主は手早くその商品を手で追つて数え、すぐにその合計を弾き出す。

「全部で千五百円だね」クロム

「あ、はい」

俺はポーチから手を抜きながら千五百の円を取り出すように思考する。それでポーチから引き抜かれた手には、丁度それだけの円が握られる仕組みになっている。これでもう残りの資金はかなり心許なくなるが、まだ換金していない死体もある。ここにくる時の二つ名持ちの魔物であるレイスの死体も、どのくらいになるかは分からぬが、少なくとも普通の魔物よりは高くなるだろうとは思う。そう考えればここでの多少の出費はマイナスにはならない。

俺はしつかりと手を握った手をカウンターへ差し出し、その手を置いた。お札が一枚と金貨が五枚。千五百ピッタリだ。

女店主はそれを丁寧に確認し、間違いないある事を確かめる。と、笑顔で、毎度あり、と言うのだった。それはその大人びた顔にしては可愛らしいもので、少し惹かれるものもないとは言えないのだが、今は隣にシアもいるのでなるべく表情からそれを悟らせないようにして、俺も笑顔で返すのだった。

「あなた達冒険者でしょ？ それだけ買って行くって事は、坑道での護衛かしら？」

「えつと、どうなんでしょう？ 場所こそ聞いてないんですけど、護衛はしますね」

あつたりと依頼内容を喋るのもどうかと思つたが、この街でこれだけ大きな道具屋で、トツネもこの場所を教えてくれたし、利用もしているだろうから、この女店主とも知り合いだと勝手に決め付けて良しとしあげ。

「うーん、まあここで護衛の依頼ならまず坑道だと私は思つけど……本当にあなた達だけで行くのかしら？」

女店主はそんな意味深な事を言つので、俺は何を言いたいのか、をその表情から探ろうとするが、そこにあるのは疑問の色と不安の色だ。

「どうこう事ですか？」

「最近魔物が活性化しているって話は聞いたかも知れないけど、その波がここまで来てね、坑道に棲む魔物も少し凶暴化してるのよ。それでこの前、この街全体でその坑道への町民の出入りを一時禁止にして、CCCにその魔物達の掃討を依頼していたんだけど、やつぱりいくらやつてもきりがなくてね。仕方ないから鉱石を掘りに行って際には護衛をつけるようになつて事で収まっちゃつたのよ。だからそんな所にあなた達のような護衛だけを連れて行くつてのが、どうにも腑に落ちなくてねえ」

「それは私達がその魔物に勝てない、といつ前提で話をされてますけど、何故なんですか？」

その話はこの街の背景を知る事が出来て、聞いて得をした気分なのだが、あからさまに魔物より弱いと見られる少し頭にくるものもなくはない。

確かに駆け出しだが、ここに来るまでにそれなりの戦闘経験も積んだし、シアとの戦闘連携も結構なものだとは思う。本当の最初に比べれば随分と様にはなっていると思っていた。だからこそ、そんな少しばかり伸びた鼻つ柱を叩かれると、やつぱりきつめの言葉が出てしまう。

女店主もそれが分かっているはずだ。その表情から余裕は消えず、なお変わらない表情で、俺を諭すように優しく俺の言葉に答えた。

「私も長い事ここで仕事してるからね。人は星の数ほど見てきた。この街に住む人達、魔紋師や鍛冶を曰当てに来て、そのついでに寄る冒険者達。話もたくさん聞いたわ。だから、そうね。言うならばそういう経験から来る法則性かしら。私の目で見ると、あなた達がまだまだひよつ子なのは手に取るように分かるわ。だからこそこうして話しているの、これがあなたのした質問の答えだけど、如何かしら?」

完敗だつた。俺はそれを示すために両手を軽く挙げて降参のポーズを取る。

「自分が間違つていたと思った時に、素直にそれを認めれるのは良い事よ。あなたは大成するわね」

「それも経験から来る法則ですか?」

「いえ、……女の勘よ」

少しばかり女性の恐怖というものを再認識した気がする。

シアは大人しいし、妹は馬鹿で騒がしいが、俺が上なので気にする事も無い。母親は俺が家事をして、バイトもしてるのであまり文句を言つことはない。もっとも彼女がどうとか、そういう話は持ち出すが……。

そこまで考えて俺は思考を止める。折角のVR世界を楽しむ時間を現実の事で無駄にするのはもったいない。それにこの世界での時間もあまりない。

少々世間話にしては長話をしたかと思いつい、俺はシアに田を配る。いわゆる助け舟を出し欲しい、の意図だ。

シアは俺の意図に気付いてくれたようで、今まで一切口を出さなかつたが、おずおずと前へ出てきて俺の隣に来ると、女店主に不器用ながら話しかける。

「……すいません、そろそろ……時間なので……」

「ああ、そうね。店主と密の立ち話にしては長く話し込んでしまつたわ。それじゃあお一人さん、気をつけでね」

「はい、ありがとうございます」

俺はカウンターの商品をポーチへと流し込み、女店主に礼をする。そしてそのまま店を出ようと、扉に手をかけたところで、不意に女店主の綺麗な声を掛けられる。

「坊や！」

俺は何事かと思いながらも振り返る。後ろを付き慕うよう歩くシアも同じく女店主の方を見る。俺とシアの視線を集めた女店主は不適に笑い、何かを投げた。

それを慌ててなんとかキャッチし見ると、それは星が付いたヘアピンだった。その形状はまるで流れ星のようで、なんというか、シアに似合いそうだった。

「まだ名乗つてなかつたわ、私はニーア。それは餓別。死なないよつにね？」

「二ヶ、です。ありがとうございます。またいざれ」

「し、シアです！」

慌てふためきながら、しつかりと名乗ったシアを俺とニアさんは軽く笑い、一度目線を合わせれば、もう何も言ひことはなく、ただその道具屋を後にしただけだった。

外に出て、職人たちの怒声が飛び交う通りに出る。そして後から出てきたシアが、道具屋の扉を閉めたところで、俺はそのシアの頭にそのヘアピンを付けてやる。

「動くなよー」

シアは何事かと慌てていたが、俺がそう言ひとピタリと動きを止める。そしてそのヘアピンをつけたシアの姿を遠くから眺めて、頷く。

中々に似合っている。俺の間は間違つてはいなかつた訳だ。シアはゆつくりと頭に手を伸ばし、探るよつてそのままのヘアピンに触る。

「なに、したんですか……？」

「ヘアピン。似合つてゐる、可愛いでわ」

俺がそう言つてシアは顔を真つ赤にして俯いてしまつが、それが何だか面白くて、敢えて俺はシアを置き去りにして走り出す。

「時間ないぞー！ 急げー！」

実を言つと俺も少し恥ずかしかつたりもした。こんな事を現実にするなんかまずないからだ。だからこの追いかけっこも恥ずかしさを誤魔化し、気持ちを落ち着かせるためのものでしかない。ま

だ時間は昼前だ。無理に急ぐこともない。それでも走った。

「トツネ、戻つたぞー」

迷わぬよう近道しようとせずに、同じ道を通りて『一目連』へと戻ってきた。

念の為に裏口の扉を数回叩き、中にいるはずのトツネに確認を取つてから、中へと入る。

そこに待ち受けていたトツネの手には、買い物に行く前に俺とシアが手渡した二つの武器が収まっていた。それを入つて早々に手渡される。

「無事に終わったよ。確認してみな」

自信満々な表情を浮かべたトツネにそう言われて、俺は皮鞘に納まつた鉄の剣を抜いた。そこには光り輝く、新品のような鉄の剣が、少し変わつた状態であつた。

シアも俺と同様にその短刀を手にとつて、物珍しそうに様々な角度から眺めていた。

「これは……」

「いやー、直すだけって言つたんだけど、作業してるのはいつ……」

新しく手渡された鉄の剣は、刃の部分が鮮やかな赤色に染まつていて、ただの鉄の剣に比べて幾分か軽いような気がした。別にそれを勝手にしたからといって怒る訳ではないが、純粹に何をしたのかが気になつてしまつ。それとその効果についても知つておきたい。デメリットがあるのならば知つておかないと、いざという時に痛い

田を見る羽田になる。

「これは……なんか効果あるの？」

「えっと、まあ大したものじゃないんだけど、キイカの方は少し切れ味が上がるようにな、シアの方は炎の威力が増すように、それぞれちょっとだけ手をえたの。もちろんないよりマシ程度だけね」

「それでもないよりはいいわ。ありがとう」

「いや、ついやつちやつただけだから……ははは」

トツネは両手を頭の後ろで組みながら恥ずかしそうに笑みを浮かべて、はぐらかそうとしていた。

トツネは魔紋師であると同時に、鍛治も出来る。むしろトツネの持つ技術は魔紋と鍛治が混ざったものだと言っていたのだから、本当にトツネ自身にしてみれば、それは大した事ではないのだろう。修理のついで、と言うのも納得できる。

……でもちょっと待てよ。どうしてトツネはシアが炎を使う事を知っていたんだろう？ トツネの目の前では使った事はあるか、戦鬪さえしていないはずなのに。シアの短刀だってあの時手渡して初めて目にしたはずだ。それなのにシアの短刀に炎を強化するような細工が出来るのだろうか。

俺の剣に切れ味が上がる細工をするのは、納得できる。そもそも魔紋を刻みたいのは俺な訳だし、現に俺の戦い方もただ隙を見て切りかかるだけのものだ。強力な戦闘になればこそシアに炎を付加してもらう事もあるが、雑魚戦ではその機会はほとんどない。

どうにか傍目で見た時に、シアが炎を使うのが分かったような痕跡を探し、記憶を探つて見るが心当たりが浮かばない。

何だか気になるのでその疑問をそのままトツネにぶつけてみる。

「なあ、俺はともかく、なんでシアが炎を使うって分かったんだ？」

「ん？ ああ、簡単だよ。武器に付いた傷とかで、偏った使い方し

ていればすぐに分かるんだ。一ヶのも炎の痕跡こそあつたけど、あんまりメインに据えて使つてゐようじやなかつたから、無難なものにしたんだ」「

素人目ではトツネが言つものは一切確認出来なかつた。

レイス戦の後に、俺は新しく取り出した鉄の剣を再びポーチへと格納して、今まで使つていた鉄の剣に装備し直した。その際にその剣を少し見たが、特別焦げ痕があつた訳でもないし、刃も新品の物と変わつた様子はなかつた。それを見て俺自身が、あんな乱暴に吹き飛ばされても目立つた傷は付かないんだな、とか思つていたのだから間違いない。

そしてそれを完璧に見抜く辺り、今朝の騒動の時のような態度を取つていたのは、全て実力の裏返しだつたのだろうと思つ。自信があるからこそ、それを否定されて悔しくて、食い下がつていたつてところなんだろうか。

「それで、なるべく早いところ出たかったんだけど、もうすぐ昼だしね。ご飯を食べてから行く事にしよう」

「いいのか？」

俺達は特別急ぐ事はない。元々成り行き上の話なので、相当危ないと思わない限りはトツネの言つようにならつもりだ。

対してトツネは何だか焦つてゐたような様子だったし、のんびりとお昼なんか食べる暇はあるのだろうか、とも思つてしまつたが、その当の本人であるトツネが昼にしようと言つてゐるのだから、俺達に一切の反論はなかつたが一応確認は取つておく。

「いいよ。片道三十分ぐらいで、行き帰りと魔物が出る事も考慮しても、二、三時間あれば事足りるし、このまま行って空腹で力が出せませんでした、なんて言わなくても困るもの

「そんな事はないと思つけど……」

俺の言葉はある音によつて遮られた。一瞬で空気が一変する。響いたのは可愛らしい腹の音。その音の出所は明らかにトツネだつた。

「…………」

「私がお腹減つてゐるからお腹にしよう

「…………素直でよろしい」

顔を赤く染めながらも堂々と言い切つたトツネに拍手を送りたい気持ちだつたが、それよりも早く、トツネはシアの手を引いて裏口の扉に手をかける。なんだ? と思う間も無く、トツネは「買出しに行つて来るから待つてろー!」とだけ言つて、あつという間にその姿を消してしまつた。シアも何が起こつたか分かつていないうな表情を浮かべたまま、扉の隙間に吸い込まれていき、扉がひとりでに閉まる音とその後に訪れた静寂だけが、俺に残されたものだつた。

「いや……どうじゆつて……」

ただ一人残された俺は、変に歩き回る事も出来ず、あれこれ触る訳にもいかず、ただただ椅子に座つて、今の状況だとか、このデュアルワールドについて考察でもして、暇を潰すしかなかつた。

メニューを開く。現実時間はもう日を跨ぐような時間だ。でもVRGの発売に合わせて、連休を取つた俺に死角はない。流石に限界まで眠くなつてきたら辞めるつもりではいるが、出来る限りはやり続けたい。

この世界で起つた事を思い返す。まだ現実時間では一日しか経つていながらこのデュアルワールド内の時間は一日半にも及び、R

PGとしてはまだまだ序盤の範疇だろう。

武器を見たのも未だに、銅の剣、鉄の剣、あとはシアの持つ短刀に、トツネが持っていた短刀だけだ。そして俺の使ったのはそのうちの半分である一種類だけ。武器の総数がどのくらいなのかは俺には想像もつかないが、その数は少ないのが明白だ。

星の欠片も未だに一個だし、全てを踏破しクリアする頃には、現実時間でどのくらい掛かるのか想像もつかない。

改めて自分のステータスを確認する。

レベルは六、HPは五十をようやく超えた所で、椅子に座つて休息しているおかげか、少しづつ回復している。

SPはレイス戦でギリギリまで使つたはずだが、今はもう完全回復している。

戦闘後に自分の状態を確認した事がないので、それがHPと同じ自然回復なのか、戦闘終了後に自動回復するのかは定かではないが、とりあえず勝手に回復してくれるようなので、当分はSP回復アイテムは必要ないだろう。

MPは言つまでもなく最大値のまま動いてない。これから使う機会も増えるだろうから、その数値を見るが、シアの魔法の消費MPを見る限り、そこそこはあるらしい。これで魔法は覚えたけどMPが足りなくて使えない、何て事にはならないだろう。

筋力以下の各種ステータスも二十から三十の値でおおよそ揃つていて、順調に育つているのがわかる。ステータスが上がった事で体が嘘のように軽くなる、なんて事はあまり実感がないが、戦闘においての行動の際には、確かにそれを実感できる。

敵に近付いたりする時のダッシュも、現実ではまずありえないような速度が出るし、武器もまるで重みがないような感覚で振り回せる。もちろん何かに当たった時には手ごたえもあるし、岩なんかを打ち付けた時は手が痺れるような衝撃が伝つてくる。

だから実際に剣には重みがあるのだろうけど、それを振るう俺の感覚がそれを消してしまっている、という事になるのだろう。

習得スキルは一つ。切りかかる攻撃にさらに威力を乗せる『スラッシュ』と、突き攻撃に威力を乗せる『ストライク』の二つだ。

アビリティは武具消耗軽減の『手入れ』に、魔法の使用に必須な『魔法』。それと疲れが早く取れる『休息』に魔物解析の『識別』の四つ。

APはレベルが上がるごとに一ポイントなので、アビリティ習得に使った四ポイントを減らし、残りは六ポイントだが、今から新しくアビリティを取るよりは、既存の物を強化するために貯めておきたい気持ちの方が強いので、とりあえずは置いておく。

後は星の欠片が一つと、買い込んだアイテムに、溜め込んでいる魔物の死体^{コープス}ぐらいのものだ。

俺は一通りの状態を確認して、やる事もなくなつたので、メニューを開じた。そのまま天井に顔を向けて一息つく。

「あら、お客様さん？」

そんな俺に、不意に声を掛けてきたのは女性だった。おそらく一階に続いているだろう階段から、突如として現れた長い金髪の、どこかで見たような顔の女性。

「あれ……？ ニーアさん？」

そうだ。さつき会つたニーアさんとその姿形がそつくりなのだ。髪型も、その色も、肌の色も、顔立ちも。違う所といえばその胸のサイズと優しげな眼差しだけだ。

俺の言葉にその女性はゆつたりとした動作で手を持ち上げ、横に振る。

「違う違う。ニーアは私の妹。私はディア。トツネのお母さん、だよ

「え…………って、はあー…?」

その田の前にいる女性、ディアさんは、その見た目からすればどう見ても二十代前半と言つたところだ。それがトツネのお母さんつて……。

トツネはその見た目ではシアと同じくらいのもので、おやらく十六、七程度だろつ。それをディアさんの見た目年齢から引くとどんでもない事になる。これは俺がディアさんの年齢を大きく読み違えている可能性が一番高いが、そつは言つても、見た目からすれば三、四十代とはとても言えない若さと美貌を持つてゐる。

…………しけこそファンタジーか……。

ディアさんは階段を下りて、椅子に腰掛ける。丁度俺の真正面だ。

「ふふふー、初対面の人はそうやつて驚いてくれるから面白いねー

そんな暢気に語るディアさんの正体不明な感じに若干恐れおののいていたが、いつまでもそうしている訳にもいかず、とりあえず挨拶だけはきちんとしておいつと思つた。

「ああ……つと。お邪魔させてもらつてこます。はじめまして二ヶです」
「二ヶ君、ね。初めまして。ゆづくらしてこつてね」
「は、はい……」
「トツネとは知り合いなの?」
「え、はい。まあ今朝知り合つたばかりですけど……」
「ううなの……、あの子をよろしくね、二ヶ君。あの子はちょっと向ひの見ずな所があるから」

そういうえば朝は結構大柄な男にも一步も引かずに言い合つしてたもんな。理がトツネにあつたとはいえ、変な奴だつたらあそこで逆

に怒つて暴力振るう可能性もないとは言えなかつたのに。そう考へると確かに少し危うい所はあるのかも知れない。

「俺程度でどこまで出来るかわかりませんけど、出来る限りは……」

「もう！ 男の子はそういう時に、堂々と胸を張つて任せてくれ下さい！ って言うものなのよ」

「わづ、言われましても……」

ディアさんは自分の胸の中心に右手を当てて、胸張つたポーズで言うのだけど、俺はレベル六の弱小冒険者なので、自信満々かつ無責任にそんな事は言えず、ただただ情けないながらも苦笑いを浮かべて誤魔化すしかなかつた。

そんな俺を射抜くディアさんの眼光は、まるで見透していくようで少し寒気が走つた。

「冗談よ。まあ、二ヶ君にはシアちゃんがいるから大丈夫だと思つけど……」

「一体全体、何の話ですかね……？ というかなんでシアの事を……」

「…

俺がそういうふうと、無言でディアさんは指を上に指す。それにつられて俺も上を見るが、そこにあるのは天井だけだ。

「一階まで丸聞こえなのよねー、この家」

「なつ……」

つまり、ディアさんは一階にずっといて、さつきまでの会話を全て聞いていた訳だ。だからこそ、シアの事も知つている。

しかし、もしそうならば、それまでの依頼の件も全て聞いていた事になる。まあ別に困るような事でもないのだけど、親としては子

供の事が心配なのがも知れない。だけど、ディアさんは何も言わないし、表情にもそういう心配の色は窺えない。だといつのに。

「だから、多分苦労する事になるかも知れないのだけれど、あの子を頼みたいのよ。それとあの子の魔紋もしっかりと刻んで欲しいの」「どうしてそこまで……」

ディアさんは穏やかな表情だといつのに、その言葉の端々にどこか尖ったようなものが感じられて、その言葉を素直に受け取れない。

「……本当は言わない方がいいのかも知れないんだけどねー、二ヶ君になら言つてもいい気がするの。だから聞いてくれる?」
「…………はい」

判断に迷つた。でもそれは知つておかないといけない事だ。

依頼してきた本人であるトツネの事では明白だ。それを俺が勝手に知る事は、きっとトツネ自身はいい顔をしないだろう。しかしその親であるディアさんは、トツネの傍にいつもいるからトツネを一番知つている。そんな人が、俺に何かを話そうしてくれているつて言う事は、ディアさんの言葉通りで、俺がそれに足るものだと思つてくれたのだ。

それに、現実的な話。トツネは未だに何かを隠しているのは実に分かりやすい。そしてそれを隠したまま依頼を実行し、その際に何らかの事故が起きる可能性もなくはない。

俺だけならまだしも、シアもそれに巻き込まれてしまつのはやつぱり避けたい。やつなると出来るだけ話を聞いておくれのは、悪い事ではないと思う。

つまりは、俺が勝手に本人の知らぬ所でトツネの話を聞いて、罪悪感を持つてしまつのに問題がある訳だが……シアの事を天秤にか

けると、俺の中ではシアの方に傾いてしまう。

だからトツネの事は本人には内緒にしておいて、今は「ディアさんが聞かせてくれるという話を素直に聞いておく事にした。

「なんだか悪い事考へてる顔ね」

「えつ！ いやそんな事は……」

「まあ、いいわ」

どうやら考へが表情に出ていたらしい。俺は慌てて表情を繕い、ディアさんと視線を合わせた。吸い込まれそうなその瞳は、とても穏やかで、鮮やかだ。

「あの子はね、技術を持つてているんだけど、それが評価されない事に悩んでるの」

「評価されない？」

トツネの技術の高さについて、俺はなにも分からない。技術があるというのは話を聞いてたり、修理された鉄の剣を見れば分かるが、それが俺の中で基準であり唯一なので、比べるもののがなければ、最高にも最低にもなってしまう。しかし、俺とシアが買い物に行つていた時間で、修理はおろかオマケすら付ける事を考えると、その腕の高さが見える気もするが、如何せんゲーム世界の鍛冶の時間は信用ならないものがある。しかもそれが俺の目の届かぬ所で行われているのだから尚のことだ。

「ええ、それがヒコネさん、私の夫の名前のせいなのよ

「どういう事です？」

「身内が言うのもあれなんだけど、ヒコネさんの練り上げた魔紋鍛治の技術は、どこにも負けないような一級品のものなの。名の立つ冒険者の方々や王様なんかも目をつけてくれるほどの最高級品。も

ちろん手間が掛かる分値段も高くなつてしまつただけど、その辺りがトツネに仕事が入らない原因になつてゐるの」

最高級品と聞いて、驚きが隠せなかつた。魔紋の事を詳しく知るためにここに来て、たまたまトツネに出会つた。そして連れて来られた先が最高級の店だつたとは、少々出来すぎな氣もするが野暮な事は考えず、今は聞かされている話について、トツネについてのみに思考を絞る。

「ここが王様も目をつけるほどの店ならば、そこの技術を継いでいるトツネにも、その名にあやかつて人も集まるのが普通だとは思うのだが、現にあの宿ではトツネ自身が造つた物を手渡していたようだし、依頼が全くない、と言う訳でもなさそつだつた。

それでも評価されないと言つのだから、俺の考えが何か間違つているのだ。

改めて聞いた事、見た事を思い出して考える。

最初にトツネが男に断られた時に、男は「こななもの」と言つていた。それはつまり、手渡されたトツネの作品に対して、明らかに下に見た発言だ。しかし、ディアさんはトツネに技術はあると言つ。それならば、トツネの技術は最低でも一般的な基準だと考えてもいいはずだ。そしてそれを下に見るという事はその上があるという事になり、それこそがトツネの父親の作品なのだというのは簡単に考えられる。だから原因だとディアさんは言つたのだ。

「その表情だとおおよその予測はついたみたいね。察しのいい男はモテるわよ」

ディアさんに茶化されるが、俺にとつてはまた表情に出でていたといつ事実の方が驚きで、再び慌てて繕つたが、それをみたディアさんに笑われてしまい、少し恥ずかしい。やっぱりこの世界の年上の女性はどこか苦手だ。

「トツネの技術は正直言つてヒコネさんに及ばないものの、普通の所よりもいいものだと私は思う。巣廻田抜きにしても、ね。でもそれが返つて仇になつてゐるよ。

ヒコネさんはその技術があるから高めの金額でも依頼は来るのでけど、トツネは頑固な所はヒコネさんに似ちゃつて、「私の腕で作つたものは、それ相応の金額に見合つただけの価値はある」って言い張るおかげで、普通の所よりも値段を高く設定しちやつてるの。もちろんそれが腕にあつた値段なのは確かなのだけど、やっぱり他の人からすれば、トツネのものはヒコネさんの劣化品、という認識にしかならないの……」

「そして、普通よりも高いせいで、一般の人達からすれば高嶺の花、つて事ですか」

複雑、でもないが、それでもそこには俺の理解できない職人のこだわりというものがあるのだろう。

もちろんお金払う方だって、より良い物が欲しいと思うのは当然だ。流石に宿にいたあの男のような態度は許せないが、その流れも十分に考えられる話ではあつた。

トツネは今、中途半端な位置にいるのだ。最高級品としては実力が足りず、汎用品としては高く、そうなれば最高級品の代替品として売れる可能性もあるのだろうが、現実問題、売れていないのでから、おそらく代替品としては高いのだろう。

そして、そのせいでトツネは悩んでいる。それをティアさんは俺が打開出来ると思ったのだろう、だからこんな話を眞面目に俺にしているのだ。でも俺は名がある訳でもないし、トツネの作品一つ満足に買えるだけの金もない。

俺はトツネに依頼されただけで、それをこなせば後はどこ吹く風でいいのに、そんな話を聞けば黙つていられないのは悪い性格なのだろう。

シアの時もそうだ。イベントだから、仲間になるかも知れない。そう考へたのは事実だが、それとは別のものも確かにあつた。

今回もそれに近い状況だ。魔紋を刻む費用の半減させるためどう、ゲーム上の事を考へながら、トシネに出来る限り協力してやりたいと思つてしまつていてる。

「でも今回トシネ、さんは、魔紋を刻むのを半額にしてくれるつて言つてました。プライドがあるのなら、そんな事はしないんじや……」

「そう。だから今回はあなた達に賭けようと思つたの。普段は頑固なあの子が、そんな事を言い出したのには、きっとあの子の心境に何かしらの変化が訪れようとしてるんじゃないかって思つた。そしてそれを引き起こしたのはきっとあなたよ、二ヶ君」

「俺、ですか……」

俺がトシネにした事なんて何もない。せいぜい宿で仲裁に入った事だけだ。それもあんまり俺自身は言つ事もなく、自然と解決してしまつた。その後はこの町の入り口であつただけ。

俺が一体どんな影響を与えたのかは知らないが、もし、本当にそうだとしたら、俺にも何か出来る事があるのかも知れない。

「あの子が今、どう思つているのか、何を考えているのか、私でも完璧に把握できる訳なんてない。子供は親から離れ、子は親から離れなくちゃいけない。そして多分だけど今回を逃したら、あの子はもう変われない氣がする。だから、どうかお願ひ。あの子を変えてしまつて……！」

ディアさんの表情は完全に子を想つ親の顔だ。

そしてそんな顔でお願いをされた口には、俺は断る権利もなく、ただ無言で頷いた。

どうなるかは分からぬが、おおよその背景は掴めた。後はなるようなるだろう。俺に出来る事は些細な事だが、それでも静まり返つた水面に小石を投げるぐらいの事は出来る。後の事は本人次第だ。

「出来る限り何とかしてみます」

「……ありがとう」

そして、互いに微笑んだ。

トツネはシアの手を引いたまま、路地裏を走っていた。あつという間に通りにまで出て、そこでその手をようやく離し、両膝に手をつけて体を休める。肩で息をする一人を何事かと行き交う人達は目をやるが、無為に関わる事もなく一瞥するだけに止まる。

一人はそんな事は露も知らず、踏みしめた石畳ばかりを眺め、その息を整えようとしていた。

「つ……はあ！」

トツネは先程までとは逆に体を反るより一気に起き、それを仰ぎ見る。その頃にはもう行きは整っていた。照りつける日差しの眩しさに、右手を顔の前にかざして和らげる。

「トツネ、ちゃん……？ デウカしたの？」

シアはそう言つが、トツネは空を仰ぎ見たまま動かず、一人の沈黙を埋めるように辺りの喧騒がより一層、一人の間に流れる。

しかしそれを搔き消すようにトツネは振り返り、シアに先程まで繋いでいた手を差し出す。そして日の光にも劣らぬ眩しい笑顔で、シアに応えた。

「……いや、何でもないよ。まあ行こう」

シアは戸惑い、その差し出された手と顔に何度も目を向けていたが、やがてその手を恐る恐る握つた。するとトツネは再び振り返り、通りを歩き始める。シアは引っ張られるよつて歩き出し、やがて隣に並ぶ。

一人の身長はあまり変わらず、見た目も歳が離れているようには見えない。

行き交う人達からすれば仲の良い友達、もしくは姉妹のように思われるだろう。しかもその手を繋いでいるとすれば尚更だ。シアは少しの間戸惑い、トツネに手を引かれながら歩くだけだが、やがてその状況にも慣れたのか、足取りも表情もいつも通りに戻っていた。

それでもどことなく不安そうな表情を浮かべるのは、見知らぬ土地だというのが大きかったのだろう。今は頬ついていた二ヶも隣にはいない。

シアにしてみればこの土地の勝手知つたるトツネより、何かあっても守つてくれるような二ヶが隣にいた方が安心できたのだ。

「それで、どこに行くの……？」

シアはそうトツネに尋ねる。昼の買い物だという事は分かっていながら、具体的にどのような場所に行くのかは、先導するトツネのみが知っている。

そもそもお昼といつても何を食べるのかすら決まっていないのだから、その材料を揃える以前の話だ。だからシアはトツネが既にそのメニューを考えていて、その上で必要なものを買い揃えるのだと思っていた。しかしトツネはゆっくりと歩みながら、シアと繋いだ手とは反対の、手持ち無沙汰な手の人差し指を頸に当て、何かを考えているように唸ついている。

その姿を見たシアはもしかして、と思うが、その予想をトツネはすぐに言葉で肯定するのだった。

「どうしようか」

シアの僅かな希望は碎かれて、一人は何の計画も無しにただただ

通りを歩いていく。

「これとこれ……あと、これ」

シアとトツネがいたのは食材を扱う『天菜』^{てんさい}という店だった。そこには様々種類の肉や野菜、その他加工品も揃っていて、現実で言う所のスーパー・マーケットのようなものだつた。だがもちろん現実のようにかごが置いてあつたり、カートが用意されているなんて事はなく、ただただ物を詰め込んで並べているようにも見えるほど、隙間なくその空間に食材が詰まつているだけ。入り口兼出口の所に人が立つていて、そこで会計するのは現実と似たような感じだ。その中を縫うように移動する一人組こと、シアとトツネの役割はきつちりと分かれていた。

シアはその視線を数ある商品に滑らせて、その質を見極めて、吟味した食材を手に取りトツネに手渡す。トツネはそれを受け取つて、その手にある食材の山に加えて抱きかかえる。

トツネの手にある食材は肉や野菜等、多種多様。完全にシアが仕切つて買い物をしていた。

「家事出来るつて羨ましいなあ。私が出来るのは鍛冶くらいだし……」

「やうなきやいけなかつたから、勝手に身に付いちゃつただけだよ。やればすぐに覚えるようなものだし……」

「そんなものなのかなあ……」

二人はそんな会話をしながら、店の会計を済ませ、紙袋に入れられた食材達を手分けして持つ。支払いは全てトツネ持ちだった。シア自身がお金をそんなに持つていらないのもあつたが、トツネはこれ

も依頼のサービスみたいな物だと呟つて、気持ちよべその支払いを請け負つたのだ。

一人は再び通りを歩く。今度は空いた手もなかつたが、話は弾む。

「……それで二ケとはどいついう関係なの？」

「えつ！？…………いつ、一緒に旅する冒険者、だよ……？」

「ふーん……、そつは、見えないけどねえ？」

意味深な笑みを浮かべ、隣を歩くシアにその視線を向けるトツネに、シアは顔を赤らめて紙袋に顔を埋める。

トツネはそんなシアを数秒間見てから駆け出し、シアの数歩前でぐるりと振り向く

「まあ、私には関係ないけどさ、大切な離しちゃ駄目だよ

「え……？」

トツネは笑う。シアが戸惑いの表情を浮かべても、何も言わずただ笑っていた。すると突然、進行方向に背を向けて進んでいたトツネが、シアの方へ駆け寄る。

「うわー！」

驚きの声を上げるトツネを、声こそ上げないもののシアも驚きのまま受け止める。一人まとめて倒れたり、シアが突き飛ばされるといつた事は無かつたが、シアはトツネの肩越しにその目の前にいる存在に顔を向けていた。

トツネも自分の身に何が起つたかわからなくて、シアの顔を見てからようやく正面を向く。

そこにいたのは男が一人。一人は煌びやかな鎧に全身を包んだ、青田の青年。髪も青色で、少し長めの髪の先々は尖つていてるかのよ

うに鋭い。その背中には身長には及ばないほどの、相當に大きな大剣が担がれている。その鋭い、嫌惡の色が満ちたその瞳がトツネ達に向けられていた。

もう一人は、打つて変わって地味な色のローブのよつな軽装に全身を包んでいる、赤めの青年。髪は搔き揚げられ、オールバックだ。腰には剣のようふら下げられているのは、ホルスターで固定された本。それもただの本ではなく。魔紋が刻まれた魔紋書だ。

魔紋書は一ページごとに異なる魔紋が刻まれていて、その該当ページを開いて魔法を発動することが出来る、いわば魔紋の集合体だ。もう一人の鎧の青年と見た目は同じぐらいで、シア達に向ける視線は鎧の男よりは柔らかいものの、嫌惡しているのは間違いなかつた。

「人様にぶつかって、謝罪もなしが」

「あつ……つと、『』、ごめんなさい！」

トツネは慌てて振り返り、鎧の男に荷物が落ちない程度に頭を下げて謝罪の言葉を言う。それを見てシアも遅れて頭を下げる。

そんな二人を鎧の男は鼻で笑い、蔑んだような目で見下す。そして鎧の男は後ろのもう一人の男に振り返る。

「よく見ると二人ともそこそこだな。おい、ステイード、どうする？」

「いいんじやないか？ 丁度いいだろ。悪くはないし」

一人の笑みは下品なものに変わり、その笑みを見たシア達は戦火に寒いものが走るのを感じた。直感で一人の言葉に隠された意味を感じ取り、それが嫌な感じがしたのだ。

だからトツネはすぐにシアの手を取り、走り出そうとする。

しかしトツネの足は一步踏み出して止まる。いや、止められた。シアの手を掴むトツネの肩に鎧の男は手をかけていて、力づくでその動きを止めたのだ。そしてそのままトツネが振り向くように腕を引いて、その力に抗えなかつたトツネはバランスを崩しながら振り向かざる終えなかつた。シアも手を握られていたために少し引っ張られ、体勢を崩す。

「おいおい、人にぶつかつとつてそれだけで済むと思つてんのか？ ちよつと付きあつてもらうわ」

そう言ひと鎧の男は強引にトツネの手を掴む。それをトツネが振り払つと、男の顔は歪んだ。

「女如きが調子に乗るなよ……！ 世界を救つてやろうつていう、俺のような冒険者の言う事が聞けないつて言うのかー？」

そう叫ぶ鎧の青年は、その振り払われた右手首についているものを、見せ付けるように構えた。

青年の腕には鎧に隠れていて見づらかつたが、確かに二ヶと同じ、国の募集に応じた証としての無色の宝石が付いた冒険証があつた。それを見てトツネもシアも唇を噛む。それは決して偽造する事が絶対に出来ない代物だ。

それを持つのは大抵は力のある冒険者だ。だからトツネもシアも、周りの人達も敵わなのがすぐにわかつてしまつ。

だから無闇に動く事はできない。冒険者は各地を飛びまわるため、変な噂が立てば魔紋と鍛冶を生業にする街にとつては痛手になつてしまつ。だから出来るだけ穩便に済ませないいけなかつた。

だといふのに、動く。その足を確かに一步踏み出す人影。紫の髪

を持つ少女、シアだ。

「その証を、あなたなんかが掲げるなんて……そんなの許せません！」

シアは下劣な行為をする鎧の男が許せなかつた。それはもちろん当事者として当たり前の反応なのだが、それとは別に、その男と二ヶが、無色の冒険証で重なつてしまつたからだ。

自分を救い、旅の同行も快諾してくれた優しい二ヶと、目の前の力で暴虐を振るう男が重なる事が、どうしても許せなかつた。だからシアは怒りのまま、物怖じせずに言い放つた。

もちろんその言葉で鎧の男は激昂する。元よりプライドの高いうえに、それまでは冒険証を見せれば誰もがひざまづいてきたため、今回もそうだと思っていたから。自分の思い通りに行かない事が気に喰わないのだ。

「つ……てめえ！ 調子に乗りやがつて……！」

状況は明らかにシア達の方が不利だつた。周りの人々も助けるような事はなく、ただ周りに野次馬のように群がり眺めるばかり。ツネの知り合いもその中には混ざつていたが、やはり打つ手はない。しかし、そんな中密かに、誰にも気付かれない場所でそれを見ていた女がいた。

騒動の場所は道具屋の目の前だつたのだ。

窓から事の顛末を見守つていた道具屋の女店主の二ーアは、その手に装飾が施された一本のペンを持ち、それを片耳に当てていた。それは現実世界で言う所の携帯電話と全く同じ役割を持つていた。もう既に誰かに掛けていいようすで、外の様子を心配そうに眺めながらも、そのペン先に声を掛ける。

「そりなの。……ええ、店の前で、トシネちゃんと女の子がなんか
変な奴に絡まれてるの。ヒ「ネさんはないの?……そり、私も出
来る事はして見るけど、相手が厄介だからどこのまで持つか分からな
いわ。出来るだけ早く……ええ、それじゃあ」

「一ーアはその耳からپンを離し近くの机に置いた。そして腹を決
めて扉を開ける。

扉を開ける直前、それは男達に向ける台詞の練習なのか、吐き捨
てるよに「一ーアは呟く。

「国の冒険者だか知らないけど、流石に無理矢理は許せないわねえ」

ゆつたりとした時間と空気は一変し、緊張が走る。

ディアさんが持つてるのは万年筆で、その表面にはシアの短刀に描かれていた紋様と似たようなものが刻まれている事から、それが魔紋が刻まれた何かしら道具である事は確かだつた。そしてそれまるで携帯電話のようにキヤップの部分を耳に、反対側を口に近づけ、会話している。

相手側の声は聞こえないものの、ディアさんの受け答えの声が真剣さを帯びている事から、何かしらの事件が起こつたのかも知れない。それが俺に関係あるかないかは分からぬが、ともかく平和な昼下がりにはなりそうもなかつた。

「わかつたわ。ヒロネさんはまだ戻らないけど……」

ディアさんは俺にちらりと視線向けてくる。その視線の意味は詳しくは分からぬが、俺に何かしら関係あるのはすぐに分かる。

それは俺に解決を頼むということなのか、俺に関わる何かが事件を起した、もしくは巻き込まれた、と考える事が出来る。その疑念からすぐに思いつくものがあつた。

まさか……。

「ええ、それじゃあ……」

ディアさんは通話を終える。手に持つ万年筆を机において、一呼吸の間を空ける。俺は気が気じやなかつた。もし俺の予想が当たつているのならば、今すぐでも飛び出して行く、そつ心に決めていた。

だからディアさんの口から、それを確信させる言葉が出ない限り

は俺は動かないつもりだった。むしろそうあつた方が俺は落ち着けるのだ。でも、そんな俺の考えは甘く、あつさりと裏切られる。

「シアちゃんとトツネが冒険者と揉め事になつてゐるそつよ。しかも無色の冒険証を持つてゐるから分は悪いわ」

無色の冒険証は俺の腕にも付けられた、國のため、世界のために尽力する事を誓つた冒険者のはずだ。なのになんでシア達が……。その時脳裏に言葉が浮かんだのは、レオン達との会話だ。そういう無色の冒険証は何かと優遇される事が多く、そう言つていた。それを逆に利用してある程度好き放題が出来るという事もある。そして俺は勘違いをしていたのだ。

レオンのような善良な冒険者ばかりだと、そつ思つてゐた。でもこの世界のNPCは生きて、独自の思考を持つてゐる。その人間臭さに俺は驚いていたはずだ。

どこまでも真っ白な人間が世界を覆いつくしてゐる、なんてことはまずあり得ない。百の人間がいれば、百の思想があるからだ。だから善良な冒険者がいれば、その反対の悪逆の冒険者だつてもおかしくない。理不尽にその力を振るう、そんな輩が。どの程度の揉め事なのか俺には検討も付かないが、少なくともシアとトツネが他人を不快にさせるようなことを好んですることは思えない。だから揉め事の発生した原因は、相手の理不尽か、何かしらの勘違いって所か……。

「場所は！？ すぐに向かいます！」

「ニーアの道具屋の前よ。ニーアが時間を稼いでくれてゐると思つけど、長くは持たないと思つわ」

それだけ聞いてすぐに駆け出す。

腰の剣を走りながら握り、祈る。どうか無事でいてくれよ……。

通りに出るとすぐにそれは見つかった。明らかに異様な人だからで騒がしい。しかしその中でも際立つて耳に届いたのは女性特有の叫び声。

「くそつ！」

それが誰のものかはわからないが、状況からしてシア達か二ーアさんのものだろう。俺は全速力で駆ける。これ以上どつかの冒険者なんかに好きになんかさせてやれない。

人だかりを搔き分けて前へ前へ体を運ぶ。視界が揺れて、それでふと思い出す。こんな状況がつい最近……、そう、シアを最初に助けた時もこうだった。

その事を思い出し、唇を噛み締める。あの時は舌先だけでやり過ごせたが、今回は相手が相手だ。口先だけでどうにかなる可能性は低く、最悪の場合はその冒険者と対等の証を持つ俺が、そいつと戦う事になるかも知れないが、そうなつたらやむ終えない。どちらにしろ見捨てるという選択肢はないのだから。

人ごみを抜けた先にあつたのは、無残な光景だった。

二ーアさんが倒れていて、それに寄り添うようにトツネがいる。明らかに二ーアさんに意識はない。そしてその先、人だかりが作る円の中心にシアがいた。短刀を手に、服はぼろぼろで、それでもその瞳には絶対に負けないという意思があつた。

相対するのは鎧の男。それとその後ろに明らかにこの町の人ではない、ローブを被つた男が嫌な笑みを浮かべながらその様子を眺めている。

「はっ！ だから女如きが俺様に敵うかよって！」

鎧の男はある「*う*」とかシアの腹部に回し蹴りを放つた。シアはそれを避ける事すら敵わずに、その体を吹き飛ばされる。それを……、しつかりと受け止める。

「あ……、二ヶ…… わ……ん?」

「ああ、もういい。もうこいんだ……」

俺は怒りというものを久々に思い出していた。あるいは憎しみといふ感情なのかも知れない。ともかく、目の前の男が許せなかつた。

「ごめん、なさい……」

そう言ってシアは体の力を抜いて、その瞼を閉じる。血や皿立つた外傷はないが、それでも相当な傷を負っているのは分かる。シアの体をゆっくりと降ろし、トツネに任せた。

「二ヶ、コイツには敵わないよー!」

「それでも……」

それでも、ここで引けるほど俺は理性的じゃない。鎧の男を注視するとそのステータスが識別で浮かび上がる。

装備は『蛇鱗の大剣』と青灯の鎧一式。浮かび上がった名前はグリード。

それが俺の定めた、敵の名前だった。

「……ここで引く訳には行かないんだよ

剣を引き抜く。日の光を受けて、刃の赤ががより一層輝きを増し、まるで俺の怒りを表すようだった。そしてその切つ先を敵に向ける。

俺が向けたのは、その優越に浸つた醜い顔のグリードといつ男。切つ先を向けても尚その余裕を崩さず、苛立つ口調で飄々と饒舌に語る。

「おいおい、騎士様の登場つてか？ つは！ ノイツあ傑作だ。その貧弱そうな体に、粗雑な鉄の固まり。それで俺と渡り合あうつか？ 夢見る騎士じつこもいいが、今は現実を見ろよ、分かるだろ？ この状況がいかに自分にとつて不利なのか。わかつたらとつと消えろ、雑魚。なあに女は悪いようにはしねえさ。女は俺達にとって貴重な清涼剤だからな」

「黙れよ、生きてる価値もない」

「……！ つてめえ……殺すぞ！」

グリードの田の色が変わる。余裕に満ちたむかつく顔も、今は怒りと憎悪に染まつた愉快な顔だ。正直な所、武器や防具を見る限り、勝てる気はしない。普通のゲームならば半ば諦めている所だが、今この瞬間だけは負けられない。どんな事をしても勝つと心に決める。

「圧勝する必要もない。いたぶる必要もない。泣いて許しを請わせる必要もない。

ただ勝てばいい。それだけが俺の出来る事。

「口だけならこぐらでも言えるぞ。御託はいからとつとと来いよ、

軟弱者

「くそがあああああ！」

それが引き金になつた。グリードは血管をはち切れんばかりに浮かび上がらせて、その背中の大剣を突進しながら引き抜く。勢いに任せたただの振り下ろし。それは俺の考えていた予想と全く同じ展開だ。馬鹿正直にやっても勝てるとは思えないのなら、相

手を馬鹿にするぐらいしか俺に勝ち目はない。

怒りは視野を狭くし、力任せの単調な攻撃に走りやすい。ましてやグリードのようなプライドの高い奴は、よりこの作戦にはまる可能性は高かった。

勢いも相まってその力は確かに凄まじかった。なにせ俺が避けて、放たれたその一撃が石畳に直撃すると、剣先を中心に小さなクレーターが出来るぐらいだ。当たればただではすまないのだろうが、当たらなければ結局無意味だ。

攻撃を避けられ硬直する隙を逃さぬよう、剣をすぐさま振る。スラッシュで威力を増した一撃を胸へと横一線に振ったが、金属的な音と共に手に衝撃が走り、思わず仰け反ってしまうほど弾かれる。しかしさなくともダメージは通ったようで、グリードもよろけるモーションをするが、それもすぐに立て直して、同じ横なぎの一撃で反撃して来る。

それを後ろに軽快に飛んで避けた。

その短いの攻防を経て、二人は場所を入れ替えて再び対峙する。

俺の動きが予想外だったのか、少し青ざめたような顔をするグリードに、俺は言葉で煽る。そんな事で、これぐらいでその気持ちが冷めてしまつてはこちらとしても困る。

種火があるうちに再び燃やさなければならぬ。鎮火した後にまた燃え上がらせるのは、かなり厳しい。だから今の内に決着をつけろか、手傷を負わせて有利な立場を確保するまでは怒りで冷静を燃やし尽くしてくれなければならぬ

「……………ツ！」

「…………おいおい、さつきまで余裕はどうしたよ？　まさかこれぐらいで全力か？　本当に口だけなんだな、お前」

「……………ツ！」

その顔には言葉にもならないならないのだろう。凄まじい怒りが浮かび上がる。

それでいい。そうでないといけない。だからもう少しだけ油断していくくれ。

今度は俺から切りかかる。考える時間を与えては駄目だ。剣のやり取りだけに集中させて、怒りだけを燃やし続けさせる。

一気に駆け寄り、右手に持った剣を無理のない軌道で斜めに切り上げる。

グリードはその軌道に交差するように大剣を構えて防御し、反撃しようと僅かに動く。しかし俺の狙いは元より剣ではなく、本当の狙いはただの蹴りだ。

切り上げた流れで体を捻り回し蹴りをガード出来るように、構えた大剣の中心に放つ。

それをすばやく察したグリードは律儀にそれをガードする。

今度は真正面で受けたので俺の蹴りの勢いのままグリードは押し込まれる。多少不器用な技でもステータスの数値によつて威力はある程度は保障されている。

そのまま一瞬のための後、蹴りを放つた足を地面へと強く降ろして体に無理矢理勢いを付けて振り降ろす。鎧で守られていない脳天を狙い放つた。

滑らかとは到底言えない様な体に無理のかかる連携技だが、それでも十分だった。

やはり地力はあるのだろう、グリードにとつては完全に予想外の攻撃にもかかわらず、咄嗟に片腕でガードする。それでも初撃よりはダメージが通つたはずだ。

反撃に備えて距離を取る。

グリードは地に膝をつけて、まるでひざまづくよつなポーズでいる。

……早く來い。……お前にはその状態が許せないはずだ。

ただ一方的に攻めるばかりでは相手も防御に専念して、隙を作ることを考えてしまう。冷静に戦況を分析されれば俺にとつてこの上ない不利になる。

だからターン制のように誘導し、適度に反撃をさせて調子に乗らせるのが俺の作戦だった。

なのに待つても、動かない。それどころか笑う。あれだけ激怒していたグリードが愉快そうに、笑う。

「……クックク……」

不気味なものを感した。それと同時に作戦が破綻してしまったような気がした。何事も予想通りに行かないのは世の常だが、それでも単純な奴ならある程度はその行動を予測して罠に誘い込める、そう思っていたのだが……これは嫌な気がする。

「そんなに死にてえのなら……全力で殺してやるよ。おい、ステイード！」

「……はいはい。つたくやりすぎないでよ、面倒だから」

グリードの言葉に反応したのは案の定、人だかりから浮いたローブの男。何か本を開きその口を動かしている。

その瞬間、本から光の玉が浮かび、グリードに飛んで吸い込まれる。他にも幾つかの光球が現れてはグリードに吸い込まれていく。

それの意味する所はすぐに浮かぶ。支援魔法だ。

すぐに地を蹴つて切りかかるが、軽々と大剣を振られ体ごと弾き飛ばされる。そして再び余裕を持つた憎憎しいほどのしたり顔を浮かべたグリードが地面に垂直に剣を突き立てる。その行動で出来たクレーターは、初撃を遥かに凌ぐものだつた。それはつまり、魔法の阻止に間に合わなかつた事を意味する強大な力だつた。

「さあて、ここまで舐めてくれたお礼だ。限界まで苛めて、てめえの田の前でその女共と遊んでやるよ」

怒りを忘れ、支援魔法でさりげに強化されたグリードに、俺は……
打つ手が思い浮かばなかつた。

負けられないのに、逃げられないのに、勝たなきやいけないのに。
打開できる術が一切浮かない。
絶望しか想像できなかつた。

状況は一変した。

ローブの男、ステイードと呼ばれた男の強化魔法でその身を大幅に強化したグリードは、今はもう怒りなど忘れ。その身を慢心に満たしていた。

しかし慢心はあくまで油断をするだけであつて、怒りで我を忘れた時のような猪突猛進をする訳じやない。勝つと確信しているからこそ、攻撃に備えて構えるでもなくその歩をゆっくりと進める。

一步ですら地面をへこませて風を生み出す、攻撃ともなりうる破壊力を秘めていた。その一步を一度、三度と繰り返し、人だかりによつて造られた闘技場のような円の空間の中心へと辿り着く。右手には軽々と大剣を持つている。

俺自身は倒れているシアとディアさん、それとトツネに、いつの間にか追いついてきていたディアさんがいるところまで下がついた。吹き飛ばされたダメージはあまりなかつたが、どのみちあんな状態になつたグリードと正面きつて戦う事は不可能だ。見て分かるほどの強さは、もはや立ち向かう事すら許さないようだつた。それでも……。倒れ、傷付いた姿のシア達を見れば、意地でもその足は持ち上がる。

「二ヶ、これ……」

「これは……」

突然近くにいたトツネがそれを手渡してきた。渡されたのは赤い皮に収まつた短刀。それは朝にトツネが揉めていた原因の品だつた。

「どうしてこれを……」

「母さんが持つてきてくれたの

ディアさんは頷く。きっと何か力になると思ったのだろう。しかし俺はこれに刻まれた魔法を知らないし、使える魔法もアビリティの関係で初級の物しか使えない。どうやっても形成を逆転出来るような魔法は使えないのだ。

それでも受け取った。どうせ片手は空いてるんだ。そこに鞘から抜き取った短刀を持つ。

システム的には多分装備状態にあるだろ？

「おいおい、苦し紛れでもそれはないだろ。道化にでもなるつもりか？ それなら喜んで歓迎してやるがな」

そんな事を言つグリードから田を離さないよにしながらも、メ

ニューを出して使える魔法を確認する。

魔法の欄にあつたのは『解呪^{ディスペル}』の文字。それを見た時にふとした予感がよぎる。

もしこの魔法でグリードの魔法を打ち消せれば、再びスティードが魔法が掛けられるまでの間は、グリードの強さも何とか出来るかも知れない範囲まで落ちる。

そうなれば今よりは希望が見出せるはずだ。やってみる価値はないとは言えない。

「そつちが来ないのなら、そつちから行つてやるよ。」

グリードが地面を抉りながら突進してくる。シア達に被害が及ばないよう横に飛び、さらに一本の剣を交差させてグリードの攻撃に備えた。

グリードはシア達の田の前で体を捻り、片足を軸にした回転切りで俺を狙つてくる。

それをあらかじめ構えていた剣で受けた。……のに俺は宙を飛び、

人のクツショーンへと背中から突っ込んだ。

クツショーンになつてしまつて下敷きになつてている人や、衝撃の余波で地面に倒されてしまった人に、短く謝罪だけしてすぐに駆け出す。最悪の場合街の人達に手を出さないと限らない。出来るだけ巻き込まないように気をつけながら、何とか解呪を試みるしかない。解呪は確認した時の説明に、剣が触れていないと使えないという説明が書かれていた。魔法が掛けられているのはグリード自身の体のみのようで、剣や鎧には包み込むような光のエフェクトは見当たらない。だから解呪をするのならば、グリードの体に直接短刀で触れなければいけない。それがどれだけ難しいかは身をもつて証明しているが、それでも勝機を掴むにはそれを意地でも成功させ、隙が生まれた瞬間に一気に畳み掛けて終わらせるしかない。

今はただ再起不能なダメージは負わないよう逃げ回つて隙を探し、それを突く事のみに専念する。

「さつきまでの勢いはどうしたあ！ まだまだ俺は元気だぞ」

下品な高笑いを織り交ぜながら挑発の言葉を吐いてくるが、一切を無視する。なにせそんな事を言いながらも、手に持つ剣はいつでもどんな攻撃でも迎撃できるように構えられている。

そういうたたかいで俺がシスティム的なものではない、経験として得たものだった。しかし、手を出せば反撃が来る事が分かっていても、そんなの構い無しに向こうから攻撃しに突っ込んでくるのには何の意味も持たない。

動き回る俺の行動を完全に先読みした、不意の一撃。

上空へ、太陽に突き刺すかのように振り上げられた大剣は、もう避ける事すら敵わない距離で俺を補足していた。

グリードもそれを分かつっていたのだろう。だからこそその顔が喜びに満ちるようすに笑う。

負けられない。

大剣がそこにとどまる事に飽いたのか、俺を切りたいと望むのか。ゆっくりと、まるでギロチンのように俺の頭へと落ちるのが見えた。

こんなところで負ける訳には行かない……！

ただその一心で俺は腕をがむしゃらに前へ、その大剣を拒絶するよう突き出す。

金属音が響き、衝撃が腕に伝い、背中に痛みが走り、見下したグリードの顔を見て、俺が地面に叩きつけられたのだと知つた。

「終わりだ……」

そう言つてグリードは再びゆっくりと大剣を振りあげる。今度こそそれは俺を処刑するギロチンになつた。

体が衝撃のせいで言つことを聞かない。動けと命令しても痙攣して動かない。

そういうしてゐうちにどんどん腕は持ち上げられていく。ゆっくりと、着実に、確実に。

そして……。

勢いよくその大剣が振り下ろされた。

思わず目を瞑る。こういうのは原始的な恐怖だ。死ないと分かっていても、痛みがないと知っていても、それでも反射的に起してしまつ。

もう気持ちは死んでいた。体が死ぬ前に、心が負けてしまつていた。

あれだけ負けないと負けるわけには行かない意気込んでおきながら、その力の差の前にはなにもかもが無意味だつた。

気持ちで現実は覆らない。現実世界ならばまだ可能性があるかもしれないが、仮想現実のなかでは数字だけが全てで、唯一の絶対だ。意思だとか心が入り込む隙間はなかつた。

だから俺はここで死ぬ。

……でも、俺が死んでこの世界、この後はどうなるんだ？ グリード達が勝利して、シア達を手籠めにする？ 俺は死体として処理されてしまうのか？

それともやつぱりゲームの定番で言つ所のゲームオーバー画面に飛んで、セーブした所からか？ 分からない。どちらにしろそれは死んで見なければ分からぬ事だ。しかし、もし前者ならば、俺は……。

想像すれば吐き気がこみ上がる。それと同時に怒りと苦しみまでもがこみ上がる。

金属音が耳に響く。かなり近い距離でうるさいほどだった。

目を開けると意識はあり、腹立たしいグリードの顔が見える。俺は、死んでなかつた。それどころか大剣は俺に触れててもいいな。

「殺すと思ったか？ 死んだと思ったか？ 残念。だつたな。俺はてめえを殺しもしないし、死なせるつもりもねえよ」

信じられない言葉だった。今までそんな素振りすら見せずに、本気で殺しに掛かっていたグリードがそんな言葉を口にするのは、俺にとつて予想外すぎる行動だった。

もしかして、これは何かしらのイベント扱いなのか……。

イベントの負け戦闘や、一定時間持ちこたえるとイベント発生、というのは別に珍しい事ではない。

だからグリードの取つた不可解な行動がイベントの一端だとするのならば、この状況を何とかしてくれる助つ人なんかが来る可能性はある。

それを僅かでも信じられるのならば、そこに希望が生まれる。

「言つたろ？ てめえの目の前での女共と遊んでやるつて！ だからてめえは殺さないんだ……ん？ つはいい表情だな。希望が絶望に変わったようなその表情。心地いいぜ」

僅かでも、極僅かでも、その光を見出そうとした自分が馬鹿だつたと知つた。

だからもう二つは信じてはいけないのだと、そう確信した。だから俺は左手に力を込める。

そこに握られたトツネの短刀が、今なら届くのだ。俺の絶望に油断し、かつ至近距離にいる今なら、短刀のリーチでもグリードの生身に届く……！

息を吸い、体に無理矢理力を込めて、大剣の柄を持つグリードの右手の鎧が守っていない部分目掛けて短刀を放つ。

「！ つぐ……」

捕られた！ 俺の行動にすぐさま反応したグリードだが、やはり油断しきつていたようで、避ける前に短刀が突き刺さる。

そして唱える。今度こそ光を見出すために。

「ディスペル
解呪！」

短刀が青く光る。一際強く光つたと思えば、すぐにその光はしばらくで消える。

隙を逃さぬようすぐにすぐさま右手の剣を不安定な体勢ながらも振つて、少しでもダメージを通しておく。地面に倒れたままの体勢からだと、鎧の隙間や鎧のカバーしていない部分に、片手剣を当てるのはその長さからいって難しいのだ。

腕の振りを使って今度は体勢を崩させるため片足を狙つた攻撃を仕掛ける。鎧ならばその重さのせいで一度倒れてしまえばこっちのものだ。

作戦は順調だった。

グリードが体勢を崩した隙に起き上がり、大剣に足をかけて使え

なくしてから、首に目標を定めて右手の剣を素早く振った。

手に感触が伝わる。……硬い、何かにぶつかる感触が。

グリードはその何も持たない手を掲げ、手甲によつて改心の一撃が防いだ。

すぐに身を引く。取つ組み合いになつても勝てる見込みは少ない。そもそも対術なんて現実世界でも習つた事すらないし、デュアルワールドでも剣ばかり降つていたのだから当然といえば当然なのが。どのみちこれで解呪が成功していれば、再び魔法を掛けるなりするはずだ、その隙を今度こそ逃さなければ、行ける……！

未知のものであればどうしようもないが、既知のものであれば破るための対策も考えられる。

「……ツクツクツク……魔法の初步すら知らないとは……とんだ騎士様だ！」

すぐにその意味が分かつた。その言葉は……解呪が強化魔法には意味を持たないのだと、そう告げていた。

「残念だが徒労に終わつたな。所詮安物の玩具か。どうする？ 策尽きた今、お前には勝つ術はあるまい。……そうだな、ここまで逃げ延びた褒美だ。裸で地面を舐めるというのなら、お前も俺達の後で、女共と遊んでもいいぞ。どうだ？」

腐つてるとしか言えない。ありえない。そんな事、ありえないしさせもしない……！

……でも、グリードの言つよつて俺に策はない。

それに……俺は内心負けたくないと繰り返しながら、……その実全くと言つていいほど、有利にすら立てていない。

……それで勝つなど考えるのは……我ながら滑稽だと思つてしまふ。

「何しよぼれてんだ！ 二ケーーー！」

声が聞こえた。それはトツネの声。励まし、激励する声。

「頼む……勝つてくれよ……！」

スースッと体に冷たいものが抜けていく感覚がした。
多分、俺は無意識のうちに手加減というものをしていた。いや……正しく言うならば躊躇していたのだ。相手が人だから、人の形をしていたから。

……グリーードは敵だ。倒さなきやならない敵。

人ではなく、魔物と同じ扱いでいい。そう自分に言い聞かせる。
……助けるべき人と同じ存在である者を、魔物と同じ物のような見方をするなんて、都合のいい事なのかも知れない。
だが今だけは……。

再び対峙した俺とグリーードは睨み合っていた。

俺はただその態度、行動、思想、何もかもが気に食わなくて、腹立たしくて。

グリーードは表に出す態度こそ余裕を保つてはいるが、その手につけられた傷といい、俺の行動にそのはらわたは煮えくり返つてはいるはずだ。

だからもう二人とも、ただ相手を倒すのではなく、殺す事しか考えていなかつた。このデュアルワールドで死がどのような形になるのかは知らないが、いずれにしろ決着はつく。それだけで十分だつた。

そして、二人は地を蹴つた。

多分、それは躊躇する必要もなかつたのかもしれない。

相手は『テー・タ』の塊で、俺は意識こそ生身のものだが、体は同じ『テー・タ』の塊。

だから一切の容赦もなく、自分の身が削れようとも痛みすら感じないこの体を、使い捨てるように使えば、強大な相手に立ち向かうのも難しいことじやない。

腕一本を消費して相手の動きを止められるのなら 勝てるのなら安いものだ。止められる時間がたとえ少しの間でも、急所をつくには十分な時間。

互いの距離が一気に縮まる。数秒と持たないでぶつかり合う程度の距離しかないのだから、互いが互いに向かつて走れば、そうなるのは当たり前のことだ。

グリードは一切の小細工もなしに、魔法で強化された力を頼りにして、無造作にその大剣を振るつ。

まともにぶつかり合えばまず俺が負ける。それは今に限らず最初からそうだった。だから俺はグリードの剣をまともに受けることはしない。……いや、俺のしようとしていることはまともに受けるといつたほうが正しいのかも知れない。

言わば、肉を切らせて骨を絶つ作戦なのだから。

距離を測り、右手を振り絞る。弓を引くように限界まで後ろに引く。全てはこの一突き スキル『ストライク』で決める。そして左手やその他のことは全て捨てる覚悟だ。ただ一回だけの攻撃に全てをかける。そしてそれで全てを終わらせる。

グリードは案の定考えなしの振り下ろしだったが、単純にそれだけでも俺にとつては致命的な脅威だ。でも引かない、引けない！ 体を捻り左手を構える。自分の体を抱くように構えた短剣はフェイクだ。斬りつける格好はするものの、実際はグリードの大剣を受

け止め、横にそらすだけの盾。

距離を測り、丁度グリードの顔の位置に掛けて、左手を右から左へ薙ぐ。

俺の捨て身の攻撃に多少は驚いたようだったが、それで止まるほどグリードは臆病ではなかつた。急制動をかけて速さを押さえ、首を後ろに反らして短刀を避ける。

グリードの大剣はまるでグリード自身とは別の意思を持つように止まる素振りすら見せず俺の体を両断しようと襲い掛かる。

それを振った左手で横合いから殴りつける。

大きく弾けるぐらいの力があればそれで傷を負うこともなかつただろうが、如何せんそういうまくはいかない。だが予想通りだつた。左手の感覚は一切がそぎ落とされたが、まだ体は動きをやめない。引き絞つた右手に力を込め、急制動のせいで切り取られたように動きを止めたグリードの首へ、狙いを定め、打ち抜く。

風切るよう、俺は腕を最大に伸ばしきつた。

グリードを殺すための剣はその首を確かに傷つけていた。

真つ二つではない。首の横を掠めるように俺の剣は伸びていて、直撃しなかつたのはグリードが直前で避けようとその首を無理矢理動かしたから。まずい、とその瞬間は思つたが、結果を見れば避け切れなかつたのだから、これで十分だつた。

グリードが膝を折つて地面にうずくまり、大剣は派手な音を立てて地面に放られ、その両手で切り裂かれた首筋を抑えている。

明らかに致命傷だつた。首筋を切られればその血管から溢れんばかりの血がこぼれる。それはすなわち死ぬ事と同じ。その猶予期間が出来ただけだ。

グリードの仲間であるステイードは、強化魔法を使つていたんだ、回復魔法ぐらい持つてはいるだろう。これで結局殺す事なく、殺される事なく事件は収束できる。後は俺が回復させる前に剣を突きつけて、回復させたきや負けを認めろ！ とでも言えればそれで終わる。助けられる……。

そしてそれを実行しようと剣をグリードに……え？

そこにはうずくまつたままのグリードが痛みを堪えるように傷口を押さえている。そして……その抑えた両手の隙間から伝い滴り落ちるのは真っ赤な鮮血。

ちょっと待て……このゲームは年齢制限がない。だからこんなリアルな表現は許されていないはずなのに……グリードから滴るもの、それは紛れも無い血だ。

ある予感が頭によぎり、恐る恐る俺は自分の左手を、グリードに勝つために捨てた左手を見る。

言葉は出なかつた。息を吸う事も吐く事も忘れ、それを見てしまつた。

抉られた肉が裏返り、その隙間から血が滴る。それを認識してしまつた瞬間、体を痛みが支配した。

俺はその場で膝をつぐ。

「な……んで……！」

ありえない。こんな事はありえない。なのに現実としてそこにあるつた。

足音が聞こえる。それも複数の。

苦痛に耐えながらも顔を上げると、シア達が一斉に駆け寄つてくる姿が見えた。

少しほっとする。傷み自体が和らいだ訳じゃないが、それでも気休め程度にはなる。なにせ俺の勝利条件はこれで達せられたようなものだから。

最後に立ち上がる。ゆっくりと確実に。本当に最後の力を振り絞つて。

シア達と同じ駆けて来たステイードに俺は震えた剣を突きつける。

そう、これで終わり。これを言わなければ……。

ステイードは痛みを堪え、死の恐怖に耐えるグリーードと俺を交互に見る。その顔は不安に満ちた顔。それを鼻で笑つてやる。

そして俺は告げる。

そして、それを聞かなければ、終われない。

「俺の、勝ちだ……。負けを、……認め、ろ」

「…………ああ

視界が暗闇に支配されていく。体は痛みに、意識は眠気に。俺は全てを投げ出して、全てを支配され、意識を失つた。

剣劇の終着（後書き）

短いお話ですがこれで一区切りと申しつ事で投稿をさせてもらいました。次の展開へと進む前に一度この物語を再構成したいと思つておりますので、しばらくは投稿の方も無くなると思います。この言葉を無かつたように次を投稿するかもしませんけどね……。

休息の一時（前書き）

前回の後書きなんてなかつたんです。一応手直しへこなすけど、やつぱり先を書きたい気持ちがあるので、ペースを落としていく方向にしました。

休息の一時

……何か声のようなものが聞こえる。

『システム制限の一級階段が解除されました。引き続きゲームをお楽しみください』

明瞭な女性の声だつた。頭に直接響くような不思議な声。声によって振り起こされた意識が、体の感覚を引き戻す。

……体が重い。ああ、そういえば俺はグリードと戦つたんだつか……。

それで最後に捨て身の攻撃で一撃を食らわせて……そして、勝つた。だけど俺も深手を負つて……そのまま……。

記憶を探る。そして思い出す。あの鮮血の惨状を。

何で？ どうして？ あの時は疑問に思つても、その答えを考えるほどの余裕はなかつたが……今は考えるまでもなく、俺は答えを知つている。

システム制限解除……。それが血と傷みを俺に及ぼしたのだ。何をきっかけにその現象が起きたのかは分からないし、そもそもその制限が解除されるような事はあつてはならないはずなのに、現に俺の身に降り注いでいるのだから、それは実際の出来事だと捉えるしかない。

粗方の情報を頭の中で整理してから、目をゆっくりと開く。

静かだつた。耳をそばだてれば遠くの方で相変わらず怒声や鍛治の音が聞こえるが、それが聞こえるのはこの部屋が静かなせいでもある。

窓から差し込む明かりは夕日の色をしていて、部屋をその色に染めていた。部屋は質素な造りだつたが、宿よりはまだ生活感がある。ふと、俺は視界の端に映つたものに気付いた。寝ぼけ眼もそのおかげで覚める。

枕元にもたれかかるように眠つたシアの頭を撫でようと、包帯で

巻かれた左手を動かそうとする。

「つぐ…………！」

僅かな動きだけでも声が漏れ出てしまうほどの激痛が走る。腕から肩に痛みは伝染し、左半身までも支配する。まるで長時間の正座で痺れた足のような感覚に近かつたが、それに痛みが伴っているのだから笑い事じゃない。

「ん……一、ケ……さん？　目が……」

多分きっと、そこでシアの動きが止まってしまったのは、俺が変な状態で、引きつった笑みを浮かべながらシアを見ていたからだろう。痛みを耐えながらも俺は必死に言葉を振り絞る努力をした。そしてようやく捻り出せたのは「……たんま」というどうしようもない言葉だった。

「大丈夫、ですか……？」

シアの優しい言葉に、健康そのものの右手を振つて大丈夫だとアピールする。

一人で腰掛けているベッドは、流石に一人分の体重のおかげで沈みはするものの、その弾力のおかげで心地良い。使われていたのか分からぬが、綺麗なシーツで、ホテルのような清潔さだ。

「なあ、シア……あれから、どうなったんだ？」

俺は自分の傷よりもそつちの方が気になっていた。

戦いに勝つて、負けを認めさせて……。そこまでしか俺は知らない。だからその後の事、傷を負ったグリードとその仲間である魔法使いステイード、ニーアさんやシアも傷を負っていたし、シアは俺の看病をしてくれていたぐらいだから大事はないとは思うが、それも含めて、どうなったのか。知りたかった。

「私と、ニーアさんは軽い打ち身だけ……、他の人も剣は使わなかつたから……。今はニーアさんとティアさん、トツネちゃんが晩御飯の買出しに行っています……」

「そつか……」

女は強い。体じゃなくて、なんというか心の切り替えの速さ、とでも言うべきか。もちろん全く気にしてない、考えてないって訳ではないだろうけど、そこを割り切つて晩御飯の買出しに行けるのは、心をしつかりと持つているから、なのだろう。

俺ならじばらくは怪我を理由に介抱してもらうの……。

「あとあの人達はその場で傷を治してから、どこかへ行きました。何も、言わないまま……」

「……そつか。まあ、あの後また横暴な事しなかつただけマシか……」

……

実際、あの一人にはそれを行うだけの力もあつただろう。

グリードは傷さえ治れば普段と全く変わらない力を出せたはずだし、ステイードも強化魔法と治癒魔法しか使っていないから、それしきでMPが切れる事もないだろう。その風貌から察するに魔法主体だとすぐにわかるし、たかだか数回の魔法でMPが切れてしまうようなら、グリードの相棒的立ち位置にはいられない。あの性格だ、弱ければ容赦なく切り捨てるはず。

それでも何もせずその場を去ったのは、傲慢故に屈辱に耐えれな

かつたか、俺に敬意でも表してくれたか……ないな。まずない。あの性格でそれはない。

まあ、いいか。何もせすどこかへ行つたんだ。今後会わないことを探る。冒険者らしく魔物退治にでも励んでいれば、俺はもう何も気にする事はない。

わざわざ探し出してあれこれ言つのも面倒だし。

「そりだ、シア。ここは一体どこなんだ?」

「ここはトツネさんの家の二階です」

「ああ……」

ディアさんが現れたのは確かに二階だつたな。それならこの生活感も納得いくが、誰の部屋だとかは考えちゃいけないだろ?……。

そんな事を思つていると声が聞こえる。俺やシアじゃない、それでいてどこか聞いた事がある声が複数。少し 笠つたような感じだが、言葉としてははつきりと聞き取れる。

そういうえばディアさんが二階の会話は二階に筒抜けだつて言つてたな……。

「母ちゃん、準備手伝つよ」

「あら珍しい。頭でも打つたのかしら」

「そうじやないよ。……ほら、今日の事件だつて私が原因のようなものだし……料理ぐらう振舞つたつてどうしようもなこと思つけど、それでも……」

「……わかつたわ。すぐに準備しましょ? 二ケ君が田を覚ます頃には出来立ての料理が並んでいなきや、示しがつかないわ。一ーアは休んでて。まだ傷が痛むでしょ?」

「すまない、姉さん。食事まで……」

「気にしないの。子の責任は親の責任。あなたは私の子供を守ろうとして傷付いたのだから、謝られちゃ私が困るわ」

その後はもう声は遠くなり、会話は聞こえなかつた。おそらくはトツネとディアさんが料理の準備に、ニーアさんはそんな一人の後姿でも見ながら椅子にでも座つてゐるのだろう。道具屋にいた時も心地良さそうに座りつぱなしだったし。

しかし、今の会話からするに、どうやら俺がこのタイミングで下に降りるとまずい気がした。

「もう少し、ここにいた方がいいかな？」

俺と同じく下の会話に耳を傾けていたシアに、俺はそんな事を投げかける。料理が出来たタイミングで降りた方が、色々と向こうにとつて都合も良さそうだった。今から下に降りても何もする事もなければ、ただディアさんたちが申し訳なく思つてしまつだけだ。

それに……。

「……そう、みたいですね」

もう少しシアと二人きりでいてもいいだろう。あれだけの事をやつて、予想外の痛みにも耐え、その結果として少しごらりと甘えたつて誰も咎めはしない、はず。

はにかむシアの顔は夕日のせいで赤く染まつていた。

「…………」

沈黙が部屋を覆いつくす。何というか……この雰囲気は、ビームとなく苦手だ。

シアと視線が合つ。大きくて丸いその瞳に、吸い込まれるようこ魅入つてしまふ。視線をずらす事は出来なかつた。いや、俺が許さなかつた。

時が止まつたような錯覚を覚える。夕日の色が少しづつ変わつていくのが見て取れるのだから、それは間違いなく錯覚なのだが、それでも二人は止まつていた。

「……あ、あの！」

先に沈黙を破つたのはシアだつた。口も落ちかけているというのに未だに顔は赤くて、必死にその言葉を紡いだのか、緊張で今にも心臓が破れそうな顔をしていた。

俺はそんなシアの顔を見て笑つてしまつ。そのあまりにも真剣ながらもどこか間の抜けたような表情を見て、笑わずにいられなかつた。

「な、なんで笑うんですか……！」

少しむくれた表情へとかわるシアへ、俺はよつやく笑いを收め、改めて向き合つ。

「いや、悪い。シアを見ると面白くてな……

「ど、どういうことですか……ー？」

今度は驚き慌てるような表情。見てて飽きない。

そんな表情を、ずっと見ていたい。もつと見てみたい。そんな事を思うのはきっと変なのだ。

シアはゲームのキャラ。自分の頭脳と思考を持つてはいるが、それはA.I.であつて、あくまで考える頭を持つてはいるというだけ。そこには人間としての意志は……。

……何を馬鹿な事を考へてるんだ。シアは、いや、シアだけじゃなくこの世界に住む人達はみんな人間だ。だってこんなにも笑つて怒つて悲しんで喜べる。それを人間と呼べないのなら、俺でさ

え人間じゃない。

デュアルワールドの住人には心がある。何も知らない人からすればふざけた戯言かも知れない。それでも俺はこの世界の住人が人間であると、断言できる。

でなければこの気持ちも嘘になつてしまつ。

「いや、気にしないで。独り言だから」

「そう言われると余計に気になるんですけど……」

もし俺がこの気持ちを打ち明けたとして、シアはどう受け取つてくれるのだろうか？ ゲーム的にはどうなるんだろうか？ それは見当もつかない。

なにせシステム制限すら解除されてしまつてしているのだから、これから何が起きようとも何ら不思議ではない。

ふと思い立つてメニュー何気ない仕草で開く。シアには画面は見えないから、動作だけ自然にしていれば何も怪しまれる事はない。

メニュー開いたのはある一点を確認するため。この世界から脱出する手段である中断とゲーム終了の欄。それらがさつきのシステム制限解除というアナウンスがきつかけで、使えなくなつてしまつていたりしないか、それだけを確認したかつた。

漫画や小説、ゲームでも、時代を先取りしてて、このデュアルワールドのようなVRゲームで異常が発生し、大概はMMOが舞台だつたので数千から数万というプレイヤーがログアウト出来ずに閉じ込められる、なんて話を見た事があつた。

それと今のこの状況はまさに一緒なのだ。

世界初のVRゲーム。そして本来ありえない血の描写に痛覚の解放。それはこの仮想世界をより現実世界に近づける事象だ。

そして、ログアウトが出来ずにゲームの世界に閉じ込められた人々は、大抵が現実の死と隣り合わせの環境に置かれる。いわゆるデ

スゲームという事態に陥る。

アバターが自分自身となり、ゲームの世界で生き抜いていく。

そんな筋書きに必要な条件が今の俺には、このデュアルワールド
という世界には揃っていた。

MMOではなくオンラインのRPGなので、現実の人間がプレイヤーと言つ事はないが、その代わりに仮想世界の人はたくさんいる。そして俺のアバターはシステム制限解除に伴い、より現実的にこの世界を感じる事の出来る、年齢制限などどこ吹く風の描写と、同じく痛覚の解放。そして俺が今確認しようとしている、ログアウトが出来ない、という状況にもしなつていれば、ここは死が隣り合わせの箱庭と化す。

恐る恐る視線を向ける。中断とゲーム終了の文字がそこにあつた。その色もまた白く、ログアウト不可能という状態にはないようだつた。その見た目だけならば。

ただそこにいつもと変わらなくあるだけで、それを無条件に信じられるほど俺はこのゲームを普通に遊べた訳じやない。グリードとの戦いでそれを知つた。

ログアウトできなければそんな表記も何も意味はなさない。

だから俺は中断という欄に狙いを定め、指先で叩いた。

もし成功したとしても中断だけなら、デュアルワールド内の時間は進まずに済む。叩いた指先に反応して次の画面が空中に現れる。改めての確認の画面だ。それをもう一度力強く肯定の文字を叩く。

その瞬間、体から感覚が抜け落ち、意識が途絶えた。

田を開いた。そこは生活感のある見知らぬ部屋でも、隣で可愛い女の子が心配してくれるなんていう状況でもなく、左手に常に疼いていた痛みすら消え去つて、何年と過ごした自分の部屋だけがあつた。

俺は、無事に現実世界に戻ってきた。これで、あのゲームがデスゲームではない事が証明された。……もつとも、今は、だが。あの声はシステムが第一段階解除された、そう言つていた。

あえて第一段階と言つたのだから、さらにその上、第二段階が存在していても、何ら不思議な事じやない。具体的に何が解放されるのかは分からぬが、どちらにしろそれは仮想現実がより現実世界に近付く、そういうものである可能性は十分にある。それこそデスマゲーム状態になる、とか。

一人で考えていてもしようがない。今は出来るだけデュアルワールドについて情報を集めよう。

じついう時に便利なのはパソコンだ。不特定多数が情報を持ち寄る、巨大な書庫のようなインターネットから、出来るだけ情報をかき集める。

一番欲しいのは、俺と同じくシステム制限解除を通告された者の情報だ。類似点でも見つかれば何か制限解除の鍵が見つかるかもしれない。

あとはこまごまとしたゲームとしての情報。現実のように傷みが伴うのならば敵の情報、フィールドの情報は出来るだけ知つておいたほうが危険は少ない。

攻略前から情報を知るというのは、俺のゲームの楽しみ方に反する事で、普通ではまずありえなかつたが、今は状況が普通じやない。この明らかに違法で無法な現状を、警察などに通報するというのも考えたが、それは留まつた。現状では十分な証拠がないのだ。

複数人、それも二人や三人ではない、結構な数の人がそう証言するならば警察も動き出してくれるだろう。しかし今は俺しかシステム制限を解除した者を知らない。

だから俺以外にもシステム制限を解除したものがいる事を確かめてから通報した方が、何かと都合が良い。

俺一人で通報して、良い年した男がゲームばかりして頭がおかしくなった、とでも思われたら一大事だし、ここは慎重になつてもいいはずだ。まだデュアルワールドで致命的な事態が起きた訳じゃない。現実世界に戻れば痛みだつて消えるのだから。

手早くパソコンの電源を入れ、情報の海へ飛び込む。デジタル表記の時計が示す時間は三時過ぎだつた。

俺は時を忘れて出来る限りの情報を集めた。

しかし俺のようにシステム制限を解除した、という情報は一切なく、見る限り誰も彼もがただVRゲームとして楽しんでいた。

ふと、まるで俺だけが異常な存在になつて、世界から取り残されたような、そんな感覚を覚えてしまう。

もしかしたらこの世界すらまだ仮想現実の中なのではないか、そんな事を思つてしまふ。

夢から覚めるには頬をつねるといい。そんな事を思い出し、唐突に自分の頬をつねつて見るが、もちろん痛くて俺はただ自分を苛めているだけだつた。……そもそも仮想現実ですら傷みが再現されるのだから、こんな事しても何の証明にすらならない、全くの無意味だつた。

気を確かに持て。そう自分に言い聞かせ、思い込む。

改めて集めた情報を元に判明した事実を頭の中で整理する。

まず事の始まりは全員が共通だつた。王様の下に集まつた状態で、王様の言葉と共に決起の声が上がる。そして門の前まで出ると後は各自自由行動、という流れだ。

その後はもう各自が好き勝手やつていたらしく、あまり共通した情報は得られなかつた。もっとも出現する魔物や、街の位置と施設

など世界の基礎は一切変わつていないらしく、ウルフリーダーに食い殺された、だとか、道具屋のニーアさんが俺の好みだとか、それらに遭遇している俺にとっては、どこか微笑ましくなつてしまふうなのも目にした。

しかしシアは一切その名前を挙げられていなかつた。冒険の始まりからすぐの広場で人だかり作つていれば、誰か一人ぐらいは俺と同じように食い付いてもおかしくないのに、ましてや可愛い女の子ともすれば男達は放つておかなければはずなのに。

起動時の乱数で発生するイベントなのだろうか……。そうだとすれば俺は相当に幸運だつたという事になる。

正直俺一人、初期レベルの初期装備で、ウルフリーダー達に勝てる見込みはゼロだつた。シアがいたからこそ俺は生き延びる事が出来たのだ。

それ以外でもシアの力を借りつぱなしだ。戻つたら改めてお礼の一つでもしないと……。

そこまで考えて、俺は気付いた。

俺はいつの間にか、またあの世界に戻る事を当たり前のように考えている。

傷みが再現される世界だといつのに、もはやゲームとはいえないほど危険な世界なのに、それでも俺はあの世界でシアと共に冒険者として旅をする事を、当たり前のように、それが当然だと、疑問すら持たずに思つていた。

……もしかすると、これがシステム制限の鍵なんぢゃないだらうか。俺はそんな事を考えてしまつ。

どんなに危険があるうとも、どんな困難だらうと、向かつていける。それを誰かのために 俺ならシアのために。

俺は現実世界と仮想世界を行き来できる。だがシアは仮想世界の住人で、現実世界には来る事は敵わない。再び会うには俺が仮想世界へ向かわなきゃいけない。

でもそこは俺にとつて死と隣り合わせの世界だ。環境の整つてい

る現代日本に比べて、魔物が蔓延る無法地帯の方が多い世界が、どれだけ危険かなんてのは比較するまでもなく分かる事だ。

それでも大切な人のために、立ち向かえる気持ちがあるかどうか。それが鍵となるのではないか。

……荒唐無稽もいいところか。

第一そのためには誰かと一定以上に親密になつた上で、さらにその気持ちを汲み取る事が出来なければならない。VRGだけで俺の心が読み取れるとも思えないし、前提が揃わないのなら、すべては無意味だ。

見慣れた天井に向けため息をつく。こうしたのはもう何度目か。

もはや癖のようなものだ。

椅子が軋む音を立て、俺の反った背中に合わせて曲がる。

色々とあつたが、真相ははつきりとしない。分からぬ事が多すぎる。

その真相を暴くためにはゲームをクリア、もしくはシステム制限とやらを解除していくしかないのかも知れない。もっともそれすら俺の推測に過ぎないが。

もう一度ため息をつく。考えすぎて知恵熱で倒れそうだ。

パソコンの電源を落とし、椅子から離れベッドへと倒れこむ。その衝撃でVRGがベッドから落ちそうになつたのを慌てて確保し、安全な所に置いてからうつ伏せになつて再び考え込む。

幾つかの疑問は浮かべ、その答えは闇の中。思い出したのはシアの顔。

瞼が重い。ああ、俺は眠いんだと自覚した時には、もう睡魔の誘惑に勝てないほどに眠かった。

白を基調とした内装は清潔さを感じさせる。家具等は綺麗に整理整頓されていて、使っているのかどうかも怪しい綺麗さだったが、

ほこり等はなく、ちゃんと手入れが行き届いているようだつた。

その中で静かにその駆動音を鳴らしながら、点滅する光、点灯する光が散りばめられた大きな箱のような物体の前に、一人の男がいた。全身が彩色のない地味な服装で、その格好は明るさと清潔さを演出する部屋の色とは反対で、混ざる事のない浮いたものだつたが、それでいてどこか馴染むような矛盾する雰囲気だつた。

優しく撫でるようにその箱の表面に手を触れている男の表情は、少し長めの髪に潜んでいたが、それでも垣間見える顔はどこか寂しげで、それでいてどこか悲哀なものを纏つていた。

「……やつと、一人目だ」

男は呟いた。誰かに語りかけるように、それでいて誰もいない空間での独り言のように。

それに応える者はいない。

それでも男はそれを気にも止めず、ただ稼動する箱に手を掛けたままだつた。

まぶたを持ち上げると眩しい陽光が目に染みる。そういえば夜にカーテンを閉める事も忘れて、そのまま寝入つたんだっけか……。思い起こすとどこか遠い思い出のような、デュアルワールドでの出来事が頭をよぎる。それでもベッドの脇に置いてあるVRGを被り、再びその世界に行けばそれが夢や幻ではない事は実感できるだろつ。

携帯の画面に触れて、真っ暗な画面を消し、現れた待ち受け画面で今の時刻を確認する。

今日もバイトは休みを取つて出勤する必要もないが、明日からはその分働く羽目になる。まあ、それも当然の代償だろつ。

幸いにも俺がゲームをプレイしていない時間は、ゲーム内の時間も止まる。自分の都合で中断出来るのは色々と助かるものだ。

現在時刻は朝の七時。雀がその声で朝の挨拶をしてくるようだつた。

真夜中まで起きていたのに、こんな時間に目を覚ましてしまうのもなんだか不思議なものだ。いつもなら睡前まで寝ているのが当たり前なのに、今日に限っては健康的な目覚めを体が欲していたのかも知れない。

睡眠時間自体はとても健康的なものとは言いがたかったが、少なくとも一度寝をするぐらい眠い訳でもないし、目が覚めてしまったのだから仕方ない。

折角この時間に起きてしまったのだし、久々に朝の家族の団欒でも楽しむ事にしよう。

デュアルワールドの事は後回しだ。ゆっくり考えても手遅れになる事はない。

そして俺は部屋の扉を開け、居間へ向かうのだった。

階段を降りて、居間に顔を出すと鼻をくすぐる良い香りがした。見れば母さんが台所に立っていて、慣れた手つきで料理をしているところだった。

台所はカウンターのようになつていて、一階から降りる階段の所からだと、店員と客が向かって立つような形に自然となつてしまつ。

「おはよう、母さん」

「あら珍しいわね。おはよう、啓介。そうだついでだから由紀を起してきてくれる?」

「あー、うん、わかった」

居間に入つてすぐに俺は踵を返して階段を上つていぐ。

妹の部屋は俺の部屋の隣だ。今日は平日だし、高校生はしつかりと学校のある日だ。この時間まで寝ているつてのも高校生としてど

うなんだ、とも思わないでもないが、まあそこら辺は俺には関係ないのでどうでもいいのだけれど。

すぐにドアの前まで辿り着く。一回続けてノックをするが反応はない。もう一度……反応なし。最後のダメ押しでもう一回。結果は言つまでもなかつた。

仕方ない……。あんまり気は進まないが……ドアノブに手を掛け
てゆっくりと捻り、開く。

中は暗かつた。とはいえ小玉電球　豆電球だと常夜灯などと
呼ばれる事もあるが　ともかくその夕焼けのような光のおかげで
全く室内の様子が分からないという事はなかつた。

しかし、明かりがついていようと、足の踏み場がほとんどない
ような状態だつた。

暗がりで具体的に何なのかといつのは分かりにくいが、床にこれ
でもかというぐらいため息が散乱している。主に脱ぎ散らかした服だ。
そのあまりの汚さに、つい、ため息が出てしまう。仕方ないので
その中を足の踏み場を見極めて進み、カーテンの掛かつた窓へと近
付き、一気に開く。

カーテンは音を立てて左右に引かれ、眩い日の光が窓を抜けて部
屋を一気に明るくする。

「ん……つ……」

由紀の声が聞こえた。流石にこれだけやれば目も覚ますようだ。
俺は再び足場を探しながら部屋の電灯まで行って電気を完全に消す。

「……あ、れ……つて、何やつてんの?兄貴」

花も恥らう高校生としてどうなのかと問い合わせたくなる格好のま
ま、寝ぼけ眼を擦る由紀に俺はまたもため息をついてしまう。

「時間だ時間。起きないと遅刻するや」

「ふーん……あ、本当だ」

もぞもぞと携帯に手を伸ばして時間を確認する辺りは、兄妹故か現代の若者だからなのか。といつかこいつは嘘だとでも思つてたんだろうか……。もう一度ため息をつきそうになつて、俺はそれを止める。

ため息の数だけ幸せが逃げる、とはよく言つたものだが、実際問題ため息をついてばかりでは何も進展がない。ため息をつく暇があったら動けと言つてゐるようなものだと、俺は思つてゐる。

「一度寝するなよ」
「分かってるつて」
「あと部屋を片付けや」
「つるわーーー！」

そんなやり取りをしながらも俺は部屋をそそくさと出て扉を閉じる。俺の朝の一仕事はこれで終わりだ。とりあえず歯を磨いて、シャワーでも浴びるか……。

再び居間に戻るとテーブルには料理が並び始めていた。いつも俺が朝には大体寝たままなので、朝食は基本的に冷蔵庫に詰められてゐるのだが、今日は珍しく朝に起きて来たからか食卓には俺の分の料理も並んでいた。

手早く手際よく配膳する母さんにしつかりと由紀を起こした事を告げて、俺は洗面所へと向かつた。

俺と由紀、母さんの三人が食卓に座り、テレビの音声をBGMにして食事を楽しんでいた。

「何で兄貴がこんな朝っぱらから起きてんのよ」

「起きたからだ」

朝の食事は目玉焼きとトースト、それにサラダという随分とオーソドックスな品揃えだったが、朝にのんびりと食事をする事のない由紀と、そもそも小食な母さんはこれで十分だった。俺には少し物足りないが、腹は膨れるので何も言う事はない。むしろ毎日手間を掛けさせている分、この程度で文句を言つのも馬鹿らしい。

「でも本当に珍しいわね、啓介がこんな朝から起きてくるのも「たまたまだよ」

そんな会話を繰り返していると、ふと聞き慣れた単語が耳に飛び込んでくる。

『世界初のVRゲームは、発売から一日たった今日もまだその熱は冷めやらぬようで、その中でも一番人気なのは『デュアルワールド』と言つVRPGゲームらしく、その購入者の数は……』

……思わずテレビ画面に見入ってしまった。そういうえばまだ一日しか経つてないんだつたな、現実時間では。

デュアルワールドでは実質一日に近い時間を過ごしている。それも色々と詰め込まれた濃密な時間だ。バイトで過ごす四時間が向こうの世界では一時間足らずのよつにも思える。あくまで俺の体感での話だが。

「大丈夫のかしらね、この……VRゲーム？ つて言つのは……」

「大丈夫なんじゃない？ 売られてるんだし」

母さんの心配する言葉にも由紀はどうでも良やうに軽く返していく。

しかし、俺は何とも言えない気持ちになっていた。
何故なら俺はそのVRゲームでありえない事態を体験しているのだ。それをここで告げるのは……。

迷った。でも、俺はそれを言わない事にした。多分言えれば母さんは心配するし、由紀は馬鹿じやねーの、とか言つてくるだろうけど、どのみちVRGは俺の手元からなくなる事になるだろう。VRGだけじゃない。そのソフトである「デュアルワールド」、それと……俺がその中で過ごした記憶も一緒に。

そんな事は今の俺にとってはありえない選択だ。

「……あつと、大丈夫だよ」

「…………兄貴なんか変だよ」

あつからかんと言い放つ由紀の言葉に俺は驚いた。そんなに俺の心情は顔に出てこるのだろうか……。

「そんな事ないさ」

「いや、絶対変」

……全く妙な所で勘がいいのは母さん譲りなのか、女の勘つて奴なのか。やっぱり女つて怖いな。

とはいえた真相を話せば、さつき考えたとおりの展開になってしまふし、俺は話題を無理矢理変えるために、一度息を細く吐く。

俺の反応を待っているのか由紀も母さんも箸を止めて、俺の事を見ている。

「由紀、時間だぞ」

「えつ、あ、本当だ。まづつ！」

俺がやつらと一人は一斉に慌てだす。

由紀は急いで食べ終わりそうだったトーストを全部丸めて口に放り込み、皿を全部重ね一つにしてから台所へと小走りで持っていく。母さんも由紀を追うように椅子から立ち上がり、玄関へ向かう。由紀の見送りのためだ。俺も今日は起きているし、久々に見送つてやるとするか……。

昔は一緒に登校したものだが、今はそんな事は全くなくて、極稀に見送りをする程度に収まっている。

玄関を開けて飛び出そうとしたところで俺も母さんに追いつき、玄関口に立つ。

「それじゃあ行つてやる
「行つてらつしゃい」「行つて來い」

一人して由紀を見送った。扉が閉まる寸前に由紀がこっちを見ていたが、さつと俺がどこかいつもと違うと、そう感じてくるからなのだろう。

ゆつくりとドアは閉まつていき、やがてつまらない音を立てて完全に閉じた。

それを確認してから俺と母さんは居間へと戻つてくる。テレビの話題はもう別のものに切り替わっていた。

その後は俺と母さんが食事を食べて、俺が家事をしていると母さんがどうやら出る時間になつたらしく、今度は母さんを見送るために俺は再び玄関口に立つた。

「それじゃあ行つてくるわね

「ああ、行つてらつしゃい」

俺はスーツに身を包んだ母さんの背中を見送った。時刻は大体九時ぐらい。

そろそろいつもの俺が起き出して来る時刻でもあるのだが、今日に限つてはそんな事もなく、逆に見送る立場になつてしまつた。

そして俺は改めて気合を入れる。全ては家事をこなすために。

何というか、久々な朝の空気に俺の気分は何故か高まつて、母さんが多分いつも通りの家事をこなそうとしたのだろう。それを俺は制して「後は俺がやつておくから」なんて言つたので、母さんは喜んでいたのだが、一方で「やつぱり由紀が言うように少し変よ、啓介」なんて言われもした。引きつった笑いだけでやり過ごしたが。

家事はすぐに終わつた。洗濯、食器洗い、床掃除等など……。

普段は俺が起きる前に母さんが全てやつてしまふのだけど、俺だつて手順を全く知らない訳じやない。そもそも学校に通つてた時は毎朝やつてたものだ。

全てを終わらせて俺は自室に籠る。もちろんやる事は一つだ。

VRGを手に取る。それを被つてVR移行ボタンを押せば、それだけでのシアと二人きりの空間に飛ぶ事になる。

何をどこまで話していたかなんてのはもはや空の彼方まで飛んでいつてしまつてるが、そこは流れを察知し、誤魔化して何とかするしかない。

息を吐く。なんだか最初に被つた時よりも緊張しているような気がしないでもないが、多分本当に緊張している。……心臓の鼓動が強くなつていて。

それら全て飲み込むように意を決して勢いよくVRGを被り、ボタンを押した。

感覚は吸い取られるように無くなり、思考も全てが遮断された。

俺は、自分の意思でこの世界に戻ってきた。

左手に傷みが再び宿り、俺を苛む。鬱陶しいその痛みも今は俺が仮想世界にいる証になる。

部屋は薄暗く、普通ならすぐにでも電気を点けるところだが、いまは体を動かす氣にもならない。

そもそもゲームのシステムで勝手にやつてくれる明度調整のおかげで、最低限の視界の確保はされている。流石に真っ暗闇だと、ものの輪郭が見える程度でしかないのだけだ。

今は少しの明かりが部屋を二人を照らしてくれているから、互いの顔も見れるし表情だつて読み取れる。

俺はポツリと呟いた。

それは多分、俺の心の底にあつた想い。

「なあ、シア」

「……なんですか？」

現実に戻った事で生まれてしまつた想い。

「もし、自分とは絶対に相容れない存在に恋をしたら、それは許される事なのかな？」

結局、それが全てを隔ててしまうのだ。どんな人のような容姿を持つっていても、どんな人らしい思考を持つっていても、それでも間にある溝は埋められない。

「……良いと、思います。それが本当の気持ちなら」

「…………そつか」

肩の荷が下りた、とでも言つべきか。溝を少しだけ埋める事が出来た、と言つべきか。

なんにせよ、少しは気持ちも楽になる。

もう日は落ちたのか、部屋は暗い。夕焼けの色は欠片すら残つていなかつた。

静寂の包む中、軋むような音がした。

「行こう、シア。どうやら準備も終わつたみたいだ」

「……はい」

そして俺とシアが立ち上がると、床を鳴らす足音が扉の前で止まり、ノックの音が二回鳴る。

その返事代わりに扉へ近付いて開けると、そこには金色の髪を揺らして立つ二ーアさんがいた。

「お邪魔だったかな」

「……そんな事は」

意味ありげな薄い笑みを浮かべた二ーアさんに苦笑いで返し、三人は並んで階段を降りていく。

階段を下りると、テーブル同士を引き合わせた急造の大きなテーブルに、料理が並んでいて、机のほとんどを埋め尽くしていた。そして椅子とテーブルだけで一階の空間の三分の一ぐらいは占領していた。

色とりどりの料理が揃い、湯気を立てて出来上がつたばかりだと誇示しているものもあった。

「二ケ君、起きたのね。怪我、大丈夫?」

「ええ、まだ少し痛みますけど、そんなでもないです」

「本当に大丈夫か、二ヶ」

「大丈夫、心配するほどじゃないよ」

ディアさんとトツネに心配されるが、なんて事はない。実際に痛みこそあれど動けない訳じやないし、食欲もしつかりとある。だから俺はただの怪我人だ。

それにここでいちいち取り合つていたら折角の料理も冷めてしまふ。

「そんな事より、食べましょう。冷めちゃいますよ」

俺はそれでも心配そうな表情のトツネに、大丈夫だと後押しするためにも、明るい表情を作り、元気で明瞭な声を作り、そう言った。そして全員が椅子に座り、食事を始める準備が整つてきた所で、勢いよく裏口が開いた。

「トツネ！ トツネは無事か！！」

叫びながら乱入してきたのは、しつかりとした体付きでいてその顔はどこか中性的なのが特徴的で、その背丈は俺と同じくらい。何か動物の毛皮なのか、高級そうな皮装備に身を包むその男は家に入るなり、全員が揃つた食卓を トツネを見て、その姿を確認すると飛びつくなづにトツネを抱き上げて、喜びの声を上げていた。

「おお！ 無事だったかあ！ いやあ心配したんだぞ、父さんはお前が……」

「ああーもう！ 寄るな！ 離れろー！」

そんな事を言いながらも嬉しそうな顔を浮かべるトツネを見て、つい口元が綻んでしまう。

「もうヒコネさん。お姉さんもいらっしゃるんだから程々にしてくださいね」

「言つのが早いが、屈強な男 つまりトツネの父親であるヒコネさんの傍にティアさんはいて、その皮製装備を預かっていた。

こうして三人が揃つている場面を見ると、家族なんだなあと心に思つてしまつ。

そして今朝に俺が現実で過ごした時間も、傍から見ればこのように映つたのだろうか……。

その光景を誰も見れるはずはないのだから、その真相は闇の中なのがだ。

「そこの嬢ちゃんがシアちゃんで、そこの兄さんは一ヶ君でいいのかな？」

「え？ あ、はい」

俺とシアは一人揃つて戸惑いながらも返事をした。

その戸惑いはヒコネさんのその快活な声の勢いに押されたのと、どうして名前まで知つているのか、という一重のものだつた。

そんな心情が顔に出ていたのか、ヒコネさんはその様子を楽しむかのように豪快に笑い、言葉を続けた。

「ああ、街の連中に聞いたんだ。一騒動起きた時にそれを解決してくれた冒険者がいる、ってな。流石にトツネや一ヶ姉さんまで巻き込まれてるとは思わなかつたが……、何はともあれ無事で……つていつても怪我はしてるか。ともかく命に別状はなく、丸く収まつたみたいで良かつた良かつた。本当に守つてくれてありがとう」

「そんな大したものじゃないですよ」

そもそも俺はシアを守りたかっただけだ。もちろん他の人が傷付くのもいやだし、傷付かせたくないという気持ちも持つてはいたが、その原点はやはりシアなのだ。

だからその褒美であるシアとの少しの時間をもう過ごしたし、これだけの料理を用意してもらって、その上またお礼を言われてもそれは身に余るものだ。

「それと……すまなかつた」

「……何がですか？ 謝られるような事はされていませんよ」

「これは町の連中から会つたら伝えてくれと、そう言われてな。手助けも出来ずにすまなかつた、と」

「そういえばこの街の人々は一切手出しをしなかつたな……。唯一抵抗したといえばトツネとニアさんぐらいなものか。」

鍛治やら何やらで肉体的には俺より明らかに強い人たちばかりだつたのに、どうしてなんだろう。それに数もかなりいたのだから、全員で一斉に取り囮めばそれこそ被害もなく安全に取り押さえれて、俺の出番すらなかつたんじゃないだろうか。

もつとも特殊な形態をしている街だから、特有のなにかまざい事でもあつたのかも知れない。

現にこうして俺に謝罪を入れてくる辺り、ただ無視をしていた、どうでも良かつた、という具合ではなさそうだ。

「気にしないでください。一応無事に解決したんですね」

「……そうか。ありがとな」

そう言つたヒロネさんは多分、これ以上この話を引っ張るのは勘弁してください、という俺の表情を読み取つてくれたのか、改めてその場を仕切りなおし、それを機に全員が明るく、笑顔になる。

ディアさんは預かっただヒロネさんの服を二階に持つて行き、父親から解放されたトツネは顔を赤くしながらその頬を膨らましていて、まるで小さな子供のようだつた。

一ーアさんはそれ見て笑い、そのせいで体の痛みがぶり返したのか、体を捻つて苦しみを避けながら笑うという何とも言えない状況になり、シアはそんな一ーアさんを心配しながらもその顔は笑っていた。

そして俺は、それを遠目に眺めていた。

もちろん顔は笑つてる。楽しいと思うから笑つてる。

でもどこか馴染めない。あんなに皆生き生きとした表情で、心のままに生きているというのに、それを見る俺の目が曇つている。

楽しいはずの時間に、俺の気持ちが付いて来ない。まるで対岸の火事でも見ているかのように、自分とは無関係なものを見る気持ちでその光景を、傍観していた。

どんなに繕つても、どんなに隙間を埋めようとしても、相容れる事はない。

それが現実と仮想の狭間だつた。

ここにいる人達、ここにあるものはすべてが仮想のもの。そして俺だけが現実なのだから、浮いて当たり前、取り残されたような気持ちになるのも当たり前。それでも俺はこの世界に自分の意思で足を踏み入れたというのに、また搖らいでしまう。

……俺は弱い人間だ。現実も仮想も関係ないと、シアがそう言ったように、俺も堂々と胸を張つて言えればいいのに、俺の中の何かがそれを認めない。

その存在は俺にも明確に捉える事は出来ないものだ。

だからせめて、この場を壊す事のないようにだけはしなければいけない。それが俺の出来る精一杯だつた。

空の星は綺麗だった。いつかの夜、一人で外を出歩いた時を思い出す。

あの時はアビリティを何に振るかで悩み、空中に浮かぶメニュー画面とにらめっこしながら歩いていたせいで、時間をかけて星空を観察する事もなかつた。

今思えばそれは凄く勿体ない事だつた。何せ現実とは比べ物にならないくらいに星が綺麗なのだ。まるでプラネタリウムを眺めているようで、とても心が落ち着いた。

一階の窓から見る眺めはとても壯觀で、闇夜を町の明かりが照らし、遠くでは木々や山々が並び、星空に浮かぶ月は鮮やかだつた。俺が一階に上る時は、一階で飲み比べをしていたヒコネさんとニアさんがノックダウンしており、その介抱をニアさんとツネがしていた。

そして「今日は泊まつて行つて」というティアさんの好意に甘えて、あてがわれた一室でのんびりと過ごしていた。

シアはトツネの部屋で一晩を過ごす約束をしていたらしく、今夜は俺は一人だつた。

とはいえた事もなく、だからこそ景色を楽しんでいたのだ。もつとも、それすらどこか落ち着かない気持ちを静めようと、無意識にしてしまつた行動なのだと思う。

俺は不器用だ。だから両方の世界を確かな現実だと認める事など、出来なかつた。

左手の包帯を眺め、あの戦いを思い出す。何のために戦つて、何のためにこの傷みを受けたのか。

……そして俺にとつて現実とはなんなのか。
その時 小さな音が聞こえた。

振り向くと扉を開けて立つシアの姿があつた。

「どうした？」

表情は俺を窺うようすで、何か物言いたげだった。

「いえ、少しお話でもしたいなと思いまして……迷惑、でしょうか……？」

俺に断る理由もない。

むしろ心の底では俺もシアと話したいと思つていたところだ。

「そんな事なこと。どうぞ、入って」

シアは俺の言葉を聞くと少しあく頷き、ドアは小さな音を立てて完全に閉まった。

風呂上りなのかその髪は濡れていって、シアが傍まで来るといい香りが鼻をくすぐる。

艶やかの雰囲気を纏つシアは、どこかいつもより大人っぽくなつたようにさえ見えてしまつ。

「何かしてたんですか？」

「いや何にも。強いて言つなら景色を眺めていた」

「景色……ですか？」

「ああ、星とか綺麗だなあ、って」

本当にそう思つていた。都会の空は星さえ見えないような、汚れた味氣のない空。その色は灰色と言つてもいいぐらいのものだ。だからこのデュアルワールドの星空は新鮮で、それでいて綺麗だと思える。昔、旅行に行つた先で見た星空よりもよりその輝きは心に染みた。

そんな俺の隣でシアは笑う。

「意外とロマンチックな事を言つんですね、二ヶさんつて」

「男は大抵口マンチストなもんさ」

「なんですか？」

「そういうもんの」

男はどこか未知のものに憧れる。

それが何なのは人それぞれだが、俺の場合は……。

「だからさ、宇宙人とか、異世界人とか、そんなのもいるって信じてるんだけど、シアはどう？」

「宇宙人や異世界人、ですか……？ 考えた事はないんですけど。……」

「……そうですね、素敵です」

「……素敵、なの？」

俺はそれに驚いた。普通はもつと受け入れがたいものだとばかり思っていたからだ。

実際の所、俺に限らず人類はその存在を知つてはいるものの、どうせいる事のない存在だと思っている。もちろん例外もいるが、大半はそんなものだ。

それをよく考える事もせずに、あつさりと言つてのけたシアの本心は俺に分からぬ。

「ええ、素敵です。……私は自分の知らないものを知る事が好きなので、冒険者の皆さんが聞かせてくれる異境の話とかが好きで、ついつい聞き入つちゃつたりして……そのせいで怒られた時もあつたんですよ」

「……そりやまた意外だなあ

「……だから、私は……」

言葉が途切れた。

話に耳を傾けていた俺は、その突然の沈黙に何事かとシアに顔を

向けるが、そこで動きが止まつていしまう。

なぜならシアの顔が俯き、その目に涙をためていたから。

「……どうしたんだ？」

俺はそうとしか言えなかつた。

触れれば割れてしまう水晶のような そんなシアに触れる事すら出来ない、臆病者だつた。

だからその涙を拭う事も出来ず、ただ眺め、答えを待つしかない。

「……今の話、きつと一ヶさん的事、ですよね……」

「…………どうして、そう思つたの？」

確かに少しほやかしてはいたものの、間違いなくこれは俺の事だ、直接聞く勇気もなく、それでいて聞いて欲しいと思ったから、まるで人事のように振る舞い、シアに話を振つた。

自分でも笑えるぐらいの臆病つぶりだ。

それを看破されて、俺は多分、なにかが振り切れてしまつた。

言い換えれば……、俺に現実と仮想は違うと思わせていた何かが、いま壊れてしまつたのだ。

「夕方目覚めた時もそうでしたし、最初に会つた時から不思議だつたんです。国の募集に応じる冒険者は大抵が腕に自信のある人達ばかりで、まるつきり初心者がなるなんて事はないですし、わざわざフィルストで王様の召集に応じたのに、国の事は何も知らない、それでいて魔物の事すら知らない。他所の国から来たのなら少なくとも魔物の存在ぐらいは知つてはいるはずです。国家間の道中で魔物の出ない場所なんてあるはずがないんですから」

シアの言つた言葉の大半は、考えて見ればその通りだつた。

そもそも俺はいきなり王様の前に放り出されて、星の欠片を探せと言われ放り出された。だつてそれはこのゲームの設定だから、俺がどうにかした訳じやない。

しかしこの世界に生きているシアからすれば、俺は何も知らなくて無謀な事をしている奇妙奇天烈な人間に見えたはずだ。

俺だつて逆の立場だつたらそう思うだろう。

それでもシアは今の今までそれを口にしないで一緒にいてくれたのだ。

シアの表情は、いつの間にか強さを持つたものに変わっていた。目の周りは赤く腫れていたが、もうそこには零はない。

「何か隠している事があるのはわかります。それを言いたくないのなら言わなくとも私は構いません。でもこれだけは覚えていてください」

言葉を一度区切り、言つた。

「私は、傍にいます」

吐く息が揺れた。息を吸う事すら忘れ、何かが溢れ出すのを止められなかつた。

シアが俺の体に寄りかかる。

それを何も言わずにただ抱きしめた。

泣き顔を見られるのが恥ずかしくて、俺はずつとシアを抱きしめていた。

そして、全てを無視した無遠慮に頭の中で声が響く。

『システム制限の一段階目が解除されました。閉ざされた箱庭

で生き延びてください』

それは『スゲームの始まりだった。

深愛の温度

不思議とその宣告に動搖はしなかった。する余裕がなかつたと言つた方が正しいかも知れなかつたが、そんな細かい事は今はどうでも良い。

ただ嬉しくて、泣いていた。

もはやシアに頼りにされているのか、頼りにしてるのかも分からぬ状態で、涙が止まるまで抱きしめ続ける。

声はなく、互いのぬくもりと鼓動だけが一人を繋いでいた。

どのくらいの時間が経つたかはわからないが、ようやく涙も止まつてゆつくりと一人は離れる。我ながら名残惜しいのか、その肩に手は伸ばしたままだ。

自分の腕に挟まれたその狭い空間から見えるのは、シアの顔だけだつた。

頬が赤く、その瞳は潤んでいて、今まで見た事がないような色っぽさを持つた顔を真正面に見ていると、どこか恥ずかしくなつて目を背けたくなる気持ちになるが、ここまでしておいて俺の方が逃げるのも情けない。

ついさつきまでずつと縋つているようなものだつたし、もう十分情けない所は見せてしまつているのだから今更という気持ちもあるし、これ以上は見せられないという意地もある。

だから俺は向き合つて、小さくその名を呟く。

「…………シア」

その呟きにシアは反応する。

大きな瞳は柔らかに細まり、口角が僅かに上がり微笑みを作る。

その笑顔はとても素敵だった。

「…………一ヶ、…………さん」

「…………さんはなし、で」

「あ、はい…………えっと、一ヶ、……」

「…………うん」

「なんか、恥ずかしい、です……」

「気にしない気にしない」

潤んだ瞳が閉じた。

…………そして、多分、唇を重ねたんだと思つ。

感触が残つてゐるよつな、それでいて信じられない気持ちもあつて、色々と思うつてゐるもあつたのだけど……、でもその行為は、隔てる何かを乗り越えさせて、溝を埋めてくれたような気がした。

白で染まる空間に黒い影があつた。目に刺激を与えるデジタルな画面を複数、縦横無尽に延ばして設置していて、各々の画面には別々の情報が表示されていて、流れるように画面が動いている。その一つの画面に赤い表示が警告音と共に現れる。

「ん…………随分と早いな」

男は画面の前で椅子に座りながらうたた寝していたが、そのけたたましい警告音で目を覚まし、画面を眺め咳いた。そして素早く手元のキー ボードを叩き、赤い警告表示を消した後に、一つの画面を拡大表示させる。

そこには一つの顔写真と、名前から何まで情報が並んでいた。

「第一段階を突破した奴か…………。この速さはよほど誠実な奴か、よほどのやり手か、まあどちらにしろこいつにしては助かるが…………」

粗方の情報に田を通した男は画面を消し、椅子から立ち上がる。ゆっくりと歩き向かったのは、黒い箱の前だった。

「……死ななければいいんだが」

その後シアとはじことなくギクシャクした時間の中、幾つかの言葉を交わしたところで、トツネがシアを呼びに来たので、シアはそれに応じて俺の部屋からいなくなつた。

急に一人になるどこか寂しい所もあつたが、今はそれでも良かつたと思える。

多分あのまま一緒にいても、お互いが気恥ずかしさから窒息しそうだつたから、そういう意味ではトツネの来たタイミングは非常に助かるものとなつたのだが、一人の時間をもつと過ごしたか、と聞かれると、やっぱり頷いてしまう。

でもこれから旅はまだまだ続くのだ。集めるべき欠片もまだ序盤もいいところだ。話す時間もこれからいくらもある。

おそらく今やるべき事は、これからのためにも自分の状況、状態を確認する事だ。

『閉ざされた箱庭で生き延びてください』そう告げた声は、最初のシステム制限解除の時と同じ、明瞭な女性の声だった。

そして閉ざされた箱庭というのは、半ば予想済みでもあつたデスマーケットの開始を告げるものだというのは分かる。最初の制限解除の時から予感はしていたからそれについてはさほど驚きはなかつたが、気になつたのは後半の部分だつた。

生き延びてください、なんてデスマーケットをけしかけた側が言つような台詞とはとてもじやないが思えない。

しかしそれを告げた声は確実にシステム側のものだ。だから間違

いはないはずなのだが、そうなると何かしらの意図が隠されている。というのは予想はつくものの、その先は一切考え付かない。

どうしてこんな状況を作つておきながら、それと矛盾した事を言うのか。

……よく考えればこれは、試練のよつな……、そんな形をしている事に気付く。

ゲームという体裁で様々なものが用意されたこの舞台で、命を懸けたデスゲーム状態になり、それでいて生き延びると書く。これは明らかに俺を試しているとしか言えない構造になつていて。どこの誰だかは知らない。ゲームの製作者辺りが妥当なところだが、生憎このゲームの製作で名前が大々的に公表されている人なんて俺は心当たりはない。

会社全体がグル、なんて壮大な事も考えて見るが、どこか現実味がないと思つてしまつ。

……ともかく今はそんな犯人探しなんてしてゐる場合じゃない。言われた通りに動くのも何だか癪だが、まずはこの世界で生き残り、ゲームをクリアしなきゃならないだらう。

ゲームクリアしても脱出来ない、なんてふざけた展開もないとは言えないが、さつきの見立て通りにこれが試練だとするならば、そんな理不尽はないと信じてやるしかない。

現実の俺の体は……俺にどうする事も出来ない。そもそもどういふメカニズムで死に至るかすら分からぬのだから、天にでも祈るしかない。

メニューは開ぐが諸々の項目は削除され、随分とシンプルなものへと変更されていた。

ステータスなんてものは見れなくなり、レベルと言う概念も消失しているが、アイテムやアビリティなど項目は残つてゐる。無駄に設定を残してゐるあたりが小憎らしい。

その有様はまるでゲームであつた名残で残された残骸のようにも思えるのだが、正常に機能する上に、ご丁寧にデスゲーム仕様に変

更されていたりするので、それがわざと残されたものだとわかる。変なところでどこか親切と言つか……「デスゲーム」と言つわりには気が抜けてしまつものを感じてしまつ。

俺はメニューを開じてベッドに横になり、体を楽な体勢にしてこれまでの仮想世界を思い返す。

これからは今までのよつた無茶は出来ない。していられない。

一人でレベル上げなんて持つてのほかだし、捨て身の作戦も使えばそれなりに命の危険が待つていい。

安全に安定させてゲームを進ませていき、やがてクリアを迎えて現実に戻る。

その時俺がこの世界をどう思つているか、現実をどう思つているかなんてのは想像もつかないが、きっと今考えているのとは違う考え方を持つていいだろう、と思つてしまつ。

今この状態ですら俺は現実をとても軽視している。まともな思考じやないとは我ながらに思うのだが、状況が状況だから仕方ないと自分に言い聞かせて今は納得しておぐ。

ゆつくりと目を閉じて、息を吐く。今は休もう。

仮想の現実は本当の現実になり、俺はその中で生きていく。

朝日が覚めて一階まで降りると、そこにいたディアさんとニーアさんの姿があつた。

ニーアさんは椅子に座りのんびりと湯気の立つ何かを飲んでいて、ディアさんは食器を片付けていた最中だつた。……しかし改めて二人が並んでいる所を見ると、そつくりすぎて何も言えない。シアやトシネ、ヒロネさんの姿はなかつた。

「おはようございます」
「おはよう二ヶ君。ご飯あるから食べて」

「あ、はい。ありがとうございます」

昨日の夜とは違い、テーブルも片付けられたのか一つだけの小さな物に変わっていたが、その上に並べられた料理の数々は昨日のものに量こそ劣るもの食欲を誘われるものだつた。

すぐにでもその食事にかぶりつきたくて、そそくさと椅子に座る。どうやら俺以外の人はもう食べ終わつて、どこかに行つてしまつたようだ。その証拠に誰かが手をつけたのか、皿の盛り付けが中途半端なものが幾つか見受けられる。

俺が起きた時にメニュー画面で見た時間は、現実時間の毎前を示していく、デュアルワールドでの時間は太陽の具合から丁度朝の七時か八時と言つたところだらう。

朝食の時間としては妥当な所だが、それよりもっと早いのだから随分な事だ。

「もう皆さんは朝ご飯を食べたんですか？」

「ああ、とつぐに食べたよ。トツネちゃんヒロネさんは朝早くから仕事の何だかで出掛けで行つたけど

「朝早いんですねー、魔紋師って」

仕事といえば、昨日なんだかんだでうやむやになつてしまつていたが、トツネの依頼の事をすっかり忘れていた。

いま思い出しても遅いのだけど、昨日行けなくて大丈夫だったのだろうか、という気持ちはある。昨日のトツネからはなんだか焦つてゐような、緊急のような感じもしたし、まだ間に合つのなら今日行つても俺は全然平氣だ。

左手の痛みも一晩寝たおかげか、思い切り壁にでも打ち付けない限り痛くはない。

……寝起きに寝ぼけたままふらふらと歩いて、その手を壁に打ち付けたせいで今は少しの傷みがあるが、それも少しづつ収まつてい

るのが分かる程度には痛みも引いている。

「本当はもっと遅いんですけど、なにかあるみたいですよ」

「なにか?」

「私にはわかりません。仕事に関しては私は関わらないと決めてますから」

涼しげな笑みを浮かべ、洗い終わった食器を片付けていたティアさんはそう言った。

何かは分からぬが、どのみち俺の知る所ではないだろう。専門職の仕事なんて俺には理解できないし、したところで何の役にも立たない。

「シアも一緒にですか?」

俺がそう言つと、一ーアさんがカップに付けていた口を離し、その顔を上げて不思議そうな表情を作り、俺の質問に答えてくれる。

「いや、今日はまだ見ていないが……」

その時、軽い足音が耳に届いた。その音の方向へ首を向けると、そこには……かなり際どい格好のシアがいた。寝ぼけ眼を擦りながら、壁に手をつけて歩いてこいるのにふらふらと揺りめき、見ているだけで怖いぐらいの不安定さで。

際どい格好は……具体的に言つのならば肌が透けているぐらい薄い生地で出来た、薄紫のキャミソール。確かに寝る時には楽な格好でいいとは思うのだが、正直その格好で降りてくるのはこせかが風險が過ぎる気がする。

見ればティアさんと一ーアさんは苦笑いを浮かべていた。

「……シアちゃん。女の子はもつ少し恥じらいを持った方がいいと思つわよ?」

ディアさんが俺に目線をちらちらと向けながら、そうシアに言つと、シアはその言葉の意味が良く分からなかつたのか、その視線をゆっくりと下へ下へと向けて、……そして、爆発した。色々と。顔は遠くから見て分かるほどに真つ赤に染まり、体を抱くように手で隠し、何も言わず階段を猛スピードで駆け上がっていく音だけが聞こえた。

「……いつもああなのか?」

「……いえ」

居間にいた三人はその出来事のせいで半ば固まつていたが、何気なく呟かれたニーアさんのおかげで少しは空気が和らいだ……気がする。

でも確かに昨日はそんなに寝起きが悪いといつ事もなかつたと思うのだけど、まあ俺も人の事を言えないぐらい寝ぼけていたのだけど……。

そんな事をぼんやりと考えていると、なにやら物音が聞こえる。何か重いものが地面に落ちた時のような重厚な音。

なんだろう、と思う暇もなく、その正体が明らかになる。裏口を開けて入ってきたのは、少し薄汚れた作業着を着たトツネヒコネさんだつた。

「ただいま、つて二ヶ起きてたのか。シアはまだ寝てるの?」

「ははは……起きては、いる」

「なんだそれ」

俺の乾いた笑いを理解できるのは俺を含め三人だけだったが、そ

の三人ともが全く同じ様な表情を浮かべていた。そしてそこに真相を知る四人目が、タイミングよく現れる。

探るよつこ、隠れるよつに階段の影から除き見るシアがそこにはいた。

「あ、シアおはよう
「お、おはよー!……」

トツネの朝の挨拶にシアは戸惑いながらも答え、それをきっかけにその姿をはつきりと現した。その服装は至って健全な、いつもの服装だ。

そしてディアさんに俺と同じ様に食事を勧められ、俺の隣に座つた。

ビーチが気恥ずかしそうに俯くシアに適当ながらもサラダを盛つてやる。ぼそりと「……ありがとうございます」とだけ言って、食事を始めた。

トツネはそんなシアの様子にビーチが不思議そうな顔をしていたが、ヒロネさんのよく通る呼び声に、弾かれるよつに再び外へと飛び出して行つた。

その後は何もなく平和に食事も終わり、俺とシアは一人で食器を洗つていた。

ただでさえ泊めてもらつているのに、その上で遅れて食事を取つているのだから、それくらいは当然の事でもあるのだが、やっぱりディアさんは譲らうとしなかつた。

なにかとトツネを助けてもらつたから、ニーアさんを助けてもらつたから、と言つて俺達に良くしようとしてくれるのは素直にありがたいのだが、こちらとしても世話になつぱなしでそろそろ良心が痛み出す頃だったので、強引に俺がやると言つて押し通した。シアも俺と同じ言い分でディアさんに詰め掛けて、多分そのおかげでディアさんも諦めたのだ。

俺が洗い、シアが拭いて片付ける。同じ柄や似たような大きさの皿でまとめておき、たまに片付ける場所がわからないなら、ティアさんに聞く、という形で手際よく片付けていた。

使った食器も片付けて、濡れた手を拭いていると裏口からトツネヒビ「ネさんが、使い込まれたような汚れの、元は白色だったはずの膨らんだ袋を一人で重そうに運んでくる。

「何なんですかそれ？」

俺の投げ掛けた問にはすぐに答えは返らなかつた。

その代わりにその袋が放られて、大きな音を立ててその袋が床に落ちる。それからその重荷を下ろしたヒビ「ネさんが額の汗を拭い、それでいてどこか涼しげなそんな表情を浮かべて俺の問に答えてくれる。

「こいつは仕事用の鉱石だ。仕事に使う予定のものが不足しててな、それで今朝のうちに運んできたんだ」「これが昨日頼んでたやつだよ」

付け出すよつて言つたトツネの言葉でよつやく納得がいった。

しかし、元々はそれをここまで運ぶ道中の護衛という話だったのだから、ここまで運んできつた今、俺のやる事はなくなり、同時にその対価として受け取るはずだった、魔紋の刻印料が半額になるというおいしい報酬もなくなる。

「これがそうなのか……」

「デスゲームとなつてしまつた今、即効性のある戦力強化にはつづけだったのだが、仕方ない。俺がただその好機を逃してしまつただけ。恨むのなら自分の不運でも恨むしかないだろ。」

トツネ達はせりに袋を引きずりつて切り取られたよつて空間の質が変わつてゐるところまで引つ張つていく。

多分その場所が作業場なのだろつ。袋を引きずる一人の姿はやがて見えなくなり、少しするとその空間から出でてくる。するとヒコネさんが何か思い出したよつて「あ」と歯を発するので、俺もシアも、ティアさん達までもヒコネさんに注目し、その言葉を待つた。

「実は二ヶ類にプレゼントがあるんだ」

「……え？」

それはあまりに突拍子もない事で、思わず声を漏らしてしまつたが、呆然としているのは隣のシアも一緒だつた。

「ああ、もちろんシアちゃんにもプレゼントは用意してこるよ。正しくは用意させてもいいが、だけどね」

シアの方へとウインクをかますヒコネさんに若干の嫌悪を覚えるが、この際は無視して俺は会話を続ける。

「…………どういう事ですか？」

「君達にお礼として無料で一つ。武器でも防具でもいい。オーダーメイドで造つて、それをプレゼントするー」

不測の対価

ヒコネさん造る武具は、独自の技術で丹精に造られ、その質も最高級なもののは間違いなかつた。なにせ王様に気に入られるくらいなのだから、性能に限らず蒐集品としても価値は十分なのだ。それなのにただの冒険者、しかも名がある訳でもない俺なんかに、わざわざオーダーメイドで造つてくれるなんて言つ葉が、すぐには信じられなかつた。しかも俺だけじゃなくシアの分も造つてくれると尧え言つてくれた。

トツネに魔紋の刻印料を聞いた時でさえ、高いものは到底手の及ばないものだつたのに、それを遙かに上回るであろうヒコネさんの作品を無料で手にいれるなんて、千載一遇の出来事なのだが、トツネの時と同様にうまい話があると、その裏があるのではないかと疑つてしまつ。

だから俺はつい試すように言葉を続けてしまつ。
いい人だと分かつてはいる。だが疑心暗鬼になつてしまつのは、俺がどこか心の奥底で動搖していたからだと自覚は出来ていた。いつ、誰が、どのように牙を向くかなんて、わかるはずもない。全てを疑い、生きていく事は難しい。だけど少しばかり慎重に生きるのは悪い事ではないはずだ。なにせ命が懸かつてゐる。俺と、シアの。

「えーっと……なんでまた急にそんな事を?」

俺の言葉にヒコネさんは大きく笑い、気が済むまで笑つた後に近くに居たトツネを昨夜と同じ様に抱きかかる。もちろんトツネは抵抗をして暴れるが、まるで幼稚園児がたかいたかいでもしてもらつて喜んでるようにも見えなくもなかつた。

「言つただろう? お礼だつて」

「でもヒコネさんの造るもののは値段はかなり高額だと聞きましたし、それに見合つだけの事はしてないつもりです」

「いいや、したさ。二ヶ君達からすればそれほど価値はない行動だつたかも知れなけれど、僕達にとつては価値のあるものなんだ」

ヒコネさんは自信ありげにそう言つた。

「だつてそうだらう? 我が子より大事なものなんてあるはずがない」

その一言で、俺は何も言えなくなつてしまつた。

俺はまだ親の気持ちが分かるほどに歳を取つてゐる訳でもないし、子供がいる訳でもない。それでも親が子供をどれぐらい大事に思つてゐるのか、どれだけかけがえのないものだと思つてゐるのかは、少しばかりは理解出来てゐるつもりだ。

俺自身が親に大事に思はれて生きてきたのだから。

「そう、ですね。すいません」

「いやなに、謝られても困る。」*「ほどーんとありがと」*そこま

す! と言つてもらわないと

「……ありがと」*「ございまーす」*

そう言つて頭を下げた。

遠慮も時と場合を選ばなきや失礼にさえなる。

これは受け取らなければならぬお礼だつたのだ。だからもう遠慮をする事なく、素直にそのお礼を受ける事にする。

俺に続いてシアもお礼を言つて、ヒコネさんは笑い、俺たちもつられて笑顔になる。

「さあて！ それじゃあ何がいいか、まずはそこからだ」

俺とシアは一人で街を歩いていた。

今日も街は相変わらずな様子だったが、昨日まではやはり町の人々が向けてくる視線の色が違った。そもそも道行く人達に視線を向けられる事 자체が、昨日とは違っている。

出掛ける前、俺とシアは散々悩みぬいた挙句に、ようやくヒコネさんにオーダーを出し、ヒコネさんもそれを快諾してくれたのだが、一人分のものを造る手間に加え、元からあつた注文の事もあって、早くして三日、遅れればもつと掛かってしまうかも知れないと言わってしまった。

もちろんだからと言つて「じゃあいいです」なんて言ひ訳もなく、待つ間はトツネの家に泊まつてもいいとも言われたので、いい機会だから俺はその好意に甘える事にした。

ただその間にゲーム攻略に勤しむというのもどこか味気ない。シアと二人だとゲームを楽しむ気すら湧いてくるからだ。

その原因は俺がこの世界に閉じ込められたからだろう。俺は二人が相容れないものだと、そう思つていた。

でも今は、仮初であつても俺はこちら側の住人で、同じ様に生きていく。だからこそこの世界を現実として感じ、楽しむ事が出来る。

もつともそれもシアといる時ばかりで、一人でいるとネガティブな事ばかりを考えてしまつて駄目だった。

我ながら気持ちが浮ついているとは思うが、これも仕方ないだろう。シアだって朝からあんな事もあつたせいか、どこかいつもより口数もない。

「……なあ、シア」

「は、はい！」

「どうしてそんなに緊張してるの？」

シアは肩を強張らせて、ギクシャクとした動きで、俺の隣を歩いていたのだ。

それがすっと気になつていて、タイミングを見計らつて言つたつもりなのだが、どうやらあまりじ�ないタイミングだつたらしく、シアはその足を止めてしまう。

……いや、確かに昨日の夜の事があるとは言え、何もそこまで急に意識するような事でもないよつた気がするのだけど……。もう思つてるのは俺だけなのだろうか。

「いえっ……これは、その……」

「もしかして昨日の事？」

「いえ……その……朝に恥ずかしいものを見せてしまつて……」

ああ……あれか。

脳裏に焼きついた光景を思い起こす。透けて見えた体は、程よく筋肉がついており、それでいて無駄な所はない細身で、女の子特有の丸みを帯びる体は……。

「……忘れてください」

「かわいかった」

シアにそう言つてやると言葉すら出ないのか、顔を赤くして俯く。本当かわいいやつだ。

そんなやり取りをしていくと、前方がなにやら騒がしい。

「誰か捕まえてくれー！…」

前方からこっちはうとうと叫びながら、必死の形相で走る中年の男の前を、なにやら小さな白い羽根の生えた物体が、逃げるよつにふらふらと飛んでいた。

よく見るとそれは爬虫類のよつな、それでいてビックな氣品をも感じさせるような生き物だった。

俺はそれに見覚えがあった。そして触れている。

このゲームの最初、OPで乗つっていた飛竜と似たような姿。それは間違いなく幼い竜だった。

少しづつ縮まる距離とともにその姿も鮮明になっていき、もはや捕まえてくださいと言わんばかりに近くを飛んでいたので、つい反射的に捕まえてしまつ。

キューイー、と弱弱しく、か細い声で鳴くその白い竜の体には、泥のよつな汚れや赤く血の滲んだ箇所も見受けられた。

それは人為的に暴力を振るわれた痕にも見える傷痕だった。

俺の捕まえた白い竜をシアも隣から見ていて、すぐに俺と同じ思考を辿つたのだろう、その表情はさつきまでとは打つて変わって、可愛さなんて欠片も残つていないうな、怒りの表情だった。

そしてそれが向けられるのは当然、こっちは向かつて走つてくるその中年の男だった。

「いやー、すまないね。さあ渡してくれるかい」

肩で息をする辺りは、年齢相当の体力なのだと窺わせるが、その顔に浮かぶ笑顔はどこか嘘くさく、目が笑つていなかつた。

俺は迷つたが、シアにこつそりと服を引っ張られ、決意する。

「この竜。怪我しているみたいなんですが、手当ては？」

「いやー、それが手当てしようとしたら、傷みが我慢できなかつたのか逃げ出しちゃつてねえ。ともかく捕まえてくれてよかつたよ。流石にこの歳になると怪我をした竜にも敵わないぐらいになつちや

つてね♪

相変わらずその田は笑わない。それどころか苛立ちすら感じられる。

「IJの竜はあなたが保護したんですか？」

「……ああ、そうだよ。俺は竜商について語りて、幼い竜を各地に売つてしまつてるんだ」

「へえー、竜商い。それじゃあこの竜も売り物なんですか？」

「いや、その竜はたまたま見つけたばかりでな。まだ私に慣れていないんだ。だから逃げ出したんだけどな……」

表情にすら陰りが見られる。どこか怪しきこの男のままこの竜を引き渡していいものか。

……いや、いいはずがない。でもここで堂々と突っぱねるだけの確たる物はない。

言つてしまえばこの男が言つた通りの筋書きでも通用するのだ。実際にその場面を見た訳でもなければ、何か話を聞いていた訳じゃない。竜から直接話でも聞ければ別だが、そんな事も出来るはずはない。

穩便に筋を通して、この竜を男から引き離す方法……。そんなうまい方法が今すぐに浮かぶのか……。

考える。出来るだけ真っ当な手段で、この竜を男に渡さない方法。

……ああそうだ。どうなるかはわからないが、少しばかりの可能性に掛けねばあるいは……。

話の筋を頭の中で組み立て、出来るだけの会話の流れを想像し、俺は口を開く。

「あの……IJの竜も商品なんですね？」

「ん? ……ああ、怪我が治つたらやつなるが……」

「じゃあ今この子を買はう、つてのは駄目ですかね？ お恥ずかしながら、一目惚れしてしまって……」

男の目の色が変わった。すぐにでもその場を去りたいような、そんな苛立ちの表情も消え去り、完全に商売をする表情へと塗り変わつていた。

「うーん、俺は構わんが……そうだな、白龍の相場から怪我やらの分を抜けば……大体二万つてところか」

「二万……」

それは普段ならどうしようもない金額だった。

提示された金額は魔紋の上位クラスの値段で、手持ちでどうにか出来るはずもない、途方もない金額だ。

だがここまで予想通り。現実でも犬や猫が数万円から数十万円までと幅があるのだから、少なくとも結構な値段を吹つかれられるのは、十分予想できる事だった。

それに対して俺が出来るのはただ一つ。ここからが賭けになつてしまふが、十分賭けるだけの勝算はある。

「……物々交換とは行きませんかね」

「はあ？ いやまあ……金額相応ならば構わないが……それだけのものを持つてゐるとは思えないんだが……」

とりあえず前段階はクリア。物さえ提示する暇もなくあしらわれてはこちらとしてもお手上げだったが、取り合つてくれるのならばまだ希望はある。

「えっと……これなんですけど」

ポーチに手を突っ込み、そのお皿当ての品を頭でイメージして引き抜く。どこかブヨブヨとした感触に気持ち悪いと思つてしまつが、それをいま顔に出す訳にも行かず、我慢しつつそれを広げた。

俺が取り出したのは魔物の死体だった。クリーチャーコープス。一つ名の付いた貴重なはずのそのアイテムを竜商いの男に見せる。

「……いつは……レイス、か……？」

具体的な価値を知つてゐる訳じゃなかつたが、現実で情報を集めた時にレイスは序盤の救済、という情報があつた。だからそれなりの価値はあると踏んではいたが、男の反応を見る限り微妙そうだ……。

それでも出来る限りの交渉はして見るが、半ば俺は諦めていた。

「ええ……駄目、でしちうか……」

シアの引っ張る手に力が込められるのが分かつた。話の雲行きが怪しい事がわかつたのだろう。背中を押されるような気持ちになるが、俺には出来る事しか出来ないので、全てはこの男次第だつた。

「……いや、ちょっと見せてもらつていいか」

「？ 構いません」

俺の言葉を受け取ると男は腰のポーチから虫眼鏡のようなものを取り出して、まるで鑑定でもするかのようにそのレイスのコープスを観察していく。

俺の手元で抱かれた白い竜も、俺の隣で心配そうに事の顛末を見守るシアも、ただその男の行動に目を釘付けにされていた。

様々な角度から十分に時間を掛けて観察し終えた頃には、男の息も整い、白い竜もすっかり俺の手元にいる事に慣れてしまつっていた。

さつきまでの怯えた様子もなく毛づくろいまで始める始末だったのだから、能天氣というか、なんというか……。

「よし、これで交渉成立だ！」
「……へ？」

あまりに突拍子もない事だったの声が漏れる。それでも竜商いの男は笑って俺にその言葉に至る経緯を説明してくれた。

何でもレイス自体の相場は大して値段も高くなくて、聞くとウルフリーダーと同じかそれ以下だと言う。そうなるともちろん白い竜の値段に到底届かないのだが、やはり一一つ名付きというだけあって、通常のレイスとは違う、変異種なのだとか。

それを聞いて真っ先に浮かんだのは「テュアル種、D型の事だったのだが、どうにもD型とはまた違うらしい。

詳しいことは専門用語の塊みたいな説明だったのでよくわからなかつたのだが、適当に噛み砕いて理解すると、ここ「テュアルワールド」では特異なものは総じてその価値は高く、D型は元の魔物に姿形が似ていて、かつ変異した種で、迷いのレイスのような一つ名付きは持つ力自体が強力で、時に街一つがなくなるほどの力を持つている奴もいるのだとか。

もちろんこの世界の人々に二つ名が分かる訳ではなく、あくまでプレイヤーである俺しかそれを見る事は出来ないのだが、普通の魔物を知っている人からすれば、見れば見るほどにその性質が違う事が分かるのだとか。

レイスの場合は舌先の硬化やその大きさなどらしい。

そして迷いのレイスを値段で換算すると五万程になるらしかったが、俺はそれを全て渡す事にした。

「本当にいいのかい？」

「いいですよ。こっちもいきなりの話でしたし、冒険者でないあなた

たがそれを換金するとなるとその分手間も掛かるでしょうから、その分だと思つていただければ……」

クリーチャー コープスは冒険証がなければ換金できないのは、初めてここへと赴いた時に、ガランさんから教わつた。

この竜商いの男の腕には冒険証はなくて、それでもコープスで交渉が成立する辺り、知り合いに冒険者でもいるか、改めて誰かに依頼するか、どちらにしろ換金の代理をする時にある程度の手数料ぐらいは渡すだらう、というのは簡単に予想が付く。

その分も払つたと思えばなんて事はない。それに正直なところ白い竜はもう少し高くて、レイスはもつと安くて、良くてギリギリ釣り合つぐらいだと思つていただけに、文句を言われないほどの差があるのならばそれに越した事はない。

竜商いの男は上機嫌で、もと来た道へと引き返していった。最初は邪推していたものの本当に怪我をしていた白い竜を保護していただけだったのかも知れない。真相こそ分からぬが、帰り際に見せた笑顔はなんか純粹な気がした。

そして街中の通りに残された俺とシアは、一匹の白い竜をこれからどうしたものかと頭を悩ませる事となつてしまつた。

俺はケン、ホワイト、シロウ。
シアはキャパー、かび丸、さとう。

となつた。

何の話かと言われば至極単純明快に竜の名前だ。
つい話の流れで怪しい中年の竜商いから傷付いた白い竜を購入したのだが、そのまま逃がす訳にも行かず、かといって親なんて見つけるのには途方もない時間が掛かるので、やっぱり購入してしまつたのだから責任を持つて飼おう、と決めたのだが、そこから先は一切進まなかつたのだ。

まずは名前ですね、とシアが言つて始まつたのだが、俺の上げる名前は白い竜からはそっぽを向かれる始末で、それじゃあ私が、と言いたげにシアが代わりに白い竜の名前を列挙して言つたのだが、やはり首を振られる始末だつた。

竜は幼いながら人の言葉を理解できる程度には知性を持つて、ぬいぐみのように抱えててもてる程度の大きさでは、まだ生後数ヶ月なのだとか。

そのあと一年足らずで自分の餌を確保するようになり、数年もすれば親の元から去るそうだ。そして人が乗るぐらいに成長するのは竜の種族にもよるらしいが大体で三年。つまり俺がOPで夢見た竜の乗つての空の旅は、この竜ではあと少なくとも二年もかかつてしまふ事になる。流石に一年もこの世界には閉じ込められていないだろつじ、そもそも三年目でようやく乗れるようになるというのだから、それから俺自身がなれないといけないのでさらに時間は掛かるだろう。

その話を聞いた時にはついため息を漏らしてしまつたものだが、それを罪なき白い竜にぶつける訳にもいかず、俺はただひたすらに白い竜に気に入つてもられるような名前を考えるしかなかつた。

町の広場のベンチで流れる水の音が心地良い中、俺とシアは隣り合わせて座り、まだ名もない白い竜は、散々飛びまわった後にシアの頭の上に乗つかつて体を休めていた。

この町の広場は四角くなつていて、地面には浅い水路が引いてあり、よく見て歩かないとその水路に足を浸す事になる。実際シアは水路に落ちそうになつて、俺がその手を引いたおかげで水路に足を落とさずに済んだのだ。

「なあ、何がいいんだよ」

シアの頭でくつろぐ白い竜にそんな言葉をぶつけるが答えが返つてくるわけもなく、代わりに眠りを妨げたせいか大きな欠伸で返す始末だ。

「そもそもこの子って男の子なのか女の子の子なのかも分かりませんよね」

「……そう言われると確かに……」

しかし、なんとなくオスのよつな気がしないでもない。その俺に對しての態度とシアに寄つていく辺りでの推測だが。

「竜の性別の見分け方とか知らないの？」

「流石にそこまでは……」

竜の生態については知つていたシアでも、そういう辺りの事は知らないようだ。それもそうか……。

となれば竜の詳しい事が書いてある本か、もしくは竜に詳しい人に聞いて見るしかないだろう。もつともそんな本も人も心当たりがないのだけれど。……いや一人、いたか。

じつとしていても考えが煮詰まるばかりで、白い竜の名前すら浮

かばずにただただ時を過ごすばかりになってしまった。

俺はベンチから立ち上がり思い切り体を伸ばす。声が漏れるほどに体を伸ばしきって、一気に体を戻す。俺が体を戻す頃にはシアも白い竜を頭に載せたまま立ち上がっていた。

「どうしますか、これから」

「……そうだなあ、とりあえずあの竜商いのおじさんを探すついでに、街をうろついてみるとしよう」

竜に詳しいといえばもちろん竜を扱う商売をしている人が当てはまる。あれからまだそう時間も経っていないし、少し探してみればまた出会う事も出来るかも知れない。もつともそれも希望的観測に過ぎないので、何もなければただのデートになってしまうのだが、それもまたいいだろう。

そんな事を考えながら白い竜と出会った通りまで再び足を向ける事となつた。

再び元の通りまで戻り、竜商いの中年男が最初に来た方向へと歩いていくと、その先にあつたのは街を取り囲む森だった。人々が幾度となく通るせいか草すら根付く事もなく、茶色の土が剥き出しになつた部分が、端々を草や木々が彩るおかげで、土の色は道になつていた。

森で視界が悪かったが、少し歩けば森の境界も見えて、来た時の森よりは距離が短いようだつた。

しかしそれ以上は、実のところ進みたくなかった。

なにせあのグリードとの戦いはまだ昨日の事で、今もまだこの辺りにグリード達が復讐の機会を虎視眈々と狙っていて、隙を見せれば襲つてくる可能性もゼロとは言えない。むしろ高いと言つてもい

いぐらいた。それでも少しぐらいなら、と軽い気持ちで町の外へ出た訳だが、まだ街までの道もそう遠くはないので大丈夫だろう。

「……いないな」

「そう、ですね……」

先が開けた森の境界から見える視界にはそれらしきものは見当たらない。

その先からは魔物すら出る領域だ。無理に動く事はやめて素直に引き返す事にする。

「戻るうか……」

俺がそう言うと、シアもいま現在俺たちが置かれている状況が分かっているのだろう、何も言わずにただ頷いて踵を返した。

一応気は張っていたが、特に何事もなく無事に街のエリアまで辿り着く。街に入れば安全か、と言われれば、特に安全という事はない。そもそも昨日は街中での戦闘だつたのだから当たり前といえば当たり前なのだが、それとは別に逃げるという選択肢を作るためにも街の中という入り組んだ場所は都合がいい。

正直あの戦いは偶然に偶然が重なった奇跡的な勝利に過ぎないしどちらかといえば痛み分けといつても差し支えないものだった。痛覚があるいまは前の戦いより俺は大胆に動けないのに、それに比べて向こうは何も変わる事のない命のやり取りなのだから、やはり精神面での不利もかなり大きくなっている。

だから俺は今度あつたらひたすらに逃げる事にした。ヒコネさんに頼んだ防具もそいつた能力をつけてもらう事にしている。もちろん男なら武器で立ちはだかる敵を切り伏せる、というのも魅力的な話なのだが、俺はあえて守る力を選んだ。その理由としてはやはり生き延びる事とシアを傷つけたくないという想いから来ている。

「申し訳ないが少しいいでしょつか」

そんな声に俺は思考の中から現実に引き戻される。街の外壁に背中を預けて立つ男が、こっちを向いていた。丁度街に入つてすぐのところで、まるでそこからやつてくる人を待つていたと言わんばかりに、

その頭には大げさに反つたような唾の大きい青と白の縞帽子を被つていて、全般的に青と白に構成されたその服装は、どこか漫画なんかで見るような西洋貴族的な格好のようにも思えた。腰には片手剣でいうところの唾の部分が、金色をしていて丸い細剣が携えてある。その風体はまさに貴族らしい。

さらにその後にとつた行動がまた紳士的だった。纖細かつ丁寧に右手を回すように胸の前まで持つてきてお辞儀をする。そんな馬鹿丁寧なお辞儀はせいぜい漫画やゲームの中で執事キャラや、ウェイターぐらいなものだった。

遅れて不恰好なお辞儀を返し、頭を上げるとその端麗な顔が目にに入る。その顔は明らかに日本人のものではなく、瞳の色もまた青い。その声を掛けてきた男の姿に呆気にとられていたが、意識を戻して俺は言葉を返した。

「……なんでしょうか」「実は、人を探していまして……」「人？」

これは困つた。俺とシアがせいぜい知つているのはヒコネさんとディアさんにニーアさん、それとトツネぐらいなものだ。この街の規模からすればせいぜい四人知つてている程度で人探しに協力が出来るはずもないと思うのだが、一応誰を探しているのかぐらいは教えてもらえば、あとでヒコネさんにでも聞けば分かるかも知れない。

「ええ、この街で一際評判がいい……アメノヒコネという人なのですが……」

……まさかそんな低確率に当たるとは思わなかつたが、確かに良く考えてみればヒコネさんは国の王様ですら知つてゐる人なのだから、その名に惹かれる人がいても何らおかしくはない。しかもこの紳士的な男は外見だけ見れば優男と言つた具合だが、その腰の剣といい、立ち方ひとつでさえどこか気品と存在感を押し出している。明らかに戦闘に慣れた人物である事はわかるし、そんな人物ならヒコネさんに武具の依頼をしたい、と言つうのも何ら不思議な事ではないだろう。

それに悪い人では無さうだし、ヒコネさんのお客とくれば俺が拒む理由もないし、いまの俺達に目的もない。

一応シアに確認しておこうと顔を向けるのだが、いつもならばつちりと目が合うところが、俺が目にしたのはシアの横顔だった。シアの視線はもちろんその紳士的な男に向けられ、釘付けになつてゐる。……これは、俺が男として負けているという事なのだろうか……。

心中で落胆しつつ、俺は顔を向けないシアに確認の声を掛ける。

「いいか、シア」

「あ、はい。私は大丈夫です……」

どこか浮ついたような表情のシアは、慌てて俺の方へ向き直りそう言つた。その態度が何故か釈然としなくて、もやもやとしたものを感じてしまふが、いまここでそれをぶつけるわけにもいかないし、そもそもが俺の身勝手なのだからひとまずは置いておく。

そして俺の目の前の男に嘘をつく訳もなく、素直にヒコネさんを知つてゐる事を告げる。

「えっと、知つてますよ。そこまでご案内いたしましょうか？」

「おお、本当ですか！」「これはありがたい」

神聖的な男は再びお辞儀をして、その顔に笑顔を浮かべる。第一印象が紳士な貴族というものだったので、その表情には少し驚いてしまった。なにせ少年のような喜びを満遍なく表現した屈託のない笑顔だつたからだ。

疑つていなかつた、といえば嘘にはなるが、正直ここまで純粹な人だとは思わなかつた。もっと、口先是回つて、実力もある。そんな万能紳士だと思っていたのだが、その印象も今まで改めなければならぬだろ？

「私の名前はトリー・ア・グリディス。トリー・アとお呼びください」

「俺は二ヶ。こつちはシア」

「……よろしくお願ひします」

シアは恥ずかしそうに後ろ手で指を絡ませていたが、それは俺にしか見えない光景だつたので黙つておく。

「それじゃあ行きましょう

俺はそう言って先陣を切つて歩き出す。道案内なのだから後ろで歩いていたつてどうしようもない。

いささかこの街を知つているという風にも見れなくもないという事に気づいたが、まあ突つ込まれる事はないだろうと、安易ながらも考えておく。それに嘘を言つた訳でもないので、聞かれたら素直に知らないとでも言えればいいだろ？ 無駄に見得を張ると後で後悔するというのは、少ない人生でも何度も体験した事だ。

並びは俺が先頭でシアがその隣で、頭の上にまだ名のない白い童。

その後ろに紳士的貴族のトロニニアを連れて、俺は何度か歩いた道を歩いていくのだった。

「ヒーリーの白い龍は……」

まだ通りの途中で、俺の後ろを歩く紳士的貴族ことトリニアさんは、物珍しそうに通りを眺めていたのだが、なにせ通り全てが似たようなものなのだ。それも次第に収まり、やがて興味はシアの頭の上でのんびりとしている白い龍へと向いたのだろう。なんでもトリニアさんは龍について詳しいらしく、シアは白い龍を頭から離してトリニアさんへと手渡し、不思議と慣れ親しんでいるかのように白い龍は抱きかかえられて、トリニアさんは観察を始めた。

数分すら掛からないような時間でトリニアさんは答えを出した。やはり詳しければ何かしらの特徴ですぐに分かるのだな。

「ヒの子はオスですね」

やつぱり、と心の中で呟き、お礼を言つてからオス用の名前を頭の中へこねぐり回しながら再び歩き出す。白い龍はトリニアさんの手を離れて、自分で飛んでシアの頭に乗つかつている。もつそこがコイツの定位位置なのだろうか……。

「それにしてもスノーダラゴンとは珍しいですね。この地方には生息していないと記憶していましたが……」

「いえ、ヒの龍は龍商いから購入しました……」

白い龍はスノーダラゴンと並つか……。確かにその白い体表といい、触れた時のヒンヤリ感といい、雪の名を冠するには十分な特徴を持つている。となると龍にはありがちなブレスとかもそういう類のものになるのか、とほんやりと考えながらトリニアさんと龍

談議に花を咲かせる。

「竜商い……確かにその筋の方々ならスノードラゴンを扱つていてもおかしくはないですね。しかしその傷は……」

さつきからどこか疑惑の色が浮かぶ表情だったのはそのためか。 ようはトリニアさんはスノードラゴンの体に付いた傷を俺達がやつたのではないかと密かに疑つてゐるのだ。もちろんそれを堂々と聞こうとしない辺りは氣を使つてくれているのだろう。 確証が持てないうちに、なんでも自分の考えだけで物事を考えるのは駄目だと思つてゐるからこそ、トリニアさんも「その傷はあなた達がやつたのですか」なんて聞かずに、傷の事にだけ触れて、それに対する俺たちの反応で真偽を確かめようという腹なのだろう。

わかつてしまえばなんて事もないし、善意から来るものだとはわかつてゐるので腹を立てる必要もない。

「ああその傷は俺達も良く分からんんです
「わからない？」

怪訝な顔を浮かべ探るような目つきを向けるトリニアさんに、俺は言葉を付け足す。 あらのままの真実を告げても何を言われるでもない。

俺達がスノードラゴンに出会つた時の事から、トリニアさんに出会つまでの経緯を簡単に説明すると、ちゃんと理解してくれたのか怪しむ顔も明るい笑みに変わる。

「そういえばトリニアさんは何故ヒコネさんに会いたいんですか？」「それはやつぱり、評判高いその技術を持つて私の武器を造つてもらいたく思ひまして」

それは確かに真つ当な理由なのだが、ヒコネさんの仕事の現状を知っている俺からすると、なんだか少し申し訳ない気持ちになつた。ヒコネさんは急を要する仕事だけは後回しに出来ないので先にこなしてしまい、まだある程度の余裕がある仕事を、後回しにしてまでも俺達の武具を造つてくれると言つていたのだ。だからもしトリニアさんがいま依頼しても、それなりに時間が掛かる事になるだろう。その原因の一端を担つてていると思つどどこか気が重い……。

そんな気持ちを俺の中から追い出すためにも、普通の会話を試みる。

「やつぱり腕の方も相当なんですね」

トリニアさんの腰の細剣に目をやりながらやつぱり、照れくさそうに笑つて腰の剣に手を掛けて隠すような仕草をする。

「いえいえ、自慢するような技は持ち合わせてないですよ。ただ私の力不足を補つためにも業物があればいいと思いまして」

確かに評判も高いヒコネさんの作った剣なら、実力を持った人が扱えば相当の実力となるだろう。まさに鬼に金棒状態だ。こういう人が仲間にいれば俺も安心してゲームクリアを目指せるのだろうけど、生憎とトリニアさんは遠方で定住しているという物言いだし、仲間にするのはうまくいかないだろう。

気づけばトリニアさんの道具屋の前を通り過ぎ、ヒコネさんのところでもう少し……と思つた時に気づいてしまつた。

俺が知つているのは裏口であり、客が来るべき店先ではないのだ。しかしいま思えば俺は店先にすら行つた事がなく、そこまでの道のりは一切を知らない。探し回れば見つける事も出来るだろうけど、この街の地理を全て知つている訳ではないので、少し迷う可能性もある。道案内をすると言つてしまつた以上、少しでも迷うとなんだ

か申し訳なくなつてしまつ。

裏口に案内するか、一か八かで正面側を探すか、どうじてひじょうかと頭を悩ませるが、結局裏口の方にした。迷う可能性がある方はどうしても選ぶことは出来なかつた。お密さんを裏口に招き入れるのもどうかと思うが、多分、ヒコネさんなら許してくれるだらう。そしてヒコネさんの店の裏口に繋がる路地裏にそろそろ差し掛かろうという所で、何だか妙に騒がしい人だかりが丁度その路地裏への入り口を塞ぐようにあつた。

「またか……」

ため息すら出るような頻度のイベント発生確率だが、それに文句を言つても事態が変わるものでないの、諦めて道を引き返す。

「二ヶさん、どうかしたのですか？」

「いや、本当はこの先なんですけど色々と面倒なので回り道しましょ。そうしましょ」「う

トリーーナさんはさらに何か言おうとしたが、シアがその手を引くと言いかけた言葉も外に出る事もなく、ぱくぱくと餌を欲しがる金魚のように動かしていたが、俺はそれよりも頬を赤らめたシアの方が気になつて仕方なかつた。

いまさら気づいたが、俺は多分嫉妬しているのかも知れない。だからといつてそれを表面には出さないのだが、やつぱり胸がざわつくというか……落ち着かない。

……しかし今はこの場から離れるのが先決だつた。

出来る限り騒ぎに巻き込まれないようになつた。余計な事をすると命に関わる事態まで発展する羽目になる。それこそ昨日のよう。まあ、あれは俺が引き金を引いたものではないのだから少し違うかもしれないが……。

ともかく今は騒ぎを避け、記憶にある店の位置を思い出し、脳内マップを駆使して向かう。そう思った直後、不幸にも厄介なイベントから逃げ切れずに、怒鳴り声が背中にぶつけられた。

「よおやく見つけたぞ……！　てめえら……」

その聞き覚えのあるねつとりとした声に頭だけ振り向けば、そこには既に抜き身の大剣を持ったグリードがいた。その後ろにはステイードが魔道書的なものを開いて、もう臨戦態勢だった。……正直泣きたい気分だったが、泣き言も言ってられないだろう。

気持ちを切り替えて今はどう切り抜けるかだけを考える。……が、もちろん浮かぶ選択肢は一つだけ。

「三十六計、逃げるに如かず！－

俺とシア、遅れてトローニアさんは訳もわからないなりに俺達に付いてくるように走った。

後ろでは再び怒鳴り声が聞こえるが、もちろんそれら一切を無視して走る。

魔法を使われるかもしれないのに、とりあえず安直に直線を走り続けるところはしないで、すぐに角を曲がり一端姿を消す。次にやることトローニアさんへの説明と、行き止まりにだけはぶつからない逃走経路の確保だけだった。

「その包帯はそのせいです。つまりの方々はあなた達の敵

……なんですね」

「まあ言つてしまえばそつなりますけど、別に危害さえなればどうでも……」

「人同士での争いは良くないですし……」

白い竜は今回ばかりは自ら空を飛んでいたが、余裕そうな顔を浮かべながら全力疾走と並走されると、すぐ悔しい気持ちになつてしまつのはどうしてなのか。

走りながらも簡潔に何故こんな事になつているのかをトリニアさんに説明し終えたところだつた。多分数分も経つてないだろう。トリニアさんはやはり鍛えているのか息切れすらする事なく、涼しい顔で考え込む仕草すら見せる余裕つぱりだつた。

「それではあの一人はただのハツ当たりといつて事になるのではないでしょうか」

「……そうとも言えると思いますけど、プライドが傷つけられたとか負けたのが悔しいとか、そんな気持ちもわからなくはないですし、変だとも思いません。けどもう一回戦えれば俺は負けるんで逃げてます」

「潔いのですね……」

「死ぬ事の方が怖いですか」

それは俺の率直な本心だ。確かに自分のプライドとかはあるが、それはやはり命には変えられないもの。自分の矜持と命を賭して戦うというのも男心くすぐられるシチュエーションではあるのだが、それを出来るほど俺は強くはない。

「そう、ですか……」

トリニアさんは何故か俯きどこか悲しむような素振りを見せる。なにか俺の言葉で思い出すところでもあつたのだろうか……。まあどちらにしろ今の俺にそれを考えたり、聞いたりする余裕はない。だといつにトリニアさんが走る速度を少しづつ落としていき、や

がて立ち止まる。

もともとトリー・アさんはこの状況で唯一の部外者なのだから、別にそのまま置いていってもグリー・ド達に襲われる可能性も少ない。可能性がないとは言えないが、俺達といるよりは一人のほうが動きやすそうなタイプの人だし、大丈夫だろう。

だから俺はそのまま走る速度を緩める事もせずに駆けようとしたのだが、俺が置いてはいけない人が シアがトリー・アさんに合わせてその動きを止めてしまう。

「シアー！」

俺の叫び声にシアはこちらを向くが、置いていけないとばかりにトリー・アさんに再び振り向く。その瞬間、遠くの角から飛び出す人影。それは間違いなくグリー・ドとステイ・ドだった。

「……くそつ……」

俺は走った。もちろん第一に守るべきはシアだ。

遙か彼方から進む光芒は街の一角を赤く染めて、その力が現れる。空に浮いた強大な炎球が一つ、標的を焼きつくそうとその炎を搖らめかせ、そして弾かれるよう向かつて来るのが見えた。

トリー・アさんには巻き込んで悪かつたとでも言いたかったが、それもこの状況を切り抜けて生きていたらの話だ。

距離的に無傷で避ける事はまず不可能だとわかつていたから、俺はシアを後ろから抱きしめて、そのままダンスでも踊るかのようにくるりと一人の立ち位置を入れ替える。

つまり俺の背中がその炎球を受け止めるようにな。

もうひとつ炎球はトリー・アさんへ向かつているが、俺にはどうする事も出来ない。

傷みに耐えるために俺は目をつぶり、歯を食いしばる。全身に力

が籠り、シアを抱きしめる。

そして嫌な汗が伝う。それは背中に迫る熱気のせいだった。

熱気が体を撫でて、その次の瞬間には凍えるような冷気が熱気に取つて代わる。何事かと、俺はシアを抱く手を解いて振り返つた。そこに広がっているのは一面の銀世界と言つても差し支えないような真っ白な世界。その場所だけが冬にでもなつたかのように雪が積もつていたのだ。その中で細剣をグリード達へと向けて立つトリニアさんの姿と、俺とシアを庇うようにスノードラゴンの子供である、まだ名もない白い竜が空中で浮き続けていた。

トリニアさんは静まり返つたその空間で、隣で羽ばたく白い竜を見て笑つた。それに応えるように白い竜も鳴く。

何も見ていないとも、何も聞かなくともこの目の前にある光景は二人が引き起こしたものだとすぐに分かる。人ひとりを軽く飲み込んでしまいそうな炎球はその姿を一切残さず、それでいて炎球が衝突したような形跡すら残つていない。トリニアさんと白い竜の何かしらの力で焼き消されたのだとわかるが、その力は遥かに俺の及ばない力だった事に、俺は痛感する。俺にシアを守れるだけの力がない事を。

突如出来た局地的な雪原の中で、凍つたように固まつた時間と人影が同時に動き出した。グリードは大きな剣を一振りして、威嚇のよう威勢のいい叫び声で吼える。

「……殺すっ！…」

睨みつける目は鋭く、それでいて禍々しいほど憎悪に満ちていた。しかしその殺そうという視線もいまは、俺やシアではなくて完全にトリニアさんに向いていた。俺たちを守るためとはいえ、奴らに抵抗してしまつたのだからそれも仕方のない事なのだが、その視線を向けられてもトリニアさんは涼しげに受け流し、剣先を天へ向けて

胸の前に構える。

「お前らは町の人々の安全といつものを考えないのか？」

発せられた言葉はさつきまでのトリニアさんからは聞いた事のない、一段声のトーンの落ちた背筋が凍るような声。それでいてどこか達観しているような、憎しみなどが籠つていらない声だった。

激昂しているグリードはその言葉でさらにその怒りの温度を上げる。周りの雪を溶かしかねないほど怒りはその表情を歪めていく。そして溜め込んだ怒りはそこが要領の限界だったのか、一気に爆発し、グリードはトリニアさんに向けて大剣を構えながら疾走した。細剣と大剣では打ち合いなど当然出来るはずもなく、トリニアさんは振り下ろされた大剣を横へ飛んで避け、雪の下に隠された石畳に激しく大剣を打ちつけたグリードの隙を、文字通り突いた。

点のような切つ先が正確にグリードの鎧の隙間へ突き刺さる。トリニアさんはすばやく剣を引くと、後ろから飛んでくる複数の火球を同じくくらいの大きさの氷球で迎え撃つ。氷は音を立てて砕け散るが、飛んできた火球もその熱が奪われたのか、存在を消していた。

飛来した火球は後ろで援護をするステイードの放つたものだった。グリードは刺された右肩辺りを押されて、トリニアさん相手に無謀に突つ込む事は駄目だと判断したのか、その身を引いた。

そして次に何をするのか、と目を張つていると突如視界が白一色に染まる。反射的に顔の目の前に手をかざすが、もちろん光の速さに敵うはずもなく、何も効果を持たず少しの間何も見えなくなる。やがて少しづつ風景とその色が戻つてくるが、そこにはもうグリード達の姿はなかった。

「そいつは多分、力サセつて奴だな。話だけは聞いたことがある。

今時期はこの辺りを通るからな

腕を組んでじつじつと構えたヒコネさんから出された答えは意外なものだった。

グリード達と一緒に戦を交えたがらも無事に切り抜けた後に、トリー・アさんをヒコネさんと引き合わせ、無事に依頼することの出来たトリー・アさんは、出来上がるまでこの街に止まる事にする、と言つて宿を探しに出て行った。

ヒコネさんの仕事も一段落したようで、一緒に仕事をしていたのトツネも一緒にテーブルについて、休憩がてらの談笑を楽しんでいた。その中で当然の如く、出掛ける前にはいなかつた白い竜について突っ込まれて、その経緯を簡単に説明した所で、ヒコネさんはその竜商いの名前を口にした。

「カサセ……もしかして悪い噂とかあるんですか……」

それはもともと、この白い竜」とスノウ　店に着いてからシアが思いついた　をはじめて見た時に考えた事だ。

竜商いと語つておきながら竜を傷付けているのではないか、とう予想して、俺とシアはその場で買い取つた。それが正解だったのか、あのカサセと呼ばれる中年の男の言つた通りなのか、それは今話そうしてくれているヒコネさんの話を聞けば、ある程度の判断はつくはずだ。そう思い俺はヒコネさんを見て、その言葉に耳を傾けるのだが、ヒコネさんは話を濁すようにうなり続けるばかりだった。

「どうか、したんですか……？」

「うーむ。悪い噂、つてほどのものはないんだ。ただ……」

「ただ……なんですか？」

歯切れの悪い言葉で、なおも話を濁すヒコネさんに少し苛立ちを感じながらも俺はじっとその田を見ていた。

「どうもきな臭いというか……、妙に竜の回りが良いというか……、貴重な竜ばかりいつもあいつの手元にいるんだ。買う側からすればありがたい事なんだろうけどな、いつもただ眺めるだけのこっち側からすれば、その状態は不思議でしかないんだ」

「不思議……」

確かに貴重だとヒコネさんが言つぐらいいの竜が、いつも数を揃えているのは不思議なものだらう。竜が具体的にどんな周期で子供を生むのかすら分からない現状でも、いくつもの貴重な商品が、これ見よがしに同じ棚に並べられてある図でも想像すれば、その強烈な違和感も少しばかは感じ取れる。第一それだけの商品としての竜をどうから仕入れているのか……。

思いつくのは自力で養殖しているか、裏でどこから安定して手に入るのか、推測を立てるにしても情報が少なすぎて具体的なものは浮かばないが、思いつく辺りはその辺りだらう。流石に竜の巣に忍び込んで子供を盗み出すなんて事をやるとは思えないし、それだけの実力があるようには見えなかつた。まだトローニアさんがよっぽど強そうだったし。

「まあともかく変に関わらない方がいいだらう。行動を制限する訳じゃないが、せめて造つたものはちゃんと受け取つて欲しいしな」

若干、冗談にも聞こえない言葉ではあるものの、笑つて返す。もとより俺もそのつもりで、無茶な事はもうしないと決めた。グリード達は何かとしつこくて要注意ではあるが、それ以外は気をつけるものもない。

「行くぞ、トツネ。仕事の続きだ」

そう言つて豪快に立ち上がり、仕事場のスペースへと一人は向かつていった。

「私、確かめたいです」

借りた部屋でありながらも、今は俺の部屋となつてゐる部屋で、俺とシアはベッドに隣り合わせで腰掛けながら話をしていた。切り出したのはシアだつたが、俺も心中では密かに思つていたことだ。それはつまり、あの竜商いのカサセという中年の男の事だつた。ヒコネさんはただ貴重な竜をいつもラインナップとして揃えているのは不思議だと言つてただけだつたが、実際にその姿を見た身としては嘘くさいものがあるのは分かつてゐた。確定ではないものの、十分に怪しめるのは確かだ。

そしてそれをシアは、どちらにしろはつきりしたものにしたい、とそう言つてきたのだ。

俺は出来る事ならば関わらずに行きたい所なのだが、シアからすればじつとしていられないのだろう。その証拠がこうして迫り来るシアの態度に表れてゐる。

普段は大体俺任せであまり主体的な行動はしないといふのに、今に限つてはやる気満々で、今すぐ飛び出していつても不思議じやないくらいだつた。

それに対しても俺が出来る事ととすれば、せいぜい諦めかけた抵抗をするか、素直に受け入れるかの一択程度だ。どちらにしろ結果は決まつているようなものだが、駄目元でとりあえず抵抗の方を選ぶ。

「駄目だ。不用意に出歩くとまたグリード達に襲われるぞ」

これで素直に引いてくれるなら俺も苦労はしないのだが、案の定シアはそれを突っぱねる。こういう時の強引さは普段引っ込み思案で恥ずかしがりなシアからは想像もできないほどに強いものだ。

一度ため息をついてから、仕方なく、といった体裁をとりながらも、シアの話に乗る。

「ありがとうございます！」

「だけどどちらにしろ慎重な行動が必要なのは間違いないし、いざとなれば調査なんて投げ出して逃げる事。命にだけは代えられないからな。それでいいか？」

「……はい」

シアの返答の少しの間が意味する所は俺にも分かるが、それでも俺はやつぱりその優先順位を譲れない。

シアはきっと、どんなに危険でも全てを投げ出して自分だけ助かるような道を選ぶことはないだろう。だけど俺はそれを黙つて見過ごす事も出来ないし、かといってシアを完全に守れるだけの力もないのは、さつきのステイードの攻撃を防げなかつた事もまだ新しい記憶だ。

だったら俺に出来る事は、危険が及ばないように考えて指示する事と、いざという時の覚悟くらいだ。もともと前に出るような性格ではないし、この方が俺の性には合つてゐるのかも知れない。

「それじゃあまずはこの辺りの地理の把握と偵察。それで情報を集めてからだ。それも細心の注意を払わないとまたグリード達に襲われる。まあ、トローニアさんが追い払ってくれたし、向こうも多少は警戒するだろうから街中は大丈夫だとは思うが、念の為」

ヒロネさんに聞いた話だと、数週間は竜商いのカサセもこの辺り

に留まるらしく、街中にも顔を出して商売をするらしく。宿に泊まることはなくて、日が落ちるとそのまま町の外へ向かうらしくが、誰も野宿している姿は見た事がないらしく、どこで寝泊りしているのかすら不明らしいので、まずは身辺調査から入ることになるだろう。その過程で紐を手繕るように事実をかき集めるしかない。

「それじゃあ行くか。つとその前に行き先は告げとかないとな。いざつて時に役立つかもしれないし」

一人してベッドから立ち上がり、シアは元気な表情で大きく伸びる。

一方俺は慈善活動みたいなことに巻き込まれて、おまけにトリニアさんと出会つてからのシアの行動や表情を思い出して、少し気持ちが落ち込んでいた。大体シアのせいなのだけど、それを全部吐き出してぶつけられるような人間ではない。そもそも俺の勝手な嫉妬心なのだから、それをぶつけられた所でシアにとつてはただの理不尽に過ぎない。

色々と喉まで込み上げる想いを飲み込むためにも、俺はシアをぎゅっと抱きしめる。突然の行動にシアは戸惑つていたが、そんな事も気にせずに力をぎゅっと込めて、すぐにその腕を解く。ようはただの自己満足だった。

でも少しは元気が出た気がする。

突然の事で戸惑つてるシアに何も言わずにすぐに部屋を出る。自分からやつておいてなんだが、シアがすぐに慌てふためいて、俺がどうしてそんな事をしたのかと聞かれると、俺も慌てふためく羽目になるので、その前にさっさと退散したほうが身の為、精神衛生上もいいだろうと判断し、体がその思考に引っ張られるように動いたのだ。

男が、さびしいから、なんて言える訳もない。

階段を下りている最中に案の定シアの声が後ろから聞こえるが、

足を止める事無くそのまま階段を下りて一階へと向かう。

今の俺の顔を見られたら、一生顔を合わせることが出来ないような気がして。

再び街へと繰り出して、竜商いのカサセについて情報を集める。二人別々の方が効率はいいのだろうけど、安全面を考えるならそれはただの愚考に過ぎない行為だ。

しかしこの街で集まる情報は大したものではなく、どれもヒコネさんに聞いたような話ばかりで、あつという間に手詰まりになってしまった。唯一寝泊りしているらしい場所は聞き出せたのだが、あくまでらしいだけで、そもそも違法な事をしているとも決まった訳ではなかつたので、次にする事は直接的な情報収集となつたのだが、そこで二人の意見が真つ二つに分かれた。

原因は俺の言葉だつた。

「ここからは俺一人で行く
駄目です！」

シアの頭という定位置に丸まつっていたスノウはその首をもたげ、何事かとキヨロキヨロさせていた。

俺にずっとくつついていると言うことはなかつたが、嫌われている訳ではないので、緊急連絡用にスノウと俺の組み合わせで偵察に赴くと、そうシアに言つたのだが、もちろん断られる。

そろそろ街の中も家路につく人たちが多くなる時間帯だったが、その中でベンチにゆつたりと座りながら話す俺達は、傍から見れば仲のいいカップルか、はたまた喧嘩でもしてるカップルか。どちらにせよこの時間ならば人の流れから浮く存在だつた。ましてや竜までそこにいれば目立つて仕方ない。

別に街の人々を信用していないという訳じゃなかつたが、俺達がこうしている事や、調べている事も、住人を通してばれてしまう可能性は十分にある。だからやると決めたら迅速にやらなきゃいけないと思ったのだけど、現状は互いに譲らないまま平行線を辿つていた。

「えーっと、わかってくれないかなあ……」

「二ヶさんに行くなら私も行きます」

頑なに譲ろうとはしないシアに半ば呆れながらも、俺は説得を試みる。本当はシアの言う通りに連れて行ければいいのだけど、やっぱり一人だと見つかる可能性も高くなるし、その場合に俺はシアを守れるかと言えば、昼間の一軒が堪えてノーとしか言えない。そうなればあとは逃げるしかないのだけど、その場合は一人のほうが撒きやすい。二人でバラバラに逃げるというのもあるが、もしシアのほうに向いてしまうと俺が困る。と説明したのだが……。

「それなら私が一人で行きます。実力だって二ヶさんに負けてませんし、足の速さなら私のほうが上です。それに小柄なほうが身も隠しやすいですし……」

シアの言つてる事はもつともなのだが、やはり俺としても譲れないものがある。どこの世界に好きな奴を自分の目の届かない危険な場所へ向かわせるものか。

「そういう問題じゃないの。俺ひとりで行くから。シアは帰りでも待つて」

「二ヶさん。怒ります」

そういうばいつの間にか、さんづけになつてゐるけど、まあいいか。今はそれよりもどうやつてシアをなだめて納得させるかだ。

そんな時、スノウが小さく鳴いた。そしてその瞬間、この状況を打開する策が浮かぶ。……いや策つていうほどの大層なものではないか。

「わかった。それじゃあスノウに決めてもらおう。一回飛んでもらつて、着地したほうが行く。それならシアも文句はないだろ?」「えーっと……」

シアはなおも難色を示すが、俺がスノウに田で合図を送ると、もう一度、今度は任せるとでも言つて強く鳴き、それをきっかけにシアも渋々ながらも了承した。

よくやつたスノウ。あとでなんか買つてやる。

「でももしどちらにも降りなかつたらどうするんです?」

「その場合は、一人で行くか出直すか、どっちかだな。まあそれはないと思つけど。それじゃあスノウ、頼んだ」

俺の言葉を聞きスノウはそつと飛び上がる。シアは少し乱れた髪を手で直して、空中でハの字を描きながら飛ぶスノウの様子を眺めていた。俺も同様に眺めていたが、シアのようになつて祈るような表情は浮かべない。もう答えは決まつているようなものだからだ。

シアはスノウの事を信頼しているし、スノウもシアの事を信頼していて、二人の仲は俺以上のもので、シアはスノウが自分の思った通りに動いてくれると思っているだろう。……いや現にそうなのだ。しかし今回ばかりはスノウは俺の味方をしてくれるという確信があつた。

竜は幼くとも人の言葉を理解する。だからこれまでの会話の流れから、ある程度なにを考えているかぐらいは読み取つてくれるはず

だ。そして互いにシアの事を大事だと思つてゐる男同士で、しつかりとアイコンタクトも取れた。

だつたら答えはひとつしかない。

羽ばたく音が止んだ。スノウが止まり木としたのは、俺の肩だつた。俺はよくやつたという表情でスノウを迎える。対してシアは驚きと少し悲しそうな表情を浮かべていた。少しばかり胸が痛むが今回ばかりは許してくれ、と心で呟き、シアにしつかりとこの勝負の結果を告げて、家に帰らせることにする。

「決まりだな」

「そんなん……」

しかし田はもう落ちかけていて、偵察には向いた環境なのだが、女の子が帰るには不向きな環境となつてしまつてゐる。とりあえずスノウでもつけて帰らせるかなあ……と思つてゐると、丁度そこに見覚えのある姿があつた。

全体的に青っぽい服装の落ち着き払つた男が、紙袋になにやら詰めて目の前を歩いていた。歩く方向からしてトツネの家へと向かう方面だつたので、多少不躾になるかも知れないが、護衛を頼む事にしよう。その力はもう田の当たりにしているので疑う余地はない。

「トツネさん！ 奇遇ですね」

俺の声に気づいたトツネさんはこぢりこぢりくと笑顔を浮かべて手を振つてこちらへとやつてくる。急な話で申し訳なかつたのだが、適当に経緯を話すと分かつてくれたようで、やはり最初に俺達を疑つたよつてこつてことには理解があるようだつた。しかも手伝つとまで言つてくれてありがたかつたのだが、今はシアの事を頼めるだけで十分だつた。

心強い護衛も付いてくれたので、スノウは元の予定通り俺とともに

に向かい、非常時にせがむにかしてくれますねねすだ。

「トリー、アさん、頼みます」

「任せてください。傷ひとつ付けずに家まで帰す事を誓いましょう」

「心強いです」

トリー、アさんへ頭を下げる。そして感謝の念を送つてから頭を上げ、そしてシアくと顔を向ける。

「行つてくる」

「……氣をつけとくださいね」

「ああ」

それだけ言つとシアはぐつと体の向きを変えた。ふとくされてるのかなんなのか、まあ心配された分だけは氣をつけることにしようと。トリー、アさんと一緒にそんなシアを声もなく笑い合つて、互いに背を向けて歩き出した。

シアとトリー、アさんは暖かな家へと、俺は真つ暗な町の外の森へと向かつて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5022x/>

現実世界の仮想現実

2011年12月13日19時58分発行